

海外果樹農業情報 No. 131
2016-3

海外の果樹産業ニュース 2016 年度下期版

2017 年 3 月

(公財)中央果実協会
[JAPAN FRUIT ASSOCIATION]

本書の内容について、ご質問やお気づきの点がありましたら、
下記あてにご連絡下さるようお願いいたします。

公益財団法人 中央果実協会 情報部

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-9-13 三会堂ビル

【電 話】 03-3586-1381（代）

【F A X】 03-5570-1852

は し が き

果樹農業を取り巻く国際化の進展に伴い我が国の果樹産業は、外国産果実及びその加工品等との競争が激化している状況にあります。このような我が国の果樹産業を取り巻く環境の変化に対応して、当協会では関係機関・団体等からの海外果樹関係の情報ニーズを踏まえ、海外における果実及びその加工品等の生産・流通事情等に関する情報の収集・提供を行うことにより、我が国果樹産業の活性化・振興及び果実の需給・価格の安定のほか輸出の振興にも資することとしております。

当協会では、これまで特定のテーマを対象とした調査報告書、果樹全般についての FAO（国連食糧農業機関）の生産・貿易統計データをもととした報告書を取りまとめ、刊行してきました。

加えて、海外の果樹産業を扱う雑誌、新聞、ウェブサイトから我が国果樹産業に密接に関係する記事や公表資料を翻訳し関係者に提供していますが、この度 2016 年度下期に提供したニュースを取りまとめ刊行することといたしました。

本書が最近の世界の果樹産業事情を理解する上で少しでもお役に立てれば幸いです。

なお、本書の翻訳責任は当協会にあることを申し添えます。

2017 年 3 月

公益財団法人 中央果実協会
理事長 弦間 洋

目 次

1	チリが中国への輸出第 1 位国に	1
2	食品安全強化法に備える米国各州と食品医薬品局	2
3	ニュージーランドのリンゴ・ナシ生産は過去最高	3
4	欧州の有機市場は二桁成長	4
5	世界のバナナ市場	7
6	最新技術でバナナをカットフルーツに	11
7	米国農務省カンキツグリーニング病対策に研究資金を投入	12
8	拡大する有機果実（米国）	13
9	EU 離脱で英国は GM 作物に対する姿勢を変えるか	14
10	世界の核果類市場	15
11	2016 年オーストラリアの果実輸出は新記録	17
12	チリで史上最大の山火事	18
13	世界のキウイ市場	19
14	奇妙な形だが美味しい Sumo Citrus はユニークな商品	22
15	2016/17 年世界のカンキツ市場と貿易動向	23
16	中国産ポメロの欧州輸出に勢い	33
17	温州ミカン Belabela 英国で販売	34
18	中国のカンキツ事情	35
19	チリのアボカド事情	42
20	オーストラリアのカンキツ事情	45
21	ニュージーランドのリンゴ新品種 Dazzle	48
22	イタリアのキウイ事情	49
23	世界のカキ市場	51
24	チリで豪雨によるブドウの被害	54
25	EU のカンキツ事情	55
26	メキシコのアボカド事情	63
27	世界のマンゴー市場	27
28	世界のオレンジ市場	68
29	オーストラリアのブドウが暴風雨被害	71
30	世界のパパイヤ市場	72
31	中国の落葉果樹（リンゴ・ナシ・ブドウ）事情	76

32	台湾の落葉果樹(リンゴ)事情	83
33	世界のベリー類市場	86
34	ゼスプリが「キウイ・ブラザーズ」で日本市場へ売込み	90
35	ペルーの落葉果樹(生食ブドウ)事情	91
36	カリフォルニア州はカキのシーズン	93
37	2016/17年産の米国のカンキツ生産見通し	94
38	世界のナシ市場	96
39	イスラエルから米国へのカキ輸出	100
40	リンゴとナシの新品種が今年の販売を開始(ベルギー)	101
41	トルコの落葉果樹(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)事情	103
42	韓国の落葉果樹(ナシ)事情	107
43	EU28カ国の落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情	110
44	チリの落葉果樹(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)事情	120
45	ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ・ナシ)事情	126
46	棚持ち改善技術でバナナもカットフルーツの仲間入り	132
47	青果物マーケティング協会の展示会で絶賛されたリンゴ JUICI™	133
48	カンキツグリーンング病の最新研究	134
49	スペインのカキ出荷 2020年までに65万トンに拡大	135
50	チリのオウトウ豪雨で被害 最大30%の減収か	136
51	生食ブドウの輸出に意欲を見せるインド	137
52	EUにおける果実・野菜の消費動向	138
53	2016/2017年 世界のリンゴ生産	140
54	世界のグレープフルーツ市場	142
55	2016/17年のリンゴ生産見通し	145
56	有機農産物は2015年も引き続き拡大	147
57	果実輸入が急減するインドネシア	148
58	オランダで過去5年間に子供の果物消費量が20%増加	149
59	フロリダ産カンキツの生産予測	150
60	日本に輸出再開を期待する米国リンゴ業界	151
61	果肉の赤いリンゴ新品種登場(スペイン)	152
62	中国：国産キウイは生産拡大するも販売見通しは不明	153
63	台湾の核果類事情	155
64	英国では在宅勤務の方が果実・野菜の消費量が多い	159
65	世界のザクロ市場	160

1. チリが中国への輸出第1位国に

AMERICA FRUIT 電子版(2017年2月22日)



昨年、チリは中国への輸出額が23%増加し、中国への果実輸出の第1位国となった。

ProChile(チリ貿易振興局)の調査によると、チリは2016年にタイを追い抜いて中国への最大の果実輸出国となったとのことだ。チリは中国に12.07億ドルの果実を輸出し、2015年に比べて23%増加した。これでチリ産果実の中国の輸入果実に占めるシェアは21%となり、9年前に比べて7%増加したことになる。

第2位のタイは11.5億ドルで、ベトナムの6.35億ドルと

続く。

チリは他の南半球の国(ニュージーランド0.33億ドル、オーストラリア2.25億ドル、ペルー1.75億ドル、南アフリカ1.62億ドル)を凌駕したことになる。

チリからの中国輸出を牽引しているのは5年連続してサクランボで、金額で6.48億ドル、輸出額の54%を占めている。次いでブドウの2.82億ドル、スモモの0.79億ドル、ブルーベリーの0.77億ドルとなっている。

「2006年10月に自由貿易協定が発効して以降、中国との貿易は着実に増加し、2015年には最大の(訳注:農産物?)貿易相手国になり、昨年もこの状態を維持している」とProChileの部長は話している。部長は、昨年、関係協会が中国で開催した125の販売促進活動の成果も強調している。

「北京、上海、広州などの大都市だけでなく、広東、山東、河南、四川などの新興市場でも、絶好の販売機会が開かれている」とも語っている。

アボカドは輸出が急拡大した果実で、2015年と700万ドルから昨年は3,600万ドルまで増加した。部長は、「チリの果実は中国市場で際立っている。ブルーベリーの98%はチリ産であり、サクランボとスモモでは輸入果実の8割がチリ産である」と語っている。

チリの輸出業者数も増加しており、2007年は68社であったものが、昨年は370社に達した。

アナリストは、もしトランプ大統領が保護主義を強化したなら、中国は世界の貿易市場の中でますます重要な国となると予測している。「(米国の貿易政策の変更により)チリと米国の貿易がマイナスの方向に作用しないか」と問われた部長は、「今年その結果が現れるには早すぎる。しかし、不測の事態に対応すべく準備をしている」と語った。

2. 食品安全強化法に備える米国各州と食品医薬品局

The Packer 電子版 (2017 年 2 月 22 日)



ロナルド・レーガン元大統領は、かつて、英語の中で最も怖い表現は、「私は政府の職員です。あなたを助けに来ました」、だという冗談を言ったことがある。

有益か恐ろしいことになるか不明であるが、2018年から果樹農家、野菜農家は、各農場で食品安全に関する新たな政府の検査を受けることになる。

食品医薬品局(FDA)は各州と協力して、農場レベルでの農産物安全に関する教育と規則(食品安全強化法)の施行を行おうとしている。

FDA の健康コミュニケーション専門官によると、2018会計年度(2017年10月→2018年9月)から各州と共同で農場での検査に関する調査設計及び試行を始めるそうだ。9月に FDA は助成を要請した42の州に対して食品安全の規則施行に要する経費を2,180万ドル支出した。

行政現場では、例えばペンシルベニア州ヨークの FDA 執行官は、FDA の支援は順調に行われている、とのことだ。執行官は州の農業技術普及部局と共同で、この規則の対象となる人、ならない人の分類、生産者が守らなければならない内容を説明しているそうだ。「FDA の歴史の中で規制を行う前に教育からことを始めた事例としてはこれが初めてだ」と語っている。

同地(ヨーク)にある生産・販売委員会の食品安全技術担当副部長によると、各州と FDA は共同で記録の保管や生産者名簿の作成を進めているとのことだ。

多くの州では農産物の安全に関する教育と普及活動が進められており、また、農産物安全規則の実施に関するプログラムの設計、その他に関する準備をしているようだ。

一方、「FDA は州の検査官に現地(農場)検査を依存しようとしている」と元 FDA 職員は考えている。「これまでの例では、FDA は何か問題が発生したときしか現場に足を向けたことはない。州政府の方が、はるかに生産現場に精通している」と語っている。先の執行官は、(当社に寄せた)電子メールで、「FDA は各州が実施したくない事項や実施能力のない事項にしか手は出さない」と述べている。各州の方が農業の専門知識が豊富で、同様に農務省農業市場局も知見を持っている。氏によれば、「実際に FDA は検査を実施する人材も資源も持ち合わせていない。要するに人も金もないということだ」そうだ。

食品安全強化法は、FDA に対して、連邦、州、地域の民間機関の規制部局、公衆衛生部局と連携関係を構築し、法の施行を行うことを義務づけている。FDA には業務の優先順位があり、乳製品検査や海産物検査については、既に州の検査官と検査を実行している。

昨年9月には、FDA は、各州に協力関係構築のための予算として2,200万ドル近くを支出し、カリフォルニア州食品農業局は100万ドル以上を受け取っている。同州広報官によると、「安全規則の施行は2018年1月にも始まることになる。FDA は残された期間を水質検査法の確立に費やすだろう。一方、生産サイドにとっては、規則を遵守するための工程表は販売計画を前提としなければならない。そして、最も早い時期に施行されても大丈夫なように最大限の努力を傾注する必要がある」とのことだ。

広報官は電子メールで、「カリフォルニアや他の州では実施手順、データ収集、教育・普及のための活動に関し、FDA と州農業部局で話し合いを進めている」と述べている。助成金を受け取った州は、2 月下旬に開催されるワークショップに参加することになっている。「FDA の目標と目的の概要が説明され、それは情報の共有、統一性と一貫性を確保するために役立つだろう」と広報官は語っている。

先の FDA 健康コミュニケーション専門官は、「配分した予算で、各州は食品安全システムの複数年計画の樹立、スタッフの雇用、教育・普及・技術支援の推進、生産者のニーズに対応したプログラムの策定を行うことになっている」と説明している。また、「今回、助成を申請しなかった州でも、1 年遅れで教育・普及、検査に関する予算の申請を行うことができる」とも話している。

実際に申請した州を見ると、教育・普及の経費だけを申請した州は5つにとどまり、残りの州は(まだ検査方式が確定していないものの)検査に要する費用も申請している。実際、FDA は当初の発表内容を変更し、教育・普及だけに充当できるとした方針を検査費用にも充てられるよう修正したためだ。

一方、先の元 FDA 職員は、安全性の検査をうまく推進し、規則遵守を達成させる鍵は、50州全部が一貫した検査に関するトレーニングを受けることだと考えている。「ニュージャージーではささいな事件で逮捕され、アイオワでは殺人を犯しても逃げおおせられる、といったことがあってはならない。こういったことは業界に混乱をもたらす」と話している。つまり、(各州が)協力することが最も良い、と見ているようだ。「実情をよく知っている各州の検査官が検査を行う方が、FDA の検査官が行うよりはるかに業界にとってよいのではないかなにしろ、FDA の検査官はこれまで薬物検査に身を捧げてきたのだから」とも語っている。

FDA 側は、各州と共に、検査官や生産者に対する訓練、教育が調和されたものとなるよう努力しているとしている。「食品安全強化法が円滑に施行され、規則を遵守してもらえよう、生産安全ネットワークを各州と構築するよう務めている」そうだ。このネットワークは全国の食品安全専門家からなる、と FDA は考えている。

2017会計年度には、FDA は追加で2,530万ドルの食品安全予算を要求している。このうち1,130万ドルは各州による食品安全規則の施行に要する経費としている。FDA 担当官は、「食品安全強化法の円滑な施行は予算の確保にかかっている」、と話している。

3. ニュージーランドのリンゴ・ナシ生産は過去最高

ASIAFRUIT 電子版 (2017 年 2 月 17 日)



ニュージーランドの今シーズンのリンゴ、ナシ生産量は過去最高の 58.4 万トンと見込まれる。

この記録の背景には高い生産性(単収の増加)があげられる。過去には2004年に56万トンを記録したが、この時の栽培面積は13,500 haであり、今回は9,500ha で達成した。

業界大手の Pipfruit 社の CEO によると、「豊作・不作のサイクルは終わった。年ごとにニュージーランドがリンゴ栽培と市場出荷に当たり世界で最高の国であることを証明している」と語っている。

「2017年はニュージーランドのリンゴ、ナシ業界にとって驚異的な年であり、祝杯をあげるべきだ。今後もより大きな成功を納めるために

努力を積み重ねることが大切だ。これは、業界が長年にわたり多大な投資してきた結果であり、また、これまでの努力のお陰で楽観的見通しもできる」とも語っている。

ドイツはニュージーランドにとって今でも最大の輸出先であるが、CEO によると輸出先は明らかに、「西から東に」向かっている。

「2004年には欧州と北米で輸出の80%を占めていたが、現在では欧州・北米とアジアの割合は50対50である。アジア市場への進出は、同地域の GDP の伸び、中間層の所得の伸び、安全な食品への期待があるからである。だから、アジアへのシフトは自然なことである」とも語っている。

2012年にニュージーランド政府は2025年までに輸出を倍増するとの目標を設定した。しかし、リンゴは4年間でこの目標を達成させ、輸出額は7.2億ニュージーランドドルに達した。CEO は、「今では2025年までに4倍増にする道を進んでいる」という。

また、CEO は「長年、世界クラスで、消費者が求める独占的な品種の開発に投資をしてきたお陰であり、驚くことではない」と語っている。ニュージーランドのリンゴ輸出の1/3はロイヤルガラであるが、ニュージーランドの競争力を強化させたのは排他的な育種プログラムと独占的なマーケティングである

「クラブ品種のジャズ、エンヴィは急速に拡大している。パシフィック・シリーズも同様であるが、最近公開された赤い果皮のリンゴ Dazzle は将来性がある。ナシにもいくつか候補品種がある」とのことだ。

「ナシはリンゴに比べると生産量が少ないが、Prevar 社が開発した Piqa Boo は画期的な品種である。ナシ産業の転換をもたらしかねない期待される品種だ」とも語っている。

このように記録が更新される中で、業界には2つの課題がある。1つは熟練労働力確保と収穫時の人手不足の問題である。もう一つは、選果施設、冷蔵貯蔵施設の近代化であり、一部の会社は垂直統合により、これら施設への投資を始めている。

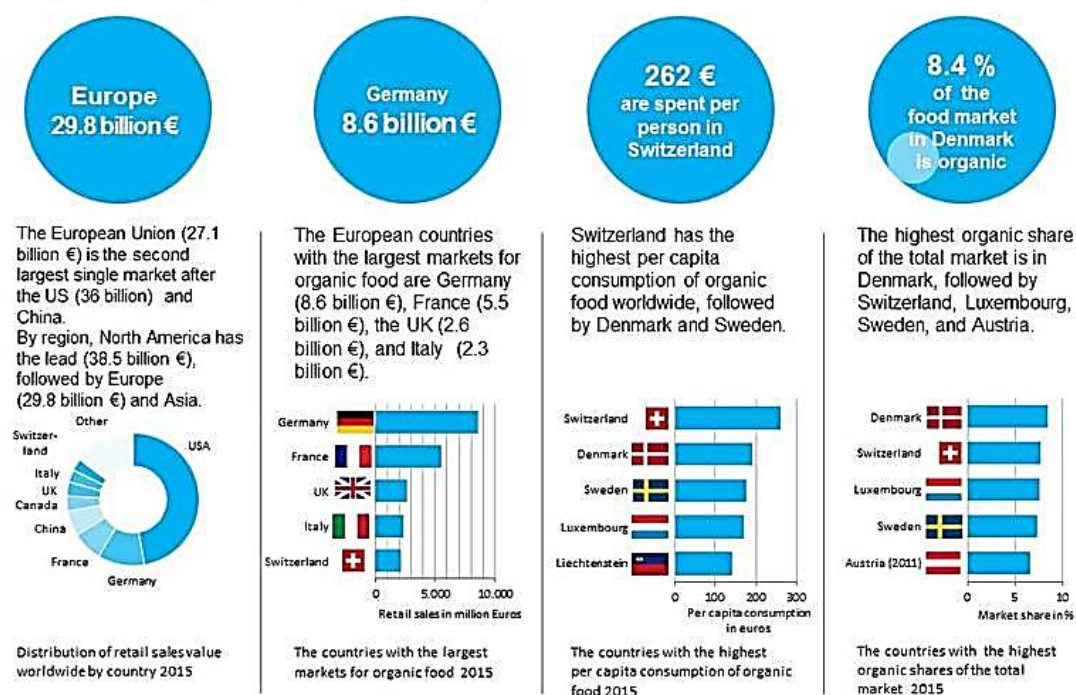
4. 欧州の有機市場は二桁成長

FreshPlaza 電子版 (2017 年 2 月 16 日)

欧州の有機市場は成長を続けている。2015年には13%拡大し、300億ユーロ近くに達する模様だ(EU だけだと271億ユーロ)。欧州の主要な市場では二桁の成長が見られる。この度(2月15日)、BIOFACH、有機農業研究所(FiBL)、農業市場情報会社の AMI が2015年の欧州有機農業関係のデータを公表した。

ドイツが有機農産物市場としては最も大きく(86億ユーロ)、次いでフランス(55億ユーロ)、英国(26億ユーロ)、イタリア(23億ユーロ)となっている。世界的に見ても、ドイツは米国(358億ユーロ)に続く世界第2の市場である。

EUROPE: ORGANIC RETAIL SALES 2015



Source: FiBL survey 2017 www.organic-world.net

FiBL のコメントは、「欧州市場における有機農産物のダイナミズムはその成長力が示している。市場規模は金融危機以来、初めて二桁(13%)の増加を見せた。フランスとイタリアでは13%増加し、ドイツでは11%増加した」とのことだ。

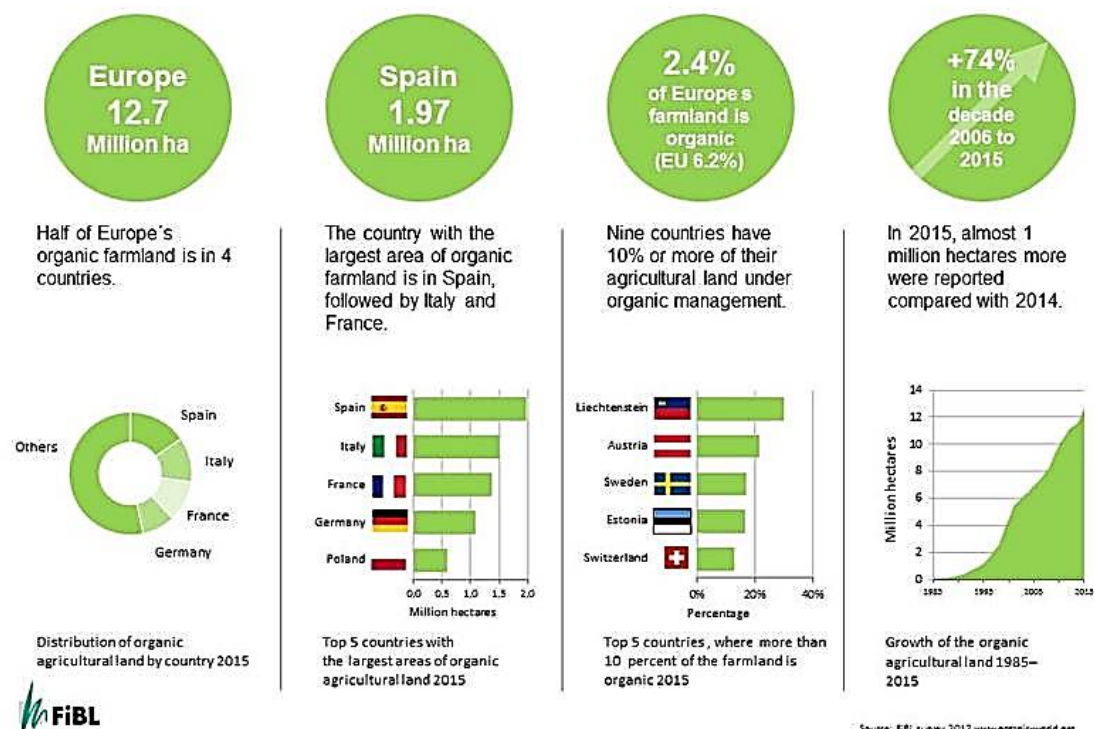
毎年、消費者は有機農産物への支出を増やしており、支出額は欧州平均で36.4ユーロ(EU 平均では53.7ユーロ)(毎年)となっている。一人当たり消費支出が最も多い国はスイスで262ユーロ、次いでデンマークが191ユーロ、スウェーデン177ユーロとなっている。欧州諸国は市場全体に占める有機農産物の割合が最も高く、中でもデンマークのシェアは8.4%と最大で、次いでスイスが7.7%、ルクセンブルグが7.5%となっている。AMIによると、「全ての農産品で有機の割合は比較的高い。例えば、スイスでは卵の4つに1つは有機であり、乳製品でも有機の割合は10%以上になる」とのことだ。

有機市場の拡大速度は有機栽培面積の増加速度よりも早い

2015年でも有機農産物市場の拡大速度の方が有機栽培面積の増加速度を上回った。しかし、栽培面積も大きく増加しており、前年より100万 ha(8.2%)増えている。2015年末には有機栽培面積は欧州で1,270万 ha(EU では1,120万 ha)に達している。農地面積に占める割合は欧州で2.5%、EU では6.2%となつて

いる。最も有機栽培面積の大きい国はスペイン(197万 ha)で、次いでイタリア(149万 ha)、フランス(137万 ha)の順である。この3カ国では、(この1年で)少なくとも10万 ha 以上面積が増加している。また、欧州の内、9カ国で有機栽培面積の割合が10%を超えており、世界的にも割合が高いのはリヒテンシュタイン(30.2%)、オーストリア(21.3%)、スウェーデン(16.9%)である。

EUROPE: ORGANIC FARMLAND 2015



有機農産物の加工品、有機農産物の輸入も二桁増

欧州全体で有機農産物生産者は35万であり(EU では27万)、有機農産物加工業者は6万、輸入業者は3,700存在する。有機農産物生産者の増加率は3%(EU では5%)と驚く数字ではないが、有機農産物加工業者は12%、輸入業者は19%増加している。

FiBL は、「加工業者と輸入業者の増加率が高いのは、生産増が需要の増加に追いついていないからだ。各国は有機農業に対する明確な戦略を持つべきで、不足する供給に生産が追いつくよう支援するとともに、(有機農業を通じた)環境的、社会的便益の提供に務めるべきだ。また、有機市場データの正確性を向上させるために統計を改善すべきである」と述べている。

ニュースソース: www.fibl.org

5. 世界のバナナ市場

FreshPlaza 電子版 (2017 年 2 月 17 日)



中南米では競争が激化している。コスタリカは生産を拡大しており、エクアドルはその影響を感じている。多くの欧州諸国では年初は需要のピークであるが、例外はポーランドとイタリアである。インドは近隣諸国を中心に輸出拡大を狙っており、欧州市場へも輸出を目指している。中国市場はエクアドルからの輸入にシフトしている。米国では価格競争が激しく、中小業者の脅威となっている。オーストラリアでは怖い病気である TR4 に抵抗性がある品種の研究に資金を投入している。

エクアドル:コスタリカとの競争激化

エクアドルでは毎年生産者の数が増加している。生産は好調であるが、中米での競争が激化しており、この影響で価格は低下し、昨年よりも50セント安い状況である。エクアドルは、コスタリカが増産していることが原因であると考えている。輸出に関しては、日本、韓国、ドバイからの需要が増加すると見込んでいる。

降雨の影響を受けるコロンビア

コロンビアでは降雨の影響で収穫に支障が生じている。しかし、生産量は増加を続けている。欧州が最大の市場で、輸出量の75%が向けられている。米国はその次で15%を占めている。この他、アジアへの輸出も望んでいる。価格は堅調で、需要量は安定している。国としては紛争(内紛)地域でもバナナ生産の拡大を目指しているが、現時点では当該地域での生産割合は20%となっている。

有機バナナに焦点を当てるペルー

天候の影響で生産に問題があるが、供給量は正常に戻りつつある。ここ数週間の豪雨では収穫作業の遅れは見られない。ペルーでは特に有機バナナに対する需要が増加している。輸出に関しては、業界では、有機バナナは今年15%増加すると見ている。また、多くの生産者が有機バナナ生産に転換しようとしている。

コスタリカは輸出量が増加

昨年は1.2億箱の輸出が行われ、新記録を達成した。コスタリカでは生産が増加しており、需要も拡大している。同国ではチキータやデルモンテのような主要ブランドのシェアが増加しており、これに応じて非ブランド品の「自由貿易」の割合が減少している。

バナナの売り上げがピークのオランダ市場

オランダでは販売のピークが継続している。伝統的に年初の数ヶ月は消費が多く、輸入業者は潤っている。供給量が少ない時期もあったが、現在、供給は潤沢に戻った。「興味深いことに有機バナナの市場は成長を続けている。まだニッチな市場ではあるが、様々な方面で需要が拡大している。子供向けのニーズは幅広く、格安バナナや有機バナナにも需要があり、フェアトレードと結びついたバナナにも需要があり、結果として全体の需要が拡大している」と輸入業者は語っている。

青色バナナは価格上昇、黄色バナナは価格安定（ベルギー市場）

通常、年が明けて4ヶ月はバナナの販売が好調である。全般的に市場は静かで特別な動きはない。青色バナナの価格は徐々に上昇しているが、黄色バナナは価格が安定している。青色バナナの価格とは輸入業者、追熟業者の買い取り価格であり、最終的には黄色バナナとして販売される。黄色バナナの価格への影響は少々遅れて現れる。しかし、業者によると、バナナの価格を引き上げることは困難とのことで、「消費者に高い価格を提示するのはもはやできない」と語っている。市場には幾つかのブランドが出回っているが、チキータが最も好まれているようだ。

市場が安定している英国

現時点では市場は安定している。需要も供給も変化はなく、増加も減少もしていない。伝統的には年初の数ヶ月は需要が増加し、供給が少なくなるのだが、バナナの取引は契約で価格が固定されており、現物市場で取引される量はほとんどないため、価格の変化はない。現物市場では為替レートの影響を受けるものだが、そもそも量的に大変少ない。とはいえ、昨年の夏はポンドがドルに対して下落したため、価格に影響があったと業者は語っている。業者によれば、コスタリカ、コロンビアからの輸入は天候の影響を受けたが、エクアドル産は影響がなかったそうだ。悪天候は「自由貿易」分には影響を及ぼしたそうだ。輸入業者は経営の多角化を図っている。例えば、一部は「エキゾチックフルーツ」の販売に取組み、一部は流通サービスに手を伸ばしている。

供給不足が見られるフランス

フランスの市場では、現在アフリカ産のバナナが多く出回っている。業者によれば、中南米・カリブ海諸国からの供給が不足しているそうだ。特にコロンビア、グアドループ、マルティニーク、ドミニカ共和国からの輸入が不足している。このためプレミアムバナナの価格が上昇しており、需要は価格が手ごろなクラス1に移行している。ドル相場のお陰で輸入は難しくなっており、輸入業者によると、安い価格で契約することは困難だという。このため、欧州では損失を出している会社が多いとのことだ。

ポーランド：学校が休日のため需要は低調

輸入業者によると、バナナ市場は不調であるそうだ。黄色バナナの販売量は欧州北部に入荷するバナナの量に見合っていない。先週はエクアドル産の現物価格が10.5～11ドルと高かったが、この価格上昇は黄色バナナの販売価格の上昇に繋がっていない。低価格の状況を受け、販売促進活動が行われている。業者によると、もっと価格は上昇すべきで、事態も好転すべきという。卸売市場では入荷量は安定しているものの低温の影響で需要の伸びはない。さらに、学校の休みが需要の伸びを妨げている。近年、ニッチな農産物として赤バナナ、ベビーバナナ、プランテンが伸びているが、市場全体を押し上げるほどではない。

スペイン：輸入品とカナリア諸島産が競合

カナリア諸島産のバナナを犠牲にして輸入品が増加しつつある。この傾向は南部の地中海沿岸で顕著で

ある。一方、北部スペインでは輸入バナナは少数派だ。輸入バナナのシェアはスペイン全土で40%であり、カナリア諸島産は60%である。近年、輸入バナナの関税が引き下げられたことにより、価格競争がはげしくなっている。スーパーでは、バナナは販売促進用の特売品として用いられている。このため、輸入バナナはカナリア諸島産より安い価格で販売され、品質も向上している。過去6ヶ月間、コロンビア産が市場に溢れたため、価格はその圧力にさらされた。現時点ではカナリア諸島産のバナナは輸入品より60～70セント高く取引されている。2月、3月は需要がピークに達し、価格は上昇するが、供給量には限界がある。カナリア諸島産バナナは週当たり6～8千トンと入荷は安定しているが輸入品の供給量は安定していない。欧州の輸入業者は、スペインは余剰品を投入する市場と考えており、これによりスペイン国内の需給は均衡を保っている。

静かなイタリア市場

イタリアのバナナ市場では年明けは低調で、2月下旬から6月にかけて好調となる。現在、アフリカ(カメルーン)、中南米(エクアドル、コスタリカ、コロンビア)から輸入されている。ナポリの卸売市場の取引価格は18キロ箱ものでキロ当たり90セントから1ユーロである。トリノ市場は中米産が87セントで、今月初旬に比べて少し安い。ローマ市場では80セントである。

以下、ブランドにより価格が異なるベローナ市場の取引価格を示す。なお、輸入国は各ブランドとも複数の国に跨がっている。

- ・Bouba ブランド、カテゴリーI:0.83 ユーロ/ kg
- ・Simba ブランド、カテゴリーI:0.85 ユーロ/ kg
- ・Cabana ブランド、カテゴリーI:0.88 ユーロ/ kg
- ・デルモンテ及び Tropy ブランド、カテゴリーI:0.90€/ kg;
- ・ドールブランド、カテゴリーI:1.03 ユーロ/ kg
- ・チキータブランド、カテゴリーI :1.15€/ kg

価格が高いギリシャ市場

業者によれば、過去2週間、南米産バナナの価格は高かったそうだ。輸入業者によるとギリシャの消費者からは、サイズの面でエクアドル産バナナが好まれるようだ。需要が大きい反面、供給量が少なかったため、価格は上昇したようだが、業者によれば、「この状況では、生産者は利益を得ているだろう」とのことだ。

スーパーは有機バナナや様々なサイズのバナナに関心を持っている。市場にとって有利な点は、2年前に比べて輸送コストが半減していることだ。

米国のバナナ戦争

供給は安定しているが需要が低迷している。ボストンの業者によると、「各小売チェーンは1ポンド(454g)当たり39セントで販売しているので痛手だ」そうだ。価格競争はこじばらく激化しており、終わりが見えないようだ。業者によると、スーパーは大手の多国籍バナナ販売会社から魅力的な価格を提示されており、これにより被害を受けているのは中小のバナナ販売会社のようだ。また、価格競争に加え、バナナは年間を通して供給される他の果実との競争にも対応しなければならない。この競争のお陰でバナナの需要が食われている。なお、こういった状況の中で、プランテンの市場は影響を受けずに堅調のようだ。

フィリピンからの輸入が減少する中国

バナナの販売ピークは9月から2月である。中国では南部の Guanxi、雲南省、海南省でバナナの生産が行われている。現時点では市場は弱含みであるが、昨年の国産価格は前年よりも高かった。この理由は国内を襲った暴風雨とフィリピンからの輸入の減少による。フィリピンは最大の輸入先ではあるが、エクアドル産輸入にシフトとしつつある。昨年5月にはフィリピンからの輸入貨物のいくつか腐敗したことがあった。また、政治情勢も要因の一つである。そして何よりも、フィリピン産バナナが気候変動と病気の影響で生産量が減少しているからだ。このため、推測であるが、同国から中国への輸出量は30%減少したとのことだ。中国は、ベトナム、タイからも道路を経由して輸入している。両国は北京や上海のような大都市には追熟施設を設けているが、

稼働能力には限界がある。

輸出が増加するインド

インドは過去2カ年にわたり干ばつの被害を受けた。生産サイドの情報によると、昨年の収穫量は40%減少したという。現在価格は上昇しているが、次期シーズンの収穫が始まる3月には価格は低下すると見込まれる。業者によると、品種キャベンディッシュの他に品種 Yelakki も生産されているそうだ。両品種は別々のラベルが添付されており、灌漑設備への本格投資のお陰もあり輸出も可能であるようだ。また、欧州、中東向けにベビーバナナの輸出が期待されている。輸出はパキスタン、アフガニスタン等の近隣諸国向けに行われているが、更に遠くの湾岸諸国へも向けられている。特にパキスタンの需要は高まっており、ドバイ市場も成長している。昨年、輸出量は45%増加し、9.3万トンに達した。以上の諸国の他、フランス、英国向けにも輸出が行われている。

試験圃場を設けたオーストラリア

数ヶ月以内にダーウィンの南に6ヘクタールの試験圃場が設置され、キャベンディッシュバナナの遺伝子組換えバナナが試験栽培される予定だ。これにより大変怖いとされる病気 TR4に耐性を持った品種の開発が期待される。この病害は1997年にオーストラリアの北部で発見されたものだ。これまでの研究成果ではこの病気に高い抵抗性を示す4つの系統の Grand Nain キャベンディッシュバナナが作出されている。

著者: Rudolf Mulderij

6. 最新技術でバナナをカットフルーツに

FreshPlaza 電子版 (2017 年 2 月 6 日)



2月8日～10日にベルリンで開催される「フルーツ・ロジスティカ」で最新の鮮度保持技術が展示される。

果実の鮮度保持技術を開発する Food Freshly 社が、バナナをスナックとして食べられる鮮度保持技術を最新の研究成果として展示するとのことだ。

カットフルーツは世界的に成長を続けており、カットフルーツの器の中にバナナを加えることは小売業者にとっては大変な魅力であるが、これまではとても難しい課題であった。このニーズに応えるため、昨年 Food Freshly 社は O Plus Ultra-7 という、天然素材を用いたバナナ用の鮮度保持剤を発売し、スライスしたバナナのスナック利用を実現した。

O Plus Ultra-7 はビタミンとミネラルで構成された鮮度保持剤でバナナの褐変を防ぐことができる。この保持剤の溶液に浸すことで、味が変わることなく天然の特性を保持できる。そして、何よりもこの製品には亜硫酸塩、アレルギー、遺伝子組換え生物などが含まれていない。

Food Freshly 社の技術担当部長は、「これまで、L-システインのような物質がバナナの褐変を防止できると論文で紹介されてきたが、亜硫酸塩を含む物質は EU では使用が禁止され、米国の食品医薬品局もカットフルーツへの使用は認めていなかった。従って、食品規制法に触れない解決策を編み出したことには誇りを持っている」と語っている。

O Plus Ultra-7 が紹介されて以降、6ヶ月間は世界中に試験用に提供されてきたが、これを利用したカットフルーツの販売が間もなく始まる。

フルーツ・ロジスティカでは簡単な方法でバナナをカットフルーツに加えることができることを紹介する。なお、酸素による果実の酸化を防ぐために(展示には)気密性プラスチック容器を用いるとのことだ。

この技術を用いてカットフルーツの売上販売を試みているのは FOODfreshly®社で、フルーツ・ロジスティカでは同社のブースで展示される。

問い合わせ先: benjamin.singh@food-freshly.eu

7. 米国農務省カンキツグリーニング病対策に研究資金を投入

AMERICA FRUIT 電子版 (2017 年 2 月 9 日)



米国農務省及び国立食品農業研究機構(NIFA)は、カンキツグリーニング病対策の研究のため、4カ所に合計1360万ドル強の研究費を支出することを公表した。

この資金は NIFA 傘下の作物研究イニシアティブ(SCRI)のカンキツ病害研究・技術普及プログラムとして、2014年に米国農業法に位置づけられたものである。

NIFA の局長によると、「カンキツグリーニング病の被害は数十億ドルに達し、NIFA からの研究予算の支出は、カンキツ産業の再生と反映に不可欠なもので、フロリダの生産者が自信をもって改植を行えるよう手助けするも

のだ」としている。

カンキツグリーニング病は世界で最も重大なカンキツの病気である。2005年にフロリダ州で初めて発見されて以降、フロリダ州全土のカンキツに広がり、90億ドル産業といわれる同州のカンキツの生産を75%減少させた。

現在、全米では15の州又は地域の全部又は一部が同病を媒介するミカンキジラミの防疫地域に指定されている。

2009年以来米国農務省は4億ドルをカンキツグリーニング病対策に投入し、このうち5700万ドルをカンキツ病害研究・技術普及プログラム(2014年以降)を通じて提供してきた。

2016会計年度の資金提供先及び金額は、サウスカロライナ州クレムソン大学が427万ドル、カリフォルニア大学リバーサイド校が510万ドル、アイオワ州立大学が248万ドル、米国農務省農業研究所(ジョージア州)が182万ドルである。

クレムソン大学の研究は、CRISPR-Cas9 というゲノム編集ツールを使ったカンキツグリーニング病抵抗性品種の育成を進めようとするものである。

カリフォルニア大学の研究は、病気の原因とされる病原バクテリアを従来方法及びナノテクノロジーを使って防除しようとするものである。

アイオワ州立大学の研究は、媒介昆虫のミカンキジラミを土壌中のバクテリア由来物資で防除しようとするものである。

農務省農業研究所の研究は、化学的手法を用いた病害防除の効果及び経済性について特定し、評価を行うものである。

8. 拡大する有機果実（米国）

The World Apple Report 誌（2017年2月版）

小売業者は引き続き有機果実の販売を支援する活動が続け、価格は高値を維持し、慣行栽培の果実に比べてプレミアム商品としての地位を保っている。

小売業者による広告回数の推移（品目別）						
Fruits	2011	2012	2013	2014	2015	2016
Bananas	8,442	18,090	18,409	25,498	64,206	75,526
Cherries	0	5,603	1,829	6,412	5,891	6,531
Seedless Grapes, Red	17,314	37,390	38,132	80,616	94,174	84,347
Oranges, Navel	4,199	26,314	24,572	15,135	34,075	47,033
Peaches, Yellow	7,373	17,348	21,126	26,552	36,458	37,560
Pears, Bartlett	11,598	12,684	13,403	24,947	24,166	26,214
Pears, D'Anjou	4,501	11,786	8,244	13,711	12,668	11,190
Strawberries	3,201	65,229	57,289	80,954	91,578	115,586

Source: USDA, National Retail Report, Specialty Crops (weekly).

上の表は8大有機果実の広告回数を集計したもので、2011年から2016まで時系列に並べた。確かに、新しい年次ほど有機果実の広告回数を補足する確率は高まってはいるが、ほとんどの品目において著しい増加傾向を示している。最も伸びが少なかったのはナシ(Pears)のダンジュ(D'Anjou)であるが、それでも2倍以上増加している。

広告された有機果実の平均販売価格の推移（品目別） （ドル/ポンド）						
Fruits	2011	2012	2013	2014	2015	2016
Bananas	0.795	0.775	0.770	0.776	0.722	0.731
Cherries	n.a.	4.472	4.852	4.668	5.291	4.666
Seedless Grapes, Red	2.496	2.600	2.682	2.794	2.785	2.700
Oranges, Navel	1.254	1.109	1.259	1.505	1.561	1.508
Peaches, Yellow	1.836	2.251	2.339	2.626	2.726	2.715
Pears, Bartlett	1.449	1.815	1.893	1.840	1.798	1.902
Pears, D'Anjou	1.320	1.293	1.415	1.329	1.356	1.467
Strawberries	3.755	3.579	3.627	3.680	3.713	3.662

Source: USDA, National Retail Report, Specialty Crops (weekly).

一方、過去6カ年の有機果実の平均販売価格は高値を維持している。2016年は2011年に比べて、8品目中5品目で価格が上昇している。上昇した品目は種無し赤ブドウ(Seedless Grapes, Red)、ネーブルオレンジ(Orange, Navel)、黄桃(Peaches, Yellow)、ナシのバートレット(Bartlett)、ナシのダンジュである。最も価格が下落(8%)したバナナは、常にロスリーダー(訳注:マーケティング用語で、小売店において集客を目的として、採算を度外視して極めて価格が安く設定された商品)の役割を担わされている。

上記や他の統計を踏まえると、有機果実に対する需要は依然として上昇傾向にあることがわかる。そして、小売業者は有機果実の販売回転数を上げるために、引き続き宣伝活動を活発化させようとしている。

9. EU離脱で英国はGM作物に対する姿勢を変えるか

FreshPlaza 電子版 (2017年2月7日)

現在、EUと英国は遺伝子組み換え食品の生産、流通に対して厳しい政策を講じている。しかし、英国がEUを離脱した後は、英国当局がこの問題でどのようなスタンスに立つのか不明確である。今後予想される英国と米国の貿易協定では、英国が遺伝子組換え作物に関する規制を緩和する可能性があると思込まれる。



今月中に販売される遺伝子組み換え作物の中で、全米で最も人気があるのは北極(Arctic)リンゴである。この遺伝子組換えリンゴは果実をカットしても褐変しないという特色を持っている。米国では認可されているが、EUでは遺伝子組換えに反対しているため認可されない。EUでは昨年1月、1998年以来初めて申請のあった遺伝子組換えトウモロコシに対してさえも認可が出されなかった。

認可がますます困難になるのではないかと意見もある中で、2050年までに97億人の人口を養うには遺伝子組み換えが不可欠だとする主張がある。多くの科学者は遺伝子組み換え作物に賛成の立場をとっており、100名のノーベル賞受賞者がグリーンピースに対して遺伝子組換え作物に対するスタンスの変更を求めている。「反対は科学的根拠に基づかない」からだ。この中で、「人や動物の健康に悪影響を及ぼしている事例は皆無である」としている。

英国は早かれ遅かれ態度を変更するかもしれない。昨年10月、議会への回答書簡の中で、英国農業相は、EU離脱の準備の一環として、政府は「将来における遺伝子組み換え作物に関する規制の見直し」を検討していたと述べている。

情報源:metoro.co.uk

10. 世界の核果類市場

FreshPlaza 電子版 (2017 年 2 月 3 日)



欧州の核果類市場はスウェーデンを除いて動きは少ない。核果類は夏果実と認識されているので、冬場の消費は少ない。ただ、スウェーデンだけは、スモモ、モモ、ネクタリンに関するこの認識が崩れつつある。イタリアの生産者は栽培面積が減少しているのに価格が低迷していることに心配している。イスラエルの生産者は EU 市場でシーズン初めと終わりの隙間市場での販売拡充を目指している。中国では生産拡大のための投資が進んでおり、国産果実は輸入品と競合関係に入っている。オウトウは中国の旧正月の期間に販売のピークを迎えている。米国とカナダは不作だった昨シーズンに対し、新年は好調な販売を期待している。

中国では国産が輸入品と競合

中国のモモの生産量は世界の約半数を占めると見られるが、今シーズンの生産量は更に増加すると期待されている。核果類は国産に加えて輸入品も出回っている。スモモの場合は、米国、台湾、ニュージーランド、チリから輸入されている。昨年は、スペインに対してモモとネクタリンの輸入を解禁し、オーストラリアに対してネクタリンを解禁した。旧正月に先だって、上海、広州の輸入市場ではチリ産とオーストラリア産が競合している。国産果実の輸出は冷蔵施設が不十分であることからほとんど見られないが、ロシア、ベトナム向けには輸出されている。

中国にとっては、オウトウの輸入の方が、スモモ、モモ、ネクタリンよりも重要である。オウトウは、旧正月前後はチリ、ニュージーランド、オーストラリアから輸入され、夏には米国、カナダから輸入される。国別にはチリが出荷額の80%を占めている。近年、オウトウ輸入は急速に拡大しているが、一方で国産のオウトウの競争力が強化しつつある。実際、国産オウトウの品質は向上しており、生産量も30%増加することが見込まれている。山東省、河北省、河南省が核果類の主な生産地であり、上海市場では山東省の煙台産のオウトウの人気は高い。加えて、地方政府はオウトウの温室栽培の拡大を支援している。

米国、カナダは今年のシーズンが好調であることを期待

チリからの輸入は既に終わった。輸入業者によるとチリの天候不順により出回り量は少なかったという。天候不順はカリフォルニア州、ワシントン州でも見られ、昨シーズンは異常な気温で推移した。シーズン当初は高

温に増遇し、シーズン終盤は降雨に見舞われた。カナダでもオウトウの生産は不調であった。収穫は例年より4～5週間前に始まり、果実のサイズは大きかったが、生産量は少なかった。このため、輸出は近年になく押さえられた。このような昨シーズンの状況を踏まえ、今年は順調な生育が望まれている。

カリフォルニア州では4月中旬にシーズンが始まる。同州では好調なシーズンであることを期待し、選果、包装施設への投資が進められている。多くの国が中国市場を目指す中で、こういった投資は不可欠である。極東市場はますます競争が激化すると予想される。

早期の輸出に期待するイスラエル

イスラエルの核果類は主に国内市場で販売される。年間消費量は約10万トンであるが、年々増加している。核果類の中ではモモとネクタリンの人气が高く、約半分を占める。スモモ、アンズはそれに続く。

核果類の生産は、気温が低く栽培に適している同国北部で行われている。同地は温暖な気候に恵まれ、収穫期間は長く収穫開始も早い。このため、4月中旬に始まる収穫期は12月末まで続く。栽培面積は8,000 haで、今後更に200ha増加すると見込まれているが、過半はモモ、ネクタリンである。

このように収穫期間が長いことは欧州向け輸出、特にシーズン開始時と終盤時に有利である。輸出は近年増加しており、新規植栽は価格が良い早生品種に集中している。シーズンピークの販売金額は、アンズでキロ当たり4～5ユーロ、スモモが5～6ユーロ、モモ、ネクタリンが1.5～3ユーロである。

核果類は夏果実と見なされているベルギー

南アフリカ産のアンズ、モモ、ネクタリンの販売は順調であった。シーズン初めは好調に推移したが、後半に悪化した。大玉(規格 AAA)が少なかったため価格は良かったが、多かった小玉の価格は下落した。

いずれにしても、核果類は夏果実の認識されており、消費は天候に左右され、最近数週間続いた低温のせいで消費は減退している。こういったことから、通常は南欧での需要は比較的高いが、今年は寒波がスペイン等を襲ったため、欧州全般の需要は減少している。

イタリアの核果類は不調

イタリアの核果類生産は露地栽培も被覆栽培も冬眠状態に入っているみたいだ。昨年末のエミリア・ロマーニャ州のモモ、ネクタリン価格は期待値よりもキロ当たり20～35セント安かった。「とても満足できる価格ではない。2015年よりはましだと言われるが、ひどいシーズンだった」と生産者は語っている。

高級品でも価格が安いことは、生産者にとって受け入れがたい。栽培面積が減少しているのに価格が安い状況では、業界は不況に陥っていると言えようがない。イタリアとスペインでは過去栽培面積が30%減少したとされている。過去には儲けも多く、生産会社は苦境を乗り切るためのバッファーを作る余裕もあった。しかし、昨年の状況は関係者の気持ちを打ち砕いた。輸出に関しても良いニュースはない。品質が評価されているスモモ Angeleno の生産が増えたものの、米国市場の需要は少なく、結局欧州市場で売りさばかざるを得なかった。

スウェーデンでは核果類は単なる夏果実とは認識されなりつつある

ここ数週間、核果類の市況は好調である。需要は拡大し、品質も良好である。こういった状況は昨年より大幅に改善されている。業者によると、これは今年の冬、寒波に襲われ、野菜の供給が少なくなった影響だとされている。つまり、スーパーとしては棚の空いたスペースを埋めるのに野菜の代替品と見なしたようだのだ。

核果類の安定供給を図るため、輸入業者は輸出国と直接取引をせず、オランダ市場から入荷している。これにより数量は限定されるが、新鮮な果実を入手できる。スウェーデンの消費者は、各種品目、異なる色、様々な品種の核果類に接することを望んでいるようだ。近年、出回る果実の品質が向上していることもあり、核果類は単なる夏果実というイメージから脱しつつある。

著者: Rudolf Mulderij

1 1. 2016 年オーストラリアの果実輸出は新記録

ASIAFRUIT 誌 (2016 年 12 月・2017 年 1 月合併号)

2016年のオーストラリアの生鮮果実輸出は幾つかの新記録を達成した。カンキツ、生食ブドウ、オウトウでは過去最高を記録した。2016年8月の輸出量は6.2万トンで、月間輸出量が過去最高となった。また、4月は主に生食ブドウのお陰で、輸出金額が1.2億オーストラリアドルと月別で過去最高を記録した。

2016年9月までの12ヶ月間で、輸出量は24%増加し、輸出金額は41%増加した。これは、生食ブドウやオウトウのように単価が高い品目の輸出が増加したお陰である。

このような大幅な増加は、アジア市場の需要が高まったためであるが、生産者、輸出業者はアジアの需要に対し、優れた生育環境を活かした高品質果実の生産により応えたのである。加えて、為替レートが有利に働いたこと、新市場へのアクセスが充実したこと、中国、日本、韓国との間で自由貿易協定を締結したことが理由として挙げられる。

オーストラリアでは、カンキツと生食ブドウが年間の輸出時期を相互に補完し、オウトウと夏果実は11月から3月までに輸出されている。

最近5カ年で急拡大

果実の輸出先(量)

中 国	16%
香 港	18%
日 本	11%
インドネシア	8%
シンガポール	7%
その他アジア	15%
中 東	11%
ニュージーランド	6%
北 米	3%
欧 州	1%
その他	4%

今や中国が最大の輸出先国である。中国はカンキツ、生食ブドウ、マンゴー、オウトウ、リンゴの輸入を解禁し、直近にはネクタリンの輸入を認めた。これにより、かつては取るに足らなかった輸出がこの5カ年で1.75億オーストラリアドル(1.35億米ドル)に達した。これは生産者、輸出業者の努力、輸送・流通業者、輸入業者、政府、業界の一丸となった協力の賜である。

インドネシア、日本、シンガポールも上位5カ国として伸張している。インドネシアはこの5年間で18%増加し、3.2万トンに達した。主な品目は生食ブドウ、マンダリン、西洋ナシである。日本向けは32%増加し、4万トンとなった。大部分はカンキツと9千トンを超える生食ブドウである。これは(日豪 EPA により)市場アクセスが改善されたここ2年間の成果である。

中東もオーストラリアにとって重要な市場である。特にアラブ首長国連邦向けは53%増加し、3万トンに達した。このうち、3千トンは夏果実(モモ、ネクタリン、スモモ、アンズ)とアジア諸国へは検疫の関係で輸出できない様々な品目で構成されている。

一方、欧州、北米向けの輸出は未だに少なく、輸出量全体の5%未満である。この中で米国の西海岸は重要な輸出先であり、マンダリンの輸出が83%増加し3,300トンとなり、輸出が減少したネーブルを補完した。また、英国向けにはリンゴのピンクレディーが昨年倍増し、1,200トンに達した。これはプレミアム商品の輸出戦略に則ったものである。この他、欧州向けにはキウイが1,000トン輸出されている。

これらのことから、出荷季節が逆となる利点を活かしたアジアの需要に対応することがオーストラリアの果実輸出の将来の姿といえる。また、カンキツと生食ブドウ業界が中心となって、アジア向け市場の拡大に力を注いでいる。南半球の中で、その利点を活かしてアジアの需要に応える国としては、オーストラリア以上の国はないといえよう。

著者: Wayne Prowse

12. チリで史上最大の山火事

FRUITNET 電子版 (2017 年 1 月 27 日)



—チリの果実輸出への影響に関しては未だに公式な見解は示されていない—

チリの中部、南部を襲った山火事に対して、同国は国際的な救援を求めている。

バルパライソ及びマウレ地方では折からの強風、長年続いた干ばつの影響で、これまで100余りの火の手が上がっている。

チリ史上最悪の山火事はこれまでに10人の犠牲者、29万 ha の消失を招いた、と同国林業公社は語っている。

マウレ地方では歴史ある多くのブドウ園が破壊されたとされ、火災は数週間続いているといわれるが、果実生産に及ぼす影響は明らかにされていない。

チリ農業会議が23日(月曜日)に行った会議では、同国農業大臣は、「今日までに得られた情報によると、農業生産の中心はセントラル・バレーであり山火事は海岸付近の山岳地帯に集中していることから、(農業生産への)深刻な被害はないと見られる」と記者団に語った。

FRUITNET 社としてはチリ港湾部までのアクセスに影響があるかは判明できていない。金曜日(27日)の段階では、道路やその他のインフラに影響が出ているか不明であるからだ。

木曜日(26日)、チリ大統領は、関係業界の代表を招集し、緊急事態に対処し今後の復旧を進めるために一致団結することを呼びかけた。

大統領によると、この会議は大変に「積極的」であったそうで、民間の各団体は、「この緊急時に政府を支援する」と約束したそうだ。

13. 世界のキウイ市場

FreshPlaza 電子版 (2017 年 1 月 13 日)



今シーズン、欧州ではキウイの生産量は少ない。イタリアとスペインでは相当の減収である。一方、ギリシャの生産は順調とのことだ。欧州市場を牛耳るのは3カ国であり、次いでフランスだ。その後はチリ、ニュージーランド産が市場に出回る。欧州産の出荷は早期に始まったが、南半球産は極端な天候の影響を予測するにはまだ早い。一方、中国は輸出業者にとっては引き続き成長市場だ。カリフォルニア州の生産は楽観視されている。というのも、収穫量はやや多く、価格も安定しているからだ。

ニュージーランドは天候の影響が問題

ニュージーランド北島の北部のタウランガ地方は大変暑かった。2016年の平均気温は高かったが、日照時間は降雨により十分ではなかった。春になっても気候は悪く、特にプキーナ地方では干ばつに悩まされ、雨が望まれている。

昨年、ヘイワードの生産量は9260万箱であったが、有機ヘイワードは394万箱に留まった。サンゴールドの生産量は4680万箱であった。輸出に関しては、中国からの需要が拡大している。昨年、ゼスプリの中国輸出は50%増加した。中国市場の昨年の伸びは例外ではなく、年間20~30%増加している。サンゴールドに対する需要も拡大している。日本は伝統的に基盤となる市場であり、現在でも成長が続いている。東アジアの市場は韓国、台湾も含めて成長している。

イラン産キウイのインド向け輸出

イラン産のキウイの出荷は終了した。イランのシーズンは7月から12月までである。インドの輸入業者によると、今年のイラン産キウイには満足しているという。品質も価格も良好で需要も多かったそうだ。イラン産はギリシャ、イタリア産に比べると安い。現在、市場はギリシャ産が出回っており、その後はチリ産、イタリア産と続く。

中国の需要は上昇中

中国は経済状況が悪化しているにもかかわらず、ニュージーランド産に対する需要が大きい。昨年はゼスプリ産のキウイが50%増加した。

カリフォルニアのキウイ生産は楽観的

今年のカリフォルニア産キウイの出荷は例年に比べて多い。実際、収穫量も多く、果実の肥大も優れている。同州中部ではキウイへ改植する生産者が多く、栽培面積が増加している。カリフォルニア州は全米のキウイ生産量の95%を占めており、約170の生産者(会社)が、1500ha を栽培している。2016年の生産量は800万箱であったが、2015年の600万箱と比較すると急激な伸びである。大部分の品種はヘイワードであるが、その他のグリーン、ゴールド品種も栽培されている。

キウイ市場は現在のところ堅調で、価格も安定している。しかし、今後数週間で輸入品が入荷することから、市場は複雑に揺れると見込まれる。輸入は、チリ、ニュージーランド、イタリア、フランス、ギリシャ、中東からである。というのも、市場立地により輸送コストが異なるからである。イタリア産の米国東海岸での価格は、陸上輸送を伴うカリフォルニア産よりも安いからだ。

イスラエルではキウイはニッチな果実

イスラエルではキウイはニッチなものと認識されている。このことは、生産量、消費量とも当てはまる。確かに収穫シーズンに入るとスーパーで購入できる。大都市の大規模スーパーや専門店では周年で購入することができる。しかし、イスラエルではニュージーランド産が最も多い。

イスラエルのキウイ生産は200ha で行われている。生産は同国北部で行われている。栽培には比較的低温が望まれることから、ガリラヤの高地とゴラン高原だけが適地である。さらに、栽培には十分な水が必要である。こういった制約があるため、国内では60の生産者が年間6千トンを生産するのみである。品種ではヘイワードの人气が高く全体の80%を占め、次いで Bruno である。

国内の生産量が少ないため、価格は高い。今年の初めには、キロ当たり3ユーロであった。しかし、需要も少ないため、国産品が市場に出回る秋を除き、価格は安定している。

生産量が落ち込むイタリア

出荷はクリスマスからピークを迎えている。スタート時は量が少ないことから価格は堅調であった。生産量は22%減少の模様だ。最初の数ヶ月の売上は悪くはなかった。なお、大部分の果実は輸出されている。

ピエモンテ州の栽培面積は1%増加したが、生産量は雹害に遭遇したため11%減少した。市場は供給量が少ないにもかかわらず需要が伸びないことから活発ではない。これは価格が上昇したためである。多くの欧州諸国で生産量が減少したことから、輸出業者は販売に慎重であり、価格の上昇を待っている。

ベネト州、ペローナ州では減収が著しい。両州では栽培面積が2015年に比べて22%減少し(原文のママ)、出荷数量は14%減少した。エミリア・ロマーニャ州では栽培面積に変動はなかったが、収量は19%減少した。業者によれば貯蔵量は(昨年より)26%少ないという。

ギリシャ、ニュージーランドからの輸入が始まり、価格は下落傾向にあるが、生産者は輸出に期待を寄せている。輸出先は、台湾、中国、オーストラリア、ブラジル、米国、カナダである。特にアジア、オーストラリア市場では需要量が多い。欧州内でも、英国、スカンジナビア、ドイツからの需要が高まっている。

ラツィオ州では作柄が不良で、生産量は34%減という記録的数字であった。なお、生産量は栽培面積が5%増加したため幾分相殺された結果である。価格は堅調であるが、輸出業者は決して売り急ぎをしていないようだ。市場には未だにギリシャ産が出回っており、同国産の出荷が終わり、市況が上向くまで待っている状態のようだ。カラブリア州、カンパニア州、バジリカータ州では栽培面積が増加したにもかかわらず、30%近い減収とのことだ。

イタリアの2016年の生産量は44.8万トンと見込まれ、うちゴールド品種は2.95万トン(前年より29%増)、グリーン品種は24%減のようだ。

ギリシャは豊作

業者によると、ギリシャでは貯蔵量が多いようだし、多くの国から需要が高まっている。しかし、今シーズンの品質は良くないようだ。ただ、欧州諸国は価格の安いギリシャ産を選択している。

ギリシャは引き続き栽培期間の延長を進めている。ギリシャはロシア市場を失って以来、欧州市場の中のメインプレーヤーとなっている。出荷時期は3月に終了する見込みで、その頃に向け価格が上昇すると期待されている。

生産量が少ないスペイン

今シーズンの生産量は20%減のようだ。例年の収量は1.5万トンであるが、今年は1.2万トンと見込まれている。一方で消費量は年間9万トンであることから、国内生産は、イタリア、フランス、ギリシャ、ポルトガルからの輸入の補完という位置づけである。

昨年と比べると果実の肥大は良好であるが、小さいサイズの価格は40～50%高であり、中型サイズで10～15%高である。価格が高いため消費は落ち込んでいるが、生産量が少ないため業者は無関心である。

好調なスタートを切ったフランス

フランスのOscar(品種名)キウイは2ヶ月前にシーズンが始まり、4ヶ月間続く。業者はシーズンのスタートに満足している。なお、12月は出荷のピークではない。ゼスプリのキウイが市場に相当残っているからだ。今年は糖度が乗らなかったため、例年より10日遅れてシーズンが始まった。しかし、この遅れで、シーズンの終了時期も延長されると見込まれる。

フランスでは、近年ギリシャが低価格を売りにしていることから、プレミアム市場に進出しようと努力している。ただし、米国市場は値決めの面で魅力的ではない。欧州以外の市場として、ベトナム、中国、韓国に輸出を行っている。

オランダ:需要は少ないものの価格は安定

輸入業者によると、キウイは絶対量が少ないという。一般にギリシャ産のキウイは単に価格が安いという理由でイタリアに好まれている。オランダからの再輸出は、主に東欧に向けられている。クリスマス直前にギリシャ産の輸出がストライキにより停止するかもしれないと懸念されたが、事態は収束した。現在、需要は少なく失望するレベルであるが、価格は適正な水準に留まっており、大玉で9～10.5ユーロ(単位不明)の水準だ。この水準はシーズン末期の5月中旬まで続く見通しだ。

ベルギー:ゼスプリの輸入が順調

ニュージーランド産のシーズンが終了し、ゼスプリのキウイは完全に売り切れた。業者は手元の僅かなキウイを販売しているが、切れ目なく欧州産のグリーンキウイに移行する模様だ。ただし、数量は昨年に比べて少ないと見込まれている。

欧州産のサンゴールドは好調の内に終了し、4月に始まるニュージーランド産のサンゴールドに期待している。サンゴールドの生産は増加見込みのため、業者は期待を寄せている。

シーズン開始が待たれるチリ

2016年シーズンの開始は例年より遅れた。欧州市場には大量の輸入品が溢れているため、輸出業者は欧州以外の市場を目指している。このため、例年は50%が欧州に輸出されるが、2016年は37%に留まった。一方、中国は有望市場であり、輸出量は154%増加した。次期シーズンは例年より早く3月中旬に始まる見通しで、生産量も安定している模様だ。

輸出を目指すアルゼンチン

キウイの栽培面積は増加しており、生産者は市場活性化の可能性に期待を寄せている。今のところ、生産物は国内向けであるが、将来は輸出を目指している。昨今の気候変動はアルゼンチンのキウイにとっては良い方に働いているようだ。

著者:Rudolf Mulderij

14. 奇妙な形だが美味しい Sumo Citrus はユニークな商品

FreshPlaaz 電子版 (2017 年 1 月 18 日)

訳注)Sumo Citrus®は日本で育成された不知火(デコポン)のことである。



2011年、カリフォルニア州で Sumo Citrus が商業販売された。このユニークなかんきつ品種は同州のセントラル・バレーで生産されている。この年以降、毎年生産が増加し、現在も拡大している。「昨年は100万箱を出荷した」と Suntreat 社は述べている。「今年は300万箱を生産し、今後7～8年間は成長を続けるだろう」とも語っている。

試食を通じて拡大する消費

Sumo Citrus は奇妙な形をしている。「他に比べるべきものがない商品だ。皮が剥きやすく、ジューシーで種がない。形

が奇妙なので消費者が好奇心を持ち、一度でも購入した消費者は買い続けている」とも話している。多くの消費者は店舗の試食を通じて初めて出会うようだ。今年、Sam's Club 社は全米の店舗で試食会を繰り広げるとのことだ。「この商品は大変人気が高く、生産が追いつかない」らしい。

国内の人気にだけでなく、海外の消費者もこの商品を求めているようだ。「日本、韓国、オーストラリアに試験輸出をしようとしたが量が確保できなかった。そこで、米国内市場への出荷を制限している」と Suntreat 社は述べている。

降雨があると遅れる出荷

Sumo Citrus の生産、収穫、出荷は簡単ではない。「栽培が難しい品種だが、2016/17年は夏季が温暖だったので好調なシーズンを切った」そうだ。12月下旬に収穫が始まったが、通常年に比べると早かったそうだ。(今年の出荷は1月第1週に始まった。これまでは収穫の開始は1月中旬からで、降雨があるとさらに収穫が遅れたそうだ。出荷は3月まで続くという。



米国以外での生産の拡大

カリフォルニア州以外でもオーストラリアで生産が行われている。「シーズンが逆であるため、出荷期間が6ヶ月拡大できる」そうで、7月中旬に収穫が始まり10月まで続く。オーストラリアの生産量の拡大はカリフォルニア州に比べて数年遅れているようだ。しかし、Suntreat 社によれば、6～7年後には周年供給が可能となると見ている。同社は、スペイン、ペルー、アジアでも生産を進める計画だ。

Sumo Citrus の商標は Suntreat 社が所有している。自らの生産量は75～80%で、少数の外部生産者と協力関係を持っている。Sumo Citrus は2品種のマン

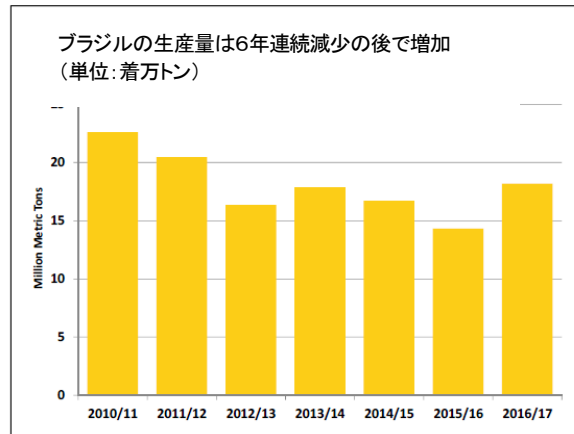
ダリンを交配し、さらにオレンジを交配したものだ。しかし、分類上はマンダリンと位置づけられている。もしこの記事に興味を持たれたなら、(オンラインで受け付け)1月最後の週に、直接発送する。

著者:Pieter Boekhout 情報源:www.suntreat.com

15. 2016/17 年世界のカンキツ市場と貿易動向

米国農務省海外農業局ホームページ（2017 年 1 月 25 日公表）

<オレンジ>



世界の2016/17年の生産量は、前年より240万トン増加し、4,960万トンに達すると予想される。これはブラジルが増加し、中国、米国の減少分を十二分に補うためである。加工仕向量はブラジルの生産量が増加するため280万トン増加すると見込まれる。一方、輸出量はあまり増加しない。これは、生産増が加工仕向増に繋がるためである。

ブラジルの生産量は前年を27%も上回る1,820万トンと予測される。これは天候に恵まれたためであり、開花、着果は順調であった。加工仕向量は前年数量の1/3相当が増加し、1,290万トンと見込まれる。生鮮消費量も生産増に伴い増加する模様だ。

米国の生産量は、フロリダ州でカンキツグリーニング病の影響が顕著であることから、前年を47万トン下回る490万トンと予測される。フロリダ州の生産量は全米の約60%で、カリフォルニア州が約40%である。フロリダ州産は大部分が加工に向けられ、カリフォルニア州産は生食用に向けられる。国内消費量は8%増加し、輸出量は若干減少する。加工仕向量はフロリダ州の減産により減少する。

EUの生産量は、冬期の干ばつとイタリアにおけるトリステザウィルス被害により、前年を19万トン下回る610万トンと予測される。輸入量と加工仕向量に大きな変化は見られないものの、生鮮消費量は生産量の減少から落ち込むと見込まれる。

メキシコの生産量は若干減少すると予測される。国内消費量は、生産量の減少と加工仕向量の増加から減少すると見込まれる。

南アフリカの生産量は前年と同程度と予測される。輸出量もほとんど変化はないが、依然として世界の貿易量の25%程度を占めている。主な輸出先はEU、ロシアである。

モロッコの生産量は、前年を4%上回る96万トンと予測される。これは生産面積増、単収増、灌漑施設の整備によるものである。国内消費量に変動はないが、輸出が増加すると予測される。

<オレンジジュース>

世界の2016/17年のオレンジジュース生産量は、ブラジルのオレンジ生産量が過去30年来の不作状態から急回復したため、65度ブリックス換算値で200万トンに拡大すると予測される。消費は米国と中国が主導する形で減少すると見込まれる。在庫量はブラジルで倍増することから、全体では15%増と見込まれる。

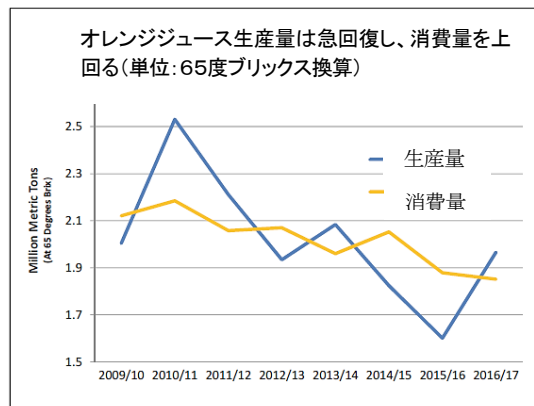
米国の生産量は、加工仕向量の減少から、2.8万トン減少し35.5万トンと予測される。輸入量は2万トン増加し、30万トンと予測される。

ブラジルの生産量は、オレンジの生産増により、44%増加して120万トンに達すると予測される。輸出量は

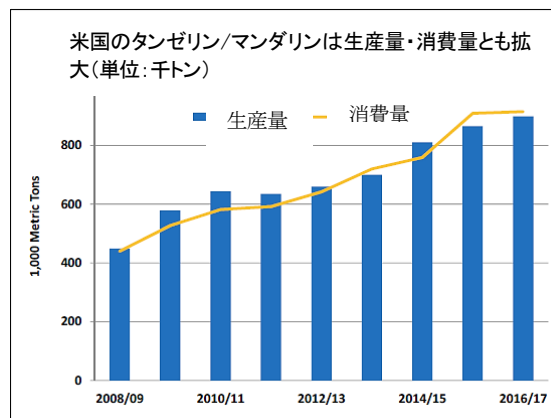
26%の増加が見込まれる。

メキシコの生産量、輸出量は、3%増加すると予測される。

EUの生産量は若干増加するが、輸出入量は変化がないと予測される。



<タンゼリン/マンダリン>



世界の2016/17年の生産量は、中国で減少したため、EU及びモロッコで増加したものの、前年を1%下回る2,840万トンと予測される。生鮮消費量は、生産の減少から若干減少し、輸出量は変化ないと予測される。

米国の生産量は、カリフォルニア州、フロリダ州とも増加し、全体では前年を4%上回る89.9万トンと予測される。生鮮消費量の拡大は国内生産の増加によるものであり、輸入の増加が原因ではない。

中国の生産量は90万トン減少し、1,930万トンと予測される。これは、カンキツグリーンング病と天候不順の影響である。この結果、国内消費量と輸出量も減少が見込まれる。中国は世界の生産量、生鮮消費量の2/3を担い、輸出量の1/4を占めている。

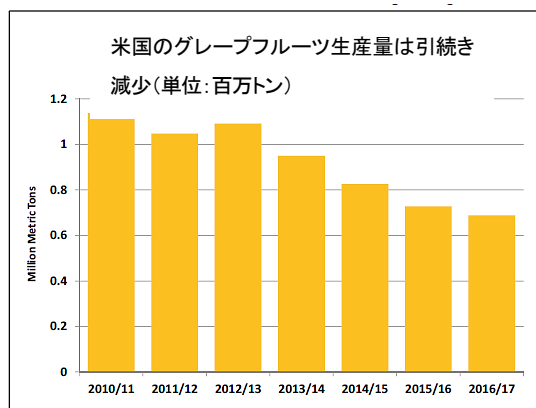
EUの生産量は、スペインで気象条件に恵まれたことから24.8万トン増加し、330万トンと予測される。域内生鮮消費量と輸出量は生産増を反映して増加が見込まれる。

日本の生産量は、好天に恵まれたことから、前年7%上回り100万トンと予測される。域内生鮮消費量も同様に増加が見込まれる。

トルコの生産量は、栽培面積の増加から、前年に比べて2万トン増加し、過去最高の110万トンと予測される。輸出量と域内生鮮消費量も増加が見込まれる。

モロッコの生産量は、栽培面積の増加から、前年を26万トン上回る130万トンと予測される。輸出量は、生産量の増加とロシアの需要増に支えられ、増加が見込まれる。

<グレープフルーツ>



世界の2016/17年の生産量は、主に中国が気象条件に恵まれなかったため、40万トン減少し、600万トンと予測される。輸出量に変動はないが、生鮮消費量は、中国の生産減から減少すると見込まれる。

米国の生産量は、フロリダ州のカンキツグリーニング病の影響で、4万トン減少し、68.8万トンと予測される。生鮮消費量は、加工仕向量が減少するため若干増加すると見込まれる。輸出量は若干減少するが、輸入量は13%増加するとみられる。

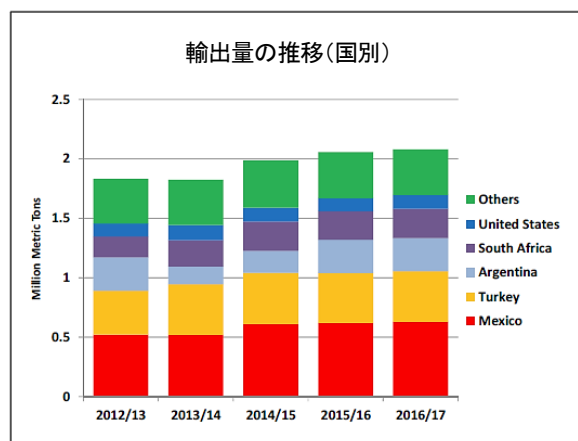
中国の生産量は、天候不順により、前年を8%下回る400万トンと予測される。国内消費量と輸出量も同様に減少が見込まれる。

EUの生産量は、主にスペインで天候に恵まれたことから、1.3万トン増加し11.5万トンと予測される。中国の生産減から輸入量が2.9万トン減少し33.5万トンになると見込まれるため、域内生鮮消費量は4%減少するとみられる。

メキシコは生産量、国内消費量、輸出量ともほとんど変化がないと予測される。

南アフリカの生産量は、栽培面積の減少から、前年を5%下回る33万トンと予測される。生産量は減少するが、輸出量はほとんど変動ないと見込まれる。

<レモン/ライム>



世界の2016/17年の生産量は、前年を4%上回る730万トンと予測される。アルゼンチン、トルコ、米国で減少するものの、EUで天候に恵まれたため増加が見込まれるためである。輸出量はEU、メキシコを中心に3%増加するとみられる。加工仕向量は若干増加する模様だ。

米国の生産量は、カリフォルニア州、アリゾナ州で減収することから、前年を2.5万トン下回る78.2万トンと予測される。生鮮消費量は、生産量の減少から3%減少すると見込まれる。輸入量は2.5万トン増加するとみられる。

メキシコの生産量は、結果樹面積の増加から、若干増加して240万トンと予測される。生鮮消費量と輸出量も若干の増加が見込まれる。

トルコの生産量は、凍害に見舞われて開花が不良であったため、前年を4%下回る42.5万トンと予測される。輸出量は若干増加して42.5万トンと見込まれる。

EUの生産量は、スペイン、イタリア、ギリシャで天候に恵まれたため、前年を28.5万トン上回る160万トンと予測される。域内生鮮消費量は3%増加するものの、輸入は域内生産量の増大から13.9万トン減少し40万トンになると見込まれる。

アルゼンチンの生産量は、着果期の霜害により、前年を3万トン下回る140万トンと予測される。輸出量は変動なく28万トンと見込まれる。

世界のオレンジの需給

(単位：1,000トン)

国名	2001/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17
生産量						
ブラジル	20,482	16,361	17,870	16,716	14,320	18,197
中国	6,900	7,000	7,600	6,600	6,900	6,200
E U	6,023	5,890	6,550	5,954	6,241	6,050
米国	8,166	7,501	6,140	5,763	5,362	4,892
メキシコ	3,666	4,400	4,533	4,515	4,400	4,375
エジプト	2,350	2,450	2,570	2,635	2,930	3,000
トルコ	1,650	1,600	1,700	1,650	1,800	1,855
南アフリカ	1,466	1,659	1,723	1,645	1,560	1,560
モロッコ	850	784	1,001	868	925	960
アルゼンチン	565	550	800	800	800	650
ベトナム	531	521	532	590	590	590
オーストラリア	390	435	430	430	455	470
コスタリカ	326	315	220	335	335	345
グアテマラ	160	152	154	160	160	160
イスラエル	116	73	69	86	105	115
その他	156	160	190	193	192	191
合計	53,797	49,851	52,082	48,940	47,075	49,610
輸入量						
E U	848	883	819	927	964	960
ロシア	495	512	469	440	470	480
サウジアラビア	348	274	274	448	435	440
中国	98	88	88	146	220	300
香港	188	217	230	256	286	295
アラブ首長国連邦	196	201	220	233	221	225
カナダ	190	199	183	190	204	210
イラク	196	169	189	180	189	190
米国	119	139	143	155	164	155
韓国	173	152	100	111	154	130
日本	127	113	87	83	100	110
マレーシア	96	104	100	102	100	100
スイス	62	68	63	67	71	75
ウクライナ	122	133	106	69	73	75
ベトナム	54	38	71	36	60	60
コスタリカ	91	77	56	35	52	55
シンガポール	44	45	48	46	44	45
ノルウェイ	36	38	34	36	38	40
トルコ	31	29	33	45	37	40
オーストラリア	18	20	16	30	30	30
グアテマラ	54	51	31	24	31	30
メキシコ	35	28	26	26	25	25
ブラジル	13	15	17	18	16	16
モザンビーク	34	35	7	11	6	10
南アフリカ	0	0	13	13	1	10
その他	0	0	0	0	4	0
合計	3,668	3,628	3,423	3,727	3,995	4106

(次頁に続く)

輸 出 量						
エジプト	900	1000	1,100	1,200	1,450	1,520
南アフリカ	1088	1,162	1,144	1,160	1,040	1,050
米 国	695	678	506	522	655	640
トルコ	357	244	349	305	371	370
E U	279	322	346	297	319	300
オーストラリア	133	127	126	156	208	230
モロッコ	138	82	111	130	92	120
香 港	67	45	49	74	107	110
アルゼンチン	85	77	76	72	60	55
メキシコ	19	31	47	44	54	55
中 国	129	83	108	53	74	50
ブラジル	20	20	20	30	28	28
シンガポール	6	7	9	8	8	8
イスラエル	13	7	6	6	7	6
ロシア	1	1	2	2	3	3
その他	2	3	3	2	2	2
合 計	3,932	3,889	4,002	4,061	4,478	4,547
国内生鮮消費量						
中 国	6,349	6,405	6,865	6,043	6,446	5,900
E U	5,536	5,382	5,549	5,333	5,599	5,400
ブラジル	7,255	5,421	6,035	5,199	4,802	5,333
メキシコ	2,852	2,887	3,312	2,947	2,771	2,645
トルコ	1,224	1,290	1,284	1,310	1,366	1,425
エジプト	1,365	1,365	1,385	1,350	1,380	1,380
米 国	1,526	1,492	1,357	1,263	1,259	1,362
モロッコ	652	642	820	688	778	778
ベトナム	585	559	603	626	650	650
ロシア	494	511	467	438	467	477
サウジアラビア	348	274	274	448	435	440
アルゼンチン	376	360	524	450	474	350
イラク	287	261	302	296	304	305
アラブ首長国連邦	196	201	220	233	221	225
カナダ	190	199	183	190	204	210
その他	1,604	1,679	1,490	1,437	1,525	1,535
合 計	30,839	28,928	30,670	28,251	28,681	28,415
加工仕向量						
ブラジル	13,220	10,935	11,832	11,505	9,506	12,852
米 国	6,064	5,470	4,420	4,133	3,612	3,045
メキシコ	830	1,510	1,200	1,550	1,600	1,700
E U	1,056	1,069	1,474	1,251	1,287	1,310
中 国	520	600	715	650	600	550
南アフリカ	249	369	471	403	426	425
アルゼンチン	104	113	200	278	270	245
コスタリカ	240	220	136	220	230	240
エジプト	85	85	85	85	100	100
トルコ	100	95	100	80	100	100
その他	226	196	200	200	180	187
合 計	22,694	20,662	20,833	20,355	17,911	20,754

世界のオレンジ果汁の需給

(1,000トン(65°Brix))

国 名	20011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17
生産量						
ブラジル	1,263	980	1,230	1,006	848	1,222
米 国	681	607	476	438	383	355
メキシコ	83	151	126	159	165	170
E U	82	83	114	97	100	101
南アフリカ	26	39	48	42	45	44
中 国	40	45	55	50	46	42
トルコ	9	8	9	8	9	9
その他	28	21	25	31	22	25
合 計	2,211	1,934	2,084	1,831	1,617	1,968
輸入量						
E U	840	815	742	890	777	775
米 国	160	302	300	330	280	300
カナダ	101	103	98	91	97	95
日 本	82	65	63	86	73	80
ロシア	51	47	45	38	37	38
中 国	60	59	57	49	40	33
オーストラリア	30	34	32	32	32	32
その他	61	61	53	47	54	49
合 計	1,384	1,486	1,391	1,563	1,390	1,402
輸出量						
ブラジル	1,150	1,110	1,200	1,153	870	1,097
メキシコ	79	143	121	153	158	163
米 国	110	114	113	81	66	65
E U	51	54	57	50	52	50
南アフリカ	18	22	31	45	52	36
その他	30	29	30	30	31	31
合 計	1,438	1,472	1,552	1,511	1,230	1,442
国内消費量						
E U	871	844	799	937	825	826
米 国	699	733	700	674	634	613
カナダ	96	99	94	88	94	92
日 本	76	70	68	80	78	78
中 国	102	115	111	99	83	73
オーストラリア	39	41	40	40	40	39
ブラジル	44	45	35	35	38	38
その他	131	123	112	102	100	101
合 計	2,058	2,070	1,960	2,054	1,892	1,860
期末在庫						
米 国	322	384	347	360	323	300
ブラジル	509	334	329	147	87	174
日 本	20	15	11	18	13	15
E U	15	15	15	15	15	15
南アフリカ	3	13	25	16	3	5
その他	23	9	6	6	7	7
合 計	892	771	733	561	447	516

世界のマンダリン／タンゼリンの需給

(単位：1,000トン)

国 名	20011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17
生産量						
中 国	16,000	17,000	17,850	19,400	20,200	19,300
E U	3,099	2,927	3,213	3,474	3,054	3,302
モロッコ	730	662	1,160	1,003	1,065	1,325
トルコ	875	876	880	960	1,040	1,060
日 本	1,001	846	1,124	1,040	933	995
米 国	635	660	700	810	865	899
韓 国	586	667	672	697	635	615
アルゼンチン	290	300	370	350	350	280
南アフリカ	146	171	195		248	263
イスラエル	166	178	139	203	190	250
その他	233	202	171	152	154	154
合 計	23,761	24,489	26,474	28,294	28,734	28,443
輸入量						
ロシア	704	789	852	782	718	730
E U	342	317	369	367	420	350
米 国	147	154	182	212	215	215
カナダ	129	143	117	141	146	150
タ イ	127	135	139	130	149	150
ウクライナ	179	185	202	125	120	120
ベトナム	202	144	149	158	116	120
インドネシア	200	77	109	87	80	80
マレーシア	69	76	65	70	70	70
フィリピン	78	57	51	54	60	60
その他	39	40	46	51	69	76
合 計	2,216	2,117	2,281	2,177	2,163	2,121
輸出量						
中 国	840	702	744	736	658	600
トルコ	474	406	532	610	575	580
モロッコ	344	307	501	414	481	510
E U	383	404	349	287	250	260
南アフリカ	122	133	153	157	190	205
イスラエル	83	78	78	93	87	105
アルゼンチン	100	87	88	53	50	45
その他	43	48	38	48	42	45
合 計	2,389	2,165	2,483	2,398	2,333	2,350
国内生鮮消費量						
中 国	14,568	15,650	16,524	18,053	18,910	18,120
E U	2,711	2,493	2,848	3,206	2,922	3,064
日 本	903	780	1,041	959	852	917
米 国	592	642	720	759	909	915
モ ロ ッ コ	386	355	659	589	584	815
ロシア	704	789	852	782	718	730
韓 国	480	607	575	535	547	542
その他	1,833	1,741	1,628	1,576	1,665	1,654
合 計	22,177	23,057	24,847	26,459	27,107	26,757
加工仕向量						
中 国	600	660	600	630	660	610
E U	347	347	385	348	302	328
米 国	153	130	131	221	135	160
日 本	115	81	90	90	95	100
アルゼンチン	40	63	82	97	110	85
イスラエル	38	30	24	45	40	75
韓 国	103	56	93	159	85	70
その他	15	17	20	24	30	29
合 計	1,411	1,384	1,425	1,614	1,457	1,457

世界のグレープフルーツの需給

(単位：1,000トン)

国 名	20011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17
生産量						
中 国	3,200	3,370	3,717	4,050	4,350	4,000
米 国	1,047	1,092	950	826	728	688
メキシコ	415	425	424	424	430	432
南アフリカ	305	437	413	387	348	330
トルコ	230	200	235	238	250	255
イスラエル	245	208	236	186	163	140
E U	102	110	92	109	102	115
その他	0	0	0	26	25	24
合 計	5,544	5,842	6,067	6,246	6,396	5,984
輸入量						
E U	341	337	360	339	364	335
ロシア	113	141	133	101	117	120
日 本	149	134	109	100	82	78
カナダ	44	43	42	40	39	40
中 国	13	17	26	31	33	40
ウクライナ	27	30	27	15	18	18
米 国	1	13	13	10	16	18
香 港	24	15	16	15	16	15
スイス	7	7	7	7	7	7
南アフリカ	0	0	12	7	4	4
その他	12	6	7	5	4	4
合 計	731	743	752	670	700	679
輸出量						
南アフリカ	174	242	217	221	202	200
トルコ	177	132	177	145	190	200
中 国	118	130	165	124	159	150
米 国	209	184	147	141	124	120
イスラエル	78	79	78	61	61	70
メキシコ	19	18	14	19	20	20
E U	18	21	19	15	14	15
その他	7	7	8	10	11	10
合 計	800	813	825	736	781	785
生鮮消費量						
中 国	3,095	3,257	3,578	3,957	4,224	3,890
E U	399	408	417	415	434	416
メキシコ	324	324	328	323	326	328
米 国	352	376	346	325	283	294
ロシア	113	141	133	101	117	120
日 本	149	134	109	125	106	101
トルコ	57	72	63	96	62	57
カナダ	44	43	42	40	39	40
ウクライナ	27	30	27	15	18	18
イスラエル	14	12	24	8	10	11
その他	28	21	20	17	17	17
合 計	4,602	4,818	5,087	5,422	5,636	5,292
加工仕向量						
米 国	487	545	470	370	337	292
南アフリカ	127	189	203	168	145	129
メキシコ	80	85	84	84	86	86
イスラエル	153	117	134	117	92	59
E U	26	18	16	18	18	19
その他	0	0	0	1	1	1
合 計	873	954	907	758	679	586

世界のレモン／ライムの需給

(単位：1,000トン)

国 名	2001/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17
生産量						
メキシコ	2,055	2,120	2,187	2,326	2,370	2,400
E U	1,264	1,179	1,308	1,598	1,269	1,554
アルゼンチン	1,300	1,350	780	1,450	1,400	1,370
米 国	771	827	748	820	807	782
トルコ	750	680	760	725	670	640
南アフリカ	260	245	312	339	340	345
イスラエル	53	51	64	65	60	70
その他	71	58	55	83	89	91
合 計	6,524	6,510	6,214	7,406	7,005	7,252
輸入量						
米 国	394	475	478	481	563	580
E U	421	440	426	380	397	400
ロシア	222	200	212	209	195	210
サウジアラビア	104	85	88	85	95	100
カナダ	78	88	100	99	86	90
アラブ首長国連邦	55	63	78	84	85	90
日 本	26	25	26	66	48	50
ウクライナ	57	55	51	51	51	50
香 港	64	62	63	54	40	40
メキシコ	2	1	1	3	2	2
その他	2	3	3	3	3	3
合 計	1,425	1,497	1,526	1,515	1,565	1,615
輸出量						
メキシコ	625	523	519	610	620	630
トルコ	429	369	426	433	420	425
アルゼンチン	267	280	150	185	280	280
南アフリカ	165	175	220	246	240	245
米 国	95	110	127	114	110	115
E U	92	77	101	105	68	90
香 港	8	7	33	18	17	15
その他	8	11	15	11	14	15
合 計	1,689	1,552	1,591	1,722	1,769	1,815
国内生鮮消費量						
E U	1,377	1,336	1,275	1,539	1,514	1,553
メキシコ	1,121	1,268	1,332	1,357	1,385	1,402
米 国	960	926	926	1,004	1,118	1,082
トルコ	259	258	276	237	212	217
ロシア	200	212	209	206	183	188
サウジアラビア	85	88	85	103	120	125
カナダ	88	100	99	87	102	105
アラブ首長国連邦	66	80	87	96	93	97
日 本	60	57	58	75	74	74
アルゼンチン	70	75	60	70	70	70
その他	192	180	189	172	156	167
合 計	4,478	4,580	4,596	4,946	5,027	5,080
加工仕向量						
アルゼンチン	963	996	570	1,195	1,050	1,020
メキシコ	310	330	339	360	367	370
E U	235	192	312	353	226	311
米 国	191	269	176	265	194	225
南アフリカ	84	58	80	79	85	85
日 本	3	3	3	27	29	31
イスラエル	3	1	3	2	2	2
その他	65	55	60	57	40	0
合 計	1,854	1,904	1,543	2,338	1,993	2,044

16. 中国産ポメロの欧州輸出に勢い

FreshPlaza 電子版 (2017 年 1 月 3 日)



「中国産ポメロの輸出は、欧州向けは1月末までで、ロシア向けは3月中旬まで続く。この違いの理由は、大半の欧州向けの産地が中国南東部の福建省の平河地域であるからだ。勿論、その他の産地にもポメロも沢山あるが、これらは国内市場向け及びロシア向けに3月末まで出荷されている。しかし、欧州はロシアに比べて



残留農薬の規制が厳しいことから、多くの地域では欧州向けに輸出することができない」と Xiamen Bona 社(廈門に本拠を置く総合会社)の幹部は語っている。「一般に、他の地域産のポメロは国内市場で販売され、輸出に回るのは5%に過ぎない」とのことだ。

「現在、欧州向けのポメロ輸出は好調に推移しており、10月以降は価格が上昇している。

輸出初期の8月、9月に一部の輸出業者が大量の輸出を行ったため、価格は急落した。このため、早期に輸出した業者は赤字を出した。しかし10月、11月の欧州市場のポメロは品薄であり、お陰で我が社は輸出する余地が生じた。一般に欧州市場での競争は厳しく、儲かる可能性があると見れば輸出業者は直ぐにも飛びつく。ドイツは欧州の中では最も大きい市場であり、同国には小売業者へ直接販売を行っている。オランダ、ポーランド、英国にも頻繁に出荷を進めている」と同社は語っている。



17. 温州ミカン Belabela 英国で販売

Fresh Produce 電子版 (2017 年 1 月 4 日)



晩生の温州ミカン Belabela が今後数週間で(英国に本拠を置く)小売チェーンの M&S と Tesco で販売されることになった。

Belabela は品種開発会社 Citrus Genesis から(スペインに本拠を置くカンキツ等生産会社)Munoz Group が導入した品種である。同品種は尾張から派生した品種で、晩生であり、色が濃く果皮が厚い。

この品種の登場でスペインの温州ミカンの出荷期間を数週間延長することができる、と Munoz Group 社は考えている。

南半球でも同品種の栽培に期待が持たれており、2017年7月には、南アフリカとペルーで生産量が150トンに達するだろうと Munoz Group 社は語っている。

世界全体の生産量は、新植園が成園になれば、北半球で5000トン、南半球で2000トンに達するとみており、これまで温州ミカンの販売ができなかった1月～2月、7月～8月の穴を埋めることが可能となる。

ロンドン発

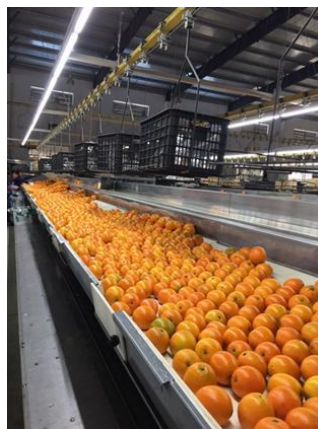
18. 中国のカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016 年 12 月 21 日公表)

<オレンジ>

生産

2016/17年(11月→10月)のオレンジ生産量は前年を10%下回る620万トンと予測される。最大の産地である江西省では引き続きカンキツグリーニング病による被害が大きいためだ。業界筋によると、比較的温暖な南部江西省は特に同病による被害が大きく、加えて、今年は裏年であったことも影響したようだ。一般にカンキツグリーニング病の広がりを見ると、温暖な地方の方が被害を受けやすい。その他、温暖な場所に位置するオレンジ生産地帯(広西チワン族自治区、湖南省)においては、同病の被害と4月の開花期に中国南部を襲った豪雨の影響があり、2016/17年のオレンジ生産量は減少した。



江西省のオレンジ果樹園と選果施設

一方、生産業界によると、江西省では何百万本というカンキツグリーニング病に罹患した樹が抜根されているが、それと同じくらいの本数が植栽されているため、オレンジの栽培面積は安定的に推移しているとのことだ。業界によると、同病への罹患を避けるため、比較的温暖でない四川、重慶及びその他の地域において徐々に面積が増加しているそうだ。これらを総合すると、2016/17年の栽培面積は若干増加すると予測される。



生産コストの増大は、一層深刻な課題となっている。選果・集出荷業関係者によると、2003年の江西省の労働費は一日当たり20元であったものが、現在では120元(17.4ドル)に上昇しているとのことだ。このため、業界筋によると、生産性向上のためには、樹園地整備、加工施設、貯蔵施設、流通インフラへの投資が不可欠であるとのことだ。しかし、高品質なオレンジに対する消費需要の拡大に伴い、カンキツ業界に対する民間投資が急速に進展しており、前述の課題に対応しているようだ。加えて、大規模な貿易業者と集出荷業者は農業生産組合と緊密に連携し(個々の農家による対応とは対照的であるが)、果実の量的確保と品質の改善を進めている。

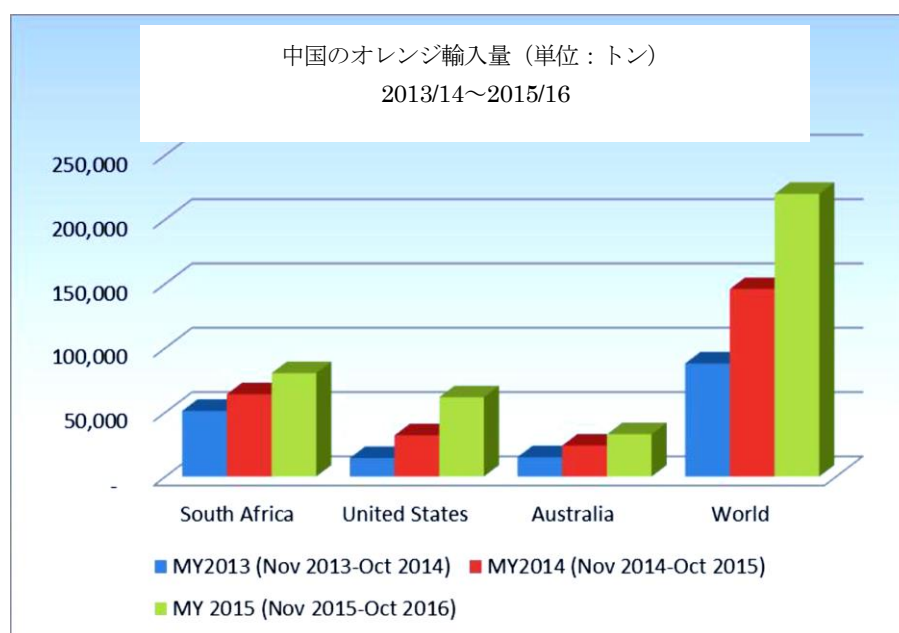
価格

出荷業者によると、江西省南部のネーブルの価格は現在キロ当たり6.8元(1ドル)であるが、2016年11月には7.2元に達していたそうだ。今年の価格水準は前年を20%上回っているが、この要因は、生産量の減少と生産コストの上昇によるとのことだ。

消費

2016/17年のオレンジ消費量は、生産量の減少と価格の上昇により、昨年より減少すると見込まれる。しかし、長期的に見ると高品質オレンジに対する需要は年間を通して堅調であり、拡大している。更に主要な情報筋によると、中国の消費者の1/3は未だに江西省南部特産の有名な品種 Gannan を食べたことがないそうだ。というわけで、今後、物流や集出荷インフラが改善され、生産者からより沢山の消費者にオレンジを供給できるようになれば、ここ数年間は消費が拡大し続けると考える。

貿易 輸入



2016/17年のオレンジ輸入量は、前年を35%上回る30万トンと予測される。これは、国内生産量が減少したこと、高品質な輸入オレンジに対する需要が根強いこと(南半球からのオフシーズン時の輸入を含む)による。2015/16年のオレンジの輸入量は前年を50%上回る22万トンであった。同年の輸入先は、南アフリカが最大で全体の37%を占め、次いで米国が28%を占めた。

輸出

2016/17年の輸出量は、生産量が減少することから、前年を30%以上下回る5万トンと予測される。最大の輸出先は東南アジアである。

中国のオレンジ (米国農務省在中国農務官調べ)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積 (ha)	780,000	780,000	790,000
収穫面積 (ha)	-	-	-
生産量 (千t)	6,600	6,900	6,200
輸入量 (千t)	146	220	300
出荷量 (千t)	6,746	7,120	6,500
輸出量 (千t)	53	74	50
国内生鮮仕向量 (千t)	6,043	6,446	5,900
加工仕向量 (千t)	650	600	550
総出荷量 (千t)	6,746	7,120	6,500

注) 年度は11月→10月

<オレンジジュース>

生産

2016/17年の生産量は、オレンジの生産が減少したこと、需要が弱いとの業界筋からの情報があることから、前年を8%下回る4.2万トンと推測される。

消費

2016/17年の消費量は、前年を12%下回る7.3万トンと予測される。これは、濃縮ジュースに対する需要が減少していること、ジュース飲料に対する需要が2014年以降減退しているためである。しかし、有力な業界筋の話では、濃縮果汁に対する需要は減少しているものの、100%フレッシュジュースに対する需要は増加しているとのことだ。特に1級都市などではコールドチェーンが整備され、フレッシュジュースのマーケティングを進めており、都市住民の収入が増加していることから今後のポテンシャルは高いとみられる。

貿易

輸入

消費の減少から、2016/17年の輸入量は、前年を18%下回る3.3万トンと予測される。

輸出

2016/17年の輸出量はオレンジの生産量の減少から、前年を18%下回る2,300トンと予測される。

中国のオレンジ冷凍濃縮果汁 (米国農務省在中国農務官調べ)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
原料果実 (t)	650,000	600,000	550,000
期初在庫 (t)	3,000	0	0
生産量 (t)	50,000	46,000	42,000
輸入量 (t)	49,299	40,156	33,000
総供給量 (t)	102,299	86,156	75,000
輸出量 (t)	3,163	2,801	2,300
国内消費量 (t)	99,136	83,355	72,700
期末在庫 (t)	0	0	0
総供給量 (t)	102,299	86,156	75,000

注) 年度は11月→10月

<マンダリン/タンゼリン>

生産

2016/17年(10月→9月)の生産量は前年を約5%下回る1930万トンと予測される。これはカンキツグリーニング病と天候不順による被害のためである。業界筋の話では、カンキツグリーニング病は、マンダリンでは広東省(特に晩生品種)で、タンゼリンでは広西チワン族自治区で深刻であるそうだ。流通業者によると、江西省北部の Nanfeng マンダリンは裏年に当たること、3~4月の開花期及び収穫期の11月における豪雨被害があったことから特に減収が著しいそうだ。しかし、湖北省、湖南省、四川省では生産量がわずかに増加し、

広東省、広西省、江西省の減収を幾分か補ったようだ。

業界筋によると、栽培面積に変動はないとのことであり、2016/17年の栽培面積は前年と同じ82万 ha と予測される。



江西省南豊市の選果・出荷施設



価格

業界によると、早生種のマンダリンの江西省における出荷価格はキロ当たり4～12元(0.58～1.7ドル)と比較的高かったが、現在出荷されている晩生種はキロ当たり2.2元(0.32ドル)に下落しているようだ。出荷価格の下落は、収穫期の降雨により品質が低下したためと、貯蔵性が悪化したためであり、今後とも価格は低迷するとの見込みである。

消費

2016/17年の国内消費量は、生産量が減少するため、前年を4%下回る1800万トン強と予測される。国産の消費量は減少するものの、高品質の輸入マンダリンの需要は、1級都市等を中心に拡大すると見込まれる。

2016/17年の加工品(主に缶詰)の消費量は、生産量の減少から、前年を8%下回る61万トンと予測される。

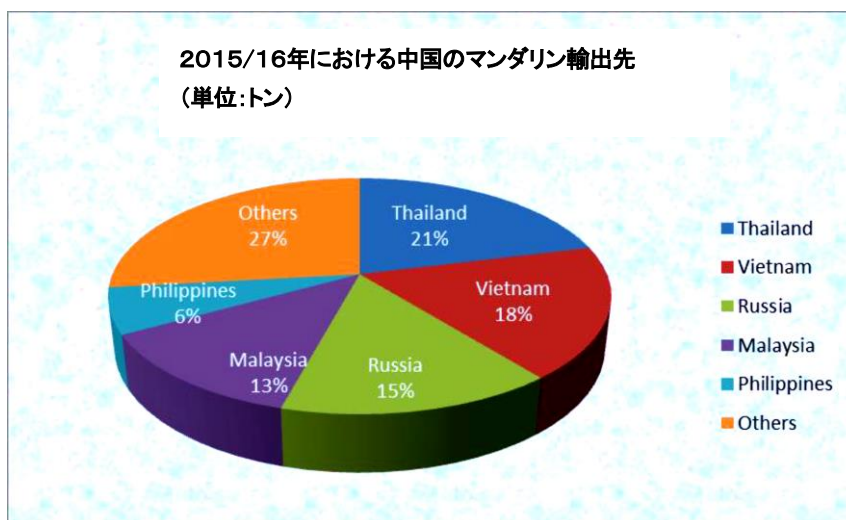
貿易

輸入

2016/17年の輸入量は、高品質なマンダリンに対する需要拡大に支えられ、前年を7%上回る3万トンと予測される。主な輸入先は、オーストラリア、南アフリカである。

輸出

2016/17年の輸出量は、生産量の減少に伴い、前年を約10%下回る60万トンと予測される。主な輸出先はタイ、ベトナム、ロシア等である。



中国のタンゼリン・マンダリン(米国農務省在中国農務官調べ)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	820,000	820,000	820,000
収穫面積(ha)	-	-	-
生産量(千t)	19,400	20,200	19,300
輸入量(千t)	19	28	30
出荷量(千t)	19,419	20,228	19,330
輸出量(千t)	736	658	600
国内生鮮仕向量(千t)	18,053	18,910	18,120
加工仕向量(千t)	630	660	610
総出荷量(千t)	19,419	20,228	19,330

注) 年度は10月→9月

<グレープフルーツ/ポメロ(文旦)>

生産

2016/17年(10月→9月)の生産量は、2016年始めの冷涼な気候、豪雨により、前年を約8%下回る400万トンと予測される。業界筋によると、気象条件が不良であったため、特に主産地である福建省と広西チワン族自治区では品質にも悪影響があったようだ。



価格

生産量の減少と生産コストの上昇から、11月初旬以降ポメロの価格は上昇している。福建省における(農場からの)購買価格(キロ当たり)は、(果肉の)白いポメロで3元(0.44ドル)、赤いポメロで6.4元である。

消費

2016/17年の国内消費量は、生産量が減少することから前年を8%下回る390万トンと予測される。全体的には消費量は減少するものの、高品質な果実に対しては1級都市を中心に需要が強い。

貿易

輸入

2016/17年の輸入量は、高品質グレープフルーツに対する需要が根強いことから、前年を11%上回る4万トンと予測される。輸入先は南アフリカが64%を占めている。

輸出

2016/17年の輸出量は、生産量の減少から前年を若干下回る15万トンと予測される。主な輸出先は欧州、ロシア、香港である。

中国のグレープフルーツ・ポメロ(米国農務省在中国農務官調べ)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	-	-	-
収穫面積(ha)	-	-	-
生産量(千t)	4,050	4,350	4,000
輸入量(千t)	31	33	40
出荷量(千t)	4,081	4,383	4,040
輸出量(千t)	124	159	150
国内生鮮仕向量(千t)	3,957	4,224	3,890
加工仕向量(千t)	-	-	-
総出荷量(千t)	4,081	4,383	4,040

注)年度は10月→9月

<レモン>

2016/17年(10月→9月)の生産量は前年を4%下回る42万トンと予測される。業界筋によると、主産地である四川省の Anyue で2016年始めに低温の被害を受けたためとのことだ。なお、有力筋によると、消費需要が急速に拡大していることから、今後数年間は栽培面積が増加するとのことだ。

政策

中国政府農業部は2014年8月に園芸部門に関するアクションプランを策定し、新品種の拡大、品質向上、生産物のブランド化を掲げた。この計画により、政府は以下を重点化としている。

- 1) 果樹品種を拡大するための育苗ほの拡充
- 2) 品質向上のための技術基準の改善
- 3) 生産拡大と円滑な市場流通のための協同組合の育成
- 4) ブランド力確立のための基盤の整備

アクションプランの中で「中国では果樹の品種が少なく、強力なブランドが形成されていない」ことを強調している。一方、地方政府レベルでは、カンキツ産業育成のための具体的計画を樹立している。この中で、技術の平準化、実証ほの設置のための財政的、技術的支援を行っている。また、樹園地の改善、品種の多様化も支援している。加えて、多くの地方政府はアグリビジネスの育成、生産の協同化にも力を入れている。

市場動向

特に北京、上海、深圳、広州などの1級都市では、ハイパーマーケット、スーパーマーケットチェーン及び果物専門店が輸入カンキツを販売する場となっている。しかし、中国では冷蔵貯蔵管理及びインフラが著しく進展しており、2級、3級都市でもスーパーマーケットが輸入カンキツを販売する場となりつつある。オンラインによる輸入カンキツの販売は、未だに物流面の制約から主力にはなっていない。しかし、多くのアナリストは、中国におけるeコマースを通じた輸入カンキツの販売に対し、明るい将来を予見している。

中国の小売業者は差別化を目指しており、消費者により良いサービスを提供することを志している。多くの業者はオンライン販売用のウェブサイトを設け、各家庭にデリバリーサービスを行うよう努めている。また、多くの業者が新ブランド、有名ブランドの商品の取扱いに熱心であり、スーパーチェーンは大手供給業者と契約を結び品質保証やより良いサービスの提供が受けられるよう努力している。加えて、生鮮果実販売に特化したチェーン店では、顧客の求めに応じて即座にギフト用の詰め合わせを提供できるよう工夫している。

中国の消費者の購買動機は、鮮度、味、外観、品質に対する信頼及び価格である。増大する中間層は食品の安全性に対して強い関心を持っており、高品質な農産物に対しては支出を惜しまない。このため、中国全土において有名ブランドに対する需要がますます高まっている。

中国南部はカンキツを含む果実の最大の輸入港を抱えている。2015/16年にはカンキツの輸入量の56%が深圳、黄浦、公平、広州に入港した。中国の税関データによると、深圳は米国産カンキツの最大の輸入港であり、2014/15年には49%、2015/16年には51%を占めた。米国産カンキツの輸入都市としては、この他にも大連、天津、北京があるが、その割合は大きくない。税関を通過した荷は、一般に大規模卸売市場である広州の江南、上海の恵山、北京の Xinfadi を経由し、中国全土に移送される。

19. チリのアボカド事情

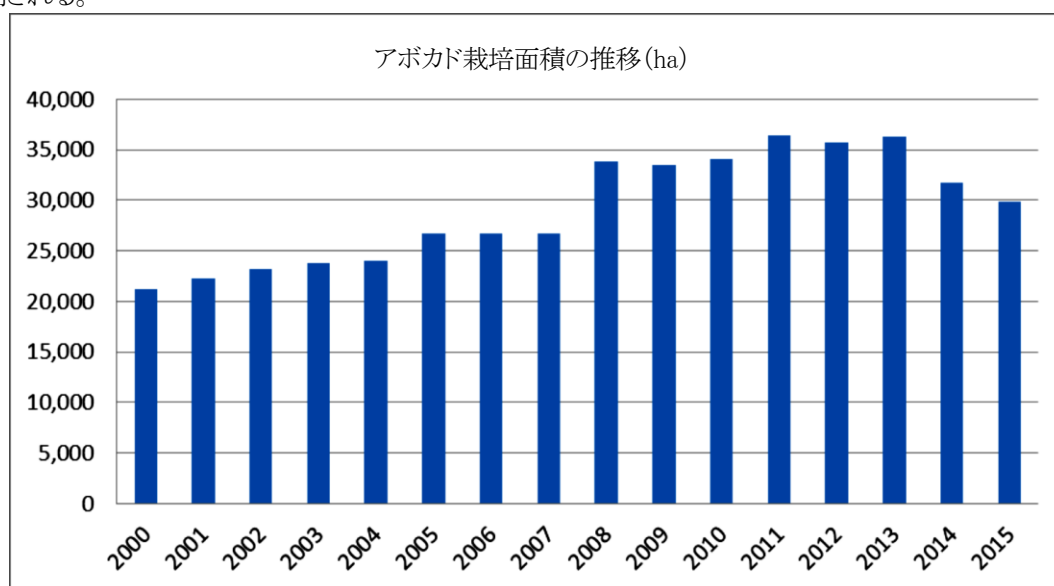
米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016 年 12 月 8 日公表)

生産

アボカドはチリの主要農作物の一つであり、輸出も国内市場向け出荷も成功している。アボカドに対する国際需要はここ10年で増加しており、価格も上昇している。しかし、栽培面積は2013年以降減少に転じている。減少の大部分はチリの栽培面積の62.1%を占めるバルパライソ州で起こっている。減少の理由は、主産地における冷涼で乾燥しがちな気候、エネルギー及び労働コストの上昇、為替相場が輸出に不利であること等の複合的なものである。

チリで栽培されている主要な品種はハスであるが、同品種は寒さに弱い。このため、生産者は寒さを回避できる場所に園地を移転している。新たな栽培地は、平坦な丘陵地帯で、低温に遭遇しにくい場所、用水を確保しやすい場所である。一方、アボカド園地は、過去5カ年で急速に栽培戦績が拡大した収益性の高いクルミに転換しているとの報告もある。

チリアボカド委員会によると、2014/15年(7月→6月)の生産量は15.2万トンとのことだ。この数字は、干ばつと面積の減少を受けて、前年よりも下回っている。しかし、2015/16年の生産量は冬期に水が確保できたこと、気温がアボカド生産に適していたことから、栽培面積が減少したにもかかわらず20万トンに増加すると予測される。



アボカドの地域別栽培面積(ha)

州名	栽培面積	割合
タラパカ	0	0.00%
アタカマ	155	0.50%
コキンボ	5,024	16.80%
バルパライソ	18,588	62.10%
首都圏	4,895	16.40%
オイギンズ	1,223	4.10%
マール	3	0.00%
ビオビオ	34	0.10%
合 計	29,923	100.00%

アボカドの品種別栽培面積(ha)

州名	栽培面積	割合
ハス	26,420	88.30%
Edranol	1,099	3.70%
Negra de la Cruz	821	2.70%
Fuerte	557	1.90%
Bacon	292	1.00%
その他	734	2.50%

消費

生産量の50%は国内で消費される。過去10年間で、年間3.6%の割合で消費量が増加しており、2015

年の一人当たり消費量は5kgに達している。国内市場での価格は安定しており、海外市場での価格に比べると魅力的な相場である。

貿易

2015/16年のアボカド輸出量は90,010トンで前年を19.4%下回った。2016/17年は一転して回復し、輸出量、輸出金額とも前年から121.3%、120.8%増加している(1月から7月までの対比)。

輸出先は多様で、2015/16年の輸出はオランダが第一位、次いで英国、アルゼンチン、米国、スペイン、中国である。

欧州はチリ産のアボカドの需要が拡大しており、それにつれ価格も上昇している。欧州各国は持続的生産に関する要求水準が高く、食品安全やトレーサビリティに関しても高度な基準を求めているが、チリ産は他の競争相手国に比べて品質水準が高いことが知られている。このため、2016年1月～7月の輸出量は前年に比べて対オランダが125.5%、対英国が380.9%増加した。アルゼンチンへの輸出量は同期間で26.2%増加し、第2の輸出先となっている。

2015/16年の米国への輸出量は前年に比べて75.4%減少したが、依然として主要な輸出先となっている。2016年1月～7月の輸出量は前年に比べて40.2%増加し、オランダ、アルゼンチンに次いで第3の輸出先となっている。

中国への輸出は、同国が市場を開放して以来、急速に拡大しており、2015年は2,716トン、2016年1月～7月で2,719トンとなっている。

2016年の収穫シーズンである8月～10月は前年に比べて大幅増で始まった。特に10月の輸出量は多く、3.4万トンを超す勢いであった。同時期の主な輸出先はオランダ、米国、英国で、品種はハスであった。8月から10月にかけての輸出価格は、前年と同程度のトン当たり2000ドルで推移した。

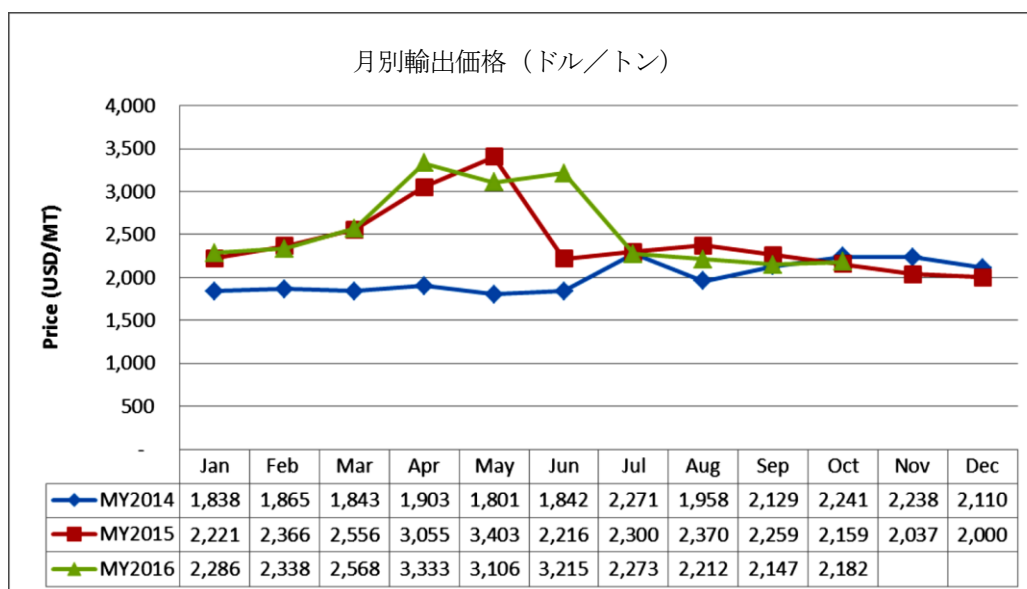
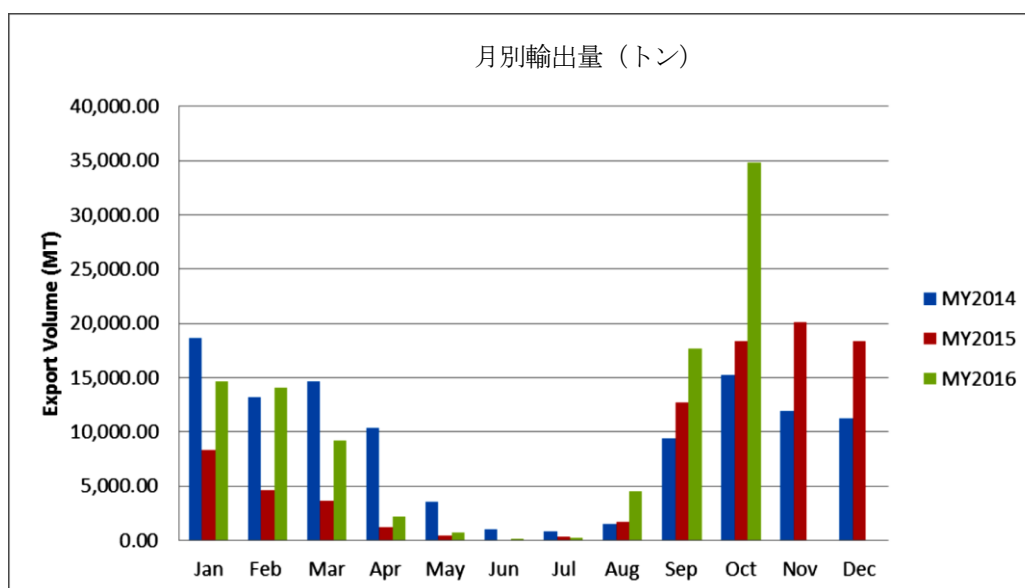
ペルーも欧州にアボカドを輸出しているが、輸出時期が4月から8月であり、チリの主な輸出シーズンは9月から3月までであることから競合しない関係にある。

アボカドの輸出量(市場年:7月→6月) 単位:トン、米ドル

	輸出量			輸出金額		
	2014/15	2015/16	対比	2014/15	2015/16	対比
合 計	111,654	90,010	-19.40%	169,040,123	161,881,229	-4.20%
オランダ	42,101	42,005	-0.20%	60,948,919	66,492,794	9.10%
英国	6,811	14,520	113.20%	12,953,692	28,592,949	120.70%
アルゼンチン	13,404	10,688	-20.30%	23,120,665	23,284,681	0.70%
米国	41,370	10,174	-75.40%	58,965,180	18,758,969	-68.20%
スペイン	3,539	4,935	39.40%	5,914,056	9,837,950	66.30%
中国	21	2,716	12833.30%	52,800	6,378,910	11981.30%
コスタリカ	0	1,547		0	2,965,287	
フランス	1,387	1,485	7.10%	2,195,419	2,059,582	-6.20%
香港	1,226	625	-49.00%	2,234,452	1,149,521	-48.60%
ウルグアイ	211	263	24.60%	410,794	572,537	39.40%
その他	1,584	1,052	-33.60%	2,244,146	1,788,049	-20.30%

アボカドの輸出量(1月→7月) 単位:トン、米ドル

	輸出量			輸出金額		
	2015	2016	対比	2015	2016	対比
合 計	18,713	41,412	121.30%	33,549,812	74,094,295	120.80%
オランダ	9,244	20,841	125.50%	12,819,056	33,550,544	161.70%
アルゼンチン	4,603	5,808	26.20%	11,679,139	12,039,846	3.10%
米国	3,117	4,371	40.20%	6,417,021	7,039,311	9.70%
英国	644	3,097	380.90%	683,565	6,648,316	872.60%
中国	0	2,719		0	5,746,388	
コスタリカ	0	2,047		0	4,000,838	
スペイン	231	1,381	497.80%	405,634	3,029,269	646.80%
ベルギー	151	223	47.70%	132,778	390,181	193.90%
フランス	221	282	27.60%	322,780	382,281	18.40%
ウルグアイ	125	163	30.40%	331,637	366,226	10.40%
その他	377	480	27.30%	758,202	901,095	18.80%



輸入

国内需要が旺盛であるため、輸入も行われている。2016年1月から7月までの輸入量は、ペルーから7,688トン、メキシコから2,392トン、米国から2,392トンであった。

政策

中国と FTA を結んでいるため、2015年以降は関税がゼロである、また、EU とも協定を結び、2003年以降関税はゼロである。更に、米国とも FTA を結び2004年以降関税は無い。なお、ペルー、メキシコ、米国から輸入する際の関税もゼロである。

20. オーストラリアのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年12月15日公表)

オーストラリアのカンキツ産業は園芸の主要部門であり、世界的にも重要な輸出国である。中でもオレンジが抜きんでおり、マランビジー川、マレー川に沿ったニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、南オーストラリア州にまたがるリベリナ(Reverina)、サンレーシア(Sunraysia)、リバーランド灌漑地帯に集中している。この一帯では生食用のネーブルオレンジと果汁向けのバレンシアオレンジが生産されている。また、クーンズランド州の中央バーネット(Burnett)地方では、マンダリン、レモン、ライムが生産されている。この他、西オーストラリア州、北部準州でもカンキツ栽培は行われている。

カンキツは人力で収穫される。労働コストが高く、人手不足であることが産業の競争力に影響を及ぼしており、集荷施設や選果機に投資が行われ、生産性を高める努力をしている。柔軟なビザ取得制度により収穫期の季節労働者を受け入れている点はカンキツ業界にとっても恩恵をもたらしているが、2016年、議会は海外からの旅行者(バックパッカー)で季節労働を行うものに対し、一定の課税を行うこととした。

<オレンジ>

生産

2016/17年のカンキツ生産量は47万トンと予測され、前年を若干上回る見込みだ。生産量の約半分は国内で消費されるが、残りは輸出される。ここ数年間で輸出の割合は大きく上昇した。国内向けには直接大規模スーパーに出荷されるケースと、中央卸売市場に出荷されるケースがある。また、1/5の生産者が90%の生産を担っており、生産者数の50%に当たる小規模な農園は全体の2%を占めるに過ぎない。

生産量は生育環境、灌漑水利用可能量、温度に左右される。2016年はエルニーニョの影響で乾燥が続いた。しかし、年半ばから降雨量が平年より多くなり、ダムの貯水量が増え灌漑用水の利用が可能となった。このような好条件があったため、特にネーブルにおいて生産量と新規植栽面積が増加した。

オーストラリアではオレンジの栽培面積は2万 ha 以上ある。このうち、1.2万 ha はネーブルで残りはバレンシアである。収穫は4月に始まり、ピークは7月と8月である。生食で利用されるネーブルは輸出需要も大きい。長期的にはジュース価格が安いバレンシアは伐採される傾向にあるが、ネーブルは収益性が高いため植栽が進んでいる。

消費

2016/17年の国内消費量(生鮮)は20万トンで前年と同程度と予測される。消費者の嗜好は従来型の品種からより甘く、皮が剥きやすい、種無しの品種及びネーブルの新しい品種に移りつつある。

貿易

2016/17年のオレンジの輸出は、生産量が増加したことで北アジアのニーズが高いことから、新記録である23万トンに達すると予測される。カンキツ全体の中でオレンジの輸出の占める割合は80%であり、残りはマンダリンと少量ではあるがレモン、グレープフルーツである。ネーブルの輸出は6月の早生種(Navelina、M7)に始まり、10月の晩生種(Late Lane、Chislett、Barnfield)まで続く。

オーストラリアのカンキツ産業は輸出志向であり、季節が逆になる北半球に輸出される(中国、日本、韓国、米国)。特に日本、韓国、中国とは二国間自由貿易協定(後述)を結び、低い関税で輸出できることから、恩恵を受けている。

2016/17年の輸入量は3万トンと予測される。輸入時期はオーストラリアの夏季であり、国内生産がない時期である。米国からの輸入は為替レートの変動により減少したが、その他の国からの輸入は増加した。

オーストラリアのオレンジ統計(在豪 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	20,600	20,600	20,600
収穫面積(ha)	20,600	20,600	20,600
結果樹数(千本)	9,350	9,350	9,350
未結果樹数(千本)	85	85	85
果樹数合計(千本)	29,000	31,000	17,300
生産量計(千トン)	465,000	565,000	475,000
輸入量(千トン)	0	0	0
総供給量(千トン)	465,000	565,000	475,000
輸出量(千トン)	50,200	69,000	90,000
国内消費仕向量(千トン)	259,800	341,000	230,000
加工仕向量(千トン)	155,000	155,000	155,000
総出荷量(千トン)	465,000	565,000	475,000

年産は4月→3月

<オレンジジュース>

生産

2016/17年の加工仕向量は7万トンに減少すると予測される。これはジュース自体に対する需要の減少と、バレンシアから輸出用のネーブルへの転換が進んでいるためだ。

オレンジジュースは生搾りと濃縮貯蔵の2つの製造方法がある。オーストラリアでは、原料は大部分がバレンシアである。ネーブルはフレッシュジュースとしては価値があるものの貯蔵中に苦味が生じるからだ。フレッシュジュースは濃縮果汁に比べてプレミアム商品との位置づけであり、大部分のオーストラリア産のジュースは冷蔵のプレミアム商品として生産されている。

国内では、通常温度で長期間保存できる冷凍濃縮果汁を使った輸入ジュースには価格面で太刀打ちできないため、これらと競争はしていない。市場シェアの半分以上を占めている輸入品は2010年まで増加していたが、その後国産の新技术を用いたフレッシュジュースの人気の高まるにつれ、そのシェアは徐々に低下している。

消費

オーストラリアにおけるオレンジジュースの消費量は過去10年で減少している。2005/06年には4.9万トンであったものが、2012/13年に4.1万トン、2016/17年には3.9万トンと予測される。一人当たりのカンキツ果汁の消費量は、アイスティー、スポーツドリンクとの競合及び加糖飲料離れから、過去5年間で減少している。

貿易

輸出はほとんど無いが、国産ジュースでは需要を満たせないため、濃縮果汁を輸入している。輸入先は国産品では太刀打ちできないブラジル、中国等である。

オーストラリアのオレンジジュース(在豪 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
加工仕向量(トン)	115,000	77,000	70,000
期首在庫(トン)	614	614	614
生産量計(トン)	9,500	8,100	8,100
輸入量(トン)	31,500	32,200	31,500
総供給量(トン)	41,614	40,914	40,214
輸出量(トン)	1,000	800	600
国内消費量(トン)	40,000	39,500	39,000
期末在庫量(トン)	614	614	614
総出荷量(トン)	41,614	40,914	40,214

年産は7月→6月

<貿易政策>

中国-豪FTA

2014年 11 月に調印され、2015年12月に承認された。中国が課していたカンキツに対する関税(11～30%)は8年以内に撤廃されることになっている。また、オレンジジュースに課している7.5～30%の関税は8年以内に撤廃される。その他、果実ジュースに課されている最大30%の関税も4年以内に撤廃される。中国は成長が早い市場であり、これらの措置は輸出業者にとっては利益をもたらすと期待されている。また、カンキツに関する検疫に関しても交渉が行われ、オーストリアが中国に課している検疫措置には変更はなかった。オーストラリアから中国への輸送は海路で3週間だが、南半球では最も短いという有利な点を持っている。

韓国-豪FTA

2014年4月に調印され、同年12月に発効した。韓国側はシーズンが逆となる製品に対して2015年1月から関税の廃止に向かう。まず、50%の関税品は30%に引き下げられ、7年かけて撤廃される。またマンダリンに対する144%の関税は18年かけて撤廃される。

これらの関税の引き下げはシーズンが逆となる4月から9月までの間である。2016年には韓国の検疫当局がブラッドオレンジの輸出を解禁すると発表し、同年から輸出が許可された。これ以前はバレンシアとネーブルだけが輸出を認められていた。

日-豪FTA

2015年1月15日に発効され、オーストラリア産カンキツの輸出拡大が期待される。協定の中では、オレンジが10年、マンダリンが15年で関税を廃止することとなっている。現在、出荷ピークが6月から9月のオレンジ、マンダリンの関税は前者が16%で、後者は17%である。グレープフルーツの関税10%は5年で撤廃される。

21. ニュージーランドのリンゴ新品種 Dazzle

FreshPlaza 電子版 (2016 年 12 月 19 日)



ニュージーランドのリンゴ生産販売会社 Fruitcraft 社は、本日、リンゴの新品種を公表した。この品種は Prever 社を通じて全世界で育成権を取得している。

Dazzle として販売されるこの品種の正式名称は PremA129 で、数十年前のロイヤルガラ以来の大物品種として期待されている。Dazzle はニュージーランド全土で生産することができ、輸出業者も取扱いが可能である。

Dazzle は大きく、赤く、甘い品種で、Havelock North にある Plant&Food Research (PFR) が20年の歳月をかけて開発したものだ。

Fruitcraft 社の部長によると、ニュージーランドの生産者のみならず、全世界にとって興奮をもたらす品種であるとし、「Fruitcraft 社は成長するアジア市場をターゲットとしている。Dazzle はアジアの消費者に向け必要とされる全ての特徴を備えている。すなわち、大きく、色が濃く、とても甘い品種である。全ての生産者と協力し、選ばれた輸出業者を通じて市場開拓をしたい。すなわち、生産者が市場開拓に関与する共同アプローチを進めたい」と語っている。

既に10万本の Dazzle が生産者(生産・出荷業者である Mr Apple, Bostock New Zealand, Freshmax を含む)により栽培され、育苗園では生産者の要望に応じて台木を確保し、翌年、生産者に提供するために多忙だそうである。

Fruitcraft 社は2028年までに 100万箱を輸出できると見込んでおり、その段階になればニュージーランドで最も人気あるリンゴの一つになる。また、もし世界的な要請があれば、ここ1～2年の間に主なリンゴ生産国に対してライセンスを付与する考えだ。

Plant&Food Research の研究者は、Dazzle は交配により誕生したもので、1997年に Sweetie と Scired をかけ合わせた中から生まれたと語っている。

「PremA129 の両親とその両親もニュージーランド生まれの品種だ。従ってこの品種の誕生には何十年の月日を要したといえる。Plant&Food Research の研究者とニュージーランドのリンゴ・ナシ業界は、キウイフルーツの伝統を受け継ぎ純国産のリンゴ品種を育成したのだ」と研究者は語っている。

Pipfruit 社(ニュージーランドに本社、リンゴ等のマーケティング、品種の開発・利用、情報提供等を実施)の CEO によると、「今回の育成品種は、生産者、輸出業者、研究者が一体となり全世界の顧客に高品質な製品を提供しようとする洗練された力の表れだ」とのことだ。

ニュースソース:Fruitcraft

22. イタリアのキウイ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016 年 12 月 19 日公表)

イタリアは中国に次いで世界第2位のキウイ生産国である。主な生産地は、ラツィオ州、ピエモンテ州、エミリア・ロマーニャ州、ヴェネト州で、生産量のシェアは、それぞれ30%、20%、16%、15%である。ヘイワードが最も生産量が多い品種で、黄色品種の Zespri -G3、Jin Tao、Soreli、SummerKiwi、Dori'、Zespri - Hort 16A が続く。最新のイタリア青果サービスセンターの数字によると、2016/17年の生産量は450,583トンで豊作だった前年(554,796トン)を19%下回る予測だ。しかし2012-14年平均よりも1%増加している。州別の減少割合は、ラツィオ州(-32%)、カラブリア州(-30%)、エミリア・ロマーニャ州(-14%)、ピエモンテ州(-9%)である。品質は満足いくものだと見込まれている。2016/17年の栽培面積は前年を1%上回るとみられる。ヴェネト州ではクサギカメムシ(cimice asiatica)の被害で栽培面積が18%減少したが、カラブリア州で15%、ラツィオ州で5%増加したためヴェネト州の減少を相殺した。ミリア・ロマーニャ州、ピエモンテ州では栽培面積は横ばいであった。

イタリアのキウイ栽培面積(ha)・生産量(t)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積	24,806	24,094	24,350
生産量	474,578	554,796	450,583

イタリア青果サービスセンター

イタリア産キウイは73%が輸出され、20%は国内市場向けで、残り7%は加工産業等に回される。販売時期は11月から5月までである。2015年の輸出量は335,712トンで、主にドイツ、スペイン、フランス、米国に輸出され、その割合はそれぞれ16%、13%、8%、7%であった。2016年の輸出量は、2015/16年が豊作であったため、1-7月までで前年を32%上回った。

2015年の輸入量は45,334トン、主な輸入先は、チリ、ニュージーランドで、輸入割合はそれぞれ、35%、34%であった。2016年の輸入量は、1-7月までで前年を9.8%下回った。チリからの輸入は-29%で、ニュージーランドは-18%であった。

イタリアのキウイ輸出

	2013		2014		2015	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
合 計	489,899,001	330,888	600,546,386	348,686	474,881,675	335,712
ドイツ	93,088,640	59,122	100,720,556	54,399	81,666,383	55,460
スペイン	66,147,332	40,370	86,649,139	47,124	68,276,923	44,767
フランス	30,770,287	22,368	39,226,080	25,165	35,512,052	27,995
米国	30,399,763	20,937	42,051,583	25,307	31,108,672	22,575
オランダ	25,631,817	15,769	30,937,400	16,007	25,110,026	16,022
中国	11,314,452	5,137	28,903,872	12,308	20,114,146	8,126
ベルギー	16,408,238	10,226	19,837,644	10,414	19,644,072	11,846
英国	18,831,201	13,864	22,269,885	14,420	17,989,170	14,930
ポーランド	19,800,466	20,134	20,846,007	17,436	12,756,838	15,463
カナダ	11,891,523	8,227	14,360,872	8,980	12,480,934	9,698
ブラジル	17,135,600	11,132	23,496,132	14,037	11,894,533	8,777
台湾	7,712,265	3,902	11,249,656	5,275	10,578,145	5,619
オーストラリア	7,447,506	4,334	10,130,298	5,511	9,142,108	6,111
スイス	9,071,511	5,203	9,340,993	4,765	8,817,097	4,997
オーストリア	9,366,306	6,424	9,989,237	5,265	8,384,069	5,056
アラブ首長国連合	7,694,500	4,620	8,798,589	4,536	7,760,869	4,902

Global Trade Atlas

イタリアのキウイ輸出(1-7月)

	2014		2015		2016	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
合 計	365,060,965	212,982	293,152,471	215,674	288,120,486	284,529
ドイツ	73,264,094	39,869	58,430,032	42,523	58,248,768	50,963
スペイン	55,427,163	30,919	47,317,302	32,254	43,135,445	36,682
米国	19,867,086	12,117	17,184,128	11,872	22,172,898	21,440
フランス	23,090,261	14,504	24,792,435	19,424	18,379,397	20,240
オランダ	19,879,012	10,061	17,161,924	11,099	16,824,703	13,853
英国	16,288,899	10,206	14,219,447	11,727	12,237,282	13,888
ポーランド	16,459,310	12,815	10,395,462	11,515	11,634,417	18,615
ベルギー	13,999,668	6,798	12,064,199	6,992	11,440,097	7,332
カナダ	7,492,718	4,337	7,065,105	5,039	7,420,338	8,029
ブラジル	8,094,595	4,760	7,521,613	5,136	6,201,130	6,080
オーストリア	7,359,186	3,771	6,512,958	3,953	5,781,568	4,857
スイス	6,548,258	3,308	6,268,163	3,669	5,305,872	3,629
アラブ首長国連合	4,253,917	2,253	4,907,334	2,991	4,893,494	4,486
サウジアラビア	4,582,199	2,444	3,773,888	2,434	4,772,654	4,557
チェコ	3,880,417	2,428	4,681,418	3,920	4,068,573	4,895

Global Trade Atlas

イタリアのキウイ輸入

	2013		2014		2015	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
合 計	65,413,693	44,846	63,920,126	37,619	62,531,478	45,334
チリ	32,910,870	23,620	13,736,930	7,695	21,730,570	15,971
ニュージーランド	16,997,584	12,306	24,633,050	14,130	21,138,135	15,424
ベルギー	8,472,477	3,787	7,957,436	2,811	7,085,267	3,347
オランダ	2,457,775	1,497	5,246,801	2,099	3,788,352	2,333
ギリシャ	1,914,801	1,801	5,602,779	7,091	3,390,656	4,628
ドイツ	627,963	369	2,175,152	1,223	2,713,729	1,871
スペイン	1,070,798	538	2,522,515	862	1,644,588	910
フランス	460,426	491	973,891	415	368,040	217
アルゼンチン	224,119	251	222,369	176	233,518	230
ブルガリア	17,110	21	630,668	853	103,469	186
キプロス	31,069	49	111,108	211	99,100	111
コスタリカ	70,954	46	0	0	85,619	50
オーストリア	102,766	16	72,920	26	73,995	31
マルタ	0	0	4,376	0	37,922	0
イラン	0	0	22,118	13	31,648	19

訳注)オランダ、ベルギー等からの輸入は転送されたものと思われる。Global Trade Atlas

イタリアのキウイ輸入(1-7月)

	2014		2015		2016	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
合 計	32,748,954	17,313	34,561,120	24,381	31,709,456	22,002
チリ	11,417,791	6,388	16,313,528	11,957	11,327,666	8,460
ニュージーランド	12,918,374	7,376	10,107,928	7,169	8,323,166	5,860
ベルギー	4,581,783	1,613	2,694,643	1,192	4,199,611	1,555
スペイン	856,352	333	724,063	389	3,311,138	1,376
ギリシャ	21,070	24	770,560	916	1,729,336	2,006
ドイツ	725,667	454	1,608,219	1,171	1,504,920	1,729
オランダ	1,749,500	847	1,725,878	1,114	707,114	464
フランス	304,038	154	128,308	76	192,928	167
アルゼンチン	99,136	84	197,661	190	192,667	164
英国	0	0	0	0	55,103	117
コロンビア	0	0	0	0	53,480	46
南アフリカ	0	0	0	0	48,792	25
オーストリア	45,988	17	55,062	25	31,471	7
コスタリカ	0	0	85,619	50	25,956	23
ポーランド	0	0	0	0	5,150	0

訳注)オランダ、ベルギー等からの輸入は転送されたものと思われる。Global Trade Atlas

23. 世界のカキ市場

FreshPlaza 電子版 (2016 年 12 月 16 日)



欧州ではスペインが最大のカキの生産国である。同国では今年、高値と同時に安値を記録した。欧州ではイタリアとポルトガルでもカキが生産されているが生産量は少ない。イスラエルの販売は好調であったが、欧州でのシェアを落とした。これはスペイン産が大量に出回ったためである。世界の市場を見渡すと、アジアと中東で輸出機会がある。中国では今年の生産量は少なかった。カリフォルニアでは寒さと降雨により収穫は早期に切り上がった。

スペインでは干ばつと降雨で生産量が左右される

干ばつのせいで、品種 Rojo Brillante では出荷当初の果実は小ぶりであった。その後10月の降雨でサイズは回復したが、成熟の進行が緩やかであったため、出荷量は少なかった。これらのことから、シーズン当初の価格は高かった。11月になって様相は変わり、供給量が増え需要を上回ったため価格は大きく下落した。欧州中にカキが豊富に出回ったため輸出業者はカナダ、アジア、中東などの EU 域外の海外市場への輸出に取組んだ。中東ではヨルダンが有望な市場と認められた。現時点では海外市場の出回りも十分多いことから、EU 域内への輸出に再び焦点をあてつつある。

12月になると豪雨のため出荷が中断した。果実は、アルテルナリア菌により引き起こされる病気の懸念が過ぎ去るまで樹上に残されたままであった。このため需要が供給を上回り、その後大量の果実が収穫されたが、1～2月にかけての供給不足が心配されている。貯蔵中の果実品質が高湿度のため影響を受けるのではないかと懸念されているからだ。

Rojo Brillante 以外にも、小規模ではあるがほかの品種 Tom Guash、Sharon Fruit(登録商標名で品種は Triumph)も栽培されている。カキ産業は急速に拡大しており、主産地のバレンシアだけでなく、エストレマドゥーラ、アンダルシア、カタルーニャ、ムルシアでも生産されている。生産量は現在32万トンであるが、専門家によると今後2～3年で70万トンに達すると見込んでいる。

このように膨大な量を販売するため、輸出業者は EU 以外の市場を目指している。EU 内ではドイツ、フランスが主要な市場であるが、カナダ、ブラジル、米国、上海、香港へ輸出を行っている。また、ロシア市場の占める割合は20%である。加えて中国市場が有望であると見て、特に注目している。

生産量より需要が多いポルトガル

カキのシーズンは9月に始まりクリスマスまで続く。今シーズンは当初出荷が少なかったが、現在は通常レベルになっている。生産者・流通業者によると、生産量の90%は国内市場向けとのことである。スペインと違い生産量は多くなく、需要量の方が生産量を上回っている。価格は品種により異なり、スペインで生産されるような固いカキの値段はソフトなカキより値段は安い。

カキはサイズが大きくなるまで樹に置かれる。一方、ポルトガルの生産者はスペインで成功したように、出荷記事を2月まで延長したいと願っている。このため、晩生品種の育成に力を入れている。これが成功すれば、12月まで収穫が延長し、冷蔵貯蔵されて2月まで出荷を延ばすことが可能と考えられる。

カキの栽培が増加しているイタリア

イタリアのカキ栽培はカンパーニャで始まった。品種は Type と Vanilla でそれぞれ70%、30%を占めている。現在の生産地はカゼルタ、ナポリ、サレルノ各州に集中している。Type とは品種群を表し、収穫時は固く渋カキで、種無しだ。Vanilla はより固く甘い。

カキはカンキツ、モモ、アブリコット、ブドウに代わる作物として注目されている。特に品種 Rojo Brillante は注目を浴びている。この種無し品種は濃いオレンジ色の果皮を持ち、果肉はカリカリして10日以上日持ちがする。

現在の栽培面積は2000ha で、南部のカンパーニャ地方以外にもエミリアロマーニャ、ラツィオ各州でも栽培が広がっている。生産量は国内需要を満たすには不十分である。ただ、ある大規模生産会社では生産総量2000t のうち15%は有機栽培で、大部分を輸出しているようだ。

毎年需要が拡大するベルギー

ベルギーの輸入業者によると、毎年スペインからの輸入量は増加するようだ。カキに対する消費者の人気は高まっているようだ。ただ、今シーズンは人気の高まりが価格の上昇に結びついていない。輸入業者によると先週の価格は1箱当たり3.5〜4ユーロで取引されていたが、今週に入って回復し、4.5〜5ユーロとのことだ。これは供給量が減少し需要量に見合っていないためようだ。

オランダでは現在出回りが少ない

スペインで降雨があったため、来週の入荷は少ない見込みだ。クリスマス前の1週間である現在、本来入荷が保証されているのに、状況は良くない。しかしスペインでカキの生産量が拡大しており、新規植栽園が結果を始めていることから、1月には供給量は回復するとみている。しかし、湿潤な天候のため、毎週品質検査が必要である。価格に関しては、数週間前は供給量が多かったため低迷したが、先週は需要がやや増加し、現在は回復してキロ当たり1ユーロ以上をつけている。

ドイツ市場は好調

ドイツ市場ではカキの需要が大きい。シーズンは概ね10月から2月までで、大部分はスペイン、イタリアからの輸入品である。業者によると、スペイン産はシーズン当初出回りが少なかったが、需要が拡大しており、イスラエル産の Sharon Fruit はほとんど市場に出回っていないようだ。

スペイン産のカキのフランスでの価格

ランジス中央市場における下記の価格は、中程度の大きさとキロ当たり0.9ユーロ、大きなサイズでは1.1ユーロであり、いずれもスペイン産だ。

中国の生産量は減少

中国のシーズンは8月に始まり12月に終わる。主な産地は、福建省、雲南省、山西省、陝西省である。今年は豪雨の影響で生産量が7%減少した。加えて果物のサイズは昨年よりも小さい。それでも生産量は約380万トンで世界最大のカキ生産国である。

台湾もカキの生産量が多い。今年は台風などで気象条件が厳しかったため、生産量は減少した。この結果、中国への輸出量も減少した。中国産のカキは香港で取引されている。ニュージーランド産のカキも取引されている。スペイン産は微増だ。

シーズンが終了した韓国

韓国では出荷が終わった。生産量は、10月高温とこれに続く低温・降雨のために期待外れであった。通常、シーズンは11月末まで続くが、今年は11月半ばで終了した。韓国産のカキはカナダ、インドネシア、フィリピン、香港に輸出されている。今年の価格は高く、特に11月中旬は高騰した。

例年より早く切り上がった米国

カリフォルニア州では、例年より寒さと降雨が早く訪れたため、シーズンが例年より早く終わった。通常、販売は12月10日まで続くが、今年は1ヶ月早く終わった。寒さと降雨の影響で落葉が早く、果実にも障害が発生した。シーズンの終わりが早かったことに加え、業者によると、収穫量も少なかった。平均価格は3から4ドルであった(注:単位は不明)。

業者によると流通市場も変化したそうで、例年は1層の箱入りで販売されているが、今年は特に東海岸でバラ売りだったそうだ。

米国では自国産のほかイスラエルから輸入を行っている。最初の輸入品の到着は11月上旬であるが、輸入物のシーズンは11月半ばから3月後半までである。

平均的な米国の消費者はカキになじみがない。このため、販売促進活動を行い、人気を高めているところだ。

イスラエルは好調

これまでイスラエルの輸出先はヨーロッパ中心であった。しかし、スペイン産が量を増やし、中東の市場もイスラエルから奪っている状況である。そこで、現在、イスラエルは米国市場に照準をあわせている。主に栽培されている品種は Triumph (登録商品名は Sharon Fruit) で糖度が高いのが特徴である。欧州市場での販売が少なくなったため、ロシア、極東への輸出に目を向けているところだ。

業者によると国内の市場は安定しており、実際に量は昨年を上回っているが、供給過剰に至っていない。

今年は降雨が始まる前に収穫が終わったため、品質も良く貯蔵性も良好だ。輸出業者によると、出荷は3月上旬まで続くそうだ。

興味深い中東市場

ドイツの輸出業者によると、ヨルダン、リビア中心とした中東市場はカキにとって有望であるため、再輸出を行っているそうだ。これらの市場は欧州市場とは異なり、好調らしい。輸出業者は来シーズンも期待しており、「アラブ市場はカキ産業にとって有望」とのことだ。

著者: Rudolf Mulderij

24. チリで豪雨によるブドウの被害

FreshPlaza 電子版 (2016 年 12 月 14 日)



中部チリでかつて経験したことのない豪雨に見舞われ、ブドウ生産に大きな影響を及ぼした。ブドウの産地であるアコンカグア、サンタマリア、サンフェリペ、サンエステバンの各渓谷で、警報の数日後に20～45mmの降雨があり、生産者は果実の裂果の被害を受けた。

「サンタマリア及びサンエステバンの低地地域では30mmの降雨があり、相当の被害を予測したが、幸いにも10%の裂果ですんだようだ。しかし、サンエステバンの高地地域、ロカルボ、エルコブレでは70%の果実が裂果した。主に被害があったのは、品種 Flame でこの地域で最も早生の品種である」と Mi Fruta 協会の Valenzuela 氏は語っている。

また、情報筋によると、ほどなく菌類に罹患し、レッドグローブ種では「葉枯れ(burn)」被害も確認された。「うどんこ病も確認されたので、厳重な防除措置を継続的に進める必要がある。また、レッドグローブにおいては、果実に残った水滴が太陽の光で起こす『ガラス効果』の影響も確認する必要がある」と生産者は語っている。

「この地方では大きな被害があったが、輸出に対してはそれほど大きな影響はないと思う。というのも、この地方の生産量はそれほど多くないからで、当初懸念していたほどの被害はないとみられる。品種 Flame の被害は大きく、一部の Superior にも被害があったが、これら品種はさほど多くはない」と Valenzuela 氏は締めくくった。



25. EUのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年12月13日公表)

注)このレポートの「年産」及び「年」は11月から翌年10月までである。

<オレンジ>

EUのオレンジ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	288,280	288,750	288,802
収穫面積(ha)	274,286	270,873	270,278
生産量(千トン)	5,954	6,241	6,048
輸入量(千トン)	927	964	960
総供給量(千トン)	6,881	7,205	7,008
輸出量(千トン)	297	319	300
域内生鮮消費(千トン)	5,333	5,599	5,399
加工仕向量(千トン)	1,251	1,287	1,309
総出荷量(千トン)	6,881	7,205	7,008

生産

EU におけるオレンジの生産は主に地中海諸国で行われ、スペインとイタリアで全体の80%が生産されている。残り20%はギリシャ、ポルトガル等である。2016/17年産の生産量は、約600万トンと見込まれ、前年産に比する3%下回る。主な要因はイタリアにおける減収である。

スペインについては、同国農業環境食料省の公式発表によると2016/17年の生産量は360万トンで、前年を17.6%上回るとの予測である。これは、春先の天候が順調で開花、着果が良好だったことによる。また、品質も良好と見込まれる。最近の降雨により果実の肥大も良い。スペインにおけるオレンジの生産地はバレンシア州、アンダルシア州、ムルシア州であり、生産量は前年に比べそれぞれ19%、17.3%、18%増加する見込みである。スペインの生産量は EU 全体の50%を占めている。また、前2州でスペイン全体の生産量の90%を占めている。スペインでは、早生種、晩生種の組み合わせで年間を通じた販売を目指している。主な栽培品種は Naveline、ネーブル、Navelate、Salustiane、バレンシア、Sanguinello である。

ここ数年スペインのカンキツ産業は経済的苦境に立たされていることから、バレンシア地方ではカンキツ園を高収益作物であるカキやキウイに転換する動きがある。農業環境食料省によるとバレンシア州では収益性の悪化から過去5カ年でオレンジの栽培面積が3500ha 減少したが、アンダルシア州ではこの間面積の変動はないとのことである。

イタリアはスペインに次ぐ第2の生産国である。主産地はシチリア島とカラブリア地方でそれぞれ全国の59%、22%を占めている。タロッコ、モロ、Sanguinello、Naveline、バレンシアが主な品種であるが、最近、Ippolito と Meli の人気が高まっている。2016/17年の生産量は、降雨の不足とカタニア州、シラクサ州で45,000ヘクタールのカンキツ園がカンキツトリステザウイルスの被害を受けたことから、前年を38%も下回ると予測される。しかし、9月と10月の降雨で果実の肥大が進み、品質は良好と見込まれる。さらに、品質の良い新品種や台木の導入で、出荷期間は延長すると期待されている。

EU主要国のオレンジ生産量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
スペイン	3,483,600	3,086,800	3,629,700
イタリア	1,360,000	1,937,000	1,200,000
ギリシャ	859,000	920,300	910,000
ポルトガル	219,000	265,000	266,000
キプロス	33,300	32,800	42,550
合計	5,954,900	6,241,900	6,048,250

米国農務省海外農業局

ギリシャでは、2016/17年の生産量は前年を1.1%下回ると予測されている。これはネーブル、Commons の着果が不良であったためだ。主産地はペロポネソスとギリシャ西部のエロリア＝アカルナニアである。主な栽培品種はワシントンネーブル、Commons、Skaggs Bonanza、Navelina、New Hall、Lanelate、バレンシアである。

ポルトガルにおける2016/17年産の生産量は公式統計によるとほぼ前年同で、品質も良好とのことだ。

キプロスの2016/17年の生産量は前年を30%上回ると予測されている。

消費

EU ではオレンジは主に生鮮果実として消費される。2016/17年の EU におけるオレンジ消費量は約540万トンと予測される。加えて、小玉の果実が多かったため、加工に向けられる果実が多い(2016/17年で170万トン)と見込まれる。

スペインにおける2016/17年の生鮮果実消費量は前年と同程度と予測される。一方、加工仕向量は生産の増加により23%増と見込まれる。一人当たり年間消費量は約20kgである。スペインでは、特に Navelina、Navelate は生鮮果実として消費され、晩生バレンシアは加工に向けられる。

イタリアの2016/17年の生鮮果実の消費量は減少すると見込まれ、加工仕向量も生産の減少から少ないとみられる。ブラッドオレンジ(タロッコ、モロ、Sanguinello)は大部分が生食向けである。晩生品種(Ovale、バレンシア)は生食向けと加工向けである。

ギリシャは生産量が増加していることから消費も増加するとみられる。なお、同国では大部分が生鮮果実として消費され、オープンマーケットや青果店で販売される。

ポルトガルの消費量は前年と同程度と見込まれる。

貿易

EU 全体では輸入量が輸出量を大幅に超えている。2015/16年の輸入量は、964,389トンで前年を4%上回った。輸入金額は6.585億ドルで、前年を1.8%下回った。南アフリカとエジプトが主な輸入先であり、次いでモロッコ、アルゼンチン、ウルグアイである。2014年5月27日、EU の植部検疫委員会は南アフリカ産カンキツの検疫条件を強化することを決定したため、2013/14年の同国からの輸入量は減少したが、昨年はEU 全体で輸入量が増加した。同国からの輸入はオランダ、英国、ポルトガルでは減少したが、スペインでは減少した。一方、2015/16年の輸出は319,080トンで前年を7.5%上回った。輸出額は2.218億ドルで、前年を8.36%上回った。主な輸出先はスイス、セルビア、ノルウェイ、ベラルーシである。ロシアの輸入禁止措置により、2014/15年のロシア向け輸出量、輸出金額は前年を85%下回った。これは0.25億ドルの輸出機会を逃したことになるが、この傾向は2015/16年も引き継がれた。

スペインは EU の中で最大の生産国であり輸出国でもある。2014/15年の輸出量は1,873,098トン(RU域内を含む)で、前年を14%上回ったが、金額では1%減少した。中国への輸出は過去3カ年で急速に増加しており、2015年10月から2016年8月までの輸出量は10,010トンに達し、前年同期を246%上回った。一方、アルジェリアへの輸出は同期間で前年に比べて65%減少した。

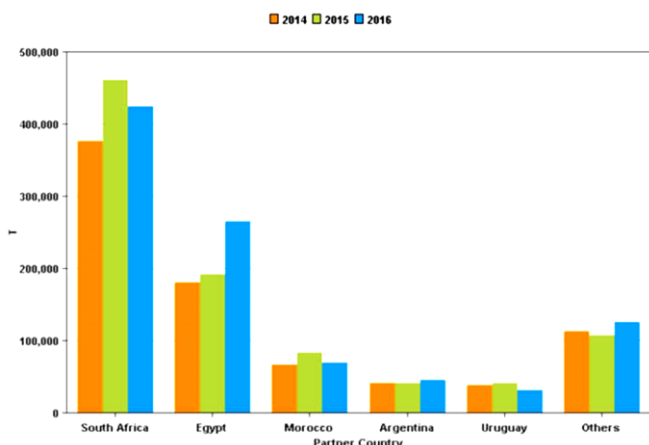
イタリアでは2014/15年の輸入量は前年を37%上回る214,085トンであった。これは、輸入の約67%を占めるスペインからの輸入量が47%増加したためである。輸出については、2014/15年は119,565トンで、前年と同程度であった。主要な輸出先はドイツ、スイス、オーストリア、フランスである。

ギリシャの2015/16年の輸出量は、生産の増加と新規市場の開拓により過去10年間で最高の数値を記録した。ギリシャの主な輸出先はルーマニア、ドイツ、ポーランドである。輸入は主に南アフリカ(1,826トン)からである。

EUのオレンジ輸入量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
南アフリカ	376,467	461,816	425,247
エジプト	181,172	192,925	266,026
モロッコ	67,224	83,298	69,697
アルゼンチン	41,806	40,875	45,791
ウルグアイ	39,228	41,641	31,177
その他	113,606	107,120	126,451
合計	819,503	927,675	964,389

Global Trade Atlas

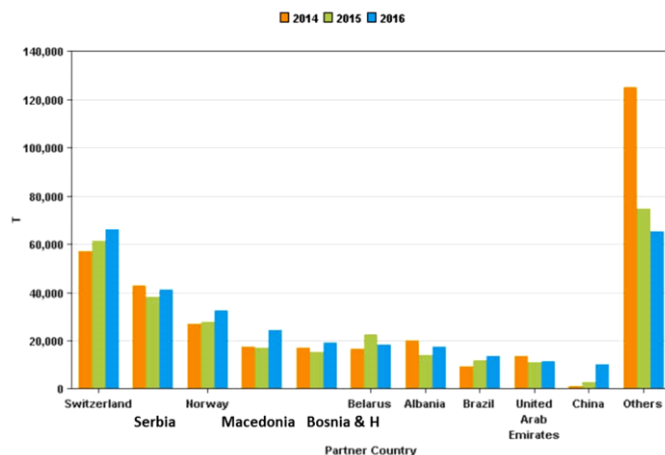


EUのオレンジ輸出量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
スイス	57,192	61,223	66,251
セルビア	42,733	38,163	41,252
ノルウェイ	26,767	27,934	32,411
マケドニア	17,295	17,106	24,176
ボスニアヘルツェゴビナ	16,950	15,384	19,278
その他	185,378	137,019	135,712
合計	346,315	296,829	319,080

Grobal Trade Atlas

ロシア向けの輸出の減少を補うためには、主にスペインからブラジル、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、中国への輸出拡大努力が必要と考えられる。



<オレンジジュース>

EUのオレンジ果汁統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
加工仕向量(トン)	1,251,000	1,287,000	1,309,000
初期在庫量(トン)	15,000	15,000	15,000
生産量(トン)	96,980	99,771	101,476
輸入量(トン)	889,659	776,873	775,000
総供給量(トン)	1,001,639	891,644	891,476
輸出量(トン)	49,867	52,015	52,000
域内消費量(トン)	936,772	824,629	824,476
期末在庫量(トン)	15,000	15,000	15,000
総流通量(トン)	1,001,639	891,644	891,476

加工仕向量(青果)以外は65°ブリックス換算

生産

オレンジの加工仕向割合はEU内外の生鮮果実の生産量、品質に依存する。2016/17年産のオレンジ果汁生産量は、101,476トン(65°ブリックス換算)で前年より1.7%増加する見込みである。これはスペインで増産が見込まれるためである。

消費

EUではオレンジが最も人気のあるジュースであり、ノンアルコール飲料などが競争相手である。

消費者の購買力が低下傾向にあり、他の競合飲料があるものの、オレンジ果汁の消費は安定している。オレンジジュースの利便性が生鮮果実よりも勝っているためとみられる。EU28カ国のうちスペインを含む14カ国が「フルーツジュースマターズ」という果実果汁の消費拡大、認知度向上キャンペーンを実施している(www.fruitjuicematters.eu)。スペインでは、このキャンペーンはスペイン果汁協会が運営し企業も資金提供して「真剣フルーツジュース」という名で実施されている。

貿易

EUでは輸入量の方が輸出量を上回っている。2015/16年の輸入量は776,873トンで、金額にして14億ドルに達する。ブラジルが最大の輸入先であり、全体の約90%を占めている。次いでメキシコで、米国はこれに続き全体の2%を占め、金額では3850万ドルである。これに続くのは南アフリカである。

2015/16年の輸出量は52,015トンで、金額は1.28億ドルである。主な輸出先はサウジアラビア、日本、スイス、アルジェリアである。スイスは過去3カ年で減少している。

EUのオレンジ果汁輸入量(単位:トン65° ブリックス)

	2013/14	2014/15	2015/16
ブラジル	915,190	811,593	699,302
メキシコ	28,128	19,507	21,399
米国	52,073	17,760	17,000
南アフリカ	11,941	11,873	12,024
その他	43,527	28,924	27,145
合計	1,050,862	889,659	776,873

Global Trade Atlas

EUのオレンジ果汁輸出量(単位:トン65° ブリックス)

	2013/14	2014/15	2015/16
サウジアラビア	7,002	5,447	6,521
日本	3,822	5,447	5,781
スイス	5,621	3,420	3,515
アルジェリア	5,140	3,731	3,108
その他	35,519	33,538	36,503
合計	57,104	49,867	52,015

Global Trade Atlas

<タンゼリン/マンダリン>

EUのタンゼリン/マンダリン統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	160,291	158,120	158,148
収穫面積(ha)	153,558	150,865	150,862
生産量(千トン)	3,474	3,054	3,302
輸入量(千トン)	367	420	350
総供給量(千トン)	3,841	3,474	3,652
輸出量(千トン)	278	250	260
生鮮生鮮消費(千トン)	3,206	2,922	3,064
加工仕向量(千トン)	348	302	328
総出荷量(千トン)	3,841	3,474	3,652

生産

2016/17年産のタンゼリン/マンダリン生産量は330万トンで前年を8%上回る見込だ。これはスペインで生産が増加するためである。

スペイン農業環境食料省によると、2016/17年産のタンゼリン/マンダリンの生産量は240万トンで前年を24%上回るとのことだ。これは、気象条件が良好であったことによりバレンシア地方で増産するためである。また、生育後期の降雨で果実の肥大が進んことも影響した。スペインのタンゼリン/マンダリンの主要産地はバレンシア、アンダルシア、カタルーニャであるが、バレンシアでは前年に比べて29%増加する見込みで、アンダルシアでは9%減少する見込みだ。新品種の早生品種、晩生品種の育成を進め、出荷期間の延長を図っている。

イタリアではタンゼリン/マンダリンのうち80%が種なしのクレメンティンで、20%がマンダリンである。主な産地はカラブリア、シチリア、プッリャでそれぞれの生産割合は50%、23%、14%である。クレメンティンでは Comune、Oroval、Monreal が主力品種である。マンダリンでは Avana、Tardivo di Ciaculli が主な品種である。2016/17年産の生産量は前年に比べて25%減すると予測されている。これは夏期の降雨不足とカンキツトリステザウイルス(CTV)の影響であり、CTV の影響はシチリアのカターニャ、シラクサのカンキツ園の4500ha に影響を及ぼしている。しかしながら、品質は夏の終わりの降雨のお陰で良好である。

EU主要国のタンゼリン/マンダリン生産量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
スペイン	2,389,900	1,972,300	2,446,200
イタリア	866,000	836,000	626,000
ギリシャ	140,300	161,500	145,000
キプロス	39,000	44,000	44,000
ポルトガル	39,000	41,000	41,000
合計	3,474,200	3,054,800	3,302,200

米国農務省海外農業局

ギリシャの2016/17年産の生産量は前年に比べて9.9%減少する予測である。これは着果が不良であったことによる。減収は主にペロポネソス地方である。一方同国西部に位置するイグメニツァ県、アルタ県、メソロッギ県、テスプロティア県は新植が進んでいることから減収は僅かである。クレメンティンが主要品種であるが、Nova、Pagr、Ortanique の植栽も進んでいる。

キプロスの2016/17年の生産量は前年と同程度と見込まれる。

ポルトガルの公式統計によると、2016/17年の肥大も品質も通常通りで、生産量は前年と同程度と予測される。アルガルヴェ地方で全生産量の80%を占めている。

消費

EU ではタンゼリンは主に生鮮果実として消費される。2016/17年の EU 域内の生鮮消費量と加工仕向量

は生産量が増加したため増加が予測される。スペインでは、2016/17年は生鮮消費量も加工仕向量も増加が見込まれる。イタリアでは生産量の減少から生鮮消費量は減少すると見込まれる。なお、イタリアでは年末の休暇期間にタンゼリンの消費量が際だって多い。ギリシャの2016/17年の消費量は前年と同程度の予測である。ギリシャではタンゼリンは生鮮で消費される。クレメンティンは主に西海岸で消費され、国内外の前半、後半の需要に対応している。Nova と Page はクレメンティンが豊富な場合、シーズン後半の需要に対応している。

貿易

EU では輸入量の方が多い。2015/16年の EU の輸入量は420,520トンで、前年に比べ14.5%増加し、輸入金額は4.82億ドルであった。金額ベースでは2.50億ドルで前年を31%下回った。主な輸入先は、モロッコ、南アフリカ、イスラエル、トルコ、ペルーである。米国からの輸入は前年より40%減少し、金額では500万ドルであった。

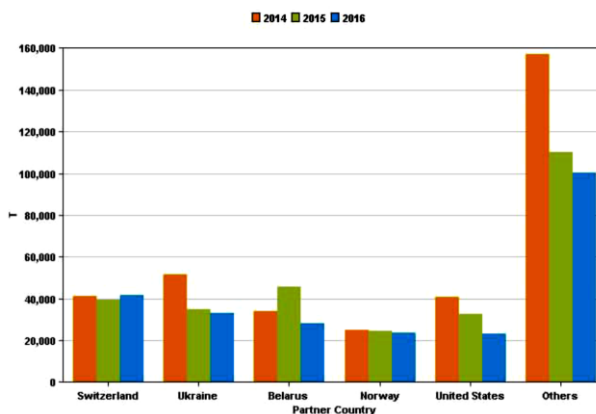
2015/16年の EU の輸出量は、前年を12.8%下回る249,960トンで、金額では2.22億ドルであった。主な輸出先はスイス、ウクライナ、ノルウェー、米国である。米国への輸出は主にスペイン産であるが、前年を28%下回る23,302トンで、2500万ドルであった。ロシア向け輸出は、同国の輸入禁止措置の影響を著しく被っている。

スペインはタンゼリン/マンダリンの主要輸出国であるが、2015/16年(10月→8月)の輸出量(EU域内が91%)は、前年を11%下回る1,488,272トンであった。米国向けの輸出量は2010年以降減少傾向にある。これはスペイン産の米国輸出に当たり、厳格な検査がされることと、コストが高いためである。特にモロッコ産との競合、輸送コストが高いことが問題である。代わって、2015/16年は中国への輸出が伸び、アジア向けが増加傾向にある。

EUのタンゼリン/マンダリン輸入量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
モロッコ	104,646	98,442	140,265
南アフリカ	84,396	96,871	114,851
イスラエル	41,397	56,326	48,761
トルコ	46,779	40,928	48,489
ペルー	48,040	46,958	46,620
ウルグアイ	16,914	10,313	5,729
アルゼンチン	12,182	4,084	3,938
米国	5,096	6,347	3,840
その他	9,825	6,989	8,027
合計	369,275	367,258	420,520

Global Trade Atlas



EUのタンゼリン/マンダリン輸出量(単位:トン)

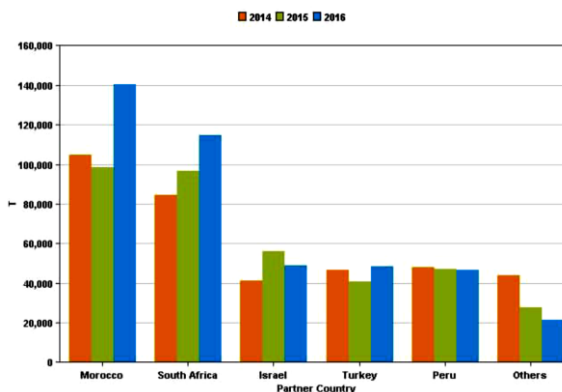
	2013/14	2014/15	2015/16
スイス	41,351	39,414	41,626
ウクライナ	51,473	34,872	32,905
ベラルーシ	33,952	45,534	28,141
ノルウェー	25,132	24,349	23,666
米国	40,568	32,487	23,302
セルビア	19,645	21,971	17,514
カナダ	9,854	18,122	16,545
ボスニアヘルツェゴビナ	15,270	17,842	14,591
その他	112,393	52,052	51,670
合計	349,638	286,643	249,960

Gloabal Trade Atlas

<レモン>

EUのレモン統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	72,434	71,471	71,484
収穫面積(ha)	63,311	62,906	63,115
生産量(千トン)	1,598	1,269	1,554
輸入量(千トン)	399	549	400
総供給量(千トン)	1,997	1,818	1,954
輸出量(千トン)	105	68	90
生鮮生鮮消費(千トン)	1,539	1,524	1,553
加工仕向量(千トン)	353	226	311
総出荷量(千トン)	1,997	1,818	1,954



生産

2016/17年のレモンの生産量は、スペインとイタリアで増加したことから、前年を22%上回る150万トンと見込まれる。

スペインの2016/17年産の生産量は、農業環境食料省によると通常の前年産に回復し、前年を17.6%上回る954,200トンと予測される。これは天候に恵まれたためと、ここ数年新植が進んだためである。スペインは欧州の中で、高品質と衛生管理において確固たる位置づけを強化している。また、スペインは世界のレモン生産国の中でアルゼンチンに次ぐ第2位の地位を占めている。輸出量では、生鮮果実において価格が上昇していることから世界最大となっており、効率的なレモン生産が行われている。品質も良好と見込まれる。

レモンの主産地はムルシア州、バレンシア州、アンダルシア州のマラガ、アルメリアである。栽培品種ではFinoが70%を占め、Vernaが30%を占めている。加工に向けられる品種は主にFinoである。

EU主要国のレモン生産量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
スペイン	1,089,000	775,800	954,200
イタリア	429,000	394,000	490,000
ギリシャ	55,700	68,500	79,000
ポルトガル	13,000	16,000	16,000
キプロス	11,000	15,000	15,000
合計	1,597,700	1,269,300	1,554,200

米国農務省海外農業局

イタリアはスペインに次いで EU 第2位のレモン生産国である。

シチリア島で全体の86%が生産されている。主な品種は、Femminello Comune (F. Zagara Bianca、F. Siracusano、F. S. Teresa)、Monachello、Interdonato である。2016/17年産の生産量は、不作であった前年から回復して平年並みと予測される。秋に降雨があったため、品質、果実の肥大も良好である。

ギリシャの2016/17年産の生産は、前年を更に15.3%上回る見込みだ。主産地はギリシャ南部のアカイア、コリントス、ラコニア、クレタ島である。主力品種は Maglini で、芳香が強く酸味も強い。早生品種の Interdonato やユーレカも栽培されている。

キプロス、ポルトガルの2016/17年の生産量は前年と同程度で、果実の肥大、品質は平年並みである。

消費

EU では主に生鮮果実として消費される。2016/17年の生鮮果実の消費量は前年と同程度と予測され、生産増により加工に回される量は増加が見込まれる。一人当たりの年間消費量は、約2.7kgである。ギリシャ

では需要の強い飲料用は主に輸入に依存している。なお、レモンジュース1kgを製造するために必要となる生鮮レモンは約17kgである。

貿易

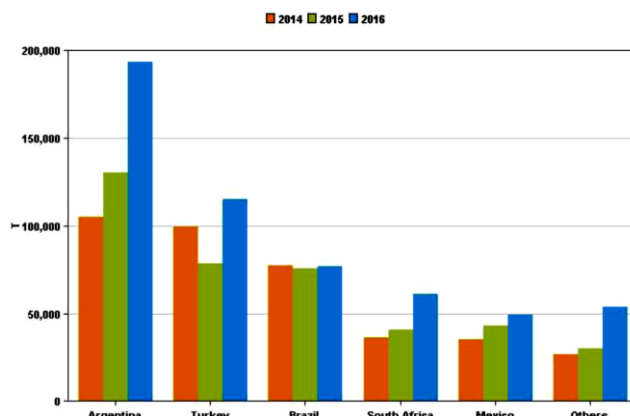
EU では輸入の方が輸出より多い。2015/16年の輸入量は549,778トンで前年を40%上回り、金額は8.37億ドルで62%上回った。EU の輸入先はアルゼンチン、トルコ、ブラジル、南アフリカ、メキシコの順である。なお、2015/16年はモロッコ、チュニジアからの輸入が増加した。

同期間の輸出は、生産量が減少したため、68,521トンで35%減少した。金額は0.99億ドルで、12%減少した。主な輸出先はスイス、ベラルーシ、ノルウェイ、カナダであった。スペインは最大の輸出国であるが、生産量の減少のため前年に比べ23%減少し、521,087トン(EU 域内を含む)であった。輸出品の94%はEU 域内向けの輸出であった。

EUのレモン輸入量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
アルゼンチン	105,153	130,648	193,519
トルコ	99,447	78,840	115,365
ブラジル	77,333	75,950	76,715
南アフリカ	36,370	40,787	60,976
メキシコ	35,114	42,950	49,215
その他	26,756	29,927	53,988
合計	380,173	399,102	549,778

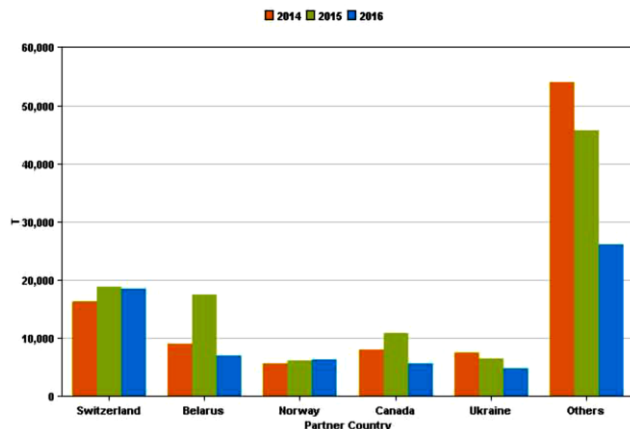
Global Trade Atlas



EUのレモン輸出量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
スイス	16,370	18,888	18,529
ベラルーシ	8,994	17,477	6,968
ノルウェイ	5,649	6,111	6,372
カナダ	8,039	10,878	5,674
ウクライナ	7,596	6,537	4,824
その他	53,955	45,699	26,154
合計	100,603	105,590	68,521

Global Trade Atlas



<グレープフルーツ>

EUのグレープフルーツ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	3,208	3,275	3,273
収穫面積(ha)	2,450	2,403	2,490
生産量(千トン)	109	102	115
輸入量(千トン)	339	363	335
総供給量(千トン)	448	465	450
輸出量(千トン)	15	15	15
生鮮生鮮消費(千トン)	415	434	416
加工仕向量(千トン)	18	18	19
総出荷量(千トン)	448	465	450

生産

EU 全体の2016/17年の生産量は前年を13%上回る11.5万トンと推測される。これは主産地のスペインで増産するためである。

EU主要国のグレープフルーツ生産量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
スペイン	77,900	68,700	80,400
キプロス	20,000	24,000	24,000
ギリシャ	5,900	4,500	6,000
イタリア	5,400	4,900	5,000
ポルトガル	200	200	200
合計	109,400	102,300	115,600

米国農業省海外農業局

ス地方で新規に植栽されている。

消費

EU では生鮮果実の消費が中心であり、消費量は生産量を大きく上回る。2016/17年の EU の消費量は、前年と同程度の41. 6万トンと見込まれる。加工仕向量は1. 9万トンと見込まれる。

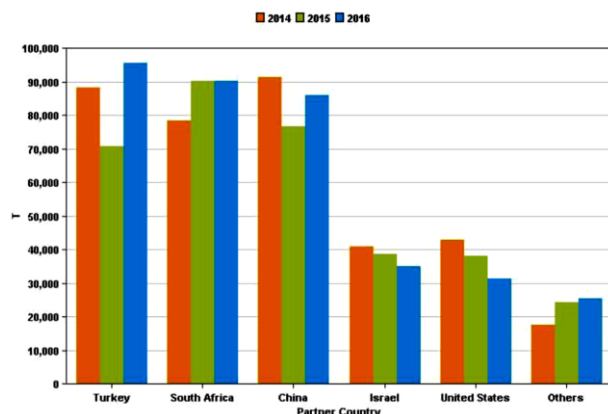
貿易

EU では輸入の方が輸出を大きく上回る。2015/16年の輸入量は363,847トンで前年を7%上回った。金額は3. 1億ドルである。主な輸入先はトルコ、南アフリカ、中国、イスラエル、米国である。米国からの輸入は金額で3800万ドルであった。輸出については、2015/16年は13,577トンで前年を8%下回った。主な輸出先はスイス、ベラルーシ、ウクライナである。

EUのグレープフルーツ輸入量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
トルコ	88,248	70,864	95,736
南アフリカ	78,380	90,406	90,393
中国	91,513	76,639	85,932
イスラエル	41,034	38,755	34,967
米国	42,998	38,270	31,421
その他	17,668	24,433	25,389
合計	359,841	339,367	363,847

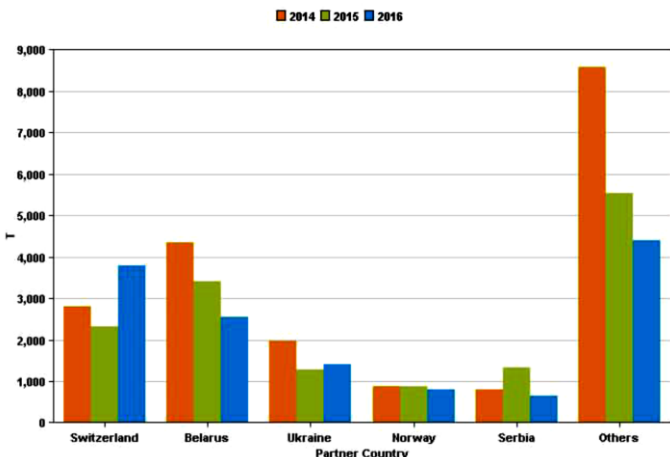
Global Trade Atlas



EUのグレープフルーツ輸出量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
スイス	2,801	2,319	3,781
ベラルーシ	4,356	3,405	2,556
ウクライナ	1,965	1,279	1,404
その他	10,261	7,741	5,836
合計	19,383	14,744	13,577

Global Trade Atlas



26. メキシコのアボカド事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年12月8日公表)

生産

市場関係者の情報によると、2016/17年(7月→6月)のアボカド生産量は180万トンと予測される。最大の産地であるミチョアカン州では2016年3月の霜害と低温の影響を受けたが、生育は概ね良好である。病害虫防除プログラムが生産拡大に功を奏しているようだ。2015/16年の生産量は公式統計では164万トンで、2014/15年の生産量は152万トンであった。

メキシコアボカド生産・輸出協会(APEAM)がミチョアカン州で病虫害防除と残留農薬を皆無とする取組みを初めて以降、アボカドの品質は向上している。なお、ミチョアカン州は全国のアボカド生産の80%を担っている。

ミチョアカン州のアボカド生産の大部分は、5～10haの小規模生産者によるものである。これら生産者は、SAGARPAが策定した食品安全プログラムに従い、長期に渡り投資を続けてきた。情報筋によると、ミチョアカン州の生産コストは、基礎的技術だけに頼る経営の場合の70,043ペソ/ha(3,650米ドル/ha)から機械や灌漑装置を含む先進技術を用いる経営の場合の87,000ペソ/ha(5,160米ドル/ha)まで幅広い。なお、最近のペソ安により、さらに数字は上がるとみられる。単位面積当たりの収量は、技術レベルにより8-10トン/haから14-16トン/haと差が大きい。全国平均では2016/17年は9.0～9.2トン/haであり、2015/16年は9.8トン/haであった。

地元紙によると、ミチョアカン州では違法に森林が伐採され、アボカドに転換されているという。環境天然資源事務所や農林畜産研究所はこのような違法行為を非難している。情報筋によるとアボカド生産や輸出による収益が高いからだそうだ。

連邦環境保護局では違法な森林伐採、林地の転用を防止するための活動を行っている。このため、メキシコアボカド生産・輸出協会では、2010年以降、50万本を超える松の植栽計画を実施している。この計画によると、2017年には28万本、2018年には32万本を植栽することになっている。

2016/17年のアボカド栽培面積は203,732haで、前年を8.7%上回る見込みだ。面積の増加はメキシコ国内及び海外市場でメキシコ産のハス(品種)アボガドの需要が旺盛であるからだ。公式統計による2015/16年の栽培面積は187,327haで、うち結果樹面積は166,944ha、2014/15年は栽培面積175,936haで結果樹面積は153,770haであった。

メキシコの州別栽培面積(単位:ha)

州名	2015/16	2016/17	増加率(%)
チアパス州	3,147	3,294	4.6
ゲレロ州	4,439	4,468	0.6
ハリスコ州	17,041	17,812	4.5
ミチョアカン州	134,941	147,720	9.4
メキシコ州	8,162	9,434	15.6
合計	187,327	203,732	8.7

消費

国内の生鮮アボカド消費量は輸出量により決まる。何故なら輸出価格の方が高いため生産者は輸出を優先するためである。2016/17年の国内消費は約60万トンと推測される。2015/16年は輸出向数量が多かったため54万トンで、2014/15年の国内消費量は63.4万トンであった。アボカドはメキシコの家庭において主要な食材であるが、生産者は輸出を第一に考え、残りが国内に向けられている。一人当たりの消費量は、輸出の増大と国内価格の上昇により、8kgから6.8kgに減少している。国内価格については、2016/17年シーズンは前年に比べて高値で始まったが、豊作の見込みから次第に値が下がっている。なお、端境期に当たる6月から8月にかけては供給量が減少するため価格は上昇する。

大部分の州では、貯蔵性に優れ、海外市場で需要が高い品種であるハス(Hass)を生産している。その他の

栽培品種は、Fuerte、Criollo、Bacon、Pinkerton、Gwen、Reed である。

生鮮以外のアボカドの用途として化粧品向けのアボカド油に対する需要も高いが、生産者は生鮮果実の輸出で収益をあげているのが現状である。化粧品産業としては、アボカド副産物は高いとの消費者の思い込みがあるため、十分にアボカドを利用していないようだ。アボカド油は食用として少量販売されるに留まっている。

貿易

2016/17年の輸出量は、貿易業者の予測では、海外からの需要が根強いことから更に増加し、100万トンを超えると見ている。また、通貨ペソがドルに対して下落していることも輸出を後押ししている要因である。Global Trade Atlas(GTA)によると、2015/16年の輸出量は960,362トンで、2014/15年の734,421トン大きく上回った。輸出は、国際的に需要が大きく、米国向けには全州で年間を通じてニーズがあることから増加傾向が著しい。国際価格も端境期の6月から8月にかけては品薄のため上昇する。

ミチョアカン州の生産者と出荷業者との係争は2016年10月にストライキに発展した。このため収穫は遅延し、輸出量の減少、輸出価格の上昇を招いた。中小規模生産者が道路を封鎖し、トラックの通行を妨害したのである。生産者は輸出価格が手取り価格に反映していないとして、2016/17年価格の見直し、仲介業者の排除、輸出向け販売分についてのドル支払い、参照価格の設定などを要求した。また、果樹園からのサンプリングとして集荷される(実質的に値引きとなる)ことも止めるよう要請した。米国内の価格は、2層箱で2015年10月に27-32ドルであったものが、2016年10月には65-68ドルに上昇した。その後、輸出は再開され、量も通常のペースに回復した。(注:軽装の結果がどうなったかは記載されていない)

米国は最大の輸出先国であり、全体の77~79%を占めている。日本とカナダも戦略的輸出先国であり、それぞれ9%、6%のシェアを占めている。ミチョアカン州では37の業者が米国への輸出資格を持っている。一方、他の州は日本、カナダ、フランス、スペイン向けの輸出に重点を置いている。

業界によるとアボカドをペースト状に加工処理したグアカモーレの輸出量は年間17万トンとみており、米国、欧州、中東、アジアに輸出されている。なお、グアカモーレの輸出に関する公式な統計はない。

輸出は出荷業者が直接行っており、多くの業者に米国資本が投入されている。ミチョアカン州の生産者は、一般に、収穫した果実をキロ当たりペソ払いの形で出荷業者に販売する。収穫費用(労働費)と関連費用(輸送費、箱代)は選果場が負担している。出荷業者の役割は、他の果樹と同様、果実の洗浄、サイズ、外観、乾燥重量に応じた選果をし、契約仕様にに基づき梱包(袋詰め、箱詰め等)することにある。一般に輸出契約仕様に適さないものが国内市場に出回っている。

アボカドの輸入は主にカリフォルニア州からであるが、2015/16年はわずか6,813トン、2014/15年は豊作であったため皆無であった(GTA データ)。

政策

メキシコから米国への輸出に関しては、所定の出荷・認証システムを遵守することが条件付けられている。現在、ミチョアカン州だけが品種ハスを米国へ輸出することができる。ハリスコ州も米国への輸出が可能となるように申請手続きを進めている。その他の州は米国以外への輸出に積極的である。

関税

米国への輸出に当たって関税はかからないが、ハスアボカド協会とマーケティングサービスによるプロモーション活動経費として1ポンド当たり2.5セントが徴収される。

また、メキシコアボカド生産・輸出協会(APEAM)に対し、1ポンド当たり5セントを支払うこととされ、米国農務省による検査費用が賄われている。

27. 世界のマンゴー市場

FreshPlaza 電子版 (2016 年 12 月 9 日)



中南米は国によって状況は様々である。数カ国では生産量が多く、出荷時期が重なり、価格の低下圧力を受けている一方、ペルーは、輸出業者によると、需要が旺盛で価格低下の圧力が少ないそうだ。アフリカ諸国は積極的に欧州市場を目指している。ベルギーの業者によると、欧州内では市場は比較的沈静化しているそうだ。というも、オランダ市場ではペルーからの輸入が潤沢であるからだ。米国ではエクアドル産の輸入に関してかならずしも満足いかない様子である。

欧州市場を目指すアフリカ

収穫は続いているが、西アフリカ諸国(象牙海岸、セネガル、マリ、ブルキナファソ、ギアナ)は5万トンのマンゴーを欧州に輸出する見込みだ。ここ数年で象牙海岸は欧州への輸出を倍増させ、3万トンに達する見込みだ。これら諸国では植物検疫上の問題に対処しなければならなかったため、これは大きな成果といえる。マンゴーにはミバエの問題があり、発見されると欧州への輸出が止められる。しかし、象牙海岸では予防のための投資が進められコントロールできるようになって、違反件数が減少した。

生産量が20%増加したペルー

通関統計によると、中国への輸出は628%増加したとのことだ。ペルー産の輸出は1月から2月にかけて大きな強みを持っており、しばしば3月まで続く。主な品種は Kent である。気象条件に恵まれたため収穫量は多く、品質も良好だ。生産見込みでは、前年に比べ20%増える模様だ。ペルー産に対する需要が増加しているため、増産による価格への影響はなさそうだ。

収穫が早く始まるエクアドル

エクアドルの収穫シーズンは10月から12月までだ。今年は収穫が3~4週間早く始まる見込みだ。これまでのところ、前年より輸出量が10%増加するとの予想である。輸出の91%は米国に向けられているが、米国の輸入業者によると、今年の輸入品には満足していないそうだ。これはサイズの小さい果実が多いためであ

り、価格も低迷している。なお、今年に関しては、最初の輸出品は中国に向けられ、この試みは上々であったという。出荷量が豊富な11月には(中国での)価格は低下しているとのことだ。

生産過剰のメキシコ

収穫は10月に始まったが、生産量は昨年を上回っているという。業者によると供給過剰が見込まれ、市場にとって問題だという。このため価格は前年を下回っており、ブラジル産との競合が生じている。とはいえ、生産量全てを販売することは可能であるようだ。

ブラジル産は低価格

収穫は昨年より早めにスタートし、量は平年並みであった。メキシコ産の出荷が長引いたため、同国産と競合が生じ、市場に悪影響を与えた。価格は昨年よりも低い。輸出の大部分が米国向けであるが、数週間前から欧州向けにも輸出されている。

輸出を増やしたいパキスタン

数ヶ月前に昨シーズンの出荷が終わったため、次期シーズンの予測をするには早すぎる。7月に輸出業者から聞いた話では、韓国、カナダ、米国向けの輸出をもっと増加させたいとのことだ。しかし、そのためにはハードルが高く、生産者は応分の投資をすることが不可欠である。例えば、韓国市場向けには果実の表面に傷がない完璧な状態であることが必要だ。これを実現するためには生産段階で改善を行う余地が十分ある。なお、パキスタンでは欧州市場への輸出も模索している。

米国:エクアドル産に満足せず

現在、米国ではエクアドル産(品種:Tommy Atkins、Haden、Kent)の輸入を行っている。輸入業者によると、今年の輸入は満足いかない状況とのことだ。というのも、果実のサイズが小さいものが多く、価格も低迷したからだ。業者によると、「果実の大きさが回復すれば市場を持ち直す可能性がある」とのことだ。12月中旬には輸入先がエクアドルからペルーに移行する。業者はペルー産の販売が好調にスタートすることを願っているが、その通りにはなりそうもない。というのも、両国産の果実が市場に存在することで供給過剰になる恐れがあるからだ。現在の価格水準はサイズの小さいもので4～5ドル(単為不明)、大きいものは5～6ドルである。

マンゴーで成功するイスラエル

マンゴーは近年最も成功した輸出農産物の一つである。シーズンの終盤にさしかかっているが、生産量、輸出量ともに過去5カ年の最高水準となっている。業者によると、マンゴーの成功要因は、主要輸出市場へ近いこと、有望品種を持っていること、マンゴーのイメージが良いことだそう。イスラエルでは生産量は約4万トンで、うち輸出は1.2～1.75万トンである。その他は国内市場で消費される。果実の消費量では第2位の地位にある。イスラエル産と競合するのはスペイン産であり、中南米産との競合関係はない。最大のライバルはスペイン産のAustinで、イスラエル産のシーズンが終わるまで競合している。現時点では果皮の着色があまり良くなく、輸出業者を悩ませている。

現行の課題は、特にEUとの関係において、ボイコットの動きがあることと及び為替レートの問題だ。加えて、輸出業者の数が多すぎる問題もある。昨年時点で16業者存在するが、収益をあげていることもあり、その後改善の兆しはない。

大きなマンゴー市場であるエジプト

エジプトのシーズンは好調に終わった。業者によると、扱っている12の品種は満足いくものだったそう。主要品種はKeitt、Kentである。国内市場におけるマンゴーの需要は大きいため、ハイパーマーケットを中心に良く売れる。加えて、エジプト産マンゴーは湾岸諸国にも輸出されている。シーズン中には小規模コンテナで試験的に英国に輸出が行われた。

大部分の生産は大手会社により担われているが、これらは特定の品種をライセンス生産している。また、小

規模生産者は地元市場向けに出荷している。

ペルー産が多い欧州市場

欧州におけるマンゴーの消費量は推定30万トンである。1/6はアフリカ産であるが、まだまだ拡大の余地がある。大部分は中南米諸国から輸入されており、このなかでもペルーが最大の輸入国(7万トン)である。

物静かなベルギー市場

輸入業者によると、現在ブラジル産の Kent、Tommy、ペルー産の Kent が出回っている。価格はこの時期にしてはやや低い水準であるが、クリスマスには安定するとみている。しかし、その後、市場は混迷すると見られている。ペルー産の供給が市場動向を決定づけると見込みだ。現時点は航空輸送によるサイズの小さい果実が主流で、大きいサイズの果実の量は少ない。海上輸送物は、Kent の4キロ箱で5.5～7ユーロ、航空輸送物はキロ当たり3.8～4.8ユーロで推移している。近年は航空輸送ものがわずかに増加しており、また、直ぐに食べられるマンゴーの需要が特に増えている。

ベルギーと対照的なオランダ市場

マンゴーはブラジル、ペルーからの輸入で量は大変豊富である。このため市場としては難しい局面にある。価格はサイズにかかわらず5～7ユーロで推移している。今後、昨年と比べれば安定しているため価格の急騰は考えにくく、1月になれば市場は沈静化すると見られている。

後れをとるイタリア

クリスマスが近づくにつれ、エキゾチックな果実であるマンゴー、アボカド、パパイヤに対する需要が拡大する。近年これら果実の需要は記録的な増加を見せている。しかし、業者によるとペルー産のマンゴーは干ばつの影響で30～40%供給が減少しているという。イタリア市場関係者は、ドイツ、フランス、英国、ポルトガル市場は「我々の先を行っている」と、マンゴーの供給が低迷していることを羨んでいるようだ。

著者:Rudolf Mulderij

28．世界のオレンジ市場

FreshPlaza 電子版（2016 年 12 月 2 日）



地中海沿岸諸国産の販売は既にスタートしている。いくつかの国では極端な気象により生産に影響を受けている。エジプトでは生産量がやや少なく、イタリアのシシリー島では予想量に比べて少ない。要因の一つは干ばつがあったことで、その後、大量の降雨があったことである。スペインではシーズン初めは高価格であったが、その後急落した。これは北部ヨーロッパが秋以降温暖であったため需要が少なかったことなどによる。南米では次期シーズンの到来が待たれている。現時点では収量予測はできないが、生産者は期待を持っている。

再び輸出を目指すイスラエル

イスラエルでは30年前に Jaffa（オレンジのブランド）が成功を納めて以来、オレンジを取り巻く情勢は大きく変化した。イスラエル産のオレンジは高品質で知られていたが、他の輸出国の生産量が増加すると価格面では競争できなかった。現在では輸出は極めて少ない。しかし、今後数年で輸出が回復する兆しがある。過去数十年、イスラエル産オレンジは国内で消費されていた。イスラエルのオレンジ消費は世界平均よりも多いが、だからといって、生産者の利益には繋がっていなかった。この結果、生産者は他の作物への転換を進め、70年代には4.2万ヘクタールあった栽培面積は、今では1.75ヘクタールに減少している。栽培品種はバレンシア、Shamouti、Tabouri で Tabouri だけが輸出されている。

今年は輸出が回復している。60トン規模の販売活動がいくつか催され、合計輸出量は200トンに達すると見込まれる。この要因の一つはいくつかの極東市場が解放されたことによる。

スカンジナビア諸国へ大きいサイズの果実輸出を目指すエジプト

12月1日はエジプト産カンキツ出荷の公式なスタート日だ。政府は着色が確実なこの日を開始日として設定している。オレンジは気象の影響で生産量はやや少ない。しかし、サイズは大きい。これらサイズの大きい果実は販売で強固な足場を持つスカンジナビア諸国では好調である。輸出業者はクリスマスシーズンの販売を狙っている。加えて東欧もエジプトにとっては有力市場である。ポーランド、チェコへは6日以内に輸出可能だ。さらに極東市場はエジプトにとって魅力的である。インド、インドネシア、シンガポールはサイズの小

さい果実の輸出先となっている。

スペインの販売は良好

ネーブルの出荷は早く始まった。10月に出荷が始まり、早期出荷の新記録だったといえる。この時期は南半球からの最後の輸入品に対して高値がつく時期であることから、(スペイン産果実の)輸出業者は大いに利益を得ることができた。最初の3週間は出荷量、価格ともに堅調に推移したが、出回り量が更に増加するにつれて、価格に影響が出た。スペイン及び輸出先市場の(通常より温暖な)気象条件が市場価格に影響を与えたのである。本年産の糖度は高く、その点では販売に有利だが、出荷がピークを迎える前に価格は下落した。その後、主産地、特にバレンシア地方で豪雨があり、出荷は遅れている。

イタリア:シチリア産の生産予測に変化

オレンジ市場はなかなか難しく、価格は安く推移していた。しかし、ボローニャ市場では果実サイズによるが、キロ当たり0.5～1.0ユーロと比較的高く推移している。産地での価格は前年より高いようであるが、需要は追いついていない。国産に加えて、価格がキロ当たり20セント程度安いスペイン産が出回っているためだ。スペイン産は大きいサイズでキロ当たり、0.7から0.8ユーロである。

一般的印象では、カラブリア州、シチリア島からのネーブルの入荷は例年より少なく、他の品種も同様である。流通業者によると、昨年よりも30%入荷が少ないのではないかと。昨年より平均より出回りが少ない年であった。

シチリアのカターニャでは生産量が30%少ないものの、タロッコ(品種)の品質はよさそうだ。中から小のサイズが多いのは干ばつによる影響とシロッコ風が強かったためだ。出荷時期は短くなり4月までと見込まれる。

シチリア島のシラクサでは収穫が始まっているが、早生の Navelina (品種)は成熟が早く11月上旬には収穫がスタートした。収穫量は予想より少ないが、市場ではサイズの大きい果実に期待を寄せている。他の地域と違い、干ばつがあった期間にも適度な降雨があった。ここ数年の収穫時期の低温でブラッドオレンジの着色は良好だ。

シチリアのリベラでは豪雨に見舞われ、果実に損害を与えた。全体的には大きな被害ではないが、一部の生産者には大きな打撃があり、収穫皆無もあった。豪雨で道路にも被害があり、オレンジの輸送にも影響が出ている。一部には出荷が不能となり、11月に収穫が始まった Navelina の出荷が遅延している。豪雨の前は2月から11月まで干ばつに見舞われ、灌水し収穫を早めていた。

ベルギー:果実サイズは小さいままとの見込み

今年のスペイン産カンキツの状況は思わしくない。まず、この時期にしては温暖な気象条件に対処しなければならなかった。このため、サイズの小さい果実が多く、着色も不十分であった。輸入業者によると、現時点でもオレンジの状況は思わしくなさそうだ。シーズン当初は誰も好調と予測していた。当初は価格も高かったが、現在は輸入品別に価格は大きく異なり、(1箱)8.5～12ユーロで推移している。南アフリカ産が出回っていた頃、価格は安かったが安定していた。品質面でも大きな違いがある。スペインでは天候が悪化しており、現在の豪雨が今後も続くとの予想に失望している。

果実のサイズには失望を隠し得ない。当初からサイズは小さく、今後とも例年より小さいと見込まれている。今週の霜が降りそうな天候は販売にとって不利にはならないだろうが、販売を有利に導くとも考えにくい。

オランダ: Salustiana を除き不安定な市場

オランダのオレンジ市場は緊迫している。スペインから大量の入荷があり、間もなくギリシャ、トルコから入荷するため、供給量は増加する見込みだ。

Navelinas の価格はキロ当たり55～75セントであるが、業者によると、今後の価格変動はあり得るとしている。唯一価格変動が認められないのは Salustiana で、キロ当たり70～85セントで推移している。

米国:マンダリンとの価格競争

マンダリンの増加はネーブル市場の縮小によって生じたものである。スーパーではオレンジはバラ売りで販売されているが、マンダリンの存在を気にせざるを得ない。しかし、Vintage Sweet のような新品種はネーブルを再び新たな地位に導いており、実際にうまくいっている。生産者はスーパーが特別に販売促進をしてくれていると認め、実際に高い価格で販売されている。

カリフォルニア州とフロリダ州では有機栽培が行われている。しかしカンキツの有機栽培は、他の果実よりも難しい。有機農産物は地域レベルの市場で販売されている。今シーズンの有機栽培カンキツの生産量は2015年と同程度の見込みだ。ネーブルでは収穫は11月に始まり、5月まで続く。1月には Cara Navels の収穫が始まり3月まで続く。ブラッドオレンジは2月に始まり4月まで続く。バレンシアオレンジは5月に始まり10月まで続く。

販売の好調を期待するメキシコ

メキシコのシーズンは11月から4月までであるが、これまでのところ期待したほどではないにせよ、好調に推移している。収穫は進行中だが、状況が好転する望みもある。オレンジの品質は良好であるが、果実サイズは小さい。

好調な販売を期待するコロンビア

干ばつの影響を受け収穫は期待外れであった。サイズは小さく、コロンビアにとって残念なシーズンだった。予報では今後降雨が期待されていることから、次期シーズンには期待が寄せられている。収穫は5月に始まる。

ペルーでは生産量の新記録

昨シーズンの生産量は大変に良好であった。天候に恵まれたため、生産量は大幅に増加した。天気予報によると次期シーズンにも大きな期待が寄せられている。

アルゼンチンも良好なシーズンを終える

オレンジは降雨や洪水の影響をほとんど受けなかった。全体的には昨シーズンは良好に推移したといえる。次期シーズンを予測するには早すぎるが、最近の霜害がなんらかの影響をもたらす可能性はある。

中国では生産量の減少が見込まれる

今シーズンの中国の生産量は15～20%減少する模様だ。この結果、価格は上昇している。減収の理由の一つには労働費、生産コストの上昇があげられる。中国では国産果実の他に、米国、スペイン、エジプト、ペルー、イスラエル、モロッコ、南アフリカ、オーストラリアからも輸入をしている。南半球の南アフリカ、オーストラリア産の価格は輸入量が増加したために下落した。

著者:Rudolf Mulderij

29. オーストラリアのブドウが暴風雨被害

Fruitnet 電子版 (2016 年 11 月 21 日)

11月11日金曜日、オーストラリアのミルデュラとリバーランド地方を襲った「奇妙」な嵐で、オーストラリアの生食ブドウ協会(ATGA)の最新の推定によると、生食ブドウに推定10～15%の被害があったそうだ。



ATGA の CEO によると、「大変大きな被害であった。推計では約2百万箱の国内出荷用、輸出用のブドウに被害があり、全国の生産量との比較では10～15%に相当する」とのことだ。

ミルデュラ地区では、11月11日の夜、大雨と雹とともに、時速 90km を超える風に襲われた。「ミニトルネード」と呼べるもので、Cardross、Red Cliffs、Paringi を通り抜け、生産者に被害をもたらしたそうだ。

CEO によると、「嵐でブドウの樹が裸になったようだ」とのことで、「Paringi だけで約 75 万箱を失い、丸裸になった。Red Cliffs の生産者は風と雨に遭遇したが、被害をもたらしたのは雹だった」そうだ。

AGTA は約80の生産者が被害を受けたと推計している。中には100%の被害があったもの、40から60%の被害があったもの等、様々だそうだ。被害を受けた生産者の多くは経営規模が35～45エーカーの家族経営と推測される。

とはいえ、被害は局所的であり、全国的には栽培面積の増加分で相殺されるかもしれない、と CEO は考えている。「過去2～3年の間に栽培面積が増加し、生産量も拡大している。だから結果樹齢に達した果樹園の生産で幾分かは相殺できるのではないか」「今回の被害の前は、今年に大きな期待をかけていた。生産量は減少するだろうが、それほどたいしたことはないのではないか」と話している。ミルデュラの多くの生産者には被害をもたらしたが、近隣の生産拠点である Robinvale は影響を受けなかったからでもある。

オーストラリアは輸出量の記録更新(11万トン)を目指して2016年のシーズンに突入した。そして主要な輸出業者は今後に向けて強気である。「今回の被害はシーズン全体を損なうようなものではない」と Valleyfresh Australia 社の Ryan Smith は語っている。「今回の被害で価格は少し上がり、国内市場に圧力を受ける可能性はある。しかし、輸出に関しては米ドルとの為替レートが有利なこともあり需要は非常に大きい」そうだ。

とはいえ、今回の被害で中国の旧正月向けの輸出数量が制約される可能性がある。オーストラリア産のブドウの輸出が2週間程度遅れ、中国の旧正月は今回2017年1月28日と、早めに始まることから、例え航空便で出荷したとしても輸出量を削減しなければならない。「嵐のため Cardross で生産されている Ralli Seedless に被害があった。中国は同地で生産されているクリムゾンのお得意先でもある」と心配そうだ。

CEO によると、「今年は昨年の輸出実績を上回ることを期待している」そうだ。中国は引き続き主要な輸出先であり、インドネシアと香港がそれに続くが、日本は非常に重要な市場として急速に浮上している。日本への輸出2年目を迎えた昨年は、輸出量が前年の3倍に当たる1万トンに達した。現在、輸出が認められているのは、Thompson、Red Globe、Crimson の3品種に限られているが、CEO は業界として他の品種の輸出も可能となるよう働きかけをしているそうだ。

30. 世界のパパイヤ市場

FreshPlaza 電子版 (2016 年 11 月 25 日)



欧州では多くの国でパパイヤはエキゾチックな果物と認識されているが、需要は拡大している。一方、米国では事情が異なり、パパイヤは主流の果実と受け止められている。南半球ではエキゾチックな果物ではない。中南米、アフリカ、アジアでは生産が拡大している。現在、南アフリカでは生産がピークを迎え、オーストラリアでは暴風雨で供給量が落ち込み、中南米では輸出先を探している。コスタリカはカナダ市場を狙っているが、ブラジルは欧州を、メキシコは米国を、エクアドルは欧州と米国を輸出先と狙っている。ペルー産は黄色系が中心であるが、同系は欧州では知られていない。スペインは施設栽培によるパパイヤ生産に投資しているため、中南米産と競合する可能性がある。

暴風雨で被害を受けた西オーストラリア

今週、暴風雨が西オーストラリア州キンバリー地方の Ord 灌漑地区が被害をもたらし、パパイヤの生産が打撃を受けた。この地方のパパイヤ生産の主要3社は、60～80%の被害を受けたとされる。この被害の影響はすぐさまパース市場に反映した。伝統的に、この地方の生産量は西オーストラリア州の70%を占めている。業者によると「植物防疫上の理由から西オーストラリア州からのパパイヤだけを扱っている。東部諸州の果実は西オーストラリア州には入れないようにしている」そうだ。この暴風の影響でキロ当たり3～4ドルだったものが、4～5ドルに値上がりした。さらに価格が上昇すれば、小売業はパパイヤを取扱わなくなると見られるが、供給量が回復するには4～5ヶ月かかる見込みだ。

生産面積の拡大による価格が下がる中国

パパイヤの生産は中国南部、特に海南省の東部で行われている。パパイヤの成熟期間は10ヶ月に及ぶので年間を通して収穫される。最も多いのは白色系である。2年前、生産拡大のための大規模投資が行われたため、今年は価格が低下している。

南アフリカでは収穫のピークが終わる

ムブマランガ(地名)での収穫ピークは終わった。同地では干ばつと高温により生産に影響を及ぼした。大手生産者によると、「干ばつのため収穫量が少なく、品質面での問題もあった」そうだ。通常年の生産量は12,5

00トン程度だが、今年は幾分少ない見通しだ。Papino、Neo Essence が主要品種だが、その他の品種も栽培試験が行われている。国内市場だけでなく輸出も行われており、英国、中東向けに毎週2,000箱出荷されている。

南アフリカ産の非生産期間を埋めるモザンビーク

モザンビークでは南アフリカの業者が国境を越えて栽培を行っている。今年は商業生産が行われる最初の年に当たるが、出来は良いとのこと、1月に収穫が始まるそう。現在、集出荷施設の準備が進められているが、モザンビーク産は南アフリカが出荷できない期間を埋めると期待されている。モザンビークでは労働コストは低い、輸送コストが高いため一部相殺される。

カナダ輸出に焦点を当てるコスタリカ

コスタリカの栽培面積は大きくないが、独自の品種を持っている。品種 Pococi が国家プロジェクトとして振興され、年間を通して収穫可能である。果実は主にカナダに輸出されている。輸出業者によると、カナダ市場では中南米、アジアからの移民の需要が高いため、市場規模として大きいそう。こういった需要者にとってパイアはエキゾチックな果物ではない。ただし、4、8、9月はメキシコ産との競合がある。カナダ輸出はコスタリカとの距離の短さが重要な役割を占めている。欧州向けが14日かかるのに対し、カナダ向けは9日間で済む。現在栽培面積は60haと推測されるが、来年には倍増するとのことだ。

品種 Original が伸びるブラジル

近年ブラジルでは品種 Original の人気が高まっている。Golden とは対照的に、Original に転換する動きがある。同品種は丸みがなく、日持ちが良い。この2カ年の間に、人口1500万人のサンパウロ卸売市場で70%のシェアを占めている。なお、2年前のシェアはわずか5%に過ぎなかった。現在欧州市場向けの輸出を目指している。

干ばつで生産が減少したコロンビア

干ばつのためパイアの出回りはほとんどない。生産者は限られた水をどの作物に割り振るか選択を迫られた。パイアに水を割り振った生産者は、その他の生育条件は適していたため収益をあげた。コロンビア産のパイアはほとんどが国内市場向けである。

加工向けのペルー産パイア

ペルーでは年間を通してパイアが生産が可能だ。生産量の80%は果実の小さい品種で、加工に向けられる。この品種は欧州向けには輸出されていない。というのも欧州で好まれる赤色系でなく、黄色系の品種であるためだ。しかし、輸出業者の中には欧州輸出への足がかりをつけようとする者もいる。

需要が供給を上回るエクアドル

供給量は平年並みだが、需要は強い。生産者の数は少ないが、毎年増加している。主な輸出先はオランダと米国だ。エクアドルでは年間を通して供給が可能で、現在、欧州で販売促進活動を行う計画を進めている。

大産地のメキシコ

この9月にコリマやその他主要都市のパイア市況に関する報告書が作成された。報告書では生産者手取り価格の最高値はキロ8.5ドルで、最低価格は7.5ドルであった。なお、2015年のコリマ州の生産量は108,996トンで、同地方はメキシコ全体の12%のシェアを占めている。

メキシコのパイア生産は、オアハカ州(274,525 トン、31%)、チアパス州(162,876 トン、18%)、コリマ州(108,996 トン、12%)、ベラクルス州(102,488 トン、12%)で行われており、国全体の生産量は883,859トンである。

卸売市場ではキロ当たり10.32～12.87ドルで取引され、スーパーでの販売価格は16.32～20.27ドルである。最も高く販売されたのはグアダラハラで20.27ドルだった。この数字はマージン率に換算すると170%に相当する。なお、最もマージン率が低かったのは、レオン、グアナフアトの123%であった。

米国ではパパイヤは主流の農産物

近年、米国では消費量が急速に拡大している。スーパーではパパイヤを常時販売している。アボカド、マンゴー、パインアップルほどには消費者に知られていないものの、業者によるとパパイヤは既に主流の農産物であるとのことだ。米国市場では Maradol が最も出回りの多い品種である。年間を通してメキシコから輸入されているが、現在の価格は16ドル程度である(単位等は不明)。Maradol はブラジルとベリーズで生産される品種 Solo を押さえてシェアを拡大しつつある。フロリダ州ではアジア系の人に人気がある Tainung を生産している。

パパイヤ市場がないスウェーデン

スウェーデンの大手小売業者によると、スカンジナビア諸国にはパパイヤの市場が成立していないようだ。スーパーの代表者によると、数年前にエキゾチックな果実を新たに導入しようと画策したがパパイヤに対する需要がなかったようだ。マンゴー、カキ、パインアップルなどのエキゾチックな果実は健闘しているものの、パパイヤの消費が伸びないのは、独特な風味と、コールドチェーンの課程で食味が変化するためだそうだ。すなわち、熱帯諸国で熟した果実を食べるような味が得られないようだ。パパイヤの流通を改善するためには大幅な投資が必要であるが、将来的にパパイヤの販売数量を増やす計画はない。なお、現状ではブラジル産が年間を通して利用可能で、1個あたり価格は3～4ユーロである。

需要が増加しているオランダ

マンゴーとアボカドの成功に続いて、パパイヤの人気も高まっている。ここ数年エキゾチックな果実に対する需要は記録的な高まりを見せている。輸入業者によると、年間を通じて需要があるようだ。現在、航空輸送に問題があるため、(供給に対して)需要が強い。品種 Solo はエクアドル産で、Formosa、Golden は主にブラジル産である。オランダは欧州各国に農産物を供給する(転送)市場であるが、ロシアでは(オランダからの輸出は禁止されているものの)Formosa の人気は今でも高いようだ。パパイヤはブラジルでは胃腸に良い農産物だと考えられており、欧州でも健康に良い農産物として、ますます人気が高まっている。

イタリアではパパイヤは高級果物

イタリアの卸売市場では年末の休暇の旺盛な需要に向けた対応を進めている。ボローニャの卸売市場関係者によると、近年、マンゴー、アボカド、パパイヤに対する需要は増加しているようだ。これらは決してニッチな農産物ではなく、高級品と認識されている。現在ボローニャ市場では年間を通じて供給されるブラジル産が取引されている。価格は他の果実に比べて相当に高い。パパイヤの取引価格はキロ当たり4ユーロであり、年間を通じて安定して推移している。一方、価格の安いエクアドル、中央アフリカ、コートジボアール産も出回っている。これらはキロ当たり2～2.5ユーロで取引されている。

スペインでは温室栽培に投資中

パパイヤの収穫はマラガ、アルメニア、カナリア諸島で進められている。収穫は夏の日照を受けた後、11月中旬から始まり、4月まで続く。初期の収穫物の糖度は高い。現在収穫されている果実のサイズは小さいが、将来に(改善を)期待している。以前はカナリア諸島でしか生産できなかったが、現在はマラガ、グラナダ、アルメニアで温室栽培を進めている。これら地域では、温室栽培の野菜に取って代わっている。しかし、作物の転換に当たっては温室内の気象条件をパパイヤに適合させるために投資が必要である。パパイヤの市場は拡大を続けており、生産者はブラジル産より優れていると考えている。欧州市場でブラジル産を凌駕することがスペインの狙いである。

決して高価格ではないイスラエル

パパイアの人気は多くの国で高まっているが、イスラエルでは未だにエキゾチックな果実の代表と認識されている。よく知られたエキゾチック果実ではあるが消費は少ない。国内市場規模は大変小さく、ニッチ市場として存在するのみで、タイ料理やタイ商品を扱う店で販売されている。供給は国内及び輸入によっているが、価格は年間を通じて安定しており、キロ当たり6ユーロである。

イスラエルではパパイアの生産は難しい。暑い夏と寒い冬に耐える品種の栽培が試みられたが、あまり良い成果は生まれていない。現在では新品種の開発が進められている。また、パパイアの栽培を進めるため、温室の建設、風や温度変化を防ぐためのネットの設置に関する投資を行っている。栽培地はバナナも生産できる沿岸地方である。しかし、面積は少なく10ha 未満である。

著者: Rudolf Mulderij

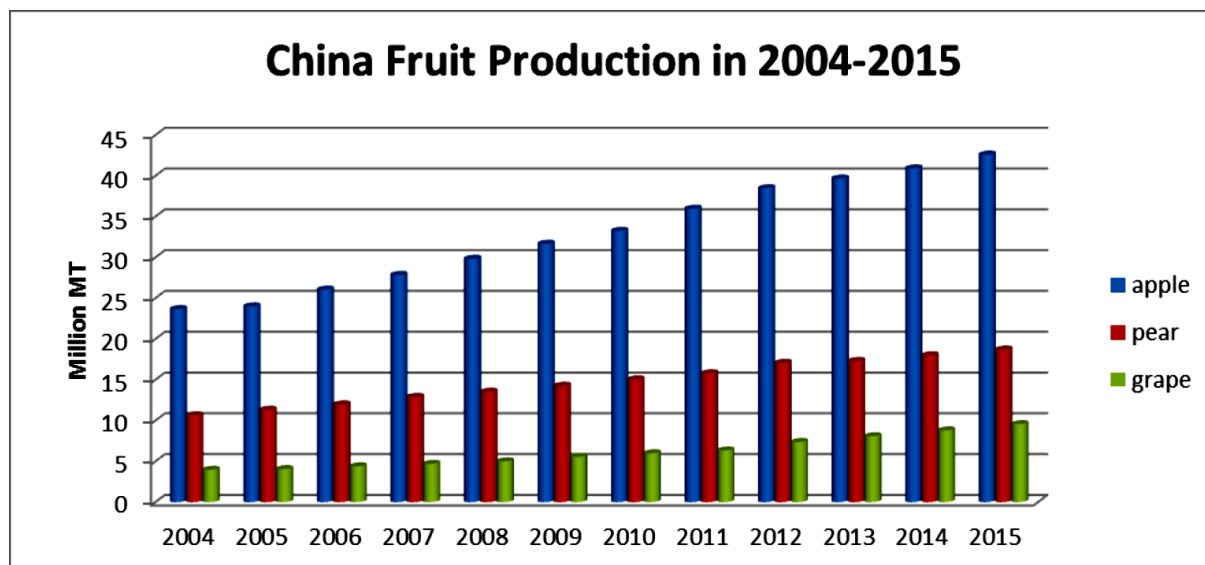
(参考)パパイアの生産量 FAO 統計(中央果実協会編集)

地域・国 年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
世 界 計	8,790	8,031	8,914	9,530	10,018	10,779	11,234	11,357	12,050	12,421
アジア 計	4,024	3,353	3,799	4,207	5,071	5,427	5,637	6,200	7,058	7,192
インド	2,535	2,139	2,482	2,909	3,629	3,914	4,196	4,457	5,382	5,544
インドネシア	733	549	643	622	718	773	676	958	906	871
中国	278	31	134	195	201	207	212	212	215	215
タイ	134	147	157	164	183	177	166	158	165	166
フィリピン	134	88	129	93	94	83	129	151	133	130
バングラデシュ	51	240	105	96	104	130	113	125	120	128
北 米 計	16	15	13	15	15	14	14	13	13	13
米 国	16	15	13	15	15	14	14	13	13	13
カリブ海・中 米 計	1,340	1,338	1,388	1,656	1,242	1,724	1,851	1,451	1,603	1,688
メキシコ	788	709	799	919	653	707	616	634	713	765
ドミニカ(共)	243	340	293	430	259	681	908	498	521	532
キューバ	119	92	90	90	89	96	136	135	179	198
コスタリカ	34	36	31	41	67	64	65	61	80	80
南 米 計	2,114	2,075	2,458	2,393	2,456	2,348	2,447	2,370	2,033	2,187
ブラジル	1,612	1,574	1,898	1,812	1,890	1,793	1,872	1,854	1,518	1,583
ベネズエラ	132	118	151	132	128	130	163	172	182	199
コロンビア	104	140	165	224	208	186	158	153	143	188
ペルー	194	171	175	158	167	174	187	126	124	150
アフリカ 計	1,285	1,237	1,242	1,244	1,219	1,252	1,272	1,310	1,331	1,328
ナイジェリア	859	756	759	765	750	764	750	760	775	773
コンゴ(民)	214	216	218	220	222	224	226	228	230	225
ケニア	86	87	86	88	88	71	98	118	118	120
オセアニア 計	11	13	14	15	15	14	13	13	13	13
豪 州	5	6	6	1	4	7	7	7	7	7

3 1. 中国の落葉果樹(リンゴ・ナシ・ブドウ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016 年 11 月 23 日公表)

生産

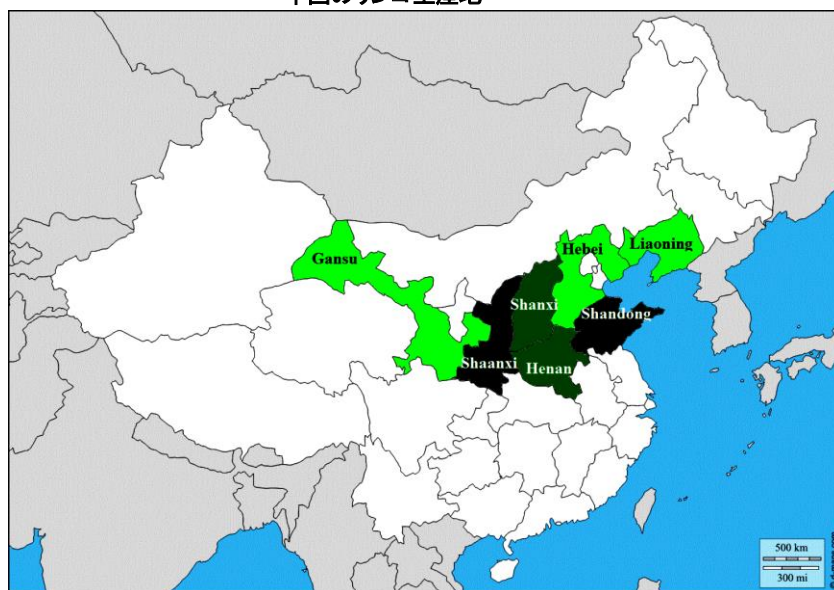


リンゴ

2016/17年(7月→6月)のリンゴ生産量は前年を2%上回る4,350万トンと予想される。リンゴの2大産地である陝西省と山東省で繰り返された高温、雹害にもかかわらず、陝西省や甘粛省において結果樹面積が増加したことが減少要因を相殺したためだ。2016年夏の気象条件は良好とはいえず、果実サイズ、外観、食味に悪影響を及ぼし、昨年より品質が低下した。

2016/17年の栽培面積は234万 ha と推測され、前年対比では1%未満の増加に留まる、見込みだ。過去数年間で急速に面積が拡大したが、今後の増加は落ち着くとみられる。山東省のような主要なリンゴ産地では、改植が進んでいる。しかし、植栽される品種は伝統的な品種が多い。現在、晩生品種であるフジの面積が最も多く、生産量の70%を超えている。残り30%はガラや Qinguan のような早生種である。

中国のリンゴ主産地



加工業者、流通業者は、近年リンゴ生産の近代化を進めている。陝西省、山東省などの主産地では、小規模農家を統合し、機械を導入して密植栽培ができるよう、大規模化が進められている。多くの省政府は、リンゴ栽培の近代化を推進しており、生産量の飛躍的増大と生産コストの削減(主に労働コスト)を目指している。しかし、多くの小規模農家は自力で投資することは難しく、生産量の大半は未だに1ha 未満の層が担っている。

濃い色:生産量の20%以上(山東省、陝西省)、中間色:生産量の10～20%(山西省、河南省)、薄い色:5～10%(河北省、遼寧省、甘粛省)

ナシ

中国のナシ主産地

2016/17年(7月→6月)のナシ生産量は前年を3%上回る1,930万トンと予想される。リンゴと違い、ナシは広範囲で生産されているため、全体として異常気象の影響を受けにくい。最大の産地である河北省では、降雨と日照不足から1/3以上が「鶏足病」と呼ばれる病気に感染した。このため、特に外観が悪く、品質的には昨年より劣っている。

栽培面積は安定しており、2016/17年は113万 ha と推測される。貴州省のように発展が遅れている地域では、省政府が貧困撲滅プログラムを通じ、ナシを植栽する農家に対し助成している。ナシの主産地では、Cuiguan のような新品種への改植を進めている。植栽されているナシの品種は、Snow、Su、Ya、Huangguan、Cuiguan、Fragrant、Nanguo、いくつかの西洋ナシである。



茶色：生産量の20%以上（河北省）、黄色：生産量の5～10%（遼寧省、安徽省、山東省、河南省、四川省、陝西省、新疆）

ブドウ

中国のブドウ主産地



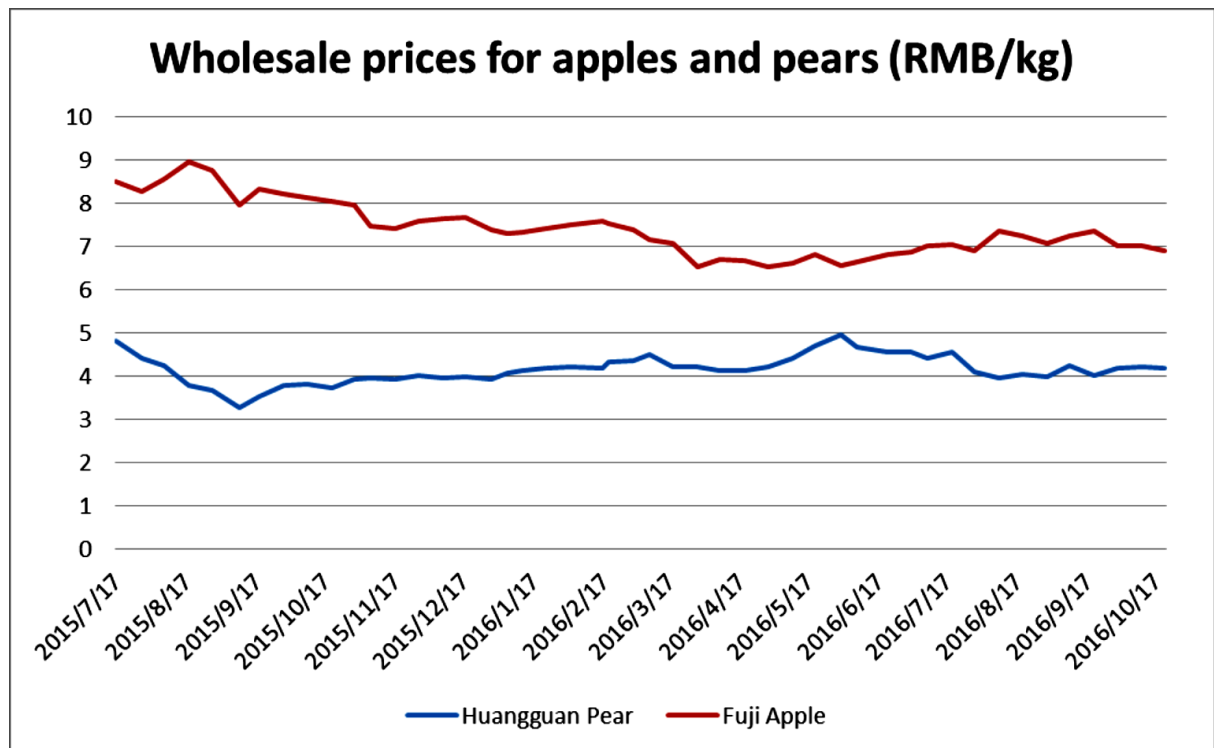
濃い色：生産量の10～20%（河北省、新疆）、薄い色：生産量の5～10%（遼寧省、浙江省、山東省、雲南省）

2016/17年(6月→5月)のブドウ(生食用)生産量は前年を6%上回る1,020万トンと予想される。これは近年の栽培面積の増加によるものである。2016/17年の栽培面積は81.6万 ha で、前年を2%上回るとみられる。面積の増加は、2015年以降は収益が低下したため落ち着いているが、2004年から2009年までは年間増加率は7～12%であった。

中国北部では品質は良好であるが、生産の過半を占める南部では、果実成熟期の降雨と高温により酸味が強く裂果もあった。主な品種は、レッドグローブ、巨峰、マスカット、ビクトリア、藤稔、Jinya、Jinxu、

Juxing、Xiahei、HutaiNo.8、トンプソンシードレス、Jinshouzhi、Meirenzhi 等である。

価格



リンゴのフジの卸売価格は2015/16年を通じて下がっている(上図)。このため、初期に高価で仕入れ貯蔵した流通業者は、以降の期間は儲けを得られなかった。このため、2016/17年は業者が買い入れに慎重である。フジの農場出荷価格は、10月中旬現在キロ当たり0.9ドルと前年を10%下回っているが、荷動きは少ない。リンゴの価格が低下したのは、今年が2年目である。業界によると、急速な生産の増加と経済の低迷が価格低下の要因だという。

公式統計によると、リンゴの生産費は2015年でヘクタール当たり12,058ドル、平均収量はヘクタール当たり30トンとのことだ。

ナシに関しては、当初急激に卸売価格が低下したが(上図)、その後回復し、シーズンを通じて安定的に推移したが、全体としては前年を下回った。2016/17年の品種 Huangguan の農場価格は7月下旬にキロ当たり0.37ドルと前年を25%下回っている。この要因の多くは、河北省で「鶏足病」と呼ばれる病気が発生し、外観が劣ったことである。ナシの価格はリンゴに比べると劣るが、面積当たりの収量は良好に管理された場合はリンゴの2倍ある。加えて、リンゴ生産に比べると、管理が容易で投入費用が少ない。

ブドウに関しては、約10年に渡り急速な拡大が続いたが、2014/15年から価格は下がり始めている。この低下傾向は2016/17年も継続すると見られる。大部分の品種、例えば巨峰の卸売価格はキロ当たり1.12ドルだが、特定の品種ではキロ12ドルで取引されている。このように品種による差は大きい、相対的にブドウの価格はリンゴ、ナシに比べると高く、利益率も大きい。

消費

リンゴは果物の中で最も消費が多い。リンゴは栄養が豊富なこともあり、長い間中国の食生活の中で重要な役割を果たしてきた。フジが最も人気がある品種であるが、これは食味が良いという理由だけでなく、年間を通じて供給されるからだ。2015/16年には、1200万トンのフジが冷蔵庫またはCA貯蔵庫に保管されたとのことだ。大部分の消費者は甘くてパリパリ感のあるリンゴを好んでいるが、果実サイズに関しては、北部の消費者は大きなリンゴを好み、南部の消費者は小さめのリンゴを好んでいる。

ナシはリンゴほど人気がないが、冷蔵庫に保管しているため、年間を通して消費される。西洋ナシに比べ、中国ナシは果汁が多くパリパリ感がある。ナシは肺のために良く、咳を和らげるとの報告がある。ナシの一人

当たり消費量は世界で最高水準にあり、生産の増加の余地は乏しい。

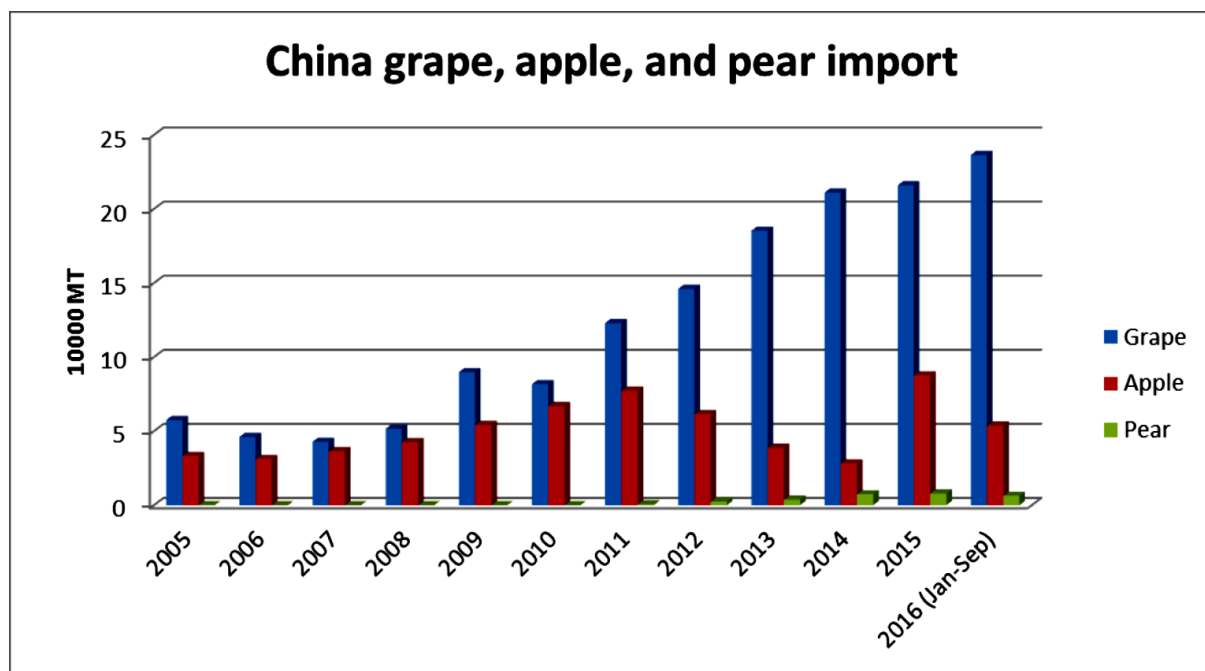
ブドウは、リンゴ、バナナ、スイカ、オレンジに次いで5番目に消費が多い果物である。消費者は、フレーバー、色、新鮮さに最大の注目を払っている。中国の消費者は、特に甘さと種無しであることを選択の基準としている。また、大半は赤色系を好む傾向にある。大部分の品種は冷蔵しても貯蔵が効かないため、生産者は生産時期の拡大を目指している。国産のブドウの出回り時期は5月下旬から10月中旬までであるため、国産のオフシーズンに輸出を拡大する余地がある。

貿易 輸入

2016/17年のリンゴ輸入量は8.5万トンで前年の10%増と予測される。これは高品質リンゴに対する需要が強いからである。2015年5月に米国の全州の全ての品種に対して輸入が許可された。この結果、2016/17年にはチリを抜き米国が輸入先第一位の国となる見込みだ。米国からの輸入は、今後数年、増加すると見込まれる。

2016/17年のナシ輸入量は1万トンで前年を17%上回ると予測される。ナシの輸入量は他の落葉果樹に比べると少ないが、着実に増加している。中心は西洋ナシで、米国や欧州各国から輸入されている。

2016/17年のブドウ輸入量は30万トンで前年を20%上回ると見込んでいる。国産品が出回らない時期の需要は大きい。輸入先は南半球のチリとペルーが上位2カ国である。加えて、両国は中国と自由貿易協定を結び、生鮮果実の関税がゼロとなっている。



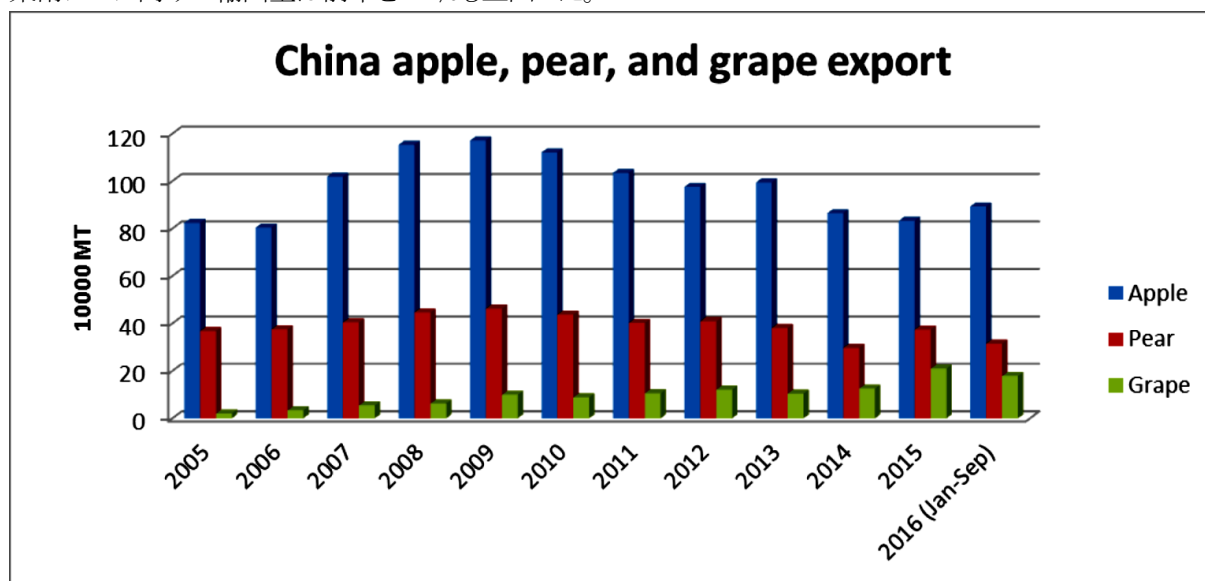
輸出

2018/17年のリンゴの輸出量は150万トンと前年を30%上回ると予測される。これは安い価格で輸出が可能であるためだ。大部分のリンゴは近隣の東南アジアやロシア等に向けられるが、これら諸国は価格に敏感である。また、人民元が安く推移していることも輸出を後押ししている。米ドルと対比で見ると、1年前に比べて人民元は6.4%下落している。

2016/17年のナシの輸出量は48万トンで、前年を50%上回ると予測される。これは、主に生産量が増加するためである。リンゴと同様、ナシの輸出先は主に近隣のアジア諸国である。供給量の増加と人民元安が輸出を後押ししている。

2016/17年の生食ブドウの輸出量は35万トンと前年を50%上回ると予測される。これは供給量が増加するためである。過去数年で生産量が急増し、2015の市場価格は大きく下がった。この結果、2015/16年の

東南アジア向けの輸出量は前年を80%も上回った。



政策

陝西省政府は2016年5月に2016-20年の果樹農業改善ガイドラインを公表した。これによると、同省の北部、西部でリンゴの生産を拡大するとしている。一方、品種に関しては晩生品種を縮小し、早生、中生品種を増加するとしている。また、密植栽培モデルを普及させ、改植時等にスプリンクラーやパイプ灌漑を導入することも記載されている。さらに、省政府は農業関連の資金提供プログラムを統合し、標準化された果樹園の建設、取引プラットフォームの構築、ブランド化、マーケティングを支援することとしている。しかし、現時点では支援プログラムの詳細は明らかにされておらず、支援を受けることもできない。陝西省は中国で最大のリンゴ産地である。

中国の品質監督検疫総局(AQSIQ)は、2016年10月8日、ポーランド産のリンゴに対する検疫要件を公表し、ポーランド産リンゴの輸入を正式に認可した。ポーランドは世界で最大のリンゴ輸出国である(2015年)。しかし、品質監督検疫総局は未だに指定果樹園や選果施設を明示していないことから、輸入は始まっていない。

市場

リンゴ、ナシ、ブドウはスーパー、ハイパーマーケットのみならず、中国全土の市場や家族経営の店舗で販売されている。E コマースが1級・2級都市では伸びているが、物流に問題があることからその割合は大きくない。どこの市場であっても、中国で成功するためには、鮮度、品質、栄養素、輸入果実の食味を強調することが鍵を握る。

中国南部は長い間、輸入落葉果実の国内最大の市場であった。広州や深センなどの珠江デルタの主要都市は依然として重要な消費の中心であるが、佛山、珠海、中山、惠州などの第2級、第3級都市の需要も大きい。中国のその他の主要市場としては、上海、北京の第1級都市、成都、重慶、杭州、蘇州、青島の新興都市がある。

米国産のリンゴ(特に祭日の贈物として人気がある)は、他国との競合が増しているが、需要は増加している。米国産ナシは2013年に初めて輸入が認められたため、中国市場でなじみがなく、他の品目に比べて市場に占める割合が小さい。米国産のブドウは中国全土のスーパーやハイパーマーケットで高い人気を誇っている。米国産ブドウに関する最近のトレンドとしては、種無しブドウへの消費需要が急速に拡大していることがあげられる。

中国は冷蔵管理や冷蔵インフラが大きく発展しているが、まだ改善の余地は大きい。最近、中央政府はコールドチェーンの確立のための助成を行っている。また、卸売市場は設備の近代化や拡張を進めている。さ

らに、貿易業者の報告によると、小売業界も冷蔵施設の整備等、店舗の改造を進めているようだ。

中国南部の小売業界は、1級都市、2級都市、3級都市での競争激化により、自らを差別化して顧客によりよいサービスを提供するよう努力している。多くは独自のウェブサイトを設け、商売圏内で宅配をするなどをしている。また、多くの小売業は新商品やブランド商品を陳列し、大手小売業は中核的流通業者と契約を結び、品質の確保、高度なサービスの提供を受けられるようにしている。さらに、生鮮果実に特化した小売チェーンが急速に拡大し、独自にデザインした贈答用パッケージを消費者に提供している。

米国産リンゴ

米国他、中国はニュージーランド、チリ、日本、フランス、南アフリカ、オーストラリアからリンゴを輸入している。競争が激しいが、米国産のリンゴに対する需要は増加している。米国産リンゴでは、レッドデリシャス、ガラ、グラニースミスの3品種は中国中の主要小売店で扱われ、8月から3月まで販売されている。これらは国民の休日である中秋節、旧正月の贈物として人気がある。小売業界の報告によると、今年は、第1級都市でガラがレッドデリシャスを抜いて、人気第一位になったそうだ。また、流通業界によると、いくつかの大手小売業は米国産の新品種の調達に関心を示しているそうだ。米国産リンゴの価格は国産品に比べて高いが、それでも品質が優れていることから、購入意欲は高い。スーパーやハイパーマーケットが増加する中で、輸入リンゴは2級、3級都市でも販売されるようになってきている。



米国産ナシ

米国産のナシが市場に出回って日が浅いため、今後の可能性を秘めている。しかし、安い国産品や他の輸入品（ニュージーランド、アルゼンチン、日本、オーストラリア）との厳しい競争が待ち受けている。流通業界によると、小売業者の中には米国産ナシの入手方法について十分な知識をもたず、また、最高品質の状態で消費者に提供するための技術を持っていないものがあるという。

米国産ナシの輸入港は大連、広州、上海であり、3つの主要品種（Starkrimson、Red Anjou、Green Anjou）は1級都市の高級スーパーで販売されている。業者によれば、Starkrimson は果皮の色が良く外観が魅力的であり、Red Anjou は食味が良く日持ちが優れているそうだ。

米国産ブドウ



米国産のブドウは9月から12月にかけて国内の1級、2級、3級都市のスーパーで人気が高い。種のあるブドウに比べると価格はかなり高いが、Red Globe、Autumn Royal、Thompson、Crimson、Champagne 等の米国産種無しブドウに対する人気は急速に高まっている。流通業者は米国産の販売で高いマージンが取れるため、取扱いたいと考えている。

小売業者によると、POS を活用した販売、輸入果実の特性を強調した販売促進活動で急速に売上を伸ばしたそうだ。また、中国の休日に合わせたキャンペーンは相当に効果があったそうだ。

米国以外の輸入先は、ペルー、チリ等である。ペルー産は10月下旬から4月までで、チリ産は旧正月（1月又は2月）に照準を合わせた販売を行っている。

中国のリンゴ統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/15年	2016/17年
栽培面積(ha)	2,300,000	2,328,000	2,340,000
販売生産量(トン)	40,920,000	42,600,000	43,500,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	40,920,000	42,600,000	43,500,000
輸入量(トン)	68,200	77,000	85,000
総供給量(トン)	40,988,200	42,677,000	43,585,000
国内生鮮仕向量(トン)	37,038,200	37,527,000	37,685,000
輸出量(トン)	750,000	1,150,000	1,500,000
加工仕向量(トン)	3,200,000	4,000,000	4,400,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	40,988,200	42,677,000	43,585,000

年産は7月-6月

中国のナシ統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/15年	2016/17年
栽培面積(ha)	1,120,000	1,124,000	1,125,000
販売生産量(トン)	18,000,000	18,700,000	19,300,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	18,000,000	18,700,000	19,300,000
輸入量(トン)	9,800	8,500	10,000
総供給量(トン)	18,009,800	18,708,500	19,310,000
国内生鮮仕向量(トン)	16,028,000	16,608,500	17,110,000
輸出量(トン)	331,800	400,000	480,000
加工仕向量(トン)	1,650,000	1,700,000	1,720,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	18,009,800	18,708,500	19,310,000

年産は7月-6月

中国のブドウ統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/15年	2016/17年
栽培面積(ha)	767,000	800,000	816,000
販売生産量(トン)	8,800,000	9,600,000	10,200,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	8,800,000	9,600,000	10,200,000
輸入量(トン)	226,400	249,000	300,000
総供給量(トン)	9,026,400	9,849,000	10,500,000
国内生鮮仕向量(トン)	8,899,300	9,622,000	10,150,000
輸出量(トン)	127,100	227,000	350,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	9,026,400	9,849,000	10,500,000

年産は6月-5月

32. 台湾の落葉果樹(リンゴ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年11月21日公表)

生産

2015/16年の栽培面積は172haである。亜熱帯の属する台湾でのリンゴ産地は高地山岳地帯に限られている。また、気象条件だけでなく、高い人件費や輸送コスト、輸入品との競合等の問題がある。加えて、環境保護プロジェクトにより、リンゴ生産に適する山岳地帯の開発が認められていない。このため、国内のリンゴ生産は縮小しており、国内需要の1%に達していない。

消費

Euromonitor Internationalによると、台湾の一人当たり果物消費量は年間101.87kgであり、この数字は世界最高レベルにある。リンゴは輸入果実の中で最も多く消費されているが、他の輸入果実であるブドウ、モモ、オウトウと競合関係にある。

ほとんどの台湾市民にとって果実は食生活の中で重要な位置づけを占めており、間食、デザート、家庭や職場でお客へ提供する食品となっている。

フジは甘く果肉が硬い品種だが、最も人気が高く、小売の90%を占めている。その他10%はオーロラ、グラニースミス、ガラ、ピンクレディー、アンブロシア、レッド&ゴールドデンデリシャスである。米国、チリ、ニュージーランドは従来品種を台湾市場に売込んでいるが、日本はトキのような希少品種を投入し、プレミアムなイメージを持って高価格で販売している。日本産の果物、主にリンゴやモモが他国産より50%-200%高く取引されるのは珍しくない。

台湾ではリンゴは寒い時期の果物と考えられているため、消費は秋から冬にかけて多い。加えて果物の消費はお祭りのシーズンに増加する。

台湾市民は太陰暦に基づくお祭りに、果物籠を友人、親戚に送る習慣がある。例えば、中国の旧正月(通常二月)、端午節(六月)、中秋節(九月)である。日本のリンゴは流通業者、消費者から高級と見なされているため、高所得者層の贈り物の主流となっている。

貿易

台湾のリンゴ輸入

	2013/14	2014/15	2015/16
輸入量(トン)	160,756	156,007	169,057
輸入額(100万ドル)	239.6	238.8	266.1
米国のシェア	31%	41%	31.87%

年産は7月→6月

台湾はリンゴの輸入市場としては成熟している。2015/16年の輸入量は169,057トン(2.66億ドル)であった。

米国は台湾のリンゴ輸入先として最大であり、31%のシェアを占めており、次いで、チリ、ニュージーランド、日本が続いている。

しかし、米国からのリンゴ輸出は2015/16年には前年を16%下回り、53,883トン(7.08億ドル)となった。

下回った理由は気象条件と裏年による生産の減少である。台湾の輸入業者は米国産リンゴを高品質でコンスタントに輸入できると評価している。2016/17年の輸出量は、ワシントン州(伝統的に米国輸出の90~95%を占める)の生産見込みが当初予想より増加したこともあり、6万トンに回復すると見込まれる。

2015年(暦年)に台湾は合計308,011

トンの果実を輸入した。この内、米国からの輸入は36%を占めている。米国から輸入される果実の上位5品

台湾の国別リンゴ輸入(上段:量(トン)、下段:金額(100万ドル))

	2013/14	2014/15	2015/16
米国	50,132(-12%)	64,264(28.9%)	53,883(-16.15%)
	65.7	79.1	70.7
チリ	62,342(50%)	46,522(-25.4%)	42,622(-8.38%)
	72.3	58.4	51.2
ニュージーランド	21,837(177.2%)	16,673(-22.8%)	30,524(83.08%)
	40	27.2	54.3
日本	16,513(24.85)	23,260(40.8%)	27,278(17.27%)
	48.8	67.7	72.1

()内は前年比

台湾の果実輸入量(暦年) 単位:トン

	2015	2014
合 計	308,011	298,703
米国	111,122	108,607
ニュージーランド	56,718	44,533
チリ	51,396	65,379
日本	28,314	21,074

目は、リンゴ(60,473トン)、ブドウ(13,565トン)、モモ(12,411トン)、オレンジ(8,200トン)、オウトウ(4,657トン)である。

輸入業者は数多い輸入先から、毎年、価格、品質その他の理由に基づいて選択することができる(ただし、中国本土は検疫上の理由から輸入できない)。一般に、米国産フジに対する販売業者の需要は強いが、輸入業者は米国の輸出業者が提示する条件が釣り合わないと、輸入先を変更することがある。輸入業者は、主要な輸入先国であっても、需要に適合しない場合や、検疫条件に適合しない場合は、柔軟に輸入先を変更するからだ。

関税

リンゴの税率は20%である。台湾税関は実際の輸入価格に税率を適応するのではなく、地域ごとの基準価格に課している。ニュージーランドに対しては FTA 協定に基づき2013年12月から関税が撤廃された。

輸入検査

輸入農産物は、「食品及び関連製品の輸入検査規則」に基づき検査される。全ての農産物は、バッチごとに検査される場合を除き、通常の場合はランダムサンプリングされて検査室に送られる。検査官は、製品名、仕様、包装をチェックし、実験室に持ち込み、感覚検査、化学検査、生物検査等を行う。検査に合格すると、市場流通が可能となる。

検疫要件

米国の植物検疫は農務省の植物防疫(PPQ)、動植物検査所(APHIS)により証明書が公布される。両機関によれば、検査は完璧で台湾への輸出用件に適合しているとのことだ。従って、米国から台湾の輸出は「米国からの輸入に関する検疫要件」に合致している。

残留農薬基準

台湾の輸入青果物は、輸入港で厚生省食品医薬品局(TFDA)からランダム検査を受ける。リンゴのように腐敗しやすい農産物は TFDA の検査が完了するまで、宣誓供述書を提出の上、自己の倉庫の移送できる。しかし、出荷は検査結果を待たなければならない。

出荷に当たりサンプル検査を受ける。検査結果が基準値を超えていれば出荷は認められず、以降の出荷にあたり検査割合を増加させる制裁が課せられる。最初に基準値違反が発見された場合(特定輸入業者による特定産物の特定生産国)はサンプル検査の割合は20%に増加し、2回目の違反の場合は全バッチ検査となる。

流通・マーケティング

リンゴを含ほとんどの生鮮果実は生で消費される。リンゴの場合は年間を通して消費される習慣ができていく。小売販売は着実に増加しているが、市場としては成熟しており、量的には今後の拡大は大きくないと見られる。また、輸入先国間での競争が激しいことから、価格は引き下げられる方向にある。ただし、唯一の例外は日本が有利な立場にある贈答用の分野であり、価格は引き続き高いと考えられる。

台湾における流通経路

伝統的な市場	43%
スーパー/ハイパーマーケット	28%
果実専門店	20%
路上の販売店	2%
オンライン/TVショッピング等	7%

台湾の消費者は利便性と生鮮さを重視している。リンゴは輸入業者-卸売業者・流通業者-一般の消費者というルートで流通する。伝統的な市場を通じた販売が主流であり、約半分を占めている。

台湾のリンゴ統計(在台湾 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	175	175	175
収穫面積(ha)	174	175	175
結果樹数(千本)	63	63	63
未結果樹数(千本)	0	0	0
果樹数合計(千本)	63	63	63
販売生産量(千トン)	1,506	1,319	1,300
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	1,506	1,319	1,300
輸入量(トン)	156,000	169,057	160,000
総供給量(トン)	157,506	170,376	161,300
国内生鮮仕向量(トン)	157,506	170,376	161,300
輸出货量(トン)	0	0	0
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	157,506	170,376	161,300

年産: 7月→6月

3 3．世界のベリー類市場

FreshPlaza 電子版（2016 年 11 月 18 日）



北欧ではベリー類のシーズンが終わりを迎えている。最後の国産品は高値で取引されたが、今後は南欧からの入荷を待っている。加えて、特にブルーベリーでは中南米から輸入が行われる。このうち、アルゼンチンでは供給に問題が生じているが、チリ、ペルーは順調のようだ。また、メキシコも好調だ。一方、米国ではイチゴで不足問題が生じている。供給量が少なく、収穫シーズン間で大きなギャップが生じている。

米国はイチゴで問題

秋イチゴは終了を迎える。北部カリフォルニアの収穫は終了した。現在サンタマリアとオクスナードからの入荷を待っている。冬イチゴの収穫はオクスナードで 11 月に始まり、12 月に量的ピークを迎える。メキシコからの輸入量は限定的で、フロリダからの入荷はここ数週間見込めない。このため、現時点ではイチゴが不足気味で、需要は供給を上回っている。カリフォルニアは冬イチゴへの転換時期に当たることから生産量が少ない。この結果、冬イチゴへの転換時期に当たり、需給でギャップが生じている。また、入荷するイチゴは軟化等の問題を抱え、奇形や頭部が白くなるなど品質上の課題があり棚持ちも良くない。

ブルーベリーとブラックベリー

ブルーベリー市場はイチゴよりはましだが、過去数年の高値は次第に下がりつつある。アルゼンチンからの輸入で価格は押し下げられている。ペルーからの輸入も少量あり、加えて、新年前にはチリからの輸入が始まる。

市場関係者によると、今年は苦悩が多い年だったという。最大の原因はアルゼンチン、チリからの輸入が少なかったことであり、加えて、カリフォルニアの生産者にとっては低価格で苦労したためである。「今年は最悪の年だった」と業者は述べている。

これに引き替え、ブラックベリーは好調である。メキシコからの輸入量が安定し、現状では供給量は豊富で価格は例年並みである。

供給量が少ないアルゼンチン

今年、アルゼンチンからの供給量は少なかった。米国の輸入業社によると、原因は南米での天候不順によるそうで、このため生産量が減少した。また、輸入業者によると生産者が新品種に切り替えているものの、こ

れらが商品として成熟するには早すぎたことも理由のようだ。

また、価格も安く、輸出業者はコストを削減するため船による輸送に変更している。輸出業者の倉庫には在庫が一杯であり、この状況は次期シーズンまで変わらないようだ。

チリ:ブルーベリーは好調

最近、チリのブルーベリー生産者は輸入規制や輸出の制約等の問題に直面していた。このため、生産者にとってブルーベリーは魅力的ではなく、栽培面積も伸び悩んでいる。しかし、今シーズン、業界は楽観している。アルゼンチンとペルーの出荷が早く終わりそうであるため、チリ産への需要が膨らみそうだからだ。中国の需要が増加していることを加味すると、生産量は20%増加する見通しだ。

一方、ラズベリーは楽観的ではない。毎年、生産量は減少しつつあり、需要も少ないことから、生産者は他の収益の大きい作物に転換している。輸出はもっぱら冷凍の形で行われている。

イチゴ栽培は良好である。予想では生産量は減少すると見られていたが、これまでのところ事実ではないようだ。米国で供給量が減少していることから、同国への輸出が増加すると見込まれる。

ペルーではラズベリー生産に投資

今年のブルーベリーは好調に推移した。有利な税制のお陰で、生産者は安定した価格が維持でき収益をあげられた。ここ数週間、チリ産が市場に出回り、ペルー産の需要は減退している。ペルーの主な栽培品種は Biloxi である。

ラズベリーの生産は増加しており、今後も増産される見込みで、栽培面積も増加している。主な輸出先はオランダ、スペインである。

コロンビアではイチゴの栽培が過去最高

近年、イチゴの生産が急速に増加している。国内の需要も増加している。しかし、供給量が増加しているため、価格は前年に比べて安い。

輸出に力を入れるメキシコ

いくつかの輸出業者はドバイをターゲットとしている。業者によるとアラブ首長国連邦への輸出は10月初旬に始まるそうだ。70%はラズベリーで、残りの大部分はブラックベリーである。輸出は欧州経由の航空機で行われるため、輸送に3日間を要する。メキシコにとってベリー類の輸出は大変に重要であり、輸出農産物の第3位を占めている。

ブラックベリー、ブルーベリー

ブラックベリーのシーズンは9月に始まる。ブラックベリーの市場は安定しているが、世界規模で需要拡大の努力が行われている。主な輸出は米国、欧州、中国である。今シーズンはエルニーニョが発生したが、強風から生産を守るため(防風施設)の投資が行われた。

ブルーベリーについては、南米諸国との競争は難しいものの、メキシコはこれら諸国が輸出できない国を含め、多くの国への輸出することが可能である。

イスラエル:高い人件費で高価格

近年、イスラエルではベリー類の生産が急速に増加し、衰えを見せていない。いくつかの地域ではベリー類の栽培に適しているが、気候条件により栽培に適していない地域でも生産が可能となるような品種の探索が進められている。生産は主に温度が低いゴラン高原で行われている。同地での収穫期は6~7月に始まる。

歴史的には、ベリー類は輸入されたものであり、現在でも相当量が輸入されている。欧州、北米が主な輸入先である。国内生産があるにもかかわらず、価格は高い。これは人件費が高いことと、一日当たりの収穫量が他の果物と比べて少ないことによる。ベリー類の中ではイチゴが消費者に人気である。イチゴは収穫期間が長く、トンネル栽培や温室で生産されている。なお、ブルーベリー、ラズベリー、マルベリー(クワ)についても増産の余地がある。

アラブ首長国連邦に照準を合わせるギリシャ

アラブ首長国連邦を輸出ターゲットとする業者は、イチゴの2品種 Fortuna、Camerosa が主力だと説明している。前者はアラブ市場に向いており外観が綺麗で11月から3・4月まで出荷が続く。後者は欧州向けで味が良く販売は12月に始まる。

スペインのイチゴの面積は安定的に推移

スペインのイチゴ栽培面積は前年(5,800ha)と同程度、又は、4～5%減少する可能性がある。ブルーベリーは栽培面積が増加しているが、商業生産には3年かかるので、生産増までは結びつかない。ラズベリー、ブラックベリーも栽培面積が増加する見込みだ。ウエルバではこれら4品目を出荷することが可能だ。

気象条件が良好であるため、今年のイチゴの収穫はクリスマス前後に始まる見込みだ。去年は夏期の高温の影響で、イチゴの収穫は12月上旬から始まった。

ベルギーでは輸入に切り替え

ここしばらくイチゴの価格は高く500g当たり5～6ユーロである。これは通常年に比べて供給量が少ないためである。オランダとベルギーでは生産量が少なく、エジプト産、スペイン産はまだ出回っていない。ベルギー市場によると、供給量の少ない理由は、温暖な気候のため収穫が早く始まったためと収量自体が少なかったためとのことである。

イチゴ

国産品は減少しており、卸売市場ではスペイン産が再度登場する見込みだ。市場関係者によると、「スペイン産は通常11月中下旬に出始める。ベルギー産の冬イチゴ Sonata、Elsanta もあるが、量は少なく価格は高い」そうだ。

今年は不思議な年で、供給量も価格も上下した。これまでの年と違って気象条件で左右された年だ、と業者は語っている。

ブルーベリー

生産者によると、国産品が全て国内市場で売れたのは初めてだそうだ。近年、生産物のいくらかは輸出されていた。このため、市場では国産は必ずしも絶対とは見なされていない。「もし安いと見なされたら、スペインやポーランドからブルーベリーを輸入するはずだが、両国から輸入がなかったことは喜ばしい」、と生産者は考えている。現在、価格はペルーやアルゼンチンからの輸入品に左右されており、量は豊富であるが品質格差は大きい。価格は125g当たり1.20～3ユーロを前後している。

ブラックベリー、ラズベリー

昨週、ブラックベリーは供給過剰であった。今週は125g当たり2.20ユーロまで回復した。ラズベリーのシーズンは終了しつつあり、スペイン、ポルトガル産に切り替わる。業者によるとポルトガル産の品質は安定しておらず、ポルトガル産は良好で供給量も安定し棚持ちも良いそうだ。

オランダ：温室イチゴは価格堅調、エジプト産が到着見込み

温室イチゴの品種 Elsanta は9月の高温により通常年より収穫が早く始まった。多くの生産者では収穫が2週間早まり、第39週(9月25日の週)にピークを迎え、その後減少している。価格が大きく上昇したため、生産者の利益は大きかった。しかし、価格は植え付け時期の早晩に応じて大きく異なった。昨週以来、オランダ、ベルギー市場では上物がキロ当たり9.00～12.00ユーロで取引さ、その他の産品も高価格で推移している。

エジプト産は今週末には出回る見込みだ。生育条件が良かったため出来も良い。近年、流通が合理化されたため品質も良好である。今年は、市場の出回りが少ない中で入荷されるため、価格も高いとみられる。

イタリアは生産を推進

ベリー類は有望である。数年前から南イタリアで協同組合がベリー類の栽培を進行している。このため、国

産品の出回り時期も拡大しており、輸入に頼る割合も減少している。これらの取組みはカラブリア、シチリア島で進められている。振興の重点はラズベリー (Vajoret) とブラックベリー (Loch Ness) に置かれている。シチリア島のブラックベリーは3月から5・6月に出荷されるが、一部はカラブリア産と重複する。

ラズベリー

2つの生産会社があわせて14ha の温室でラズベリーの生産に取り組んでいる。生産物は11月～8月まで市場に出荷される。温室栽培のラズベリー (品種 Adelita) は、特に南部で有望である。これまで、バジリカータ、カンパニア、カラブリア、シチリアの各地で試験が行われ上々の成果があった。これらはクラブ製の品種として出荷されている。露地栽培は5・6月から出荷され、施設で栽培されるものは7・8月から出荷される。

今年はテッラーナ、クカンツァーノ、ジョニーノ・ポリコーロで品種 San Rafael の温室栽培の試験が行われる。この品種は果実が大きく、日持ちが良いことが特徴である。加えて、中南部イタリアでは作物のローテーションに応じて1～3月、3～5月の2回に分けて収穫を行うことができる。

コジベリー (クコ)

カラブリアで栽培試験が行われ、コジベリーの栽培に成功した。現在、いくつかの地域で数社が生産を行っている。生鮮果実としての需要は大きく、昨シーズンは小売業者が試験販売を行い成果があった。生産者は、欧州の消費者に対し、乾燥果実としてだけではなく生鮮果実としても魅力があることをもっと宣伝すべきだと考えている。

ブルーベリー

生産者はブルーベリーの生産にもっと投資を行うべきだと考えている。というのもイタリアは有利な条件にあり、6月～7月は国産で市場を独占しているからだ。しかし、その他の期間は欧州からの輸入に頼っている。この輸入されている期間を (国産で) 有効に活用することが重要だ。国内消費は増加しており、潜在的な需要は大きい。

イチゴ

品種 Mariso はイタリア内外で様々な期待に応えられる良い品種である。市場に出回っているものの品質は良好で、価格も魅力的である。ベローナ市場では秋は魅力ある時期である。イチゴの需要は年間を通してある。秋イチゴとしては Eva や新品種の Garda などがある。秋イチゴは定植 (8月20～25日) 後の35～40日で始まり、20～25日続く。同じ品種は春 (4～5月) にも収穫できる。秋収穫では量は少ないが価格は魅力的である。

高価格のフランス

RhôneAlpes、Val de Loire 地方のイチゴ収穫シーズンは終わりに近づいている。イチゴの品種 Charlotte の価格は500g当たり5.80～6ユーロの間で推移している。ラズベリーは半分の量で収益は2倍である。価格は125gで12ユーロであるが、ルシヨン産のパックされていないラズベリーは6ユーロである。

デンマークは国産のイチゴを消費

業界によると、(過去に) 小売業者が多く生産者が経営を維持できない価格を要求したため、ベリー類市場の大部分は少数の大手企業に集約されたとのことだ。しかし、集約されなかった生産者は、供給量が少ないことから高価格を得られるため、良好な条件下にあるようだ。デンマークの消費者は国産品のために支出することをいとわない。特にイチゴはそうである。しかし、(個々の生産者の) 生産のピークはわずか3週間である。

イチゴは大部分が露地で栽培される。温室は少ないが収穫は10月まで続く。露地の生産のピークは6月から8月までである。

現在イチゴの供給は不足している。スペイン産、イタリア産の出荷が始まる前の現時点ではオランダが供給国である。イタリア産は第48週 ((11月27日の週) から始まり、スペイン産はその数週間遅れである。新年に向け需要が増加し、正月の2週前にピークを迎える。この時期の価格は夏よりも高い。第48週頃の価格は概ね2.5キロ当たり20ユーロである。

著者: Rudolf Mulderij

34. ゼスプリが「キウイ・ブラザーズ」で日本市場へ売込み

ASIAFRUIT 誌 (2016 年 11 月号)

ゼスプリは健康価値の高さが評価され売上が伸びている日本市場で、更なる販売促進活動を行う。

日本市場での販売は2015年には2300万箱(1箱3.5kg)で前年を14%上回った。

今回の販売促進では、「キウイ・ブラザーズ」というキャラクターを使い、日本の消費者に「キウイは体に良い」と宣伝している。

このデザインは日本で評価が高い「グッドデザイン賞」を受賞し、日本社会に受け入れられるとみている。

ゼスプリ・日本のマネージャー安斉一郎氏は、「今回の受賞は、キャラクターが精緻なことだけでなく、2つのキャラクター(「グリーン」と「ゴールド」)がテレビCMから店頭販売まで、一貫して活躍していることが理由と考える」と述べている。

「昨年2300万箱を日本で販売し、前年の14%増であった。今回の素晴らしいキャンペーンでこれまで世界第一位の市場であった日本で更なる販売強化を期待している」「今回の受賞は榮譽であるとともに謙虚に受け止めている」と安斉氏は語っている。



経済の低成長が続き、果実の消費が減少する日本市場だが、キウイの販売はアジア各国で伸びを見せている。

日本政府によると、キウイへの支出は、2016年8月は過去12年間平均の106円から179円に上昇した。また、家族当たり消費量は、過去12年平均の134gから、最高の217gに達した。一方、8月の果実全体の消費量は過去14年で3番目に少ない家族当たり7.10kgであった。

日本の市場は停滞しているようであるが、ゼスプリはキウイ・ブラザーズを使って販売促進を行っている。また、有名人を起用することで健康に焦点を当てた販促をより強化しようとしている。

「我々の戦略はキウイの健康効果を訴え、具体的にターゲットを定め、消費者とのコミュニケーションを図り、消費を増やすことだ」と同社は述べている。

35. ペルーの落葉果樹(生食ブドウ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年10月26日公表)

ペルーの生食ブドウ統計(在ペルー 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	29,500	30,000	30,000
収穫面積(ha)	27,000	28,000	28,000
販売生産量(トン)	435,000	490,000	500,000
非販売生産量(トン)	105,000	115,000	110,000
生産量計(トン)	540,000	605,000	610,000
輸入量(トン)	9,500	9,000	7,000
総供給量(トン)	549,500	614,000	617,000
国内生鮮仕向量(トン)	205,000	235,000	235,000
輸出量(トン)	340,000	370,000	375,000
市場隔離量(トン)	4,500	9,000	7,000
総出荷量(トン)	549,500	614,000	617,000

非販売用生産量に地酒ビスコ向けを含む 年産は1月→12月

2016/17年のペルーの生食ブドウ生産量は60.5万トンと予測され、うち37万トンが輸出される見込だ。前年に比べて12%増加すると見込んだのは、主にペルー北部で新植面積は減少するものの商業生産に達する果樹園が増加するためである。

生食ブドウは、価格が魅力的であること、輸出市場を多く持つことから、ペルーの主要な輸出作物となっている。産地はイカ県、リマ県の海岸沿いにある中央渓谷、北部沿岸地方のピウラ県、ランバエク県に集中している。2014/15年のヘクタール当たり平均収穫量は20トンで、ピウラ州では34トンに達した。ペルーの主要品種はRed Globeである。この他、Crimson seedless、Flame seedless、Sugrone、Thompson seedlessが生産されている。

ペルーが生食ブドウの生産を拡大する上で直面する課題の一つは害虫対策である。冷涼な気候の国であれば線虫等の発生は見られないが、ペルーは温暖であることから害虫が発生する。北部のピウラ県では二期作が可能であり、この場合は害虫の影響を緩和できるが、いずれにせよ、耐虫性の品種開発に努めている。

水の確保も重要な課題であり、特にイカ県では深刻である。水は深さ100メートルの井戸から汲み上げられ、各井戸で灌漑できるのは50haである。イカ州では新しい井戸の掘削を禁止しており、このため農地の拡大が制約されている。水問題を解消するため、高地にあるワンカベリカ県から水を引くインフラ整備プロジェクトが計画されている。しかし、プロジェクト実施に当たっては解決すべき経済問題、社会問題がある。加えて、ワンカベリカ県への補償を行わなくてはならない。

項目	ドル/ha
土壌改良	6,237.42
トレリス	10,296.20
防鳥設備	3,943.64
植栽	5,458.89
灌漑	5,500.00
機械	4,353.54
その他	1,789.48
合計	37,579.17

生食ブドウは生産に当たりコストがかかる作物である。初期投資にはヘクタール当たり3.8万ドルが必要であるが、この中には土地代は含まれていない。しかし、一端生産を始めると収益は大きく、ペルーの中で最も収益性の高い作物の一つである。以下の表は、ヘクタール当たりの初期投資額と、年次別の収支見積もりであり、業界の資料を踏まえ、当職が作成したものである。

ヘクタール当たりの収支見込み(品種:レッドグローブ、ペルー中部で生産すると仮定)

植栽年	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年目
収入										
輸出	23,369	30,755	46,737	46,737	46,737	46,737	46,737	46,737	46,737	46,737
国内市場出荷	693	912	1,385	1,385	1,385	1,385	1,385	1,385	1,385	1,385
戻し税	1,168	1,538	2,337	2,337	2,337	2,337	2,337	2,337	2,337	2,337
合計	25,230	33,204	50,460	50,460	50,460	50,460	50,460	50,460	50,460	50,460
支出										
生産経費	22,000	19,500	19,500	19,500	19,500	19,500	19,500	19,500	19,500	19,500
粗利益		3,230	13,704	30,960	30,960	30,960	30,960	30,960	30,960	30,960
初期投資	37,579									
単年収支バランス	-37,579	3,230	13,704	30,960	30,960	30,960	30,960	30,960	30,960	30,960
累計収支バランス	-37,579	-34,349	-20,645	10,315	41,275	72,234	103,194	134,154	165,114	227,033

消費

2016/17年のペルーの国内消費量は23.5万トンと推測される。国内市場向けは輸出向けと品質、品種において大きく異なる。国内では品種では青系の Italian が最も多く消費され、次いで Red Globe である。国内市場での価格は輸出品に比べるとかなり低い。このため、生産者としては輸出が最優先である。

貿易

ペルーの生食ブドウ輸出は、過去数カ年で大幅に増加した。1999/2000にはほとんど輸出量はなかったが、2015/16年の輸出量は34万トンと推計される。ブドウはペルーの主要な輸出農産物であり、2014/15年の輸出額は7.04億ドルで前年より9%増加した。この著しい増加は、新植が進められ栽培面積が拡大したことによる。なお、2014/15年の輸出量実績は312,063トンで、前年を18%上回った。

2014/15年の輸出実績によると、輸出先は米国が22%を占め(68,352トン)、次いでオランダが15%(46,096トン)、中国が13%(41,135トン)である。この他の輸出先は、香港、タイ、英国である。2014/15年の平均輸出価格は7%低下し、キロ当たり2.26ドルであったが、米国向けは9%上昇し3.07ドルであった。

36. カリフォルニア州はカキのシーズン

FreshPlaza 電子版 (2016 年 11 月 14 日)



「今シーズンはカキの販売が 9 月第 1 週から始まった。残された販売期間は 1 カ月であるが、消費者に供給できる量は十分ある。サイズの大きいカキ(品種は「富有」「蜂屋」)の出荷から始めたが、消費ニーズに応じて様々なサイズを用意している。消費ニーズに応じたサイズのカキを提供できるよう、摘果を行っている」と Specialty Fresh 社は語っている。

安定した価格設定

「販売価格は安定しており、価格の上下は見られない。1 層詰め箱(9~10 ポンド、4.09~4.54 キロ)を 14 ドルで販売している。需要も消費も良好であるのでもっと販売を拡大したい。そしてもっと多くの消費者にカキを知ってもらいたい。収穫は果実が樹で熟してから行う。手で収穫して手で箱詰めをする」とのことだ。

「蜂屋」は完熟した時は大変甘く、果肉が柔らかい。しかし、熟する前に食べたなら、渋くて痛みすら感じ、顔を顰めるだろう。しかし、熟してから食べると、果汁がほとばしる。

「富有」は「蜂屋」より前に熟する。そして果肉が固い状態でも甘いので、何やらリンゴと似ている。加えて葉と種を除いて全て食べることができる。

毎週変化する販売環境

一方、Coosemans-Denver 社に話を聞くと、「カリフォルニア州はカキの生産にとって大変良い。しかし、生育環境が毎週変化するので、価格も変動する。天候と供給状態によって価格は毎週変化し、時には日ごとに変動する」そうだ。

「現在はカリフォルニア産の「富有」を貯蔵しているが、他の時期には Sharon Fruit (イスラエル産の富有)を貯蔵する。「蜂屋」は特別な注文に応じて出荷している」とのことだ。



著者: Pieter Boekhout

37. 2016/17年産の米国のカンキツ生産見通し

米国農務省統計局 (2016年11月9日公表)

フロリダ州のオレンジ生産見込みは7200万箱(293.9万トン)

フロリダ州の生産量予測は293.9万トンで、前回の10月予測から8.1万トン上回った。今回の数値は前年を12%下回るもので、1963/64年の238万トン以来最低となる。オレンジの内訳は非バレンシアオレンジ(早生、中生、ネーブル)が147万トン、バレンシアオレンジが147万トンである。減少傾向は2006/07年産から2015/16年産まで継続している。この10年間で11月予測と最終確定値の乖離は平均で7%である。この内、最終値が上回った年は8年で、下回った年は2年であった。最も上回った年は最終値が11月予測の19%増で、最も下回った年は9%減であった。

なお、特に断らない限り、本報告では「平均」「最高」「最低」は過去10年間のことを示す。

フロリダ州の非バレンシアの生産量は3600万箱(147万トン)

フロリダ州の非バレンシアオレンジの生産量予測は、前回は8.2万トン(ラウンドの関係で上記数字と一致しない)上回る147万トンである。現在果実のサイズは最低を下回っており、このままだと最終的に下回るとみられる。落果率は最高よりも低く、収穫期まで続くと考えられる。非バレンシアのうちネーブルは前回予測と変わらず4.1万トンで、果実サイズは平均を下回り、落果率は最高を上回っている。

フロリダ州のバレンシアオレンジは3600万箱(147万トン)

バレンシアオレンジの生産量予測は前回予測と同じ147万トンである。現在果実サイズは平均を下回り、収穫期も同様と見込まれる。落果率は最高に近く、収穫期には最高を下回る程度の見込だ。

フロリダ州のグレープフルーツは総計960万箱(37万トン)

フロリダ種のグレープフルーツの生産量予測は前回と同じ37万トンである。白色種、赤色種とも前回と変動はなく、それぞれ8.1万トン、28.9万トンの予測である。白色種では果実サイズは平均を下回り、落果率は平均を上回っており、赤色種では最終的にサイズは最低をやや上回り、落果率は平均を上回る見込だ。

フロリダ州のタンゼリン等は155万箱(6.7万トン)

フロリダ州のタンゼリン等(タンゼロを含む)の生産予測は、前回は0.4万トン下回る6.7万トンである。早生種(Fallglo, Sunburst)は2.5万トンで、Fallgloが0.8万トン、Sunburstが1.7万トンである。Fallgloは収穫が進行中で果実サイズは最低に近く、落果率も最高に近い38%に達する見込だ。Sunburstの果実サイズは最低に近く、最終的にも最低水準の見込で、落果率は平均を上回る28%の見込だ。品種ロイヤルは0.9万トンで、品種ハニーは前回より幾分下回る1.8万トンの予測だ。ハニーの現在の果実サイズは最低を下回っているが、最終的には最低をやや上回る見込だ。落果率は平均を上回る40%である。

タンゼロの生産量予測は前回と同じ1.4万トンで、果実サイズは平均を下回り、1箱(90ポンド、40.8キロ)当たり301個入る状況である。落果率は平均を上回り19%である。

オレンジ冷凍濃縮果汁の製造率は1箱(90ポンド、40.8キロ)当たり1.47ガロン(5.56ℓ)

オレンジ冷凍濃縮果汁の製造率は1箱当たり5.56ℓで、前回の予測値である1.48ガロン(5.60ℓ)より1%下回った(ブリックス42°濃縮)。なお、前年の最終製造率は、フロリダ州カンキツ局によると1箱当たり1.4055ガロン(5.32ℓ)であった。果汁生産見込は1月に公表される。

熟度(品質)

定められた方法によりフロリダ州の産地から果実を集め分析を行った。酸度は赤色グレープフルーツを除き昨年より高く、糖度は白色グレープフルーツを除き低かった。糖酸比は何れの品目でも低かった。1箱あたりの搾汁量は何れのオレンジでも昨年を下回ったが、グレープフルーツでは上回った。1箱あたりの糖含量は

白色グレープフルーツを除き昨年を下回った。

米国のカンキツ生産予測－米国農務省統計局 2016 年 11 月 9 日公表－単位:千トン

	生産量		2016/17 生産予測	
	2014/15	2015/16	10 月予測	11 月予測
ネーブル等非バレンシア				
フロリダ	1,935	1,474	1,388	1,470
カリフォルニア	1,415	1,651	1,524	1,524
テキサス	45	52	39	39
全米合計	3,395	3,177	2,951	3,032
バレンシアオレンジ				
フロリダ	2,023	1,857	1,470	1,470
カリフォルニア	334	316	308	308
テキサス	11	13	13	13
全米合計	2,368	2,186	1,792	1,792
オレンジ合計				
フロリダ	3,958	3,331	2,858	2,939
カリフォルニア	1,749	1,967	1,833	1,833
テキサス	56	65	52	52
全米合計	5,763	5,363	4,742	4,824
グレープフルーツ				
フロリダ計	497	416	370	370
白色種	125	96	81	81
赤色種	372	320	289	289
カリフォルニア	174	138	145	145
テキサス	154	174	171	171
全米合計	826	728	686	686
レモン				
カリフォルニア	748	744	762	762
アリゾナ	73	64	65	65
全米合計	820	807	827	827
タンゼロ				
フロリダ	27	16	NA	NA
タンゼリン等				
フロリダ計	98	61	71	67
早生種	62	34	29	25
ロイヤル	NA	NA	9	9
ハニー	35	27	19	18
タンゼロ	NA	NA	14	14
カリフォルニア	679	787	835	835
アリゾナ	6	NA	NA	NA
全米合計	880	909	977	968

注) 公表数字は箱で示されているが、トンに換算した。

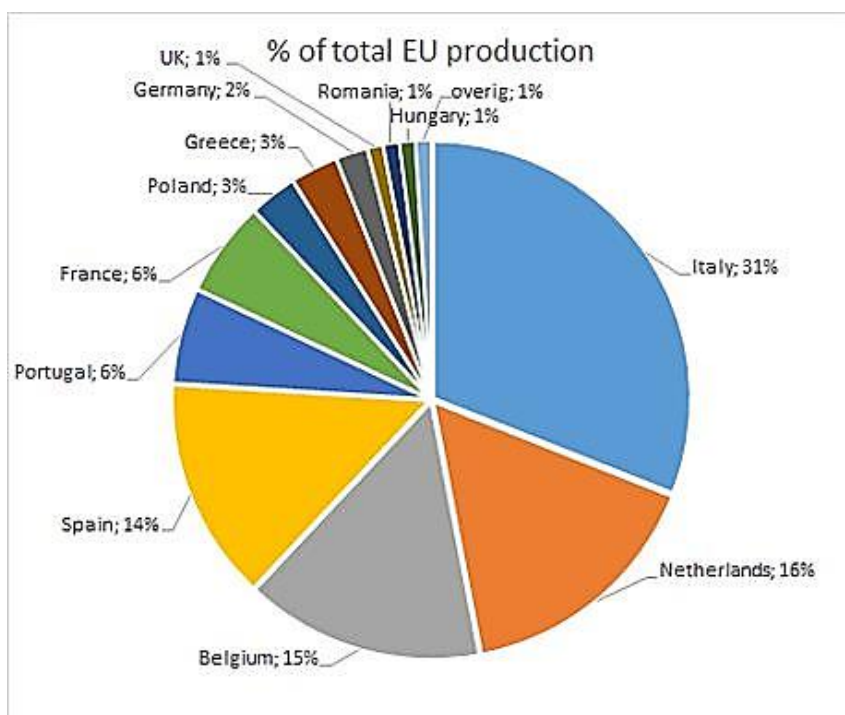
38. 世界のナシ市場

FreshPlaza 電子版 (2016 年 11 月 11 日)



EU は中国に次ぐ生産地域で、2016/17年の生産量は230万トン前年を8%下回ると見込まれている。オランダを除きイタリア、ベルギー、スペイン等の主要生産国は二桁%前年を下回ると予測されている。EU で

生産される品種の40%はConferenceで、主にオランダ、ベルギーで生産されており、スペインでも一部生産されている。その他の品種はAbate Fetel、William Bon Crétien/Bartlett、Rochaである。ロシアの輸入禁止措置による影響は、2014年よりも小さくなっているようだ。2014年には6万トンが市場隔離されたが、今年は米国農務省によると0.55万トンと推測されている。



イタリアはEUを市場のリード役

イタリアはEUの中の最大の生産国で、生産見込量は67.8万トンと2015/16年より11%減少し、過去3カ年平均よりも9%減少する見込だ。主産地は北部エミリ

ア・ロマーニャ地方で、生産量は448,396トンと前年13%下回る見込だ。ヴェネト州の生産量は77,531トンで前年を10%下回る見込だ。生産量の減少は全ての品種で認められる。イタリアでは品種 Abate Fetel の栽培が最も多いが、同品種は収益性の高い核果類に転換されつつある。

近年、イタリアではナシの需要が24%増加し、今年の上半期だけで7%増加した。イタリア産ナシにとって国内市場が最も重要であり、販売促進活動も行われている。

毎年、10万トン強が輸入されているが、輸入量は減少傾向にある。昨年の輸入量は2014年に比べると11%減少した。2016年第1四半期では南半球からの輸入が5%減少した。一方、EU 域内からの輸入は若干増加している。輸入先はスペイン、オランダ、フランス、ポルトガルである。スペイン、フランス産の早生種が7月から9月まで出回り、次いで、オランダ、スペイン産の Conference、さらにポルトガル産の Rocha と続く。

輸出は90%が EU 域内でその次はスイスだ。最近、新たに、リビア、イスラエル、サウジアラビア向けの輸出が行われている。

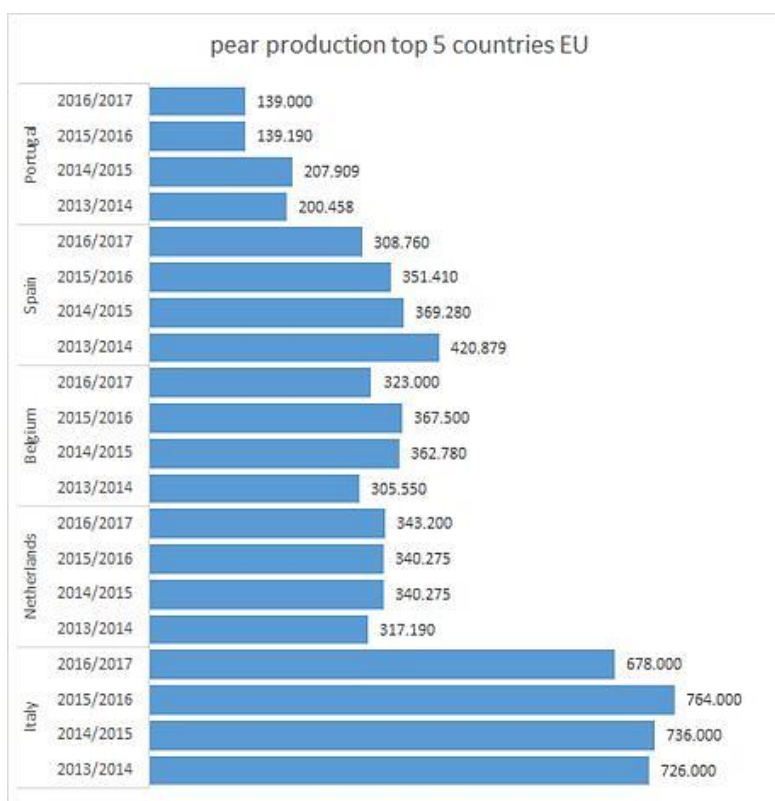
ベルギーの減収で利益を得るオランダ

オランダは生産量が若干増加し、34.3万トンと予測される。これは過去3カ年平均の3%増に相当する。オランダでは栽培面積は多いが、単位面積当たりの収量は低いのが特徴である。今シーズン、業者は楽観的である。リンゴと似たような市場情勢にあり、英国、ドイツ、その他新興市場向けの輸出は好調である。小さいサイズの価格が昨年よりも価格は高い。ここ数週間、市場では昨年より需要が強いが、糖度の高さも原因となっているようだ。オランダ産の好調は、ベルギー産が雹害を受けたことも大きな要因だ。

雹害を被ったベルギー

ベルギーの生産量は前年より10%減、過去3カ年平均より6%減少する見込みだ。開花期と生育期の低温と湿潤な気候の影響である。また、6月下旬に雹害があり、多くの果樹園が被害を受けた。

シーズン当初は、リンゴよりはましであったが価格は安く推移したが、現在、価格は安定している。この先3カ年、ベルギーとオランダは、ドイツ市場で Conference の販売促進活動を行う計画である。この活動には EU も支援している。ドイツでは Abate Fetel が最も人気がある品種だが、Conference の売り込みを図ろうとするものである。リンゴは品種が多く選択の幅が広いが、ナシは品種が品種の選択肢が少ない。ドイツでは、ナシは高齢者による消費が多いが、活動では若年層や家庭への販売に焦点を当てている。



ドイツへの販売促進活動は、ロシアの輸入禁止措置の代替であるというわけではないようだ。しかし、これまでの経験で、特定の国だけを対象とするのではなく、複数の国への販売促進が有効であり、ドイツはその一つということだ。なお、保守的なドイツ市場で成果を上げるには時間がかかることを覚悟しなければならない。

品種 Rocha が回復したポルトガル

ポルトガルは2015年の不作から回復したが、生産量はまだ通常年のレベルまでは達していない。30%収量が少なかった昨年に比べると15%の増加である。ポルトガルの主要品種である Rocha は毎年2万トン程度の生産量がある。ナシ全体では多くが国内市場向けであるが、一部は英国、中東、アフリカ、ブラジルに輸出

されている。

生産量が大きく減少したスペイン

スペインは記録的減収(308,760トン)で前年を42,650トン、過去3カ年平均を19%下回った。カタルーニャ、アラゴンにおける春先の天候不順で開花及び着果が不良であったためである。加えて先月には雹害に見舞われた。今年は全ての品種で減収したが、今後数年、栽培面積の減少傾向は続くと思われる。ナシの生産者は収益性の高い核果類に転換をしつつあるからだ。

フランスでは生育は様々

フランス政府は今年の生産量は2015年を7%下回る13万トンと予測している。9月は暑かったので消費が減少すると見ていたが、生産量の減少で価格は安定して推移した。アルプ・コートダジュールでは夏の暑さで生産量が減少した。一方、ラングドックルシオンでは霜害と豪雨のため9%の減収であった。ペイ・ド・ラ・ロワールでは収穫が1週間遅れた。栽培面積については、特に Williams(品種)で減少している。アキテーヌの Comice(品種)は4%増加し、セントレでは凍害と春先の洪水で3%生産量が減少した。

今シーズンは遅れて始まった。8月には需要が増加して、早生品種の Guyots は前年よりも30%、例年よりも22%高い価格であった。好調な価格は堅調な需要と生産量の減少によるものである。9月の高温で、ナシは夏果実と競合することになったが、Williams の生産量が少なかったため価格は例年より22%高かった。その後、秋に入ってから価格も安定しており、例年より3%高い状況である。

新植に投資を進めるロシア

ロシアではナシは人気がある果物であり、年間を通して消費される。消費のピークは早春で、この時期は南半球から輸入される Vermont、Packham が主体だ。

政府が EU 等を対象に輸入禁止措置を講じる前は、オランダとベルギーが一番の輸入先であったが、現在は、1月から4月まではセルビアから、4月から9月までは南アフリカ、アルゼンチン、チリから輸入されている。

春の霜害にもかかわらず、セルビアでは生産に影響はなかった。価格は昨年と同程度である。ロシアでは緑系の品種に人気がある。

輸入禁止措置を講じて以来、ロシアではナシの植栽に対して投資を行っている。こうした投資、栽培面積の拡大にも拘わらず、生産量は国内需要をまかなうには十分ではない。

満足のイスラエル

収穫は上々であり平年並であった。シーズン初めは天候不順で減収が懸念されたが、不安は解消され、生産量は4万トンと見込まれる。イスラエルでは生産量は全量国内市場に向けられる。ナシの多くは貯蔵され、年間を通して販売される。生産はゴラン高原、ガラリア地方に80%が集中している。冬は異常な乾燥で、降雨量が例年の60%以下であった。春には熱波に遭遇したため、収穫量の減少が懸念され、早春は高価格で推移した。現在では価格は安定しており、キロ当たり平均2.4ユーロである。なお、価格の幅としては1.5～2.5ユーロで販売されている。なお、少量であるが輸入も行われている。人気の品種は Spadona、Cosia であるが、Canadian Harrow も登場している。

冬の販売に備える米国

米国北西部のナシ生産量は1800万箱で前年と同程度とのことだ。収穫は既に終わり、現在は貯蔵され、冬期の販売に備えているところだ。この時期の品種としては D'Anjou が重要だ。業者は今後の販売に期待を寄せており、春から初夏にかけての販売活動を計画している。特に休暇時期(クリスマス等)にピークを迎える需要に応える販売促進活動は重要だ。販売側も消費者に認識してもらうよう、レシピの提供、熟成の仕方などの情報提供が不可欠だ。

ナシは季節ごとの需要に特色がある。夏ナシ(早生種)が終わり、冬ナシ(晩生種)が出回る中で、D'Anjou、Bosc、その他の赤ナシへの需要が強い。

ブラジルのナシ栽培は高コスト

天候不順のため、ナシの生産量は前年を21%下回る1.5万トンに減少した。ブラジルではナシの生産が少なく輸入に頼っている。主な産地はリオ・グランデ・ド・ソル、サンタカタリナ、パラナ、サンパウロ、ミナスジェライスであるが、国内で生産されるナシは地元の特に小規模都市で販売されている。ナシの栽培は、他の作物に比べるとコストが高くつくことから、新規生産者が生まれにくい構造である。輸入量は、昨年の208,346トンから14%減少し、179,306トンであった。輸入先は主に米国である。

輸出先として重要なインド

ナシの輸出市場としてのインドは重要である。主な輸出国は中国、ベルギー、イタリア、南アフリカ、米国である。業者によると南アフリカ及びオーストラリア産は品質がよいそうだ。中国産は品質問題を抱えているが、年間を通して輸出できることからインドへの最大の輸出国となっている。中国産の品種は Ya、Shandong、Nashi 等である。ある輸入業者によると、「毎週3〜4コンテナを輸入しているが、価格は安定している。最大の課題は輸送中の温度管理であり、しばしば過熟状態で到着する」そうだ。

著者:Rudolf Mulderij

39. イスラエルから米国へのカキ輸出

FreshPlaza 電子版 (2016 年 11 月 3 日)



「今シーズン最初のカキ輸入船が航行中だ」と MOR USA 社は語っている。イスラエルを出港した船は11月14日にニュージャージー州のニューアーク港に到着し、18日には店頭に並ぶ予定だ。

11月中旬から3月まで

イスラエルから輸入されるカキは11月中旬から3月末まで販売される。通常、MOR USA 社はシーズン中に80～120コンテナを輸入している。「去年は天候不順のためほとんど入荷しなかったが、今年は120コンテナを輸入できるだろう」とのことだ。

「まだ入荷していないが、今年のカキの品質は大変良いそうだ。手に取るまでは

何とも言えないが、親会社の MOR インターナショナルは米国のニーズを十分承知しているので安心して」と述べている。MOR USA 社は2000年からカキの輸入を始めたそうだ。

MOR は世界中にカキを販売している。「これまでイスラエルから欧州に輸出してきた。しかし、欧州は以前ほど強力な市場ではない。スペイン産が市場に入り込んでいるからだ」そうだ。この結果、米国市場にはより多くの輸出できる。カキは米国では特殊な果物で、海外から(移民として)やってきた人には人気があるが、一般的な米国人には知られていない。消費者への教育と、販売店でのサンプルの提供をしなければ主流の果物に押し上げられない。

糖度21度

イスラエルから輸入されるカキは従来からの品種 Triumph である。大変甘く、糖度は21～22度だ。MOR USA 社は北米の小売会社に2種類のパッケージで販売している。一つは2.2キロの平積み箱で、個々の果実にステッカーを貼っている。もう一つは2ポンド(900g)の取手がついたバスケットで、9つのバスケットを1パックとしている。両方とも高級店を含め大量流通に乗せている。取扱っている小売チェーンは、Wegmans、Meijer、Harris Teeter、H Mart と東洋系ストアとのことだ。



著者:Pieter Boekhout

40. リンゴとナシの新品種が今年の販売を開始（ベルギー）

FreshPlaza 電子版（2016 年 11 月 7 日）

ベルギーのシント-トロイデン市にあるベルギー・フルーツ・オークション（BFV）社が、新品種 Jona+、Redlove、Joly Red（以上リンゴ）、Sweet Sensation（ナシ）の今シーズンの販売をスタートした。

Jona+



Jona+はジョナゴールドの突然変異優良3品種の総称である。外観が明るい赤色で、集中的に管理・選別され、厳格な品質要求を満たし、綺麗に包装されており、需要が増加することは確実のようである。Jona+は優れた品質、栽培中の厳格なモニタリング、収穫、貯蔵の集中管理などにより（ロイヤリティーを取らないとはいえ）クラブ制品種の要件を満たしている。

パッケージにも気を遣い、QR コードをつけ、消費者が情報を得られるようにしている（www.jonaplus.be）。果実個々にステッカーが貼ってあるので Jona+を識別できる。こういった方式により、外観、フレーバー等が均一な果実を提供できる。消費者には高品質果実の提供、生産者には利益を還元するシステムで、将来にわ

たり両者に利益をもたらすことになるだろう。

Sweet Sensation

味が良くジューシーで、紅がかった果皮のナシ Sweet Sensation の販売が開始された。

11月30日に開催される国際消費者コンペではこのナシが対象になるそうだ。個々の果実にステッカーが貼ってあり、ウェブサイト www.sweetsensation.eu/win から情報を入手できる。また、コード番号も添付され、ヨーロッパの特定都市の商店街でコード番号を入力すると特典がある。



Redlove

BFV 社自慢の品種で、果皮も果肉も赤い。最近スイスで開発された品種で、同社傘下の農園で13,000本が栽培されており、生産量は25トンの能力があるが、今シーズンの収穫量は推定5トンである。BFV 社は、この品種が料理業界や関連産業に革新をもたらすと見ており、特別に注目をしている。Redlove は豊かな香りと



甘酸が調和したフレーバーを特徴としている。また、様々な用途にも用いることができ、前菜、メインディッシュ、デザートにも適している。果皮から果肉まで明るい赤で、紅葉の時期や冬には装飾的な要素を提供できる。この鮮やかな赤色のお陰で、前菜のドリンクやジュースにも適している。

このため、料理に向けたこのリンゴがトップを虜にするのは間違いないと確信している。加えて100g当たり50～100mgのアントシアニンが含まれており、他の品種より10～15倍多い。アントシアニンは抗炎症・抗酸化作用を持っている。レシピは www.redlove-apple.be で紹介している。

Joly Red

かなり大きくルビー色の果皮を持った甘い品種である。このリンゴは、当初、甘さが好きな地中海諸国やアジア向けに育成された。しかし、ベルギーで行ったプロモーションで、同国でも歓迎されることがわかった。甘酸が調和したジョナゴールド等が好まれる地域でもこの品種が受け入れられるようだ。このため、ヨーロッパでも販売を進めたい。



Jona+は最適な果皮色と硬度6.5kg/cm²で収穫することとしており、加えて今年から糖度13.5度以上とした。そして、均一性と果皮に傷がないように細心の注意を払っている。

Sweet Sensation は果皮が鮮やかな赤で傷がないことに注意を払っている。硬度は5.0kg/cm²とし、糖度は13.5度としている。この基準は、この甘いナシにとってそれほど難しいものではなさそうだ。

Redlove は問題なく硬度6.5kg/cm²と糖度14度を満たしてくれる。収量の多さと品質のよさで、BFV 社のリンゴ部門の柱になるだろう。

Joly Redは貯蔵性が良く、硬度も7kg/cm²で糖度は平均14度ある。この品種は高い水準を求められており、植栽から販売まで管理されることでクラブ制リンゴとして市場に出回ることになるだろう。

ニュースソース: www.bfv.be

4 1. トルコの落葉果樹(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016 年 11 月 3 日公表)

＜生産＞

トルコでは多くの品種が栽培されているが商業生産向けの品種は多くなく、落葉果樹は一般に小規模農家が担っている。しかし、近年大規模果樹園が設立され、商業用の品種を作付けしている。これらは品質も良く近代的な手法により生産されている。これら大規模果樹園では輸出需要に応じた新品種を生産している。

リンゴ

2016年のリンゴ生産量は270万トンに増加すると見込まれる。トルコはヨーロッパ圏内ではポーランドに次ぐ大生産国である。トルコは地形の変化に富んでいるため460品種が17万 ha の面積に栽培されているが、商業的に流通しているのは10品種である。



リンゴは各地で栽培されているが、商業流通されるリンゴの約50%は3つの地域で生産されている。イスパルタ、カラマン、ニーデで、これらは中部アナトリアと北部地中海地域の南部にある。最も単収が多いのはイスパルタ地域で1本当たり130キロの収量が記録されている。この他、アンタルヤ、エレーリ、デニズリ、ヤロヴァ、チャナッカレ、アマスヤでも生産されている。Amasya（写真）は最も人気のある在来品種で、生産量の10%を占めている。

栽培面積は増加していないが、従来型の樹木(高木)から近代的な矮性樹への転換が進んでいる。矮性樹は密植栽培が可能で収量が多いからだ。

また、現在ではほぼ半分が近代的な品種に置き換わっている。また、輸出の可能性が高い新品種も増加している。トルコで栽培されているリンゴの概ね半分がレッドデリシャスで、1/3がゴールドデリシャス、次いでAmasya である。グラニースミス、フジ、ガラ、ジョナゴールド、ブレイバーンも増加している。有機栽培の割合は3%である。

ブドウ

ブドウも多くの地域で栽培されており、商業的作物である。種無しブドウはエーゲ海地方(西トルコ)で生産され、マルマラ地方(トルコ北東部)ではブドウ酒用と生鮮用が生産されている。早生品種は地中海地方(トルコ南部)で生産されている。収穫は5月初旬から始まり10月まで続く。

2016年の生産量は、前年に受けた霜害から回復し、通常レベルの220万トンと見込まれる。

ナシ

トルコでは様々な品種が栽培され、年間を通して収穫される。2016年の生産量は40万トンと見込まれる。このうち50%はマルマラ地方で生産され、次いでエーゲ海地方、北部地中海地方であり、産地はブルサ、ヤロヴァ、アンタルヤ、アンカラ、コンヤ、ブルドゥルに集中している。

品種は、在来種、道入種ともに栽培されているが主な品種は、Santa Maria、Akca (写真)、Mustafabey、Cassia、Williams、Ankara、Deveci である。



<消費>

リンゴ

リンゴは入手しやすく、伝統的な食べ方があり、様々な品種があることから最も人気がある果実の一つだ。90%は生食で消費され、加工(ジュース、缶詰、ビネガー、乾燥果実)向けは5%、5%が輸出用である。一人当たり消費量は30キロであり、EUの20.6キロ、世界平均の8.2キロに比べて大変多い。

消費者はあまり品種に頓着しておらず、色(赤、黄、緑)と味で識別している。トルコでは赤系が好まれ、43%が赤系である。消費者は甘くて香りの良いものを好むことから、ガラ、フジは食味試験で好まれる品種である。

Amasyaは在来種で最も重要な品種であり、市場の需要も拡大している。レッドデリシャスは収穫初期に好まれる品種であり、年が明けるとゴールドデリシャスが人気となる。レッドデリシャスは冷蔵庫がなければ収穫数ヶ月後に果肉が軟化するからだ。CA貯蔵庫があれば、年間を通して市場流通が可能である。現在冷蔵貯蔵の能力は100万トンであり、約半数(45万トン)がイスパルタに置かれている。

ブドウ

一人当たりの消費量は35キロで、多く消費される果実の一つである。生食ブドウは季節性の作物で、夏から秋にかけて消費される。ブドウはパッケージに入れない方式で販売されているが、スーパーやハイパーマーケットではパッケージ詰で販売されている。

業界筋によると53%が生鮮果実として消費され、36%が干しブドウ(主に輸出されている種無しの sultanas 種を含む)、11%が加工(糖蜜、ワイン生産用(最近増加している)、ラキ(地元の蒸留酒)、ジュース、ビネガー)に向けられる。生食に向けられる53%の内訳は、41%が種ありで12%が種無しである。

ナシ

90%が生食として消費される。3~5%が輸出され、3%が缶詰用である。一人当たり消費量は5キロである。主要な品種は Santa Maria(生産量の30%)、Deveci(同20%)(写真)、Ankara(同10%)、Williams(同10%)、Keiffer(同5%)、Akca(同5%)である。近年 Santa Maria、Deveci、Williams が冷蔵貯蔵され、3月まで出荷されている。



<貿易>

トルコは落葉果樹の生産大国でありながら、生産量に比べて輸出量が少なかった。この理由は輸出市場で受け入れられる新品种の割合が少ないことである。また、近隣のシリア、イラクの混乱の影響も受けている。

2015年にロシア機がトルコ領内で撃墜されたことから、その制裁措置としてロシアはトルコに対して食料品の輸入を禁止している。2015年11月30日に課された禁止農産物は、オレンジ、タンゼリン、アンズ、モモ、プラム、家禽、七面鳥、トマト、タマネギ、キュウリ、キャベツ、ブドウ、リンゴ、ナシ、イチゴ、塩である。これまでロシアは生鮮果実の最大の輸出先であったため、大きな影響を受けた。しかし、輸入禁止措置は徐々に解除されつつある。2016年10月9日には、カンキツ、アンズ、モモが解除された。現在はリンゴの輸出再開を待っているところである。

リンゴ

90%以上が国内で消費され、輸出量は少ない。これは輸出向けの品種の生産量が少ないためである。

2015年には輸出量は前年を15%下回る109,273トンであった。これはロシアの輸入禁止措置の影響が大きい。同年の輸出先は多い順にイラク、シリア、エジプトであり、3カ国で83%を締めている。ロシア向け輸出は大幅に減少したが、その代替市場として中東(ヨルダン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦)、ジョージア、インド、トルクメニスタン等へ輸出が行われた。2016/17年の輸出量は12.1万トンと見られる。

輸入は2015年には1,305トンに落ち込んだが、米国からの輸入割合は増加している。一方でチリからの輸入は大きく減少した。2016/17年の輸入量はさらに減少し、1,200トンと見込まれる。

ブドウ

2015年の輸出先は、ロシア、ドイツ、ベラルーシ、サウジアラビアの順である。ロシアによる輸入禁止措置は輸出シーズンが終了した後だったため、この年の影響はなかった。2016年の輸出先は多い順にベラルーシ、ウクライナ、ジョージア、カザフスタンである。輸出先が示すように、これらに輸出された後に原産国名を変更し、ロシアに再輸出されていることが示唆される。

年によるが、輸出されるブドウの85～95%は種無しである。2016年の輸出量は25万トンに増加すると見込まれる。輸入量は国内生産が多いため750トンに減少すると見られる。輸入先は多い順に、チリ、イラン、南アフリカ。ペルーである。

ナシ

2015年の輸出量は50%増加し24,200トンであった。2016年は国内生産量の増加から25,000トンに増えると見込まれる。2015年の輸出先は多い順にイラク、ロシア、サウジアラビア、トルクメニスタンであった。

輸入はほとんどなく、減少傾向にある。

トルコのリンゴ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	170,000	170,000	175,000
収穫面積(ha)	170,000	170,000	170,000
結果樹数(千本)	45,000	50,000	55,000
未結果樹数(千本)	12,000	15,000	15,000
果樹数合計(千本)	57,000	65,000	70,000
販売生産量(千トン)	2,109,000	2,540,000	2,550,000
非販売生産量(トン)	180,000	200,000	150,000
生産量計(トン)	2,289,000	2,740,000	2,700,000
輸入量(トン)	2,335	1,300	1,200
総供給量(トン)	2,291,335	2,741,300	2,701,200
国内生鮮仕向量(トン)	2,063,745	2,532,300	2,470,000
輸出量(トン)	127,590	109,000	121,200
加工仕向量(トン)	100,000	100,000	110,000
総出荷量(トン)	2,291,335	2,741,300	2,701,200

年産: 7月→6月

トルコの生食ブドウ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	295,000	295,000	300,000
収穫面積(ha)	295,000	295,000	300,000
販売生産量(トン)	2,200,000	1,885,000	2,200,000
非販売生産量(トン)	150,000	120,000	150,000
生産量計(トン)	2,350,000	2,005,000	2,350,000
輸入量(トン)	1,075	844	750
総供給量(トン)	2,351,075	2,005,844	2,350,750
国内生鮮仕向量(トン)	2,103,071	1,828,947	2,100,750
輸出量(トン)	248,004	176,897	250,000
総出荷量(トン)	2,351,075	2,005,844	2,350,750

年産: 6月→5月

トルコのナシ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	220,000	220,000	230,000
収穫面積(ha)	220,000	220,000	230,000
結果樹数(千本)	15,000	15,000	20,000
未結果樹数(千本)	20,000	20,000	20,000
果樹数合計(千本)	35,000	35,000	40,000
販売生産量(千トン)	290,000	395,000	400,000
非販売生産量(トン)	15,000	20,000	20,000
生産量計(トン)	305,000	305,000	420,000
輸入量(トン)	160	51	50
総供給量(トン)	305,160	415,051	420,050
国内生鮮仕向量(トン)	282,116	380,851	385,050
輸出量(トン)	16,044	24,200	25,000
加工仕向量(トン)	7,000	10,000	10,000
総出荷量(トン)	305,160	415,051	420,050

年産: 7月→6月

4 2．韓国の落葉果樹(ナシ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016 年 11 月 7 日公表)

栽培面積

韓国のナシ栽培面積は、2000年の26,000ha をピークに減少しており、今後も減少すると見られる。2016/17年(7月→6月)の栽培面積は前年より更に14%減少し10,883ha と予測される。面積の減少は主産地である全羅南道、京畿道、忠清南道で見られる。以下は過去 3 カ年の栽培面積の推移である。

道別栽培面積の推移(単位:ヘクタール)

	2013/14	2014/15	2015/16
全羅南道	3,602	3,457	3,499
京畿道	2,703	2,577	2,426
忠清南道	2,382	2,389	2,334
慶尚北道	1,748	1,536	1,422
その他	3,305	3,168	2,983
合 計	13,740	13,127	12,664

韓国統計

栽培面積減少は主に2つの要因であり、一つは都市化の進に伴い農地が工業団地に転換していること、一つは農村地域の高齢化である。

South Korea



2015/16年には韓国の主産地である忠清南道のアサンで急速な栽培面積の減少が見られ、京畿道の平沢市で工業団地の建設により農地が失われた。加えて、気候変動を理由にナシの生産者がブルーベリーやキウイなどに転換を進めたことも減少の要因である。

高齢化が進んでいることもナシ生産にとって深刻な問題である。高齢農家の中にはナシ生産を中止するものがある。ナシ生産は袋がけをしなければならず、労働力が必要なため、他の生産が容易な作物に転換しているからだ。加えて、ナシに対する需要が減退していることも栽培面積の減少に拍車をかけている。

韓国の農村地域の高齢化

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
農家人口(千人)	3,304	3,274	3,187	3,117	3,063	2,962	2,912	2,847	2,752
65歳以上の割合(%)	30.8	32.1	33.3	34.2	31.8	33.7	35.6	37.3	39.1

生産量

2016/17年の生産量は、栽培面積の減少と夏期の天候不順から、前年を5%下回る24.8万トンと予測される。2016年はじめは、韓国の業界は開花数が多いことと春先の好天候から生産量が増加すると見込んでいた。しかし、夏期の熱波と干ばつにより生産量は減少することとなった。

ナシに対する需要が減少しているため生産量の減少は当然とも言える。2007/08年にナシの生産量は最高記録である47.1万トンに達したが、その後は減少を続け、2015/16年には26.1万トンに落ち込んだ。韓国で生産される品種は大部分が Singo である。Singo は果実が大きく貯蔵性も他の品種より優れていることが理由である。大きい果実は韓国の祝祭日の贈答用として人気があるが、その他の場面での人気は減退している。加えて、他の果実が消費者の手に入るようになってからナシの人気は衰えている。韓国が結んだ自

由貿易協定(2004年のチリとの協定等)により、年間を通して様々な果実が選択できるようになっているからだ。

韓国の品種別ナシ栽培面積(ha)

	Singo	Wonhwang	その他	合計
2007	18,022	1,215	3,326	22,563
2011	12,445	907	1,729	15,081
2012	11,866	855	1,632	14,353
2013	11,396	819	1,525	13,740
2014	10,891	776	1,460	13,127
2015	10,544	732	1,388	12,664

消費

2016/17年のナシの国内消費量は、前年の226,438トンから3%減少し、219,000トンと見込まれる。これは、生産量の減少、特に Singo に対する需要の減退、他の輸入果実の需要増によるものである。その他の要因としては、次第に食生活が洋風に変化していることが挙げられる。

一人当たりのナシ消費量は、2000年から2005年まで、6.7キロから8.7キロに上昇したが、その後は減少し、2015年には4.7キロとなっている。一方、輸入果実を含む「その他」果実の消費はこの間9.8キロから23キロと大幅に増加している。

韓国の一人当たり果実消費量(キロ)

	果実合計	ナシ	リンゴ	ブドウ	カンキツ	カキ	モモ	その他
2005	62.7	8.7	7.5	8.2	13.1	4.8	4.6	13.2
2010	62.4	5.8	9.3	6.9	12.5	3.6	2.8	21.5
2011	62.4	5.5	7.6	6.3	13.6	3.3	3.7	22.4
2012	61.8	3.1	7.9	6.6	13.8	3.3	4	23.1
2013	63.2	5.2	9.8	6.3	13.5	3	3.8	21.4
2014	66.5	5.5	9.4	6.5	14.3	3.7	4.2	22.9
2015	66.7	4.7	11.4	6.4	13.2	3.3	4.7	23

注)カンキツには輸入オレンジを含む 韓国食料農村部資料

品種 Singo は市場の83%を占めているが、その理由は生産性及び貯蔵性が高いことが大きな理由である。しかし、逆説的ではあるが、大きなナシは需要の減退を招いている。多くの国民、特に単身世帯は、家庭内で消費するためにサイズの小さい果実を選択するようになってきているからだ。Singo は一回では食べきれず、冷蔵庫にも入りにくい。しかし、サイズの小さいナシの栽培面積は少ない。

中秋節などの期間には Singo は人気があり、贈答用、先祖への供養用に用いられる。このような時期にはリンゴも大きいサイズのものへの需要が高いが、ナシと事情は異なる。リンゴは過去10年間で一人当たり消費量が7.5キロから11.4キロに増加しているからだ。リンゴの場合は多くの新しい品種(Envy、Arisoo 等)が導入され、需要に対応しているからだ。

2016/17年のナシの加工仕向量(主にジュース)は7,000トンと見込まれ、前年より40%少ない見込だ。これは規格外品等が少ないことによる。

韓国の果実輸入量(トン)

	2005	2010	2012	2013	2014	2015
オレンジ	123,048	110,055	173,943	152,714	98,371	111,569
ブドウ	13,353	34,963	54,192	58,743	59,260	66,192
バナナ	253,974	337,907	367,673	313,604	359,124	358,249
パイナップル	48,763	60,565	73,131	75,917	75,420	67,003
マンゴー	762	1,351	2,839	6,154	10,599	13,315
キウイ	26,751	28,515	28,945	20,065	19,590	23,800
オウトウ	987	3,800	9,454	9,088	13,359	12,451
ザクロ	7,485	7,402	8,823	13,823	10,761	8,810
グレープフルーツ	1,532	7,861	10,452	11,580	19,491	25,010
合 計	476,655	592,420	729,451	661,687	665,975	686,398

貿易

2016/17年の輸出量は、前年より1,000トン少ない22,000トンと見込まれる。これは輸出に適した数量が減少したためである。これまで、輸出量は20,000トンから22,000トンの間で推移し、輸出先は80%が米国及び台湾である。両国とも韓国人社会等に向けたものである。なお、業界としては今後の輸出の伸びは、新規需要が見込めない限り難しいと考えている。

輸入に関しては、植物検疫上の理由で禁止されている。

韓国 ナシの国別輸出量(トン、千ドル)

	2013/14		2013/14		2013/14	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額
米国	9,734	27,619	9,725	29,325	9,265	25,323
台湾	12,586	32,080	10,367	25,431	9,986	24,635
香港	467	921	610	1,231	465	959
ベトナム	310	473	927	1,752	1,313	2,712
その他	1,383	3,710	1,707	4,498	2,098	5,586
合 計	24,480	64,802	23,336	62,236	23,127	59,215

韓国のナシ統計(在韩国 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	13,127	12,664	10,883
販売生産量(千トン)	302,731	260,975	248,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	302,731	260,975	248,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	302,731	260,975	248,000
国内生鮮仕向量(トン)	273,369	226,348	219,000
輸出量(トン)	23,336	23,127	22,000
加工仕向量(トン)	6,026	11,500	7,000
総出荷量(トン)	302,731	260,975	248,000

年産は7月→6月

4 3. EU28 カ国の落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016 年 11 月 4 日公表)

<リンゴ>

EUの生食リンゴ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/15年	2016/17年
栽培面積(ha)	529,475	529,650	523,800
収穫面積(ha)	519,320	514,600	503,660
販売生産量(トン)	12,122,468	11,581,136	11,347,400
非販売生産量(トン)	1,513,955	1,077,766	1,246,800
生産量計(トン)	13,636,423	12,658,902	12,594,200
輸入量(トン)	400,121	449,208	462,000
総供給量(トン)	14,036,544	13,108,110	13,056,200
国内生鮮仕向量(トン)	7,780,332	7,497,490	7,541,200
輸出量(トン)	1,792,234	1,590,180	1,595,000
加工仕向量(トン)	4,139,203	3,851,750	3,820,000
市場隔離量(トン)	324,775	168,690	100,000
総出荷量(トン)	14,036,544	13,108,110	13,056,200

年産は7月-6月

生産量

EU28カ国は世界のリンゴ生産、消費のリーダーの一つである。生産量上位5カ国はポーランド(2016/17年産の30%)、イタリア(同20%)、フランス(同13%)、ドイツ(同9%)、スペイン(同5%)で、これらでEU全体の77%を占めている。この中でスペインは徐々にではあるが着実に栽培面積が縮小し、他の収益性が高い核果類に転換されている。一方、ルーマニアでは小売に関する法律が改正され、最低51%は地場生産される果実を購入しなければならないようになったため、中長期的にはこの措置で生産意欲が増大するとみられる。

2016/17年の販売生産量は1,130万トンと推計される。これは、前年に比べて2%の減少である。しかし、各国ごとに事情は異なる。中部・東部EUでは4月に晩霜害と降雪に遭遇し生産量が減少した。減少幅は、スロベニア(82%)、オーストリア(78%)、スロバキア(63%)、クロアチア(27%)、チェコ(27%)、ハンガリー(8%)である。一方、ポーランド、ドイツ、スペイン、ルーマニア、ギリシャ、英国では生産量は前年を上回った。ポーランドでは密植栽培のリンゴ園が成熟期を迎えたためであり、ドイツ、スペイン、ルーマニアでは前年の不作から回復したためである。

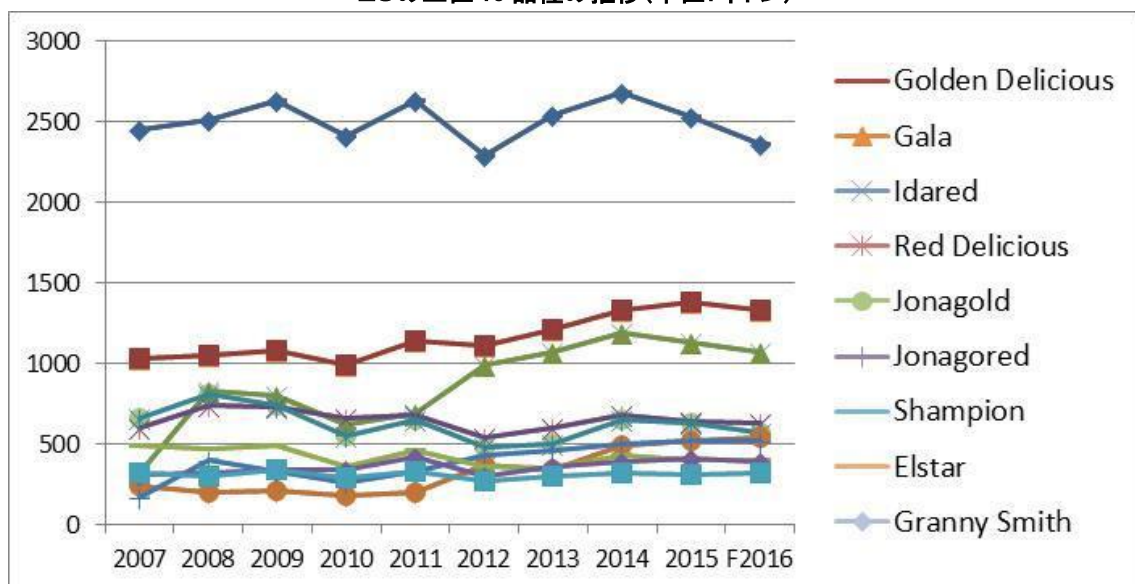
ドイツの農業市場情報会社によると、EUの有機リンゴ生産量は15.1万トンであり、生産量全体の1.2%を占めている。有機リンゴ生産の多い国は、イタリア、ドイツ、オーストリアである。

一般に本年産の品質、果実の肥大は良好であるが、ポーランド、ドイツ、ハンガリー、ベルギーでは雹害があったという報告がある。

EU内で1万トンを超える品種は25にのぼる。この中ではゴールデンデリシャス、ガラ(関係種を含む)、アイダレッドが有力品種だ。しかし、国によって品種構成は異なる。ゴールデンデリシャスはイタリア、フランス、スペインで第1位であり、ドイツとオランダではエルスターが第1位。アイダレッドはポーランドとハンガリーで第1位品種だ。対照的にガラはどこの国でも第1位品種ではない。多くの国で生産されているが、第2位品種という位置づけだ。新品種ではピンクレディー、カンジ、ルーベンス、テンテーション、キクが増加している。オランダでは新品種の割合が生産の10%に達している。

国名	2014／16	2015／16	2016／17 (予測)	16/17の前年 との比較	16/17の 構成比
ポーランド	3,195,000	3,169,000	3,400,000	7%	30%
イタリア	2,456,215	2,279,808	2,281,814	0%	20%
フランス	1,524,000	1,600,000	1,515,000	-5%	13%
ドイツ	1,115,900	973,462	998,900	3%	9%
スペイン	592,576	563,000	598,000	6%	5%
ルーマニア	390,000	350,000	380,000	9%	3%
ハンガリー	667,500	407,000	375,000	-8%	3%
オランダ	344,175	327,600	323,700	-1%	3%
ギリシャ	272,210	276,746	285,000	3%	3%
英国	225,000	243,000	250,000	3%	2%
ポルトガル	257,298	308,990	244,000	-21%	2%
ベルギー	308,460	276,450	227,000	-18%	2%
チェコ	128,292	155,361	113,045	-27%	1%
クロアチア	96,703	96,182	70,000	-27%	0.60%
ブルガリア	47,502	50,000	52,000	4%	0.50%
リトアニア	52,000	55,000	52,000	-5%	0.50%
オーストリア	229,299	216,092	47,915	-78%	0.40%
アイルランド	44,000	44,000	44,000	0%	0.40%
デンマーク	26,000	24,000	22,000	-8%	0.20%
スウェーデン	16,000	21,000	20,000	-5%	0.20%
スロバキア	48,494	46,250	17,000	-63%	0.10%
スロベニア	71,034	83,855	15,000	-82%	0.10%
ラトビア	10,000	9,000	10,000	11%	0.10%
フィンランド	4,810	5,340	6,030	13%	0.10%
合 計	12,122,468	11,581,136	11,347,404	-2%	

EUの上位 10 品種の推移(単位:千トン)



貯蔵量

世界リンゴ・ナシ協会によると、2016年7月1日の貯蔵量は396,616トンと前年を8.7%上回っている。貯蔵場所は国より異なり、生産者団体が主体である国、卸売市場及び生産者団体である国に分かれる。市場年度末の在庫量は新年度の価格の影響を及ぼす。この報告書では在庫量は「国内生鮮仕向量」の内数として扱っている。

消費

リンゴはEU各国で最も多く消費される果物である(ただし、カンキツが第一位のスペインを除く)。しかし、近年、一人当たりのリンゴ消費量が減少している。これは、ソフトフルーツ(モモ等)へ消費が転換している(英国等)、生鮮果実の消費が全体的に減少している(ドイツ、ハンガリー等)のためである。また、地元産及び有機農産物を購入する動きが多く加盟国で見られるが、全体的には、まだ少ない。

加工

2016/17年産の加工仕向量は前年を1%下回ると見込まれる。ポーランドでは生産量が増加したため加工仕向量が27%増加すると見込まれる。しかし、EU全体の加工仕向量が減少する中でこれを補う量ではない。もし加工原料の価格が現在のように低水準であるなら、生産者によっては収穫を放棄することも考えられる。現在の加工原料価格はキロ当たり0.05ユーロで推移しているからだ。

加工向けリンゴの用途としては、果汁、濃縮果汁、リンゴ酒、ワイン/ブランデー、ソース、缶詰、チップス、パイがある。加工向けの割合は国により大きく異なり、0%のギリシャ、スウェーデン、デンマークから60%のハンガリーまで区々だ。加工仕向割合は年によって変動するが、2015/16年の割合は29%と見込まれる。加工仕向量が多い国は、順番に、ポーランド、ドイツ、ハンガリー、イタリア、ルーマニア、フランス、スペイン、英国、オランダ、オーストリアである。

貿易

大部分はEU域内で貿易が行われている。過去5カ年では、約220万トンが域内の貿易量で、域外からの輸入量は40~80万トンである。近年の域外からの輸入量は、リンゴ総供給量の3~6%に相当する。

2016/17年は、オーストリア、チェコ、スロベニア、スロバキア、ハンガリーで大幅な減産であったため、近隣諸国、特にポーランド、イタリアからの輸入の増加が予想される。

域外との貿易

輸入

2016/17年の域外からの輸入量は、極端に少なかった2014/15年から回復するが、過去10カ年平均より25%少ない見込だ。輸入量の70%以上は南半球からで、EUのオフシーズンに輸入されている。輸入量の多い国は英国、オランダで、両国でEUの輸入量の58%を占めている。なお、オランダに輸入されたリンゴは他国に転売されている。

米国からの輸入は年間を通して行われているが、主要な輸入時期は11月~4月だ。米国の輸出先で最大の国は英国である。米国産の競合相手はEU域内生産国と価格が安い中国産である。2014/15年に輸入量が大幅に減少したのは、2014年3月にジフェニルアミンの残留基準が厳しくなったためである。

国別輸入量(単位:トン)

国名	2013／14	2014／15	2015／16	15/16の前年 との比較	15/16の 構成比
チリ	183,981	113,212	120,762	7%	27%
ニュージーランド	137,097	113,499	108,265	-5%	24%
南アフリカ	117,118	96,391	96,329	0%	21%
マケドニア	36,910	10,744	35,887	234%	8%
ブラジル	37,662	31,849	24,029	-25%	5%
セルビア	42,395	827	23,648	2759%	5%
アルゼンチン	36,222	14,712	15,098	3%	3%
アルバニア	2,147	211	7,190	3308%	2%
米国	10,676	6,918	5,356	-23%	1.20%
ボスニアヘルツェゴビナ	6,564	251	4,039	1509%	0.90%
ウルグアイ	1,586	2,245	2,399	7%	0.50%
中国	3,484	655	2,071	216%	0.50%
モルドバ	3,314	2,136	181	-92%	0.00%
その他	3,166	6,471	3,954	-39%	0.90%
合 計	622,322	400,121	449,208	-12%	100%

輸出

2016/17年の輸出量は少量の増加に留まる見通しだ。ロシアの輸入禁止措置により、新たな市場(東欧、北アフリカ、中東、ブラジル)を開拓しており、一部は成功している。成功例はイタリア、ベルギー、フランスによるインド市場の開拓である。また、2014年10月に始まったプリクリアランスプログラムでイタリアとフランスは米国への輸出が可能となった。さらに、ポーランドはベトナム及びその他アジア諸国と協定を結んだ。

主要な輸出先は、ベラルーシ、エジプト、アルジェリアである。また、次の主要輸出国5カ国で輸出量の90%を占めている。ポーランド(主にベラルーシ、カザフスタン、セルビア、エジプトへ輸出-以下同様-)、イタリア(北アフリカ、サウジアラビア)、フランス(アルジェリア、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、エジプト)、リトアニア(ベラルーシ)、ギリシャ(エジプト、ヨルダン)

EUと米国が競合している市場は次の通りである。アラブ首長国連邦(フランス産、イタリア産)、サウジアラビア(イタリア産、フランス産)、インド(イタリア産、ベルギー産、ポーランド産、フランス産)

国別輸出量(単位:トン)

国名	2013／14	2014／15	2015／16	15/16の前年 との比較	15/16の 構成比
ベラルーシ	254,693	636,476	563,556	-11%	35%
エジプト	98,795	186,987	252,622	35%	16%
アルジェリア	124,329	159,799	88,891	-44%	6%
サウジアラビア	40,480	63,074	80,171	27%	5%
カザフスタン	56,182	85,650	75,577	-12%	5%
アラブ首長国連邦	40,232	69,310	66,447	-4%	4%
セルビア	4,428	37,803	57,746	53%	4%
ヨルダン	13,880	28,583	40,732	43%	3%
ノルウェー	35,417	38,512	40,106	4%	3%
リビア	59,002	50,211	32,728	-35%	2%
ウクライナ	34,825	63,112	25,125	-60%	2%
インド	3,173	18,160	23,836	31%	1%
ボスニアヘルツェゴ	8,272	41,080	21,725	-47%	1%
イスラエル	21,869	8,787	19,927	127%	1%
ブラジル	9,906	27,105	17,728	-35%	1%
スイス	13,680	12,010	12,828	7%	1%
コロンビア	3,324	6,683	11,769	76%	1%
マレーシア	6,179	8,494	10,624	25%	1%
その他	743,960	250,398	148,042	-41%	9%
合 計	1,572,626	1,792,234	1,590,180	-11%	100%

市場隔離

ロシアの輸入禁止措置により、価格維持を図るため、EUでは例外的に市場隔離措置を講じている。現行の措置は(ロシアの輸入禁止措置の行方によるが)2017年6月30日までとなっている。

<ナシ>

EUのナシ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	122,993	122,268	122,248
収穫面積(ha)	113,626	112,858	112,974
販売生産量(トン)	2,429,851	2,373,130	2,173,952
非販売生産量(トン)	135,857	126,052	105,100
生産量計(トン)	2,565,708	2,499,182	2,279,052
輸入量(トン)	220,808	221,504	275,000
総供給量(トン)	2,786,516	2,720,686	2,554,052
国内生鮮仕向量(トン)	2,026,769	2,028,240	2,016,314
輸出量(トン)	416,727	309,847	265,500
加工仕向量(トン)	294,015	368,770	266,738
市場隔離量(トン)	49,005	13,829	5,500
総出荷量(トン)	2,786,516	2,720,686	2,554,052

年産は7月-6月

生産量

EUは中国に次ぐ生産地である。2016/17年の生産量は前年を8%下回る230万トンと見込まれる。オランダは生産量が増加するが、イタリア、ベルギー、スペインで二桁の減収割合が見込まれている。これら4カ国でEUの生産量の3/4を占めている。

イタリアはEUの中の最大の生産国で、産地は北部エミリア・ロマーニャ地方に集中している。生産見込量は67.8万トンで2015/16年より11%減少し、過去3カ年平均よりも9%減少する見込だ。主力品種である Abate Fetel を含め全ての品種で減収のようだ。これは春から6月中旬にかけて低温だったことが原因であるが、品質と果実の肥大は良好である。

オランダでは生産量が前年よりやや増加し、過去3カ年平均よりも3%増の34.32トンと見込まれるが、収量の多かった地域と少なかった地域が分かれている。主力品種の Conference は品質も果実の肥大も良好である。

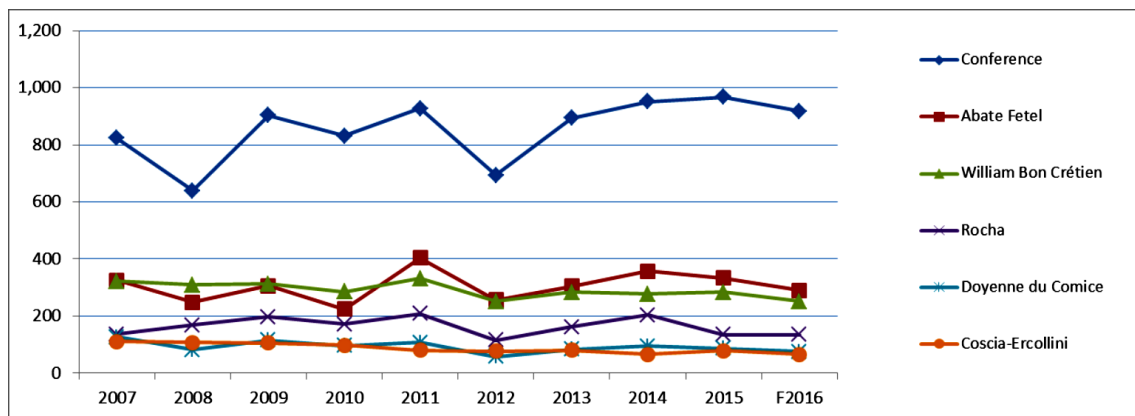
ベルギーの生産量は前年より10%減、過去3カ年平均より6%減少する見込みだ。開花期と生育期の低温と湿潤な気候の影響である。また、6月下旬に雹害があり、一部地方では被害を受けた。

スペインは記録的減収(308,760トン)で前年を42,650トン、19%下回った。カタルーニャ、アラゴンにおける春先の天候不順で開花及び着果が不良であったためである。加えて生育後期に複数回の雹害に見舞われた。主力品種の Conference、Blanquilla、William Bon Crétien、Limonera、Ercolini は軒並み減収であった。

栽培面積は11.3万 ha と変化はない。その中で、イタリアとスペインでは、収益性の高い核果類への転換が進み、面積は減少している。一方、ベルギーとオランダでは、品種 Conference の収益がリンゴより高いことから面積が増加している。EU の品種の40%が Conference で、ベルギー、オランダを中心に、スペインでも一部で生産されている。その他の主力品種は次の通りである。Abate Fetel (イタリア)、William Bon Crétien/Bartlett (イタリア、スペイン、フランス)、Rocha (ポルトガル)

国名	2013／14	2014／16	2015／16	2016／17 (予測)	16/17の前年 との比較	16/17の 構成比
イタリア	726,000	736,000	764,000	678,000	-11	31
オランダ	317,190	340,275	340,275	343,200	1	16
ベルギー	305,550	362,780	367,500	323,000	-10	15
スペイン	420,879	369,280	351,410	308,760	-12	14
ポルトガル	200,458	207,909	139,190	139,000	0	6
フランス	142,900	133,000	141,000	130,000	-18	6
ポーランド	68,500	69,200	63,900	72,000	13	3
ギリシャ	63,607	73,488	65,385	62,000	-5	3
ドイツ	34,000	44,972	43,071	36,000	-16	2
英国	26,000	24,000	25,000	28,000	12	1
ルーマニア	25,000	21,000	17,000	19,000	12	1
ハンガリー	14,000	17,660	26,900	14,500	-46	1
その他	42,720	30,287	28,499	20,392	-28	1
合 計	2,386,804	2,429,851	2,373,130	2,173,852	-8	100

EU の主力品種の推移



消費

EU では生鮮果実の消費が減少している。リンゴ、オレンジ、バナナは人気の高い生鮮果実であるが、ナシは価格次第で毎年の消費量が上下する。EU におけるナシの一人当たり消費量は概ね4kgであるが、徐々に減少しつつある。一人あたり消費量の多い国はナシの主産国で、イタリアでは9.4kg、次いでポルトガル、オランダ、ギリシャ、スペイン、ベルギーである。消費量の少ない国(2kg 以下)は、ハンガリー、スロバキア、ポーランド、ルーマニアである。2016/17年の域内消費量は、他の生鮮果実と同様の傾向で、前年を1.2万トン下回る約200万トンと見込まれる。

主な消費層は熟年夫婦、若い独身者であり、地元産、有機の消費は伸びている。

加工

形、サイズ、品質において生鮮果実に向かないものは加工に回される。用途は缶詰、ジュース、パイ用である。また、可食にならないものは餌、発酵のためにも利用される。2015/16年の加工仕向量は収穫期の降雨のために多かった。

2016/17年の加工仕向量は26.7万トンで、前年よりも相当少ないと見込まれる。これは、生産量が少なかったためと、収穫期の天候に恵まれたためだ。イタリア、オランダ、スペイン、ポーランドは加工仕向量が多く、この4カ国で EU の大部分を占める。イタリアではジュースに向けられ、オランダでは缶詰、ジュース、ゼリーに向けられる。

域外との貿易

輸入

ナシの貿易は大部分が域内国間であり、過去3年平均では90万トンが域内で輸出入され、域外からの輸入は平均23万トンである。

域外からの輸入を行う国はイタリアとオランダで、両国で EU 全体の70%を占めている。その他の輸入国は、英国、ドイツ、フランスである。輸入の主要港であるオランダのロッテルダムからは域内各国に移送される。一方、イタリアの輸入品は主に国内で消費される。

輸入先は主に南半球であり、同地域で遊郭が行われる2月から輸入が始まり、ピークは4月～7月である。主な輸入品種は Williams Bon Crétien、Packham、Abate Fetel である。

国別輸入量(単位:トン)

国名	2013／14	2014／15	2015／16	15/16の前年 との比較	15/16の 構成比
南アフリカ	105,459	93,396	95,582	2	43
アルゼンチン	88,629	59,249	63,472	7	29
チリ	44,655	55,326	47,430	-14	21
中国	8,324	7,882	10,892	38	5
トルコ	1,642	722	1,568	117	1
ニュージーランド	1,176	858	540	-37	0
ベラルーシ	19	181	535	196	0
セルビア	890	91	341	275	0
ボスニアヘルツェゴビナ	1,201	187	302	61	0
ウルグアイ	1,201	1,323	285	-78	0
米国	1,180	535	154	-71	0
スイス	171	148	92	-38	0
韓国	53	118	85	-28	0
ペルー	0	94	73	-22	0
ブラジル	2	162	68	-58	0
その他	269	536	85		0
合 計	254,871	220,808	221,504	0	100

中国は品種 Ya を輸出する唯一の国であり、EU 在住のアジア人に消費されている。米国からは品種 Anjou が輸出されているが、地元産との競合で、上記の通りここ数年で大幅に減少している。

2016/17年の輸入量は、域内の生産が減少することから増加すると見込まれる

輸出

ロシアの輸入禁止措置により、輸出が落ち込み、現在も続いている。輸出先はベラルーシが最大であり、主な品種は Conference である。

中東への輸出は増加しており、サウジアラビアとヨルダンだけで昨年は倍増した。2016/17年も中東向けは増加が見込まれる。

2015/16年は香港向けが減少したが、代わりに中国向けが増加した。香港市場は飽和していると思っているが、中国向けはまだ増加すると期待している。

ロシアの輸入禁止措置により、アジア、中東、南北アメリカの新市場の開拓を進めているが、新規市場では目にしたこともない欧州産品種が受け入れられるには数年を要すると考えられる。

国別輸出品(単位:トン)

国名	2013/14	2014/15	2015/16	15/16の前年 との比較	15/16の 構成比
ベラルーシ	53,235	184,321	148,378	-20	48
ブラジル	55,011	69,172	42,815	-38	14
ノルウェー	16,436	18,116	17,287	-5	6
モロッコ	13,895	20,553	15,268	-26	5
カザフスタン	7,839	14,515	10,190	-30	3
ボスニアヘルツェゴビナ	1,659	6,908	9,435	37	3
リビア	11,163	11,770	6,783	-42	2
スイス	5,974	4,403	6,026	37	2
サウジアラビア	3,218	3,029	5,864	94	2
イスラエル	5,436	4,522	5,264	16	2
香港	3,014	5,631	4,468	-20	1
アラブ首長国連邦	3,227	4,251	4,381	3	1
中国	911	2,499	3,130	25	1
メリリヤ	3,305	2,914	2,844	-2	1
アルバニア	1,805	3,095	2,283	-26	1
アゼルバイジャン	2,921	4,230	2,239	-47	1
ヨルダン	249	603	2,202	265	1
セルビア	743	2,411	2,179	-10	1
アルメニア	2	3,516	2,103	-40	1
カナダ	1,216	1,874	2,017	8	1
その他	277,773	48,394	14,691		3
合 計	469,032	416,727	309,847	-26	100

価格

ロシアの輸入禁止措置にも拘わらず、生産量が減少しているため、今年のナシ価格は高く推移している。今シーズンは高価格が続くとみられる。

<生食ブドウ>

EUの生食ブドウ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/15年	2016/17年
栽培面積(ha)	96,759	94,975	94,698
収穫面積(ha)	91,185	91,518	91,126
販売生産量(トン)	1,630,145	1,747,190	1,685,030
非販売生産量(トン)	8,094	9,034	8,900
生産量計(トン)	1,638,239	1,756,224	1,693,930
輸入量(トン)	603,748	608,036	612,000
総供給量(トン)	2,138,964	2,364,260	2,305,930
国内生鮮仕向量(トン)	2,140,559	2,276,228	2,221,230
輸出量(トン)	101,428	87,182	84,000
市場隔離量(トン)	15,950	850	700
総出荷量(トン)	2,241,987	2,364,260	2,305,930

年産は6月-5月

EU は生食ブドウの主要産地であり、イタリア、ギリシャ、スペインで EU 全体の97%を占めている。2015/16年産は好調に販売されたが、2016/17年産の生産量は前年を3.5%下回る約170万トンと見込まれる。減産する主な国はベラルーシ(-17.4%)、ギリシャ(-6.9%)、フランス(-6.7%)、イタリア(-4.3%)である。EU 全体では過去10年間で大きく生産量が減少したが、この傾向は継続している。これは生産コストの上昇で収益性が低下していること、域外国との競合が激化していること、による。

生食用ブドウの生産量の推移(トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
イタリア	998,627	1,044,607	1,000,000
ギリシャ	299,339	311,491	290,000
スペイン	231,700	270,742	281,030
その他	108,573	129,384	122,900
合 計	1,638,239	1,756,224	1,693,930

2016/17年、イタリアは天候不順のため着果が不良であったが、品質は良好である。イタリアの生食用ブドウは南部で生産され、プッリャ州(70%)、シチリア(25%)が主産地である。主な品種は Italia、Victoria、Red Globe で、これらで66%を占めている。ここ数年、EU 内外の市場の需要に応じ、Sugraone、Crimson、Thompson、Sublime 等の種無しブドウが増加している。しかしながら、過去4カ年わたる収益性の悪化から、同国の栽培面積は減少している。早生品種は Black Magic、Vittoria で5月から7月に販売される。中性、晩生品種は Italia、Palieri、Pizzutello、Bianca、Red Globe でシチリア、アブルッツォ、プーリア、バジリカータで生産され8月から12月に販売される。

ギリシャではクレタ島の干ばつ、コリントの豪雨により生産量が減少した。栽培面積は17,300ha で、主産地はコリントのペロポネソス、マケドニアのカバラ、クレタ島のイラクリオンである。主な品種は、Sultana (Thompson Seedless)、Victoria であるが、販売時期を10～11月まで延長することが目下の課題である。

スペインの栽培面積は14,000ha で主産地はムルシア、バレンシア、アンダルシアである。栽培品種は50を超えるが、主な品種は Aledo、Ideal、Muscatel、Dominga、Napoleon である。種無しブドウは全体の30%であり、主にムルシアで生産されている。

消費

域内の生産状況に左右される面はあるが、消費量は近年一定で約220万トンである。6月から12月までは域内生産品が消費され、年を越すと南半球からの輸入品が消費される。輸入品は消費量の約22%を占める。

生食ブドウの最大の消費国はイタリアで、次いで、ドイツ、英国、ギリシャ、フランス、スペイン、ルーマニア、チェコ、ポルトガル、オーストリア、ブルガリア、スロバキア、クロアチア、スロベニアの順である。現時点ではイタリア産の種のある品種は市場で受け入れられているが、域内の消費者は次第に種無し品種(Sugraone、Crimson、Thompson、Regal、Summer Royal、Centennial、Sublime)に嗜好を移しつつある。このため、生産者は種無し品種に転換しつつある。また、果物が少なくなる冬の時期に供給できるよう晩生品種(Crystal、Princess)の生産にも力を入れている。

貿易

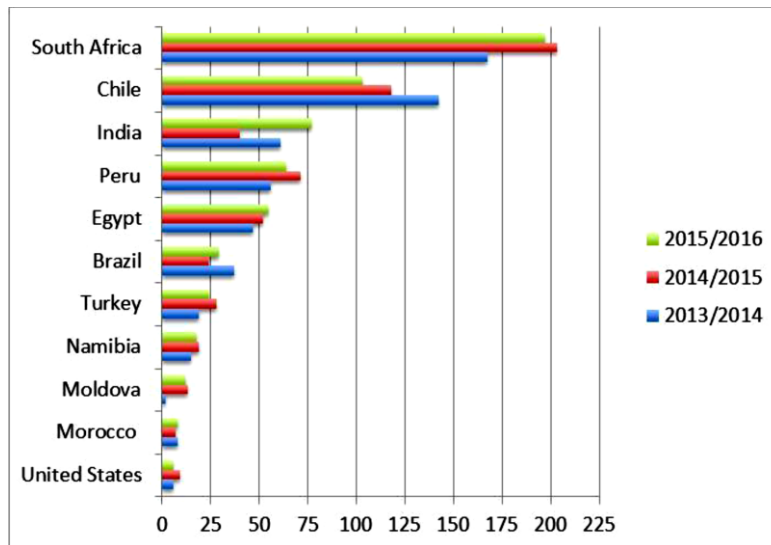
生食ブドウの貿易バランス

	数量(トン)			金額(100万ドル)		
	2013/14	2014/15	2015/16	2013/14	2014/15	2015/16
輸入	576,780	603,748	608,036	1,563	1,446	1,403
輸出	152,258	101,428	87,182	286	197	168
差し引き	-424,522	-502,320	-520,854	-1,277	-1,249	-1,235

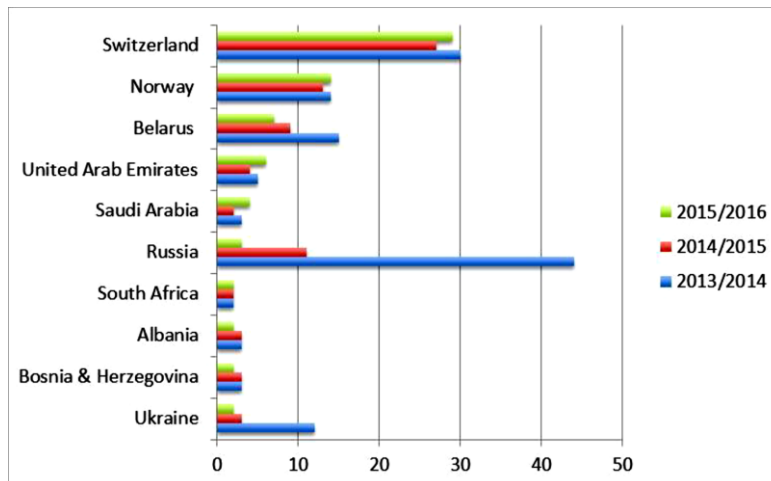
EU は生食ブドウの純輸入地域である。2015/16年の主な輸入先は南アフリカ(197,211トン)、チリ(102,902トン)、インド(77,019トン)、ペルー(63,880トン)、エジプト(54,946トン)、ブラジル(28,813トン)、トルコ(24,326トン)、ナミビア(18,041トン)である。主な輸入国はオランダ、ドイツ、英国であるが、オランダは中継貿易国である。2016/17年は域内の生産量が減少するため、輸入は増加するとみられる。

一方、2015/16年の主な輸出先は、スイス(29,148トン)、ノルウェイ(14,214トン)であるが、アフリカ、アジア、中東向けの輸出市場を開拓している。2016/17年の輸出量は域内生産の減少と域内消費が安定していることから、減少することが見込まれる。

EUの生食ブドウの輸入先



EUの生食ブドウの輸出先



4 4．チリの落葉果樹（リンゴ、生食ブドウ、ナシ）事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016 年 10 月 26 公表)

<リンゴ>

生産

2015/16 年のリンゴ栽培面積は36, 059ha で、前年に比べて3%減少した。これは単位面積当たりの収量が少ない品種から多い品種への転換、リンゴより収益性の高いアウトウ等への転換が進んだためである。

チリではリンゴの生産はオヒギンス地域とマウレ地域に集中しており、前者が生産量の25. 5%、後者が62. 1%を占めている。栽培面積の81%が赤色系品種で、19%が緑色系品種(大部分はグラニースミス)である。典型的な赤色系品種はロイヤルガラ、ピンクレディー(それぞれ19. 3%、10. 3%)である。一方、Scarlett、Red Chief も主要な品種であるが、現在では新規植栽はない。新品種として植栽されているものは、Brookfield Gala、Gala Premium、Fuji Raku Raku、ハニークリスピー、Rosy Glow であるがこれらはロイヤルガラ(収穫期2～3月)、フジ(同3～4月)、ピンクレディー(同4～5 月)の派生品種である。このように収穫時期は品種によってずれており、気象災害等があった場合にリスクを分散することができる。



2016/17年産のリンゴ生産は、冬期に必要な低温(7℃以下)に遭遇したため、開花期は例年より 10 日早かった。チリでは早期開花は生育にとって良い現象である。対照的に2015/16年産は十分な低温を得られなかったため、開花が不規則で収穫は10日程度遅れ、生産に影響が出た。

9 月 13 日のサンチアゴ周辺のリンゴ園

消費

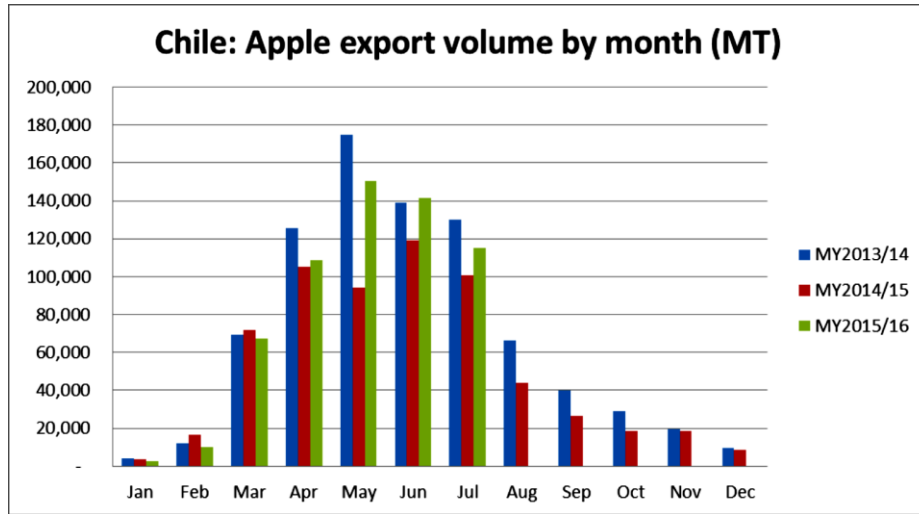
リンゴの消費は2003年以降増加している。一人当たりの消費量は2013年に14kgで、国内消費仕向け量は25. 5万トンであった。なお、人口はチリの1, 819万人である。

貿易

2016年1～7 月の輸出量は595, 873トンで前年同期に比べて16. 4%増加した。ただ、4 月中旬の降雨でフジとピンクレディーの収穫に影響があり、一部が裂果した。加えて降雨により低温貯蔵に問題が生じ、早期輸出を余儀なくされた。輸出のピークは5～6月であり、年トータルでは66万トンに達する。

2016/17年産の生産は先に述べたとおり順調であり、輸出量は75万トンに達すると見込まれる。チリの最大の輸出先は米国である。

チリの月別輸出量(トン)



リンゴ国別輸出量(暦年)

輸出国	輸出量(トン)			輸出額(米ドル)		
	2014	2015	対前年比	2014	2015	対前年比
合計	820,242	628,301	-23.40%	693,288,381	517,705,764	-25.30%
米国	119,574	78,290	-34.50%	105,146,957	71,501,530	-32.00%
コロンビア	90,741	75,593	-16.70%	73,221,748	61,084,793	-16.60%
台湾	52,527	39,332	-25.10%	58,041,468	44,645,707	-23.10%
オランダ	64,817	42,943	-33.70%	55,012,348	33,876,275	-38.40%
サウジアラビア	33,803	39,981	18.30%	28,975,525	33,474,310	15.50%
エクアドル	60,576	41,348	-31.70%	42,097,914	30,313,509	-28.00%
ペルー	46,810	43,715	-6.60%	30,630,292	28,755,877	-6.10%
ブラジル	42,577	35,820	-15.90%	34,963,281	27,446,998	-21.50%
英国	41,152	25,373	-38.30%	41,391,885	24,348,936	-41.20%
中国	15,875	22,524	41.90%	15,122,480	21,564,094	42.60%
その他	251,790	183,382	-27.20%	208,684,483	140,693,735	-32.60%

リンゴ国別輸出量(1月-7月)

輸出国	輸出量(トン)			輸出額(米ドル)		
	2015	2016	対前年比	2015	2016	対前年比
合計	512,130	595,873	16.40%	424,635,727	496,898,893	17.00%
米国	74,453	100,626	35.20%	68,614,066	96,471,293	40.60%
台湾	34,552	38,104	10.30%	38,407,733	39,926,032	4.00%
オランダ	41,917	44,565	6.30%	33,055,159	35,758,087	8.20%
コロンビア	50,927	45,163	-11.30%	40,667,398	34,792,498	-14.40%
サウジアラビア	37,745	41,819	10.80%	31,562,639	34,690,841	9.90%
ブラジル	17,901	42,368	136.70%	13,086,230	32,404,707	147.60%
英国	24,524	25,448	3.80%	23,445,650	23,962,898	2.20%
カナダ	10,381	21,363	105.80%	9,166,764	23,026,813	151.20%
インド	19,997	32,189	61.00%	14,391,696	21,850,493	51.80%
ペルー	26,325	27,661	5.10%	16,150,604	16,114,689	-0.20%
その他	173,408	176,567	1.80%	136,087,788	137,900,542	1.30%

チリのリンゴ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	37,200	36,059	36,000
収穫面積(ha)	33,900	33,600	33,500
結果樹数(千本)	39,900	38,900	38,000
未結果樹数(千本)	2,900	2,800	2,500
果樹数合計(千本)	42,800	41,700	40,500
販売生産量(千トン)	1,200,000	1,220,000	1,350,000
非販売生産量(トン)	10,000	10,000	10,000
生産量計(トン)	1,210,000	1,230,000	1,360,000
輸入量(トン)	2,100	1,500	1,500
総供給量(トン)	1,212,100	1,231,500	1,361,500
国内生鮮仕向量(トン)	252,032	251,500	255,000
輸出量(トン)	628,300	660,000	750,000
加工仕向量(トン)	331,768	320,000	356,500
総出荷量(トン)	1,212,100	1,231,500	1,361,500

＜生食ブドウ＞

生産

チリのブドウ生産地はアタカマからマウレ地方である。これら地域で48,378ha が栽培されている。主な品種はレッドグローブ(大粒、赤色系、種ありで栽培面積の24.4%)、トンプソンシードレス(緑系、種無しで栽培面積の23.9%)、クリムゾンシードレス(赤系、種無しで栽培面積の16.9%)、フレイムシードレス(赤系、種無しで栽培面積の15.7%)、スーペリアシードレス(緑系、種無しで栽培面積6.5%)である。新品種として、Arra-15(緑系、種無し、カリフォルニアから導入)、Sweet Celebration(赤系、種無し、カリフォルニアから導入)、Timco(赤系、種無し、カリフォルニアから導入)が植栽されている。

2015/16年の生産は悪天候の影響を受けた。春先の低温で開花が不安定であり、夏は高温で降雨があった。これらの条件のためカビが引き起こす病気に罹りやすくなった。

コピアボ溪谷(アタカマ地方)は最も早生の輸出用ブドウを生産しているが、2015年3月に洪水の被害を受け、7,746haの栽培面積の内、1,000haで被害があった。しかし、アタカマ地方の現在の状況は、天候に恵まれ収穫が例年より10日早い見込だ。リンゴと同様、冬期の低温と春期の高温、灌漑用水の確保で生育は順調だからだ。同地域のブドウ輸出は例年より早まったため、高価格が期待できる。

消費

2013年の一人当たり消費量は7.8kgであり、人口を掛け合わせると年間国内消費量は少なくとも14.2万トンとなる。

貿易

2015/16年の輸出は前年を数量で9.6%、金額で8.3%下回った。米国向けの輸出量は11.7%減少したが、それでも輸出先の第1位であり、全体の45%を占めている。米国に輸出される品種は種無し品種で、クリムゾン(2015/16年8.3万トン)、トンプソン(同8万トン)、フレイム(同6.6万トン)である。

2015/16年の輸出先は中国向けだけが増加し、33.3%の伸びであった。その他の主要市場向けは軒並み減少した。中国向けの品種はレッドグローブで、10万トンに達した。

輸出のピークは3～4月だが、4月中旬の降雨で晩生品種に被害があった。月別の輸出量は5月を除き前年を下回っている。5月だけ前年を上回ったのは4月の降雨の影響である。いずれにせよ、降雨の影響でカビの発生を恐れ収穫も前倒しとなった。

降雨は2016年の10月中旬にもバルパライソからマウレ地方にかけてあった。この降雨による被害は特に報告されておらず、病害対策を行うことだけが求められている。2016/17年産の輸出量はこれまでのところ天候が順調であることから、73万トンと見込まれる。

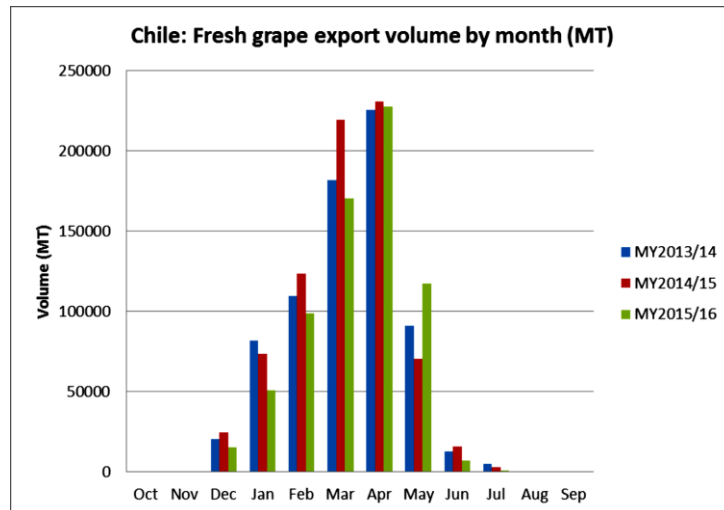
ブドウ国別輸出力(年産)

輸出国	輸出力(トン)			輸出力(米ドル)		
	2013/14	2014/15	対前年比	2013/14	2014/15	対前年比
合計	727,875	760,841	4.50%	1,118,033,631	1,108,001,919	-0.90%
米国	318,298	355,846	11.80%	418,450,515	487,982,132	16.60%
中国	79,124	90,201	14.00%	130,927,236	135,460,737	3.50%
韓国	47,172	50,630	7.30%	109,554,260	115,269,324	5.20%
オランダ	65,841	61,163	-7.10%	86,334,504	69,832,150	-19.10%
英国	37,535	37,136	-1.10%	66,380,631	53,757,601	-19.00%
ブラジル	26,086	24,583	-5.80%	52,669,547	35,648,632	-32.30%
メキシコ	18,024	17,236	-4.40%	34,300,700	28,193,109	-17.80%
ロシア	22,673	16,456	-27.40%	36,908,353	23,365,014	-36.70%
カナダ	11,513	14,169	23.10%	15,477,915	19,615,347	26.70%
日本	10,779	10,778	0.00%	16,646,205	13,921,057	-16.40%
その他	90,830	82,643	-9.00%	150,383,765	124,956,816	-16.90%

ブドウ国別輸出力(10月-7月)

輸出国	輸出力(トン)			輸出力(米ドル)		
	2014/15	2015/16	対前年比	2014/15	2015/16	対前年比
合計	760,368	687,535	-9.60%	1,107,331,252	1,014,916,688	-8.30%
米国	355,846	314,221	-11.70%	487,982,132	450,766,652	-7.60%
中国	90,200	120,259	33.30%	135,460,738	171,515,316	26.60%
オランダ	61,162	43,807	-28.40%	69,832,150	47,426,677	-32.10%
韓国	50,630	33,850	-33.10%	115,269,324	74,709,588	-35.20%
英国	37,136	30,466	-18.00%	53,757,602	48,472,788	-9.80%
ブラジル	24,253	18,429	-24.00%	35,170,816	28,922,293	-17.80%
カナダ	14,169	13,132	-7.30%	19,615,348	21,736,090	10.80%
メキシコ	17,236	12,985	-24.70%	28,193,109	21,621,773	-23.30%
ロシア	16,438	11,936	-27.40%	23,328,294	17,072,649	-26.80%
日本	10,777	9,254	-14.10%	13,921,057	11,693,684	-16.00%
その他	82,521	79,196	-4.00%	124,800,682	120,979,178	-3.10%

ブドウの月別輸出力(トン)



チリの生食ブドウ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	52,200	48,378	48,000
収穫面積(ha)	49,600	46,200	46,000
販売生産量(トン)	935,700	847,800	906,000
非販売生産量(トン)	3,500	20,000	3,700
生産量計(トン)	939,200	867,800	909,700
輸入量(トン)	500	200	300
総供給量(トン)	939,700	868,000	910,000
国内生鮮仕向量(トン)	178,900	180,000	180,000
輸出量(トン)	760,800	688,000	730,000
総出荷量(トン)	939,700	868,000	910,000

<ナシ>

生産

2015/16年のナシの栽培面積は8,646ha で、輸出を通じて収益生が高いことから、徐々に面積が増加している。

チリのナシの主要生産地はオイギンス(55.5%)、マウレ(31.7%)、メロポリタン(9.3%)で、全生産面積の96.5%を占めている。主要な品種は、Packam's Triumph(35.2%)、Abate Fettel(17.9%)、Forelle(12.7%)、Coscia(8.3%)、Beurre Bosc(6.4%)である。Abate Fettel、Coscia は現在も栽培面積が増加中であるが、Packam's Triumph は変動がない。

2016/17年産は冬期に低温要求量を満たしたため、前年(低温要求量を満たさなかったため収量が低下した)に比べて生産量、輸出量とも回復し、生産量は28万トンになると見込まれる。

消費

国内消費に関する公式なデータはない。このため、データのある輸出量と加工仕向量から推計している。チリで国内消費される生鮮果実は、輸出できなかったものが主体である。

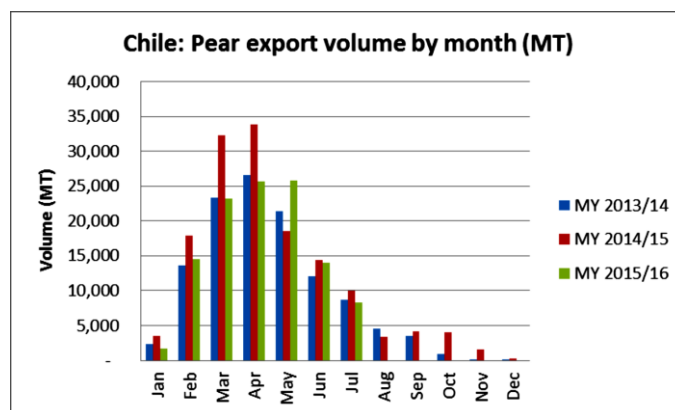
貿易

チリ産ナシの輸出先はオランダ(18.6%)、コロンビア(15.5%)、米国(13.2%)である(いずれも2014/15年)。

2015/16年産の輸出は天候不順の影響を受けた、金額で15.7%減少し(1月～7月の対前年比)、数量で13.1%減少(同)した。輸出の最盛期は3月から5月であるが、2015/16年は前年に比べて下回った。

2016/17年の輸出量は、冬期、春期の天候に恵まれたことから回復し、13.8万トンに達すると見込まれる。

ナシの月別輸出量(トン)



ナシ国別輸出量(暦年)

輸出国	輸出量(トン)			輸出額(米ドル)		
	2014	2015	対前年比	2014	2015	対前年比
合計	117,023	143,726	22.80%	115,901,779	130,133,279	12.30%
オランダ	19,657	26,676	35.70%	20,818,528	25,772,000	23.80%
コロンビア	19,534	22,214	13.70%	20,300,049	19,837,647	-2.30%
イタリア	10,415	16,725	60.60%	11,385,372	15,562,457	36.70%
米国	15,803	19,025	20.40%	12,335,536	15,405,830	24.90%
ペルー	9,467	11,311	19.50%	7,605,674	8,091,428	6.40%
エクアドル	10,304	9,580	-7.00%	9,207,979	8,022,561	-12.90%
ロシア	5,514	6,763	22.70%	6,039,777	6,488,440	7.40%
ブラジル	1,842	4,258	131.20%	2,227,889	4,112,505	84.60%
スペイン	2,982	3,758	26.00%	3,250,896	3,921,771	20.60%
サウジアラビア	1,203	3,156	162.30%	1,303,483	3,883,400	197.90%
その他	20,302	20,260	-0.20%	21,426,596	19,035,240	-11.20%

ナシ国別輸出量(1月～7月)

輸出国	輸出量(トン)			輸出額(米ドル)		
	2015	2016	対前年比	2015	2016	対前年比
合計	130,325	113,212	-13.10%	118,868,723	100,217,854	-15.70%
オランダ	26,676	21,046	-21.10%	25,772,000	20,495,029	-20.50%
コロンビア	15,628	13,992	-10.50%	14,085,635	12,157,323	-13.70%
イタリア	16,725	13,814	-17.40%	15,562,457	11,932,904	-23.30%
米国	19,025	13,896	-27.00%	15,405,830	10,626,123	-31.00%
ペルー	8,379	9,221	10.00%	6,095,265	6,139,800	0.70%
ロシア	6,416	6,142	-4.30%	6,238,311	6,058,196	-2.90%
エクアドル	7,999	7,202	-10.00%	6,552,844	5,371,268	-18.00%
サウジアラビア	3,062	3,027	-1.10%	3,758,520	3,803,524	1.20%
ドイツ	3,819	4,032	5.60%	3,025,738	3,336,856	10.30%
ブラジル	3,753	2,497	-33.50%	3,706,719	2,521,419	-32.00%
その他	18,843	18,343	-2.70%	18,665,404	17,775,412	-4.80%

テリのナシ統計(在テリ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	7,300	8,646	8,900
収穫面積(ha)	6,000	7,200	7,500
結果樹数(千本)	6,500	7,600	7,800
未結果樹数(千本)	1,200	1,400	1,500
果樹数合計(千本)	7,700	9,000	9,300
販売生産量(千トン)	288,000	265,000	280,000
非販売生産量(トン)	2,000	2,000	2,000
生産量計(トン)	290,000	267,000	282,000
輸入量(トン)	600	700	600
総供給量(トン)	290,600	267,700	282,600
国内生鮮仕向量(トン)	88,500	87,000	88,000
輸出量(トン)	143,700	125,000	138,000
加工仕向量(トン)	58,400	55,700	56,600
総出荷量(トン)	290,600	267,700	282,600

45. ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ・ナシ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2015 年 11 月 2 日公表)

概要

業界の推計によると、2016/17年産(2017 年1月～12月)の落葉果樹栽培面積は9,976ha で、前年産(9,626ha)に比べて3. 6%増加する見込みだ。栽培面積は、2020年までは毎年300～400ha 増加すると予測される。

様々な食味を持つ品種の組み合わせ、高品質な産物の提供、アジア市場への良好なアクセス条件により、ニュージーランドの落葉果樹産業はルネサンス期を迎えている。

2015/16年産の落葉果樹の収穫量は、現在562,400トンと推計されている。同年は裏年に当たるが、前年産に比べると0. 6%しか下回っていない。2016/17年産を展望すると、栽培面積の増加と表年に当ることから、3%上回る580,100トンと見込まれる。

2015/16年の国内消費量は71,925トンと前年を2. 6%下回り、2016/17年は同程度の71,675トンと推計される。

2015/16年の加工仕向量は143,000トンで前年を12%下回ると見込まれる。これは、同年産の品質が輸出基準を満たすものが多かったため、加工向けが減少したものである。2016/17年の加工仕向量は145,000トン予測されるが、これは前年に比べて生産量が増加するためである。

2015/16年産は輸出し向け率が増加し、大部分の産地にとって素晴らしい結果となった。落葉果樹全体の輸出量は351,550トンで、前年を5. 5%上回った。2016/17年産を展望すると、生産量が増加することから367,500トンと推計される。

生産者の経営状況は4年連続して良好であり、2015/16年産の FOB 価格を基に計算した収益は前年同期を9%上回っている。

栽培面積・収穫面積

リンゴ

当職(在ニュージーランド米国農務官)の予測では、2016/17年産のリンゴ栽培面積は9,554ha で、前年を3. 8%上回る見込みだ。リンゴ栽培面積は2020年までは増加基調にあり、2020年の栽培面積は10,400～10,500haと見込まれる。2020年までの5～6年の間は、色の鮮やかなロイヤルガラ&スポーツ、新フジ系品種、パシフィッククイーン、エンヴィが増加すると予測される。様々な食味を持つ品種の組み合わせ、高品質な産物の提供、アジア市場への良好なアクセス条件により、ニュージーランドの落葉果樹産業はルネサンス期を迎えている。

ナシ

ナシの栽培面積に変動はない。2016/17年産の栽培面積は前年と同程度の422ha と推測される。

ニュージーランドにおける品種別栽培面積の推移(ha)

収穫年	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
プレイヤーン	2,464	2,484	2,246	2,034	1,869	1,740	1,589	1,504	1,381	1,352	1,303
ロイヤルガラ&スポーツ	2,872	2,893	2,669	2,538	2,417	2,423	2,369	2,386	2,337	2,410	2,549
コックス	354	314	295	281	248	236	203	178	150	134	121
フジ	875	836	829	899	931	970	934	906	832	837	858
グラニースミス	322	294	286	282	267	256	256	246	240	219	233
クリプスピンク/ピンクレディー	287	248	285	353	397	434	446	459	443	461	523
ジャズ	440	576	768	917	977	983	943	905	869	855	825
パシフィックビューティー	250	177	162	149	135	127	120	113	92	84	83
パシフィッククイーン	306	223	212	220	263	291	351	456	622	730	827
パシフィックローズ	642	529	454	424	416	399	396	390	379	364	365
パシフィック小計	1,198	929	828	793	814	817	867	959	1,093	1,178	1,275
エンヴィイ					88	174	272	285	315	346	416
その他品種	184	198	332	389	421	376	385	484	709	790	707
リンゴ合計	8,996	8,772	8,538	8,486	8,429	8,409	8,264	8,312	8,369	8,582	8,810
ナシ合計	722	735	412	412	429	473	441	448	403	407	403
落葉果樹未登録分									383	320	413
落葉果樹合計	9,718	9,507	8,950	8,898	8,858	8,882	8,705	8,760	9,155	9,309	9,626
プレイヤーンの割合	27.40%	28.30%	26.30%	24.00%	22.20%	20.70%	19.20%	18.10%	16.50%	15.80%	14.80%
ロイヤルガラの割合	31.90%	33.00%	31.30%	29.90%	28.70%	28.80%	28.70%	28.70%	27.90%	28.10%	28.90%

リンゴの生産量

2015/16年産

2015/2016年産のリンゴの販売はほぼ終了し、同年産の生産量は54.9万トンと推測される。これは前回の予測時点(2016年5月)より0.2%の増加である。気象条件は、2015年6月から8月にかけては寒くて乾燥した冬であったが、その後10月にかけて気温が上昇し、開花期には期間は短かったが着花数が多かった。夏から秋にかけては順調な気候で、特に生産量の62%を占めるホークス湾岸では2015/16年が裏年であるにもかかわらず、前年よりわずかに0.7%収穫量が少ない程度であった。

25%を生産するネルソン地域では大きな雹害があり、品質面でも等級が引き下げられたが、これを除けば全体では2015/16年産の方が前年産より生産量は多かった。また、エルニーニョ現象で干ばつが懸念されたが、十分な灌漑水を確保できたため、影響はなかった。

2016/17年産

2016/17年産の生産量は56.65万トンと予測している。これは2015/16年産より3.3%上回る数字だが、栽培面積の増加が要因である。加えて、同年は表年に当たるため、単収も増加する見込みだ。しかし、単収の増加率は若齢果樹園が多いことから減殺される見込みだ。この春の天候は開花、受粉にとって良好であった。また土壌水分も多く、生育後半の灌漑にも支障がないと見込まれる。

ナシ生産量

2015/16年産

2015/16年産のナシ生産量は1.34万トンで、前年産より5%増加すると見込まれる。ナシ生産は大部分がネルソン地域で行われているが、同地域を襲った雹害は、前回の予測時に考えていたほど重大ではなかった。

2016/17年産

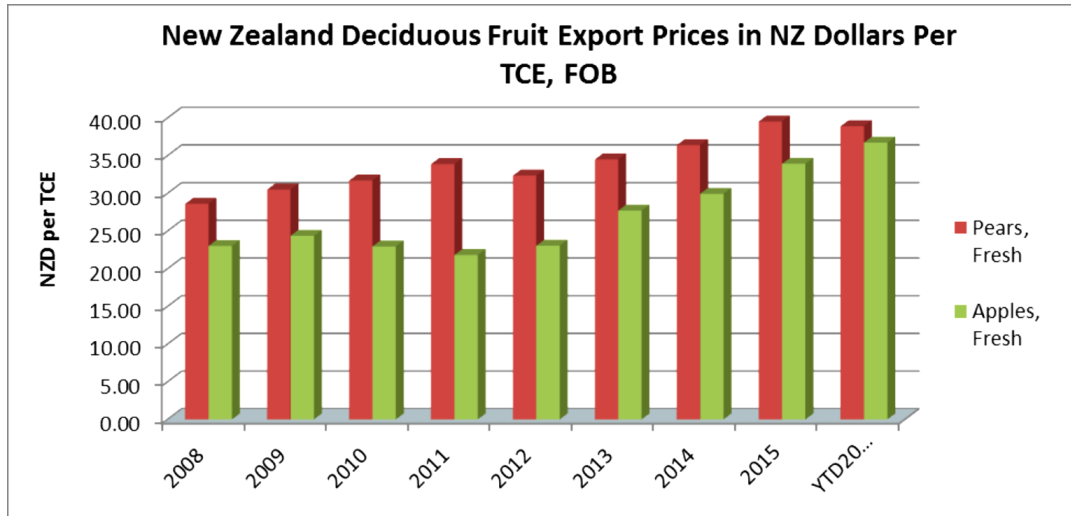
2016/17年産の生産量は1.36万トンで、前年産より1.5%増加すると予測している。

生産者所得

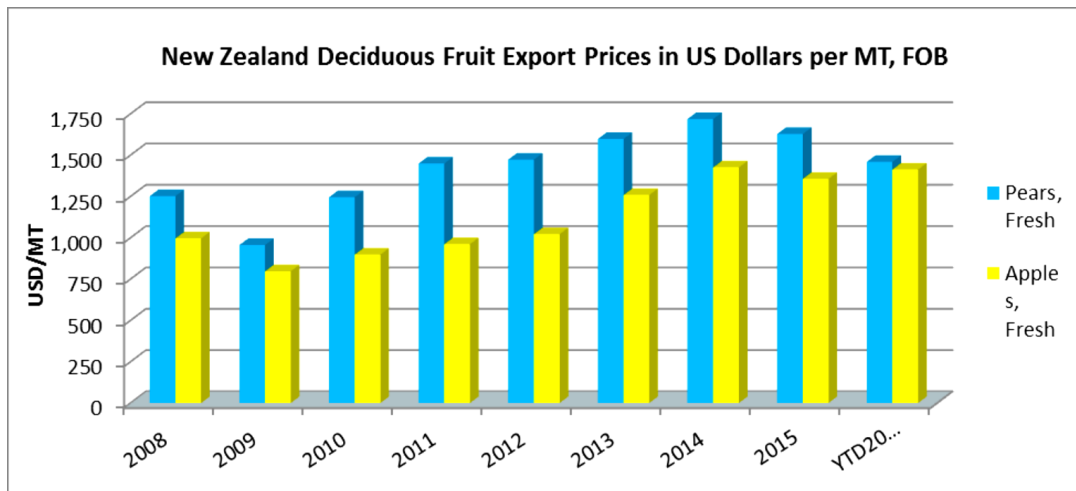
2015/16年産の落葉果樹の収益は、引き続き増加する傾向である。輸出期間(2016年1月～8月-全体の97%を占める-)のFOB価格は1箱(18kg)当たり平均36.71ニュージーランドドル(26.80米ドル)と、前年より9%高かった。この結果、1箱当たりのFOBが前年より13%増加した2014/15年産を更に上回ることになる。ヘクタール当たりの輸出数量は前年と同程度であるため、面積当たりの収益は9%増加すると見込まれる。

FOB価格(ニュージーランドドル換算)の上昇の約半分は市場価格の上昇によるもので、残り半分はニュージーランドドル安によるものである。収益の増加は4年連続であり、生産者に自信をもたらし、収益を果樹園への投資へ誘導するものである。投資は新品種への改植、新規開園に向けられている。

ニュージーランド 落葉果樹輸出価格(FOB/1箱(18kg)当たり) 単位:ニュージーランドドル



ニュージーランド 落葉果樹輸出価格(FOB/トン当たり) 単位:米ドル



国内消費 リンゴ

2015/16年の国内消費量は61,175トンと見込んだ。これは前年を3%下回る。また、2016/17年は大きな変化はないと思われるため同数と予測した。

ナシ

2015/16年の消費量は10,750トンと見込む。これは前年を0.5%上回る数字だ。また、2016/17年の予測は2%下回る10,500トンと予測した。

加工仕向

2015/16年のリンゴの加工仕向量は14.1万トンで、前年より12%減少する見込みだ。これは品質が良好であったため、輸向向けの規格に適合する割合が増加したことによる。2016/17年の加工仕向量は14.3万トンで前年を1.4%上回る見込みだ。この伸びは生産量の増加によるものである。

ナシの加工仕向量は毎年2千トンと変動は少ない。

ニュージーランドのリンゴ統計(在新 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	8,887	9,204	9,554
収穫面積(ha)	8,550	9,000	9,350
販売生産量(トン)	539,000	535,000	552,500
非販売生産量(トン)	14,000	14,000	14,000
生産量計(千トン)	553,000	549,000	566,500
輸入量(トン)	174	175	175
総供給量(トン)	553,174	549,175	566,675
国内生鮮仕向量(トン)	63,143	61,175	61,175
輸出量(トン)	329,031	347,000	362,500
加工仕向量(トン)	161,000	141,000	143,000
総出荷量(トン)	553,174	549,175	566,675

ニュージーランドのナシ統計(在新 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	422	422	422
収穫面積(ha)	405	405	405
販売生産量(トン)	12,558	13,200	13,400
非販売生産量(トン)	200	200	200
生産量計(千トン)	12,758	13,400	13,600
輸入量(トン)	4,129	3,900	3,900
総供給量(トン)	16,887	17,300	17,500
国内生鮮仕向量(トン)	10,700	10,750	10,500
輸出量(トン)	4,187	4,550	5,000
加工仕向量(トン)	2,000	2,000	2,000
総出荷量(トン)	16,887	17,300	17,500

貿易

リンゴの輸出

2015/16年の輸出量は347,000万トンと、年の329,031トンに比べ5.5%増加することが見込まれる。これは輸出向けの規格に適合する割合が前年より増加したことによる。2016/17年も増加基調が続き、前年を4.5%上回る362,500トンと予測される。

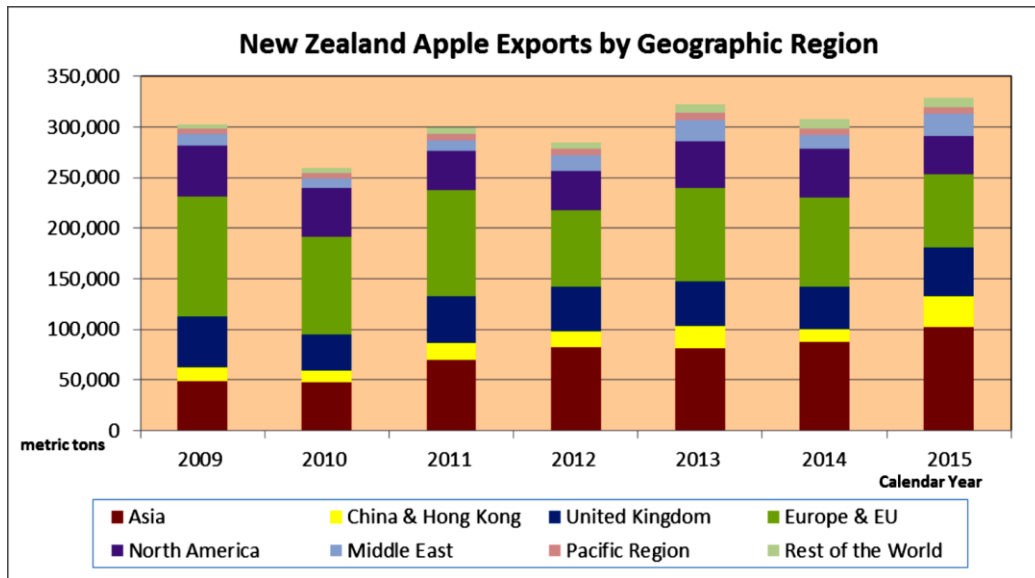
生鮮リンゴ輸出量(2014-16年(1月-8月))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2016年の 対前年比
	2014	2015	2016	2014	2015	2016	
EU(英国を除く)	88,707	73,327	75,631	29.39	22.88	22.36	3.14
米国	40,345	32,050	48,624	13.37	10	14.37	51.71
英国	41,548	47,236	42,777	13.77	14.74	12.65	-9.44
台湾	19,876	21,995	31,994	6.59	6.86	9.46	45.46
タイ	17,178	27,392	22,936	5.69	8.55	6.78	-16.27
中国	1,966	20,246	17,470	0.65	6.32	5.16	-13.71
アラブ首長国連邦	11,422	17,706	16,875	3.78	5.52	4.99	-4.69
インド	12,466	14,881	13,232	4.13	4.64	3.91	-11.08
香港	10,563	10,100	9,287	3.5	3.15	2.75	-9.06
シンガポール	8,455	7,774	8,430	2.8	2.43	2.49	8.43
その他	49,282	47,792	51,021	16.33	14.91	15.08	6.76
合 計	301,808	320,499	338,277	100	100	100	5.55

生鮮リンゴ輸出量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年の 対前年比
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
EU(英国を除く)	92,432	88,707	73,327	28.69	28.81	22.29	-17.34
英国	43,923	41,548	47,236	13.63	13.49	14.36	13.69
米国	38,788	40,345	32,070	12.04	13.1	9.75	-20.51
タイ	27,078	20,220	30,141	8.41	6.57	9.16	49.07
台湾	8,858	19,876	22,096	2.75	6.46	6.72	11.17
中国	9,856	1,966	20,331	3.06	0.64	6.18	934.08
アラブ首長国連邦	18,096	11,422	18,764	5.62	3.71	5.7	64.28
インド	15,048	12,487	15,007	4.67	4.06	4.56	20.18
香港	11,395	10,670	10,599	3.54	3.47	3.22	-0.67
シンガポール	8,148	8,747	8,336	2.53	2.84	2.53	-4.7
その他	48,514	51,905	51,124	15.06	16.86	15.54	-1.5
合 計	322,136	307,893	329,031	100	100	100	6.87

輸出先別輸出量の推移



2014/15年のアジア向け輸出は133,316トンに達し、欧州向け(大陸内 EU+英国)の120,563トンを上回った。アジア向け輸出の増加傾向は2010年以降見られるもので、次の5年間も継続するとみられる。この理由は、新植されている品種がアジアの消費者向けの品種であるからだ。

リンゴの輸入

2015/16年のリンゴの輸入は175トンと見込んでおり、2014/15年の輸入量と同量である。輸入の減少傾向は2007年から継続している。これは国産リンゴに対する CA 貯蔵技術の進展や成熟阻害剤である SmartFresh™ の出現で、輸入を必要としないからであり、今後とも輸入は最小限に留まると見込まれる。

生鮮リンゴ輸入量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年の 対前年比
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
米国	777	822	173	89.06	97.5	99.48	-78.89
ニュージーランド (再輸入)	71	21	1	8.09	2.5	0.52	-95.73
オーストラリア	24	0	0	2.74	0	0	0
インド	1	0	0	0.11	0	0	0
合 計	873	843	174	100	100	100	-79.31

ナシの輸出入

2015/16年のナシの輸出量は4,550トンと見込まれ、前回の予測値(5,000トン)より9%の減少である。しかし、この数字は2014/15年の輸出量4,187トンに比べ、8.7%増加である。2016/17年産の輸出量は、天候が順調であるため、5,000トンで前年を上回ると予測される。

輸入は2008年以降、3,000トンから4,000トンの間で推移している。これは国産の生産量に影響されているからだ。2015/16年の輸入量は3,900トンと2014/15年トンに比べて5.5%減少する見込である。2016/17年の輸入量は3,900トンと見込まれる。

生鮮ナシ輸出量(2013-15年(暦年))

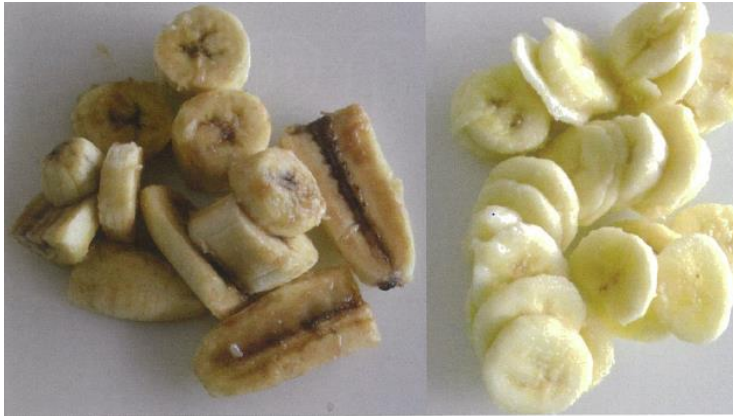
輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年 の対前年
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
米国	1933	2265	1102	40.95	42.17	26.32	-51.35
台湾	594	682	846	12.58	12.7	20.2	24.04
EU(英国を除く)	455	519	174	9.64	9.66	4.16	-66.47
英国	497	623	644	10.54	11.6	15.37	3.29
香港	287	293	467	6.08	5.46	11.15	59.16
カナダ	218	261	250	4.61	4.86	5.98	-4.17
中国	22	110	151	0.47	2.05	3.61	37.33
シンガポール	243	217	121	5.14	4.04	2.89	-44.31
フジー	148	116	119	3.14	2.16	2.83	2.08
トンガ	55	35	68	1.16	0.65	1.62	93.69
その他	269	251	245	5.7	4.67	5.85	-2.39
合 計	4721	5372	4187	100	100	100	-22.06

生鮮ナシ輸入量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年 の対前年
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
オーストラリア	1,520	1,929	2,839	43.85	52.15	68.75	47.15
米国	1,518	1,233	777	43.8	33.34	18.83	-36.97
中国	321	365	423	9.27	9.88	10.25	15.9
韓国	86	100	89	2.49	2.71	2.16	-11.08
ニュージーランド	0	0	0	0	0	0.01	0
アメリカ領サモア	0	71	0	0	1.92	0	-100
オランダ	21	0	0	0.59	0	0	0
合 計	3,465	3,699	4,129	100	100	100	11.63

4 6．棚持ち改善技術でバナナもカットフルーツの仲間入り

ASIAFRUIT 誌（2016 年 10 月号）



右は O Plus Ultra-7's による棚持ちの改善(カットバナナ)

ドイツの食品品質保持会社「Food Freshly」のお陰で、バナナがスーパーで販売されるカットフルーツの仲間入りをするかも知れない。

同社によると、抗酸化剤の O Plus Ultra-7's を処理すると、7～10日棚持ちが良くなるそうだ。この技術は防腐剤を使わず、遺伝子組換え技術を用いることもなく、有害な物質を使用するわけでもない。

「EU、米国、カナダの食品安全基準に合致している。O Plus Ultra-7's は生鮮食品全般に有効である。（開発した）抗酸化剤は水溶性で、バナナに使うときは1～2分漬けるだけだ」と同社は説明している。

処理した後もバナナの風味は保たれるが、果肉の構造や色は保たれて軟化することもない。加工業者は空気組成を変えてパッケージする必要もない」とのことだ。

この技術のお陰で、普通はカットすると直ぐに褐色になるバナナはカットフルーツの食材の仲間入りすることができる。

「これまで、繊細な果実に使用できる抗酸化剤はなかった。生鮮カットバナナを消費者に提供できる製品を史上初めて市場に提供できるのは喜ばしい」と技術部長は語っている。

4 7. 青果物マーケティング協会の展示会で絶賛されたリンゴ JUICI™

FreshPlaza 電子版 (2016 年 10 月 24 日)

米国オーランドで開催された青果物マーケティング協会 (PMA) 主催の展示会 (記注: 10月14~16日) で、Oneonta Starr Ranch Growers (Orlando 社) が出品した JUICI™ は参加者の中で絶賛された。

実際、生産者からは、「展示会で最優秀だ」と賞賛され、小売業者も「おお、これが勝者だ」との声を耳にした。特に今年は出荷が遅れ、リンゴの展示が少ない中で、今年新たに出品された JUICI™ は、両親がハニークリスプとブレイバーンで食味が優れ貯蔵性の良い優れた特性を持つ、甘くて酸味もある品種だ。Orlando 社のマーケティング責任者によると、「甘さと酸味が絶妙で、パリパリ感が驚くほどでジューシーだ」と賞賛している。

同氏によると、「皮が薄くハニークリスに似た食味があるこの新品種はワシントン州の火山灰土壌で10年以上にわたり開発が進められてきたものだが、長時間待った甲斐がある」とのことだ。

「ハニークリスプを親に持つためか、(貯蔵中の) 呼吸が緩やかで、信じられないほど棚持ちが良い。果実は密度高く樹になり、樹から収穫する時の力も18-20ポンド/平方インチを要し、室温に置いてもパリパリ感は継続する。フレーバーは誰しも好きになり、消費者は果物籠の中に飾ると喜んでくれる」そうだ。

「濃い赤色を発色するが、もともとの背景は黄色でオレンジ色もかすかに醸し出す」と同氏は JUICI™ の果色の特徴を説明している。さらに、「今年は販売の初年度で、販売量はわずかだが、生産量が増加しても北米だけでなく世界中で Orlando 社が販売の独占権を所有する」そうだ。

「今年は11月上旬だけしか販売できないが、現在、急速に植栽を進めており、ワシントン州の歴史の中で急速に生産を拡大する独占品種になるに違いない」そうだ。

「今年の販売先は既に限定されており、甘くて酸味が調和したこの新品種が米国内でどのように受け止めら



れるか、様々な階層を対象にテストを行う予定だ。来年は販売量を3倍に増やし、2018、019年にはより一般的に販売できるよう十分な量を供給するつもり」だそうだ。

「Orlando 社は提携小売企業にデモンストレーション活動、ポスターの配布、ディスプレイなどを支援することとしており、全ての販売用箱に左図の「トライ ミー」のロゴ付きのカードを入れ、リンゴのサイズも小売に最適な1 (収穫・出荷用) 箱 (19kg) 72玉、80玉に統一する」そうだ。

「リンゴは再び活況を呈して拡大するのではないか。いくつかの独占品種を持っているが、JUICI™ が最高だ。本当のテストは、消費者が口にし、自ら判断することだ。だから様々な方法で小売業を通じて宣伝活動を行っている。商標登録された文字デザインや独特のロゴで包装した27ポンド入の専用箱で販売する」そうだ。

ニュースソース: Oneonta Starr Ranch Growers

48. カンキツグリーニング病の最新研究

FreshPlaza 電子版 (2016 年 10 月 20 日)

フロリダ州立大学のカンキツ研究・教育センターの研究者によると、彼らはカンキツグリーニング病に罹患した樹木の治癒研究に当たり、最先端を歩んでいるようだ。

カンキツグリーニング病は細菌病であり、果実生産ができなくなり、最終的には樹木を枯らす。この病気はフロリダ州で猛威を振るい、壊滅的な打撃を与えている。今週初めには、米国農務省は今年のプロリダ州のオレンジ収穫量を7千万箱と予測し、昨年の8,160万箱を下回るとともに、過去のピークであった1998年の2.44億箱を大幅に下回ると公表した。

研究ではいわゆる CRISPR*という名の遺伝子編集技術を用いている。（* 訳注: CRISPR とは Clustered Regularly Interspaced Short Palindromic Repeats の略で、近年原核生物でファージやプラスミドに対する獲得免疫機構として機能していることが判明した DNA 領域のことを指す）

細菌のウイルスに攻撃システムをまねて、DNA とリボ核酸を用い、カンキツの中のグリーニング病に脆弱な（遺伝子）部分を取り除くだけでなく、当該部分をカンキツの他の遺伝子と置換えるという手法を目指している。

10月18日、ネルソン上院議員（訳注: フロリダ州選出）は直接 CRISPR を目にするため、センターを訪問し、研究者と面会した。

ニュースソース: health.wusf.edu

49. スペインのカキ出荷 2020年までに65万トンに拡大

FreshPlaza 電子版 (2016年10月20日)



スペインの農業研究所では、カキに関して、官民共同で行っている3大研究課題は、①病虫害防除、②ポストハーベスト技術の改善、③収穫期間の拡大であるという。官民共同研究は、Ribera del Xúquer(地名)が原産地名称制度として登録された1998年にあわせてスタートした。この研究は、カキを秋の果物として人気が高める上で大いに役立っている。10年前は出荷量が2万トンであったものが、昨年は22万トンとなり、2020年までには65万トンに達すると見込まれている。ただし、共同研究の委員会によると「出荷期間が4ヶ月に拡大すれば」との条件付

きだ。

「共同研究の最初の成果は、植栽樹の品質向上のためにウイルスフリー苗を作出することだった」と農業研究所の部長は振り返っている。そして、同研究所は当地の原産地名称制度委員会から表彰された。その後、研究の主眼はカキの病虫害対策に向けられた。「生産者とともに環境に影響を与えない方法で防除に取り組んでいる。環境に優しい方式として天敵を導入している」と先の部長は語っている。

貯蔵と脱渋

カキブームが沸き起こるにつれ、農業研究所は貯蔵及び脱渋方式の改善にも取り組んだ。この2つは、将来の発展を支える上で必須の課題である。「まず、カキの成熟の過程について研究した。カキは必ず甘味を帯びてくる。自然の工程と同じ過程で、貯蔵中の品質を保ちつつカキに刺激を与えないような最適の手法を模索した」とのことだ。

生産者を直接支援する研究に加え、農業研究所は、カキの栄養価値に関する研究も始めた。カキに関しては不明な点が多い中、市場でプロモーション活動を進める上で必要なことだからだ。また、昨年6月に「カキの栽培」と題する本を出版し、生産者、流通業者のガイドブックとなっている。研究機関と生産者等が寄り添うことで目標を追い求めることができる、と部長は考えている。



スペインのカキ生産は、中国、韓国、日本に次いで世界第4位に位置している。一方、輸出量のシェアでは世界の80%を占めている。次なる研究課題は、既に取り組んでいることではあるが、品種を多様化することだ。カキの販売期間を長くするため、1月下旬まで収穫できる品種の作出を目標としている。

50. チリのオウトウ豪雨で被害 最大30%の減収か

FreshPlaza 電子版 (2016 年 10 月 19 日)

先週末、チリで記録的な豪雨があり、オウトウの産地であるクリコや首都圏で被害があった。この影響により第7州(クリコ及びその周辺)で30%減収、第6州(首都圏地域)で20%減収する恐れがある。この影響を特に被ったのは、早生種の Royal Dawn、Brooks であった。

雨よけ施設の有無に拘わらず被害が発生

当該地域の主力生産者は、「雨は土曜日から降り始め、日曜日朝まで続いた。第7州は最も被害が大きく、降雨量は50mmに達した。第6州は20mmであった。

この結果、早生種は何らかの被害を受け、裂果した。多くの果樹園は雨よけ施設があったにも拘わらず損害は避けられなかった。

生産量は減少するも品質には影響なし

幸い今後数週間、降雨は見られないと予測されている。しかし、数ヶ月前に見舞われた霜害に、今回の被害を合せると大きな被害になると見込まれ、需要は安定しているものの、供給量は当初の見込みよりも大きく減少する模様だ。この需給のアンバランスで、価格は上昇すると見込まれ、主要な市場である極東アジアを中心に、価格は昨年より高くなるとみられる。なお、輸出量合計で見ると、今回被害を受けた品種は全体の15%を占める。

輸出のシェアが大きい晩生種は今回の被害を受けていないとみられる。収穫は15日後から始まり、1月中旬まで続く。供給量は減少するものの、品質には影響はない。技術の進歩により被害果は選果ライン上で除外することができる。従って、パックされる果実の品質は保つことができるためだ。

生産会社の販売管理者によると、雨と雹が昨日(10月18日)の午後にも再び降ったという。「何らかの被害は毎年起るものだ」と同氏はSNSで述べている。

ニュースソース: www.sfg.cl



5 1. 生食ブドウの輸出に意欲を見せるインド

FreshPlaza 電子版 (2016 年 10 月 19 日)



インド全国ブドウ輸出協会会長によると、これまでの輸出量の最高は19.2万トンであったが、ブドウ生産地が天候に恵まれたため、今年はこの数字を超えそうとのことだ。この他、チリが悪天候とエルニーニョの影響で生産量が15～20%減少見込であることも理由の一つだ。「チリから欧州への輸出は悪天候で大きな影響を受けそうだ。もしインドが適切に対処できれば、今年は輸出が増加し、利益をあげられるはずだ」「昨年はロシア、バングラディシュ向け輸出が減少したが、今年回復すれば、インドとしては有利に働くだろう」「需要は拡大しており、為替が改善されれば輸出は増加するはずだ」と述べている。

「昨年、インドは欧州に8.4万トン輸出をしたが、今年は5～7%増加するのではないかと」も語っている。インドはEUとの間で、今後2年間、植物生長調整剤である塩化クロルメコート(CCL)の残留基準を0.05ppmと据え置くことに合意した。これはインドの輸出業者にとっては朗報である。なお、今年8月になって、EUは基準を0.01ppmに引き下げよう要請し、輸出業者を不安にさせた。この件を遡ると、2010年に塩化クロルメコートが基準値を超えたことから、EUは受託販売に消極的になり、インドの輸出は後退を余儀なくされた。というのも、EUは2009年に残留基準値を厳しくしたからであり、この変更を知らなかった輸出業者は輸入禁止に直面せざるを得なかったのだ。とはいえ、輸入が禁止されたのは全体の10%以下であった。

インドのブドウは、2014年に19.2万トンが94カ国に輸出されて以降、注目を集めるようになった。この年は欧州及び英国向けが最も多く6.5万トンを占めていた。昨年のブドウ輸出で最も多かった産地はナシック地域で10.8万トンの新記録を達成した。内訳は7.5万トンが欧州向けで、残りの3.3万トンはロシア、バングラディシュ、中国、ドバイ等であった。

直近では、カナダへの輸出が解禁された。これはインド・カナダ二国間協議の結果であるが、実際に輸出が可能になるのは来シーズンからである。カナダは欧州への輸出実績がある業者を対象に輸入を許可する方針であり、加えて、登録された果樹園で生産され、登録された施設で集荷され、トレーサビリティが行われるものに限定するようだ。

インドのブドウ栽培面積は35万エーカーと推定されており、このうちマハラシュトラ州が27.5万エーカーで、残りはカルナタカ州、アンドラ・プラデシュ州、テランガーナ州である。

国全体の生産量は280万トンで、うち220万トンがマハラシュトラ州である。

ブドウ生産者は、2016/17年から州の農業局に果樹園の登録を始めた。農業局は受付の締切りを10月30日としている。輸出促進当局のガイドラインによると、輸出をする場合は登録が必須となっているからだ。

5 2．EUにおける果実・野菜の消費動向

FreshPlaza 電子版（2016 年 10 月 18 日）

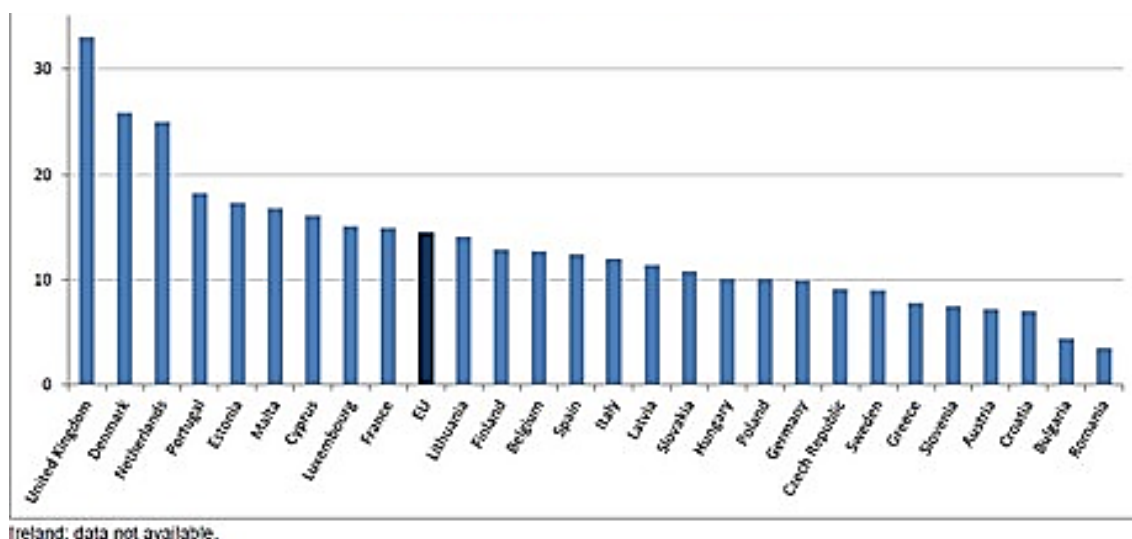
定期的に果実、野菜を消費することは健康やバランスのとれた食生活にとって基本である。しかし、EU域内では15歳以上の1／3強(34. 4%)が日常的に果物、野菜を摂取しておらず、毎日5皿(ファイブ・ア・ディ)以上摂取している人は14. 1%しかいなかった(2014年)。ファイブ・ア・ディはEU全体で推進している運動で、WTOの1日当たり最低限400gの果実、野菜を摂取する(パレイショ、その他芋類を除く)という勧告に基づくものである。

1日当たりの果実、野菜の消費量はEU各国間で大きな差があり、15歳以上で日常的に摂取していない人の割合は、最高のルーマニアが65. 1%、最低のベルギーが16. 5%であった。また、ファイブ・ア・ディを実践している人の割合は、最高の英国(33. 1%)から5%以下のルーマニア(3. 5%)、ブルガリア(4. 4%)まで差があった。

摂取は男女間で差があり、教育の程度でも差があった。高い教育を受けた人ほどファイブ・ア・ディを実践している割合が大きかった。

これらのデータは欧州健康面接調査によるもので、ユーロスタッドから世界食品ディである10月16日に公表された。

日常ファイブ・ア・ディを実践している人の割合(15 歳以上) 2014 年 単位:%

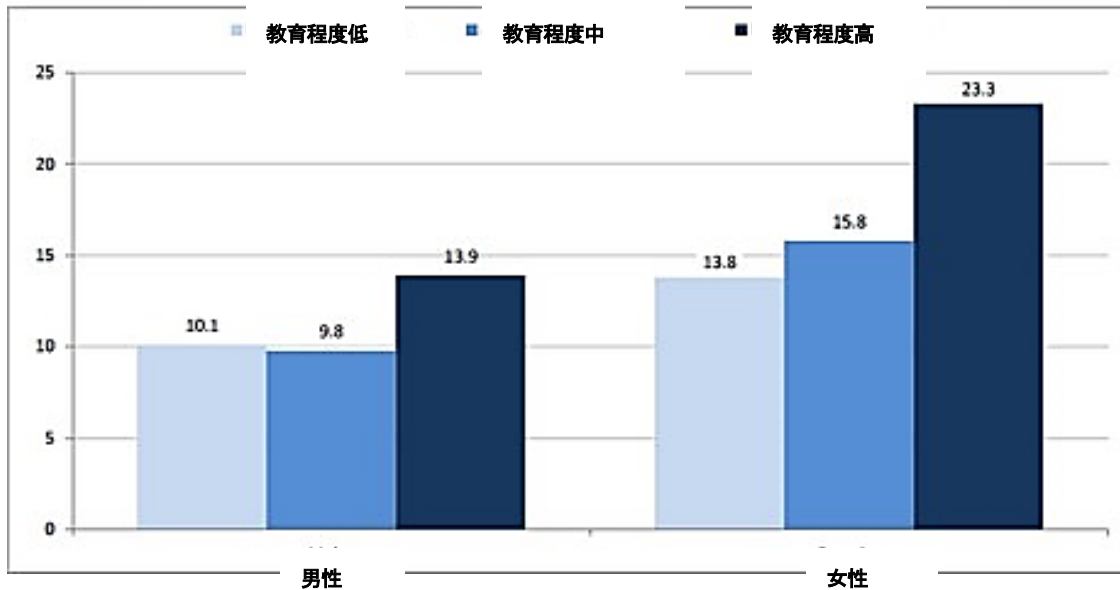


左から、英国、デンマーク、オランダ、ポルトガル、エストニア、マルタ、キプロス、ルクセンブルグ、フランス、EU 平均、リトアニア、フィンランド、ベルギー、スペイン、イタリア、ラトビア、スロバキア、ハンガリー、ポーランド、ドイツ、チェコ、スウェーデン、ギリシャ、スロベニア、オーストリア、クロアチア、ブルガリア、ルーマニア

EU加盟国の内、15歳以上で日常的に果実、野菜を摂取していない人の割合が最も低いのはベルギー(16. 1%)、次いで、ポルトガル(20. 7%)、英国(21. 3%)、イタリア(23. 0%)、スペイン(25. 0%)、スロベニア(27. 0%)、クロアチア(27. 5%)、ギリシャ(30. 1%)であった。反対に半分を超え、割合が高い国は、ルーマニア(65. 1%)、ブルガリア(58. 6%)で、次いでラトビア(48. 5%)、スロバキア(48. 6%)、チェコ(46. 3%)、オランダ(45. 9%)、ドイツ(45. 2%)であった。

15歳以上で1／3がファイブ・ア・ディを実践している国は英国(33. 1%)で、1／4が実践している国はデンマーク(25. 9%)、オランダ(25. 0%)であった。一方、実践する割合が少ない国は、ルーマニア(3. 5%)、ブルガリア(4. 4%)、クロアチア(7. 0%)、オーストリア(7. 2%)、スロベニア(7. 5%)、ギリシャ(7. 8%)であった。EU全体では7人に1人(14. 1%)しか実践していないことになる。

EUにおいてファイブ・ア・ディを実践している人の割合(15歳以上) 単位:%



2014年の調査では、高い教育を受けている人の方がファイブ・ア・ディを実践する割合が高く、EU 全体では18. 8%で、低い教育レベルの人は12. 1%であった(格差6. 7%)。

教育の程度による差が大きかった国は、英国(教育程度高が40. 5%、教育程度低が15. 6%、格差15. 6%)で、次いでデンマーク(格差14. 3%)、ポルトガル(格差11. 5%)であった。反対に格差が2%以下だったのは、ギリシャ(0. 9%)、ドイツ、オーストリア(それぞれ1. 6%)であった。

ニュースソース:ユーロスタッド

5 3. 2016/2017 年 世界のリンゴ生産

The World Apple Report 誌 (2016 年 10 月号)

注)本記事は Good Fruit Grower 誌10月号の記事(既報)とほぼ同じタイトルの記事ですが、視点が異なるため敢えて掲載しました。

世界のリンゴ生産量は2016/17年も増加し、8,600万トン(新記録)に達すると見込まれる。これはシーズン前に開催された各種会議からの結論である。

中国は更に記録を更新し、4,300万トンに達すると予測されている。つまり、世界の生産量の1/2が中国で生産されていることになる。Prognosfrut 会議で欧州の主要な生産国の予測が公表されたが、全体で1,200万トンと2015/16年を若干下回るとの結論であった。しかし、リンゴ産業は成熟しており、生産減は問題を生じないだろう。ポーランドの生産量は記録を更新し、EU 全体の1/3を超えると見込まれる。

北米は生産量が回復し、570万トンと見込まれる。これは前年の不作から立ち直るためで、米国、メキシコ、カナダとも増加する。

南半球の生産量を予測するには早すぎる。しかし、400万トンの生産量は確実と見込まれる。アルゼンチンは減収の見込だが、ニュージーランドと南アフリカによる生産増が上回るようだ。

この他の地域にも生産大国はある。最も生産量が大きいのはトルコだ。2016年は新記録に近い285万トンと見込まれる。インドとイランは順調な年には250万トンの生産が可能である。この他、需給上重要な国はロシアであるが、170万トンを上回ると見込まれる。

市場の見込

通常的环境下では少々の生産増はさほどの問題にはならないが、市場見通しからは、今回は通常的环境にはない。

混乱が続く欧州

平常状態から逸脱している原因は、ロシアが EU に対して輸入禁止措置を継続していることだ。最も大きな影響はポーランドに出ている。同国は EU の中でロシア向け輸出が最も多かったからだ。しかし、ポーランドに限らず、EU 全体で影響が生じている。価格が低下し、多くのケースで損益分岐点を下回っている。また、財政上の理由から、EU は損失に対して適切な補償をしてこなかった。加えて、ロシアに代わる代替市場の開発は困難であった。

また、漠然とした不安として英国の EU 離脱問題がある。しかし、これまでのところ英国の輸入に関する変化は直接現れていない。おそらく、結果的には英国への輸出国間の量的再配分という形をとるのであろう。加えて、英国は EU 離脱の手続きを急ごうとはしていない。

転換点を迎える中国

中国は経済が減速している中で、生産量は新記録を更新すると見られる。楽観的見通しは、中国の果実消費は引き続き増加し、生産増を吸収することに加え、輸入生鮮リンゴや他の輸入果実の増加をもたらすとするものである。正反対の見方は、国内需要が減速するため、中国は再び輸出に力点を置くとともに、リンゴ濃縮果汁の生産を拡大するというものだ。後者の見方には証拠があり、既に輸出拡大が進行中であるとのことだ。

北米での競合

北米での3カ国で生産が増加するため、人口の多いカナダ東部、米国東部での販売等に当たり競合が激化するとみられる。唯一の解決策は輸出市場を拡大することであるが、苦しい戦いになると思われる。

南アジアの市場の入荷は増加

インド、イランの生産量が多いことから、南アジアの市場に影響が生じる。トルコもロシアの輸入禁止措置を受けていることから、代替市場を開拓している。これらのことから南アジア市場では入荷が増加すると思われる。

在庫の削減問題

今シーズンの大きな問題は、商売上の主役が小売業者に移行する中でいかに在庫量を減らすかということである。もし輸出先が確保されなければ、欧州、北米でこの容易に在庫問題が発生すると思われる。

米国の場合、幸運なことは、特にガラやハニークリスポのような主要な品種で収穫及び出荷時期が(今年も)早くなりそうなことだ。となれば、早期出荷により適切な価格で販売量が確保できる。そして、価格は数ヶ月間安定して維持できる可能性があるからだ。

貿易障壁撤廃の課題

貿易円滑化には課題がある。2008年の大不況以降、リンゴの輸入国が講じてきた罰則を被らない保護政策である。多様性を抱える EU、中国、インド、インドネシア、マレーシアはリンゴや腐敗しやすい農産物の輸入に対し何かしらの理由を付けて制限している。

自由貿易を標榜する WTO はこの問題への対処に失敗したか、対応が緩慢であったため協定に違反した国への処分はなく、りんご輸出国は大きな損害を与えた。

WTO がほとんど力を発揮できない中で、主要な貿易国は2つの大きな貿易協定の締結を目指している。EU と米国との環大西洋貿易投資パートナーシップ(TTIP)と米国、日本その他10カ国による環太平洋パートナーシップ(TTP)である。しかし、TTIP は双方で解決困難な問題を抱え、TTP はオバマ大統領の任期中に議会からの承認を得ることはほとんど見込めない。

リンゴの需要拡大策

一般に供給が拡大し、需要が弱いときに行うことは、消費者を対象としたプロモーション活動である。しかし、生産国の大多数は、従来型のプロモーション活動を長い間やめているので、消費者に直接訴えるプロモーション活動を行う環境にはない。

EU と米国政府では、個々の産業を支援するための予算は限られている。これら予算は、複数の産業分野を同時に支援する際には活用できるが、特定の産業が緊急に必要だという場合には利用できない、という問題がある。

供給と需要

以上のことから、リンゴの生産サイドにとって2016/17シーズンは、供給と需要の力がうまく均衡するかどうか懸かっている。これはサイコロを振るようなものである。

5 4．世界のグレープフルーツ市場

FreshPlaza 電子版（2016 年 10 月 14 日）



フロリダとテキサス並びに中国、中国、南アフリカ、メキシコは世界の主要な生産地である。北半球は販売が始まり、南半球では終了を迎えつつある。両半球間の転換は徐々に進展している。メキシコの輸出は多いが、イスラエルの輸出量は少ない状況にある。

ハリケーンで影響を受けたフロリダの生産量

今回のハリケーンマシューの影響により、収穫が1～2週間遅れている。米国農務省によると、今年の収穫量は前年より11%少ない960万箱と推測されている。このうち赤色系は750万箱である。しかし、この数字はハリケーンによる被害は考慮されていない。しかし、生産者によると、幾分かの被害はあるが、商売にならない程のことはないようだ。収穫が始まれば、全貌が明らかになるが、平均的には被害は15%と見込まれている。

今シーズンの良い点は、品質が優れていることだ。昨年よりも糖度が高く、需要も大きい。日本は重要な市場であり、フロリダ産が輸出される頃、日本市場には他国からの輸入品は出回っていない。欧州は第2の輸出市場であり、同様に輸出時期には他国産はほとんどで回っていない。概ね生産量の半分が輸出されている。

好調の南アフリカ

グレープフルーツの輸出量は約 1,240万箱(1 箱15kg)であり、生産量が史上最高であった2015年より23%減少した。これは、Letsitele、Onderberg で干ばつに襲われ、Hoedspruit で雹害があったためである。加えて2016年は「裏年」に当たった。生産会社は世界中の市場への販売に努力し、輸出は好調であった。特に中国市場では高値で取引ができた。

To end Week 22/11/16 Million 15 Kg Cartons	Packed	Packed	Packed	Shipped	Shipped	Original Estimate	Latest Prediction	Final Packed
SOURCE: PPECB/AGRIHUB	2014	2015	2016	2015	2016	2016	2016	2015
Grapefruit	14.1 m	14.4 m	12.5 m	12.8 m	11.5 m	12.4 m	12.9 m	16.1 m
Soft Citrus	7.6 m	7.3 m	9.3 m	6.5 m	7.9 m	11.2 m	11.7 m	10 m
Lemons	11.5 m	12.4 m	12.8 m	11.5 m	12 m	16.1 m	15.2 m	15.1 m
Navel	19.7 m	19.5 m	22 m	16.6 m	19.4 m	25.1 m	23.9 m	24.5 m
Valencia	12 m	12.2 m	13 m	7.8 m	7.6 m	46.4 m	41.6 m	52.7 m
Total	64.9 m	65.8 m	69.6 m	55.2 m	58.4 m	111.2 m	105.2 m	118.4 m

南アフリカのカンキツの集荷量、出荷量、当初生産予測量、最終生産見込量、単位:百万箱(1箱15kg)

世界各地での販売が見込めるメキシコ

メキシコのグレープフルーツ生産量は多く、ミチョアカン州が主産地である。大部分の輸出は欧州向けであった。かつては、欧州市場に出荷できるのは2～3週間程度であったが、気候変動とフロリダ州での減収により、確固たる足がかりを得、輸出期間も拡大している。

生産者は輸出に関して楽観的である。輸出業者としてはグレープフルーツが終われば「ソフトフルーツ」の輸出に移行するのであるが、グレープフルーツに対する需要は旺盛である。昨年の輸出量は6万トンであり、主な輸出先は、米国、日本、カナダ、フランスであった。

最近、欧州に加え、日本の需要が増加している。日本は最近メキシコに市場を解放したが、これは大変な偉業である。日本の需要の多い時期は、10月～1月だ。

収穫を待つエジプト

エジプトのシーズンは年末から始まる。輸出業者は自国通貨がユーロ、ドル、ポンドに対して下落しているため、(自国通貨換算で)高値で取引されることを期待している。なお、為替レートの変動は他の農作物にも影響を与えている。

これまでのところ天候は順調であるため、高品質が期待されている。しかし、果皮に傷がある(生産者の努力では回避が困難)ことが若干の心配である。輸出に関してはロシア市場が有望である。また、アイスランドへの新たに輸出できると踏んでいる。

栽培面積が増加しているスペイン

スペインの栽培面積はこれまで変動がなかったが、過去2カ年にわたり若干増加している。新植の大部分は国内の最大の産地であるムルシアで行われた。新植のお陰で、今後は生産が増加すると期待される。今シーズンのスタートは10月下旬である。収穫予測量は、昨年の7.14万トンから6%少ない6.7万トンと予測されている。最近の降雨に期待が寄せられているが、今年産の果実の肥大は悪い。昨シーズンは価格が安定していた。今シーズンは高価格で終わりつつある南アフリカ産に続き価格傾向が継続することが期待されている。輸出業者は、フロリダ産の減収とイスラエル産の輸出減少により恩恵がもたらされることを望んでいる。

現在は輸入品に頼るイタリア

国産のグレープフルーツの収穫にはまだ早い。国産の収穫は12月に始まり、春まで続く。チェゼーナの卸売市場では国産の入荷は2月までない。現在は南アフリカ産が出回っており、1箱(15kg)が15～20ユーロで取引されている。伝統的に白色系が好まれているが、赤色系も流通している。トルコ産が今後15日程度で入荷する見込だ。

南アフリカ産は他の市場でも取引されている。ベローナの市場では白色系がキロ当たり0.93ユーロ、赤色系が1.18ユーロである。トリノでも同程度の価格である。ローマでは、赤色系がキロ1.10ユーロ、白色系がキロ1ユーロである。

国産は主にシチリアで生産されており、主産地はカタニーア、パレルモである。シチリア島以外でもプッリャ州、カラブリア州でも生産されている。欧州内では生産量が多いスペインが競争相手である。

オランダ：南アフリカ産が終了し、フロリダ産はサイズが小さいものが多いと見込まれる

既に南アフリカ産は終了している。現在トルコ、イスラエル産が市場に出回っており、後半は地中海のスペインからの供給が増加する見込みだ。メキシコ産も市場に出回っているが、一部の輸入業者によると、品質的にはフロリダ産の方が好まれるため、フロリダ産の方が出回るとみている。南アフリカ産の価格は1箱12～14ユーロで、現在トルコ産、イスラエル産は13～14ユーロである。フロリダ産は11月中旬から出回り、20～24ユーロで取引されるとみている。

フロリダの業者によると、ここ数年間、欧州への輸出量は劇的に減少しているそうだ。フロリダでは猛暑の影響により小玉傾向であったが、ハリケーンの影響で大玉が落下し、小玉の割合が益々増加したようだ。ハリケーンの影響で供給量は15%減少すると見られているが、確たるところは未だ不明だ。

輸入業者によるとグレープフルーツの需要はここ数年一定だという。しかし、消費の大部分は高齢者によるものであり、このユニークなカンキツの消費を拡大するためには消費者への宣伝活動が必要だそうだ。昨年場合は卸売市場でフロリダ産の方が地中海産よりも販売が好調であったようだ。

ベルギーではフロリダ産の方が人気

輸入業者によると、現在フロリダ産の入荷の準備をしているそうだ。販売は通常11月初旬に始まるが、今年は米国の天候不順のため、入荷は11月下旬の見込である。輸入業者は米国産のグレープフルーツの方を他国産よりも望んでいる。というのも、スペイン産や南アフリカ産よりも米国産は品質が優れていると考えているからだ。加えて、米国産は価格が魅力的であるからだ。消費者も米国産の方を好むようである。欧州の需要が多いため、入荷量も十分と予想しているが、もし、十分な量が入荷できない場合は、価格が上昇すると見込まれる。

中国産は大部分がポメロ(文旦)

中国ではグレープフルーツの大部分を南アフリカ、オーストラリアから輸入している。この他、イスラエル、エジプト、アルゼンチン、ペルー、モロッコからも輸入している。南アフリカからの輸入は4月から徐々に始まる。輸入量は相当程度あるため、業者の利幅は小さい。最も価格が安くなる時期では、15kg当たり150元(20ユーロ)～130元に落ち込む。その後、7月には価格が持ち直し、190元に達する。

国内グレープフルーツの生産量が限定的で、中国で生産されている大部分はポメロ(文旦)である。

著者：Rudolf Mulderij

5 5. 2016/17 年のリンゴ生産見通し

Good Fruit Grower 誌 (2016 年 10 月号)

同じ地域で良いことばかりは続かない、との格言は全米リンゴ協会に当てはまる。2016/17 年の協会の生産見込は、米国全体では2.46億箱(1箱19kg)で、生鮮向けも加工向けも前年を3%上回り、過去5カ年平均も3%上回るとの予測だ。

最大の生産地であるワシントン州の生産予測量は1.49億箱である。過去2年間高温に見舞われ、去年は干ばつに襲われた。しかし、今シーズンは順調な天候に恵まれている。

一方、北東部は晩春に荒天に見舞われ、干ばつにも襲われた。「今年の北東部に生育状況を一言で示すなら、『干ばつ』である」とニューヨーク州リンゴ協会の CEO は8月にシカゴで開催された全米リンゴ協会の総会で語っている。リンゴ生産を行っている東部11州の内9州は生産量の減少を予測しており、前年を10%下回る5,830万箱と見込んでいる。

中西部は3,400箱で、この内ミシガン州は3,100万箱と前年を31%、過去5カ年平均を49%も上回る大記録となると同州の会長は見込んでいる。

西部諸州は全体で1.58億箱と前年を5%上回ると予測している。ワシントン州単独でも前年を5%上回り、加えて、サイズも着色も良好であると同州果樹協会は語っている。

2015年の結果樹面積は2004年に比べると16%も減少しているが、生産量が増加しているのは、2003年以降、単位面積当たりの生産量が45%増加しているからだ。これは、高密度植栽培が増加しているためだ、と全米リンゴ協会の政策・産業部長は説明している。

全国的には未だにレッドデリシャスの生産量が最も多いが、関連品種も含め減少を続けており、他品種のシェアが増加している。ガラ、グラニースミス、フジ、ゴールデンデリシャスがシェアを伸ばしている品種のトップ5である。

昨シーズンの世界のリンゴ生産量は7,700万トンであり、このうち、中国が56%を占めていた。以下、各国の生産事情を紹介する。

カナダ

2016/17年産の生産量は1,710万箱で前年を17%、過去5カ年平均を5%上回ると予測されている。もし、東部の生産地で降雨量に恵まれれば、生産量は更に増加すると見込まれる、とオンタリオ州のノーフォーク果樹生産組合は述べている。

オンタリオ州では、良好な開花であったが、生育期間中、乾燥が続いた。生産量は710万箱と予測され、前年を57%上回ると見込まれる。品種構成はマッキントッシュ(旭)が25%で、エンパイア、ハニークリスポ、ガラ、アンブロージアと続く。

ケベック州は560万箱で、前年を4%下回ると予測されている。霜害に見舞われず、開花も良く、スタートは順調であったが、火傷病による被害があったためだ。

ノバスコシア州は、夏期に乾燥に見舞われたため、130万箱の生産量と予測され、前年を3%下回る見込みだ。ハニークリスポが全体の25%と最も多く、次いでノーザンスパイ、コーランド、アイダレッドと続く。

ブリティッシュコロンビア州では一部で雹害があったが、収穫は早いと見込まれている。生産量は130万トンと前年を7.7%上回るとの予測だ。品種はガラが45%を占め、続いてアンブロージアである。

カナダ全体ではマッキントッシュが32%を占め、次いでガラが13%を占めている。

メキシコ

メキシコも増産が見込まれている。前年(2,700万箱(1箱20kg))を15%上回り、過去5年平均を8.5%上回る3,100箱の生産量と予測されている。

チワワ州の生産増が最も大きく、前年を17%上回り、コアウイラ州、ドゥランゴ州では各10%増であった。

メキシコのリンゴ消費量は年間4,000万箱で、毎年増加している。販売価格は高く、未だに高級果実と見なされている。現在でもドルへの交換レートは高いが、2016年に入って米国産の輸入関税はなくなった。(訳

注：2015年はメキシコが米国産リンゴに対してアンチダンピング関税を課した）

南米

南米のリンゴ生産量は世界の3%に過ぎないが、輸出市場においては重要なプレーヤーで、米国産と競合関係にある。

最も生産量が多いチリは、二色系の品種であるフジ、ロイヤルガラに牽引され、生産の増加が見込まれる。生産量は5%増加して概ね160万トンと予測されている。

一方、アルゼンチンは20～30%生産減すると見込まれ、葯55万トンと予測される。ブラジルは15～20%減少し100万トンと予測される。

欧州

欧州の生産量は史上第3位の1,200万トンと見込まれる。これは昨年、一昨年よりも少ないものの、過去5年平均及び10年平均は上回るものである。欧州中心部を襲った霜害により、42万トン減収したとみられる。

欧州の生産量の35%を占めるポーランドは生産の増加が見込まれ、ドイツ、ギリシャ、ルーマニアも同様に増産が見込まれる。一方、ロシアがEU等に課している果実・野菜の輸入禁止措置により、輸出業者は引き続き代替輸出先を探さなければならない状況である。

中国

リンゴ・果汁生産会社社長によると、中国は過去15年間、着実に生産量が増加し、2001年以降、平均して毎年180万トン増加しているという。2016/17年産は過去最高の4,380万トンの生産量と見込まれている。これは2015年より2.8%増で、過去5年平均の11%増である。ガラ等の早生品種は減収するが、Qinguan、フジ等の晩生品種は大幅な生産増と見込まれている。

56. 有機農産物は2015年も引き続き拡大

The Packer 紙 (2016年8月22日号)

生産増が主導する形で2015年の有機農産物の消費量は過去最大を記録した。市場関係者は若い消費者の購買意欲が強いため、今後さらなる需要拡大を期待している。「有機に対する消費需要は近年着実に増加している。特に食生活にこだわるミレニアル世代(1980~2000年生まれ)が先導役となっている」と食品会社幹部は語っている。有機への需要の高まりは、人々が健康、幸福等を求める中で、これら志向に沿っているためでもある。一般に、消費者は有機野菜がパッケージされた種類が豊富なサラダを好む。この販売増加は著しく、従来のミックスサラダやグリーンサラダを凌いでいる。

過去20年における有機の伸びは著しい。消費者は非常に興味を抱いている。特にミレニウム世代は健康に敏感で肥満を恐れているからだ。これらが生鮮果実と野菜の消費拡大につながり、有機農産物の消費が主流になる要因となっている。一方、他の食品会社幹部によれば、ベビーブーマー世代も有機の消費拡大の一翼を担っているという。この世代は余生を健康に過ごすため、薬よりも良い食品を摂ることに熱心だそうだ。カリフォルニア州の有機栽培農家は、昨年15%の販売増を記録し、特にカンキツの伸びが著しかったという。もはや有機食品は特別なものとはいえない、という小売業者もいる。今では米国の小売業者には有機は欠かせない商品となっているとのことだ。

有機生産者によると、需要は着実に伸びており、食品サービス業の中で大きな位置を占めているという。ある有機食品を専門に扱う業者は、昨年20%の売上増を記録したそうだ。この業者によると、慣行農作物を扱っていた出荷業者も最近有機農産物を扱うようになりつつあるという。業者は需要の高まりを十分認識しているからだ。

ワシントン州の有機リンゴ生産会社は、需要の高まりに対応して既存の顧客の注文には何とか対応しているが、新規の客には販売できない状況だという。有機として認証されるためには3カ年の移行期間が必要なので、移行期間中のパートナーがいれば、注文の内容から選り分けて(移行期間中の商品を)販売することもあるという。別の生産会社によると「有機リンゴ」の販売は最高潮にあるという。会社所有の30%の園地が来シーズンには有機と認証される見込だそうだ。有機への転換の勢いは大変に強いものがあるが、反面、需要と供給のバランスをとるため、転換速度のコントロールも必要だという。また、イチゴ、ブルーベリーの生産会社によると、生産・供給コストが高いことが有機栽培を飛躍的に拡大することを妨げているという。一方、ロサンゼルスに本社を置く生産会社(350品目の有機生産物を扱う)の広報担当者は、有機農産物の増加の余地は、まだまだ大きいという。米国での年間の有機農産物の増加率は5%未満なので、成長の可能性はとてつもなく高い、とのことだ。

57. 果実輸入が急減するインドネシア

ASISFRUIT 誌 (2016 年 9 月号)



インドネシアの2016年上半期の果実輸入量は引き続き減少している。特に最大の輸入国である中国からの減少が著しい。政府による規制強化で輸入が厳しくなったためだ。2015年6月、インドネシア農相は、食品安全管理に関する同国政府の承認を受けていない国からの輸入品は、同国検疫当局が指定する試験機関で検査に合格しない限り市場への出回りを禁止することを布告した。この規則は2016年2月半ばに施行された。

中国は承認を受けていない国であるため、3月から7月まで中国からの輸入はストップし、果実価格は上昇した。折からの同国の経済低迷で、余裕のない消費者は果実を購入できない状態となっている。

輸入業者にとって更に困ったことには、本年当初から、新規参入者が輸入業者を経由せず、直接海外の出荷業者と取引するようになってきたことだ。

在庫が急減したため、いくつかの流通業者は国産の果実販売会社と契約を結び、輸入減に対応している。ある輸入業者によると、国内の果実(マンゴスチン、ドリアン、マンゴー、パパイヤ、メロン、スイカ等)を小売業者に販売しているという。この業者は国産のマンゴスチン、サラク(ヤシ科)、ドラゴンフルーツの輸出も始めたとのことだ。別の業者によると、お陰でインドネシアの果樹産業は量的にも品質的にもこの先5~7年の間に発展するのではないかと述べている。

輸入が制限される中で、ナシ、ブドウ、レモンの輸入は好調のようだ。輸入業者によると、ブドウは同国で人気の高い果物であり、従来以上の新たな品種が輸入されているという。中国産が不足する中でオーストリア産のナシにとっては絶好機であり、レモンは健康に良いとされていることから輸入は継続しているようだ。

こういった事態の中、新しい品目、品種の輸入が始まっている。ニュージーランド産の Rockit Apple(ブランド名)も新たに輸入が始まった品種で、特定業者がライセンス販売を行っている。高級果物店で販売されているが、インドネシアでは大きなリンゴが好まれるため、サイズの小さいこの品種の販売は疑問である、との見方もある。

ブドウでは Moondrop(別名ブラックサファイア)が高級店で販売されている。また、オーストリア産の Sweet Sapphire、Cotton Candy、Melody もインドネシアにデビューした。

高級店では鮮やかな色、ユニークな形、高糖度のものが好まれるようだ。小売店では競争相手に打ち勝つため、差別化ができる果物を求めているとのことだ。

一方、予めパッケージされた果物の販売が増加しているようだ。消費者が簡便な方法で果物を購入したいと望んでいるからだ。「一掴みでレジへ」というこの方式は高級スーパー等で人気を集めており、小ぶりの核果類やレモンなどが詰め合わされている。「シンガポールのようにジャカルタでも流行を始めた」とのことだ。しかし、郊外型の大型スーパーでは個売り型を好む方が多く、個売りとパッケージの販売割合は10対1だという。

オンラインによる果物の販売は、物流が機能すればインドネシアでも発展すると見込まれている。ある輸入業者によると、今後5年間で、時間を節約したい消費者の支持を得てEコマースは大きく伸びるとのことだ。一方、既にオンライン販売業務を開始している会社は、青果物のオンライン販売が進展するには少々時間がかかるのでは、と話している。

インドネシアでもブランド化と販売促進活動の重要性が増している。食味、品質、供給量が安定した商品であればブランド化を進めるチャンスである。ある輸入業者は既に自社名のブランド化を進めており、対象はドラゴンフルーツ、バナナ、メロン、韓国産のSingoナシ、フトモモに及んでいるそうだ。

58. オランダで過去5年間に子供の果物消費量が20%増加

FreshPlaza 電子版 (2016年10月13日)



過去5カ年でオランダの食生活は変化している。ポテトの消費量が減少し、脂肪と油の摂取量も少なくなった。一方、ノンアルコール飲料、ハーブ、ソースの消費量は増加している。野菜の消費量はほとんど変化が見られない。その中で、子供の果物の消費量が20%増加している。これらの調査はオランダ公衆衛生環境調査所(RIVM)によるものだ。最新の食料消費動向調査を2012年から2016年にかけて実施したもので、今回の調査結果の最終報告は2018年の末に公表されるという。

オランダ人は一日当たり平均3kgの食品・飲料を消費しているそうだ。このうち2kgは飲料の形で摂取している。一方、食品摂取の構成要素の年齢による違いはほとんどない。例外は子供の方が比較的多くの果物を消費し、大人の方が飲料を多く摂取していることだけだ。今回の調査では、9歳から18歳までの子供が過去5カ年で果物の消費を20%増加したことが明らかになった。

ニュースソース:RIVM

59. フロリダ産カンキツの生産予測

FreshPlaza 電子版 (2016 年 10 月 13 日)

10月12日、米国農務省は今シーズンのフロリダ州のオレンジ生産予想量を7,000万箱と公表した。この数字は昨年の8,160万箱を下回るもので、過去最高の2億4,400万箱(1998年)に比べると大幅に少ない数字だ。

この落ち込みは、2005年に発見されたカンキツグリーニング病によるものだ。以来、果樹園が減少している。この病気によりフロリダ州のカンキツは減びるとは言わないまでも、長年にわたり縮小することが見込まれる。

また、カンキツ産業全体も縮小に向かっている。フロリダの主要生産物はジュース(95%のオレンジが果汁生産に向けられている)であるからだ。オレンジジュースに対する米国消費者の認識は、ビタミンCの供給源というより糖分の供給源ととらえるようになり、人気は落ち込んでいる。米国農務省が公表している1人当たりのオレンジジュース供給量(消費量の代替となる数字)を見ると、1997/98年に6.27ガロン(23.7リットル)であったものが、2015/15年には2.74(10.4リットル)ガロンと減少している。フロリダ州の減少、世界一位の生産国であるブラジルでもカンキツグリーニング病などによる生産の減少があるにも拘わらず、ジュースの価格は一定水準を維持している。

このような事態は消費者には良いかも知れないが、フロリダ州の生産者には二重の苦痛となっている。通常は病気で生産量が減少すれば、価格は上昇するからだ。今回は通常のケースと違うため、生産者の収入は2012年の18億ドルから昨シーズンは9.05億ドルに縮小している。

一方、生鮮オレンジに対する需要は衰えていない。消費者にとって幸いなのは、生鮮オレンジの主産地はフロリダではなくカリフォルニアであることだ。

カリフォルニア州で生産量が大幅に減少した2007年は凍害によるもので、カンキツグリーニング病によるものではない。同病は2012年にロサンゼルス近郊で発見され、カリフォルニア南部に拡大はしたが、大部分の生産を担う中部のサンホアキンバレーには被害が及んでいない。ということは、カリフォルニアの生産者にとってはチャンスである。カンキツグリーニング病に準備する時間が十分あるし、同病に対抗する技術が開発されつつあるからだ。従って、フロリダ州のような打撃を受けることはないのではないか。だとすれば、冷凍濃縮果汁の発明により、オレンジジュースが朝食の特別な飲み物から手軽に飲めるものに転換したことでフロリダ州に生産量第一位を譲り渡した1949年以来、再びカリフォルニア州が第一位に返り咲くことを意味する。そして、フロリダ州の業界は一から立て直すことになるのではないかと。

ニュースソース:bloomberg.com.

60. 日本へ輸出再開を期待する米国リンゴ業界

Good Fruit Grower 誌 (2016 年 10 月号)



米国産のリンゴの日本への輸出は 2010 年産が 2011 年に販売されて以来途絶えている。

米国のリンゴ業界は、15年ぶりに日本への輸出を目指している。

米国は日本への食品輸出が第一位の国であるが、リンゴでは目立っていない。米国北西部の生産者は2000/01シーズン以来、日本への輸出が途絶えている。これは日本のリンゴの関税が17%であることと、輸送コストがかかるためである。

日本への輸出にあたっては、55日間の低温処理、臭化メチル燻蒸、輸出に先立つ日本検疫官の検査が求められている。日本側はコドリングの進入を懸念しているからだ。

しかしながら、今年、少なくとも2つの生産会社が日本へ輸出をしたいとしている。北西部の輸出業者の話では、日本の検疫官が既に1カ所の出荷施設を訪問したという。

「出荷業者は検疫に関する費用を既に盛り込んでいる。そして輸出の試みを望んでいる」「明らかに出荷業者は何らかの利益を期待しているようだ」と輸出業者は語っている。

日本のリンゴ生産量は変動しているが、最近では若干減少傾向である。とはいえ、生産量は世界の20位以内に入っており、世界リンゴ・ナシ協会の最新データによると、2013年は60万トンを生産している(注:日本の公表数字は、収穫量74万トン、出荷量66万トン)。しかし、日本独自の品種富士が主流で、リンゴ自体がプレミアム商品となっており、加えて業界のロビー活動は活発だ。

伝統的に日本の小売業者は、ワシントン州産のリンゴを低価格で販売するのを望んでいるが、種々の制約要因の中では難しいことだ、とワシントンリンゴ委員会の国際マーケティング部長は述べている。「面白いことに、他の輸出市場とは異なり、日本は成熟した市場だ」「日本の消費者は、ワシントン州産のリンゴでも高価格で購入する余裕がある」と部長は言う。

一方、米国の業界では、日本向け輸出に当たって燻蒸を必要としない新しいシステムの開発に取り組んでいる。最近の例ではオウトウに関してこういったシステム開発を行ったが、12年間にわたった。

6 1．果肉の赤いリンゴ新品種登場(スペイン)

FreshPlaza 電子版 (2016 年 10 月 6 日)



果肉が赤い3つの新品種の市場出荷が計画されている。これらはマドリードにある団体のIFOREDプロジェクトによって生み出されたものである。このプロジェクトは、果肉が赤く、食味が良く、外観が優れ、世界中の消費者に受け入れられる品種を開発することを狙いとしている。

2012年に設立されたIFOREDプロジェクトは、世界の5大陸の大規模生産会社14社から新品種候補を取寄せた。今回出荷が計画されている品種はフランスの会社IFOが所有権を持ち、20年以上の研究を通じ3～4世代を経たものである。

プロジェクト発足以降、新品種候補は提携の果樹園で試験栽培が行われ、商品化に向けた評価が行われた。今回市場出荷が計画されている3品種は、果皮が黄色、オレンジ色、赤色である。

商品化前の段階の植栽は2016年春に開始され、2017年秋に商品化に向けた本格テストが予定されており、2018年から商業生産を開始するというスケジュールだ。IFOREDはユニークなブランド開発及びマーケット戦略を進めており、世界中で広く販売されるよう、サポートすることとしている。

IFOREDの会長は、「我々は交配で得られた優れた品種候補を抱えている。今回公表した新品種は優れたフレーバーと果皮の色が多様であることで高い可能性を持っている。しかし、3品種以外にも試験段階手前の優れた品種候補があり、消費者に喜んでもらえるだろう」と語っている。

今後、IFOREDとの提携者は、各国の市場向けに生産し、販売することになるだろう。現時点での提携者は5.5万 ha の栽培面積で300万トンの生産量規模を持っている。

フランスの IFO 社が所有権を持ち、IFORED を通じて販売が予定されている新品種は次の通りである。
R201:濃い赤の果皮で、果皮と果肉の境に優れた特徴を持つ。果肉は鮮やかな赤で、フレーバーに優れ、ベリーの食味を持つ。収穫時期はブレイバーンと同程度である。

Y101:オレンジ色の果皮で、果皮と果肉の境は黄色。ピンクから赤の果肉色を持つ。果肉は固くジューシーである。また、食味は糖度と酸味のバランスがとれている。収穫時期はガラの終盤と同程度である。

Y102:ゴールドデンデリシャスの後に収穫される。果皮は黄色で、果皮と果肉の境に優れた特徴を持つ。果肉はピンク色。食味に優れ、貯蔵性も良い。

6 2. 中国：国産キウイは生産拡大するも販売見通しは不明

FreshPlaza 電子版 (2016 年 9 月 30 日)



中国のキウイシーズンはちょうど中間点であるが、収穫は既に終わっている。陝西省の Zhouzhi はキウイの故郷として知られ、現に中国で生産されるキウイの60%は同地産である。西安 Chuanyuan 農業技術会社の周氏は、同地で自らキウイ生産を行うとともに、キウイの販売に関するスペシャリストである。

在庫が増加し販売は不調の見込

「現時点ではほとんど収穫が終わっているが、80～90%は市場に出ていない。その代わり在庫が膨らんでいる。貯蔵技術が進歩したため、Zhouzhi ではここ数年の間に大量の冷蔵施設が整備された。しかし、冷蔵施設の整備速度は生産量の増大を上回っていることが問題だ。このため、販売業者の多くが冷蔵庫に貯蔵している。生産者の販売価格は上昇しており、これにつれて市場価格も上昇している。一方、販売契約数量はそれほど多くなく、利益幅が小さい。私は多くの会社が貯蔵庫を整備していることに危機感を抱いている。もし、貯蔵量が需要を上回ったら市場価格が崩落する恐れがある」と氏は語っている。

昨年よりも高値であるが販売量は増加していない

「これまでのところ、価格は昨年を上回っている。例えば、品種 Cuixiang はこれまで6円で取引されていたが、今年は既に8元に達した。キウイは多段階の流通、輸送、貯蔵を経て生産者の手元に届くので、消費者の購入価格は10元に達する。訳注: 価格の単位は不明 昨年に比べると経済環境は更に悪化している。消費余力は昨年よりも小さくなっている。もし、小売価格が10元を超えたなら、消費者は他の果物か輸入果実を購入するかも知れない。Cuixiang は確かに美味しい品種だが、価格が上昇しすぎると販売機会を失いかねない」ともいう。

西安 Chuanyuan 農業技術会社

同社は西安市の Zhouzhi に本拠を置いている。同地では地元の生産者を組織化し、生産・販売を共同で行っている。同社は、品種 Cuixiang、Yuxiang、Huayou、Yate を扱っているが、地元生産者だけでも100トンの販売量があるが、この他にも生産物を購入しており、販売量は合せて300トンである。

「現状を鑑みると、品質と味に焦点を当て、通常の販売スピードを維持したい。貯蔵分は高い価格で販売できるかも知れないが、リスクが大きい。特に小規模生産者には大変なリスクだ。だから、現時点では生鮮(非貯蔵)キウイの販売に力点を置きたい。消費者に非貯蔵キウイを(大いに)食べてもらえば、翌



年の貯蔵キウイの販売も(量が減少して)有利になるからだ」とのことだ。



写真：
周氏



ニュースソース: 西安 Chuanyuan 農業技術会社

6 3．台湾の核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート（2016 年 8 月 30 日公表）

モモ、ネクタリン

栽培面積

台湾農業会議所によると、モモ、ネクタリンの結果樹面積はここ数年安定しており、2016年は2,200ha とのことだ。ネクタリン(白色系)は5月/6月に収穫され、モモは7月/8月に収穫される。

生産

2015年の生産量は2.7万トンで前年を5.8%下回った。これは台風の被害による。大部分は北部及び中部台湾で生産されている。亜熱帯性気候は生産に適しているが、台風による影響が大きい。

モモには2種類あり、一つはハニーピーチで山岳部において栽培され、通常の収穫期は7月/8月である。低地及び温暖地で栽培されるのは通常のモモで、甘味も少なく、固く、6月/7月の端午節(ドラゴン・ボート・フェスティバル)の時期に収穫される。ハニーピーチは香りがあり外観も綺麗であることからプレミアム果実と位置づけられ、贈答用に利用される。また、傷つきやすいため、輸送には注意が必要である。ハニーピーチの小売価格は通常のモモに比べて10倍高い。

ネクタリンの生産は極めて少ない。最近、台湾の農業研究所がネクタリンの商業生産に関する栽培試験を始めており、今後、商業生産が伸びる可能性はある。

消費

一人当たり消費量は世界でも最高水準にある。年間を通して自国産の果物が消費できることから、台湾の人は舌が肥えている。また、外観(サイズ、色、形)と品質が台湾の果実販売にとっては重要である。

単位:トン	2013年	2014年	2015年
国内生産	27,156	28,677	27,016
輸入	21,553	12,982	16,106
輸出	0	0	0
合計消費量	48,709	41,659	43,130

2015年の輸入量は国内消費量全体の約37%で、2013年の輸入量より44%減少している。台湾では3大祝祭日(春節、端午節、中秋節)に果物籠を友人、親戚に贈る習慣があり、輸入モモ、アウトウ、リンゴは人気の商品である。

貿易

2015年の輸入量は16,108トンで、4,268万ドルであった。これは前年に比べて24%増加したが、台風による国内生産量の減少に対応したものであった。この内、米国が最大のシェア(76%)を占め、次いでチリ(16%)、日本(6%)であった。2015年の米国からの輸入量は前年を10%上回っている。同年の国内生産量は27,026トンであり、米国の最大のライバルは台湾産のモモになる。米国は、今後とも見通せる限り最大の輸入国であり続けると見込まれる。というのも、中国本土からの輸入は植物検疫上の理由から禁止されているためだ。

米国産は国産が出回らない時期の供給源として大宗を占めている。日本産はプレミアム商品として位置づけられており、主に贈答用に用いられている。米国産は高品質で高価格の商品と受け止められている。貿易業界では、2016/17年の輸入量は16,000～17,000トンと予測されている。なお、米国ドルの為替が上昇しており、台湾の輸入業者は米国からの輸入に慎重になっている。

マーケティング

モモを含む生鮮果実の25%は近代的な小売量販店で販売されている。これら小売チェーンは、定期的に米国産果実の販売プロモーションを行っている。プロモーションでは価格を伝統的な生鮮市場より下げ、客を引き寄せている。なお、伝統的な生鮮市場のシェアは45%で、果物専門店は20%、露天商は2%のシェアである。一方、(ネットによる)ホームショッピング、テレビショッピングも安定的なシェア(8%)を持っている。

台湾の消費者は輸入果実を容易に購入することができる。購入の決め手になるのは、価格と原産国である。台湾の国産果実は持続可能な生産規模を持っているものの、気象災害により生産量が不安定であるため、輸入に相当頼らざるを得ない。米国産は人気があるが、残留農薬等を心配する消費者もいる。しかし、この問題は米国産の輸入に大きな支障とならないだろう。

米国産モモ、ネクタリンの台湾への輸出				
年	モモ		ネクタリン	
	トン	1000ドル	トン	1000ドル
2009	9,270	21,047	10,301	13,874
2010	9,392	21,316	12,560	15,576
2011	7,855	18,501	9,402	11,962
2012	6,898	19,798	7,203	11,839
2013	7,452	24,496	8,968	12,244
2014	5,926	21,601	5,343	9,134
2015	7,036	24,011	5,375	8,719

台湾のモモ、ネクタリン輸入量、うち米国からの輸入量、米国のシェア			
	総輸入量(トン)	米国からの輸入量(トン)	米国のシェア
2008	33,875	30,252	89 percent
2009	24,312	19,571	81 percent
2010	26,628	21,952	82 percent
2011	21,664	17,258	80 percent
2012	18,629	14,101	76 percent
2013	21,553	16,421	76 percent
2014	12,982	11,270	86 percent
2015	16,108	12,411	77 percent

台湾のモモ、ネクタリン統計(在台湾 農務省 農務官)

	2,014	2,015	2016
栽培面積(ha)	2,307	2,278	2,300
収穫面積(ha)	2,282	2,254	2,200
結果樹数(千本)	803	803	803
未結果樹数(千本)	8	8	8
総樹数(千本)	811	811	811
生産量計(トン)	28,677	27,026	27,000
輸入量(トン)	12,982	16,108	16,000
総供給量(トン)	41,659	43,134	
輸出量(トン)	0	0	0
国内消費仕向量(トン)	41,659	43,134	
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	41,659	43,134	43,000

アウトウ

生産/栽培面積

台湾は亜熱帯性気候であるとともに、土壌が適していないことから、アウトウの生産は行われていない。このため、国内の需要は輸入によりまかなわれている。

消費

2015年では、台湾は米国北西部の3番目、カリフォルニア州の4番目の輸出先であった。台湾の消費者は

価格が高くてサイズが大きい(1箱9～10列)米国産を好むことから、米国の生産者にとっては重要なお得意様である。

オウトウは他の果実と違って、特別な輸入果実と受け止められている。また、魅力的な形状と独特のフレーバーが人気である。台湾の消費者にとっては濃赤色のオウトウの方が、レイニアのような淡赤色のオウトウに比べ、甘くてフレーバーがあると考えられている。このため、最も出回りの多い品種はビングである。

多くの果実は伝統的な生鮮市場で販売されるが、業界の調べでは25%のオウトウはスーパーやハイパーマーケットで販売されている。夏の間、スーパー等は販促活動を実施して米国産オウトウを売込み、生鮮市場より安い価格で提供している。近年、(ネットによる)ホームショッピング、テレビショッピング、コンビニの販売が拡大している。今後数年間はオンライン販売が拡大するとみられている。また、米国産のオウトウは祝祭日の贈答用として最も人気があるものの一つである。

貿易

2015年の輸入量は前年を20%下回る9,252トンで、金額は7,540万ドルであった。米国が第1位の輸入先で41%のシェアを占め、次いでニュージーランド(24%)、チリ(22%)、カナダ(7%)、オーストラリア(6%)であった。*訳注:下の表と異なる。

台湾は2002年にWTOに加盟し、チリ、ニュージーランド、オーストラリア等の南半球諸国に市場を開放した。加えて、同年、中国本土からの輸入も解禁した。しかし、現在、中国産のオウトウ輸入は、品質、安全性の観点、消費者の中国産オウトウに対する拒否反応からわずかである。

オウトウの輸入はその他果実の輸入とも密接に関係している。台湾の消費者は多くの種類の果実を輸入、自国産を通じて入手することができる。今後のオウトウ消費は、国内産のブドウ、バナナ、スイカ、グレープフルーツ、オレンジとの競合により、減少すると見込まれている。これら果実はオウトウに比べると価格は安い。このため、台湾の輸入業者は米国産オウトウの輸入を拡大することにためらいを持っている。

台湾のオウトウ輸入			
	総輸入	米国からの輸入	米国のシェア
2012	14,984MT(\$88million)	14,984MT(\$88million)	65 percent
2013	8,284MT (\$67million)	4,401MT(\$34million)	53 percent
2014	11,744MT(\$92million)	6,581MT(\$48million)	52 percent
2015	9,252MT(\$75million)	4,657MT(\$31million)	50 percent

マーケティング

オウトウは季節性の高い果物で、多くは夏に販売される。その他の時期では、50%近く高い価格で販売されることもある。季節外れの高価格商品は限られた人しか購入できなかったが、最近は貿易環境が改善され、南半球産が輸入されるようになり、販売期間は延長されている。

オウトウは腐りやすいデリケートな作物である。このため、コールドチェーンが不可欠であり、輸入はこれらに対応できる大手の業者により担われている。

政策/植物検疫関係

核果類の輸入検疫は保険福祉部(省)の下部機関である台湾食品医薬品局(TFDA)により担われている。主な制度は、食品衛生法、食品安全管理規則、残留農薬基準の3つである。現在数カ国に対しては病虫害を理由に輸入を禁止している。米国からの輸入に当たっては、米国で発行された輸出検疫証明書が必要である。

台湾は化学物質の残留について監視しており、事前の通告なしに基準値が変更される場合がある。また、米国の輸出業者は台湾の残留農薬基準が米国の基準や国際的期間が定めた基準と異なることに留意しなくてはならない。台湾の検疫当局から輸入禁止を通告されたいためには、米国輸出業者は台湾輸入業者と密接に連携をとる必要がある。

TFDAは検疫実施部局であり、保険福祉部は残留基準を国際的基準や米国を始め主要国の基準に適合

させる、等の見直しを担当している。在台湾の米国政府機関は、米国の業界とともに台湾当局に対して残留基準の見直しを働きかけている。

台湾のアウトウ統計(在台湾 農務省 農務官)

	2,014	2,015	2016
栽培面積(ha)	0	0	0
収穫面積(ha)	0	0	0
結果樹数(千本)	0	0	0
未結果樹数(千本)	0	0	0
総樹数(千本)	0	0	0
生産量計(トン)	0	0	0
輸入量(トン)	11,744	9,252	10,000
総供給量(トン)	11,744	9,252	10,000
輸出量(トン)	0	0	0
国内消費仕向量(トン)	11,744	9,252	10,000
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	11,744	9,250	10,000

6 4．英国では在宅勤務の方が果実・野菜の消費量が多い

FreshPlaza 電子版（2016 年 9 月 29 日）



英国では400万人以上が在宅勤務をしている。彼らはより健康的で、活動的で、生産性も高いようだ。在宅勤務者は病気に罹る割合も少なく、より健康的なものを食べ、運動量も多い。一方、オフィスで仕事をする労働者よりも年間の休日が7日少ない。

労働組合会議の調べによると、この10年間でオフィスに通勤していた労働者の内24万人が在宅勤務に移行したそうだ。新しい研究によると、在宅勤務は収益生の面とコストの面で人気があり実用的だそうだ。

半数の在宅勤務者は、推奨されているファイブ・ア・デイに基づいて果実、野菜を摂取している。そして、4分の3は月に最低12回は30分の運動をしている。

しかし、その一方で、在宅勤務の方が睡眠時間は45分短く、年間休暇日数が7日短い。「在宅勤務を成功に導くのは『バランス』につきる」と研究者は語っている。「もし在宅勤務をオフィスと同じようにできるなら、即ち仕事を離れて部屋のドアを閉めたら肉体的にも精神的にもスイッチをオフにすることができるなら、大変大きな利益をもたらすことになるだろう」とのことだ。

ニュースソース:uk.finance.yahoo.com.

65. 世界のザクロ市場

FreshPlaza 電子版 (2016 年 9 月 30 日)



ザクロ市場は堅調に推移し、需要は拡大している。イスラエルは供給不足気味の EU 市場から利益をあげている。スペインは栽培面積拡大に向け投資を続けており、イタリアは史上最速で出荷シーズンを迎えた。トルコは、国内市場の成長余地は残されているが、近年、輸出が急拡大している。エジプトは国際市場に打って出ており、実際に世界各国に輸出をしている。インドは生産量が減少したため高価格で推移している。中国ではザクロの人气がますます高まっている。栽培面積が減少しているにもかかわらず、生産量は増加する見込みだ。米国では需要が高まっているが、栽培面積は減少している。この原因は水不足である。

不足が続くインド

本来ならマハラシュトラ地方産の早生種の輸出が始まっている時期だが、今年は未だにスタートを切っていない。シーズン当初は苦しい状況で、出荷できる量もごく僅かであった。このため国内市場では価格が上昇し、輸出に向けられる量はほとんどない状態である。着色も良い状態ではない。

とはいえ、いくつかの会社では直ぐ食べられる商品(加工品)への処理を開始している。また、外食産業からも関心を持たれている。輸出は主に湾岸諸国に向けられている。

中国:栽培面積の減少で面積当たりでは高収益

1980年代に導入されたチュニジアザクロは現在でも小売業界で人気がある。国内の産地は、四川省、河南省、雲南省である。

しかし、過去数年、販売が不調であったため、生産者は他の儲かる果実へ品目の転換を進めた。2015年における ha 当たりの平均収入は1.2万元(1,600ユーロ)であった。栽培面積が減少したことで、今年の面積当たりの収益は増加すると見込まれる。収穫は8月に始まったが、当初から好調が見込まれている。収穫の始まりは、春期の低温により例年より2週間程度遅かった。出荷は4ヶ月続くが、この間に2つの大きな国民的休日が挟まるため、ザクロは高級果実として人気が出ている。北京等の大都市でも好調に販売されている。

米国では栽培面積の減少にも拘わらず生産量は増加

品種ワンダフルの収穫は第40週((10月2日～)から始まる。早生品種は既に市場に出回っており、好評である。好評の理由の一つは海外からの需要の根強さによる。米国のザクロは色が濃く、甘く、サイズが大きいことが特徴だ。ワンダフルの生産割合は全体の70%を占めている。栽培面積は前年に比べて15%少なくなるとも拘わらず、生産量は増加する見込みだ。昨年は水不足による被害があったが、今年は何とか灌漑が可能となりそう。今年の収穫量は650万箱が見込まれ、この内40%が輸出される。主な輸出先は韓国、カナダ、台湾、日本、ブラジルである。昨年はブラジルへの輸出が25%増加し、オーストラリア向けも増加した。また、ロシアの輸入禁止措置にも順応してきた。これまでロシア向けに30万箱を輸出してきたが、現在では皆無となっている。

欧州の供給不足を埋め合わせるイスラエル

8月に欧州向けの輸出が始まった。この時期は欧州にザクロが出回っていないため、大きな有益を得ることができた。スペイン産、トルコ産が欧州市場に出荷されると競争が厳しくなるが、イスラエル産は固定的なシェアを握っている。ワンダフルは出荷期間が長いこともあり、人気が高い品種である。出荷は10月に始まり3月まで続く。他の品種は8月に出荷が始まり9月には終わるためワンダフルほど人気はない。これら品種は品質や糖度の面で品種間差があまりないが、欧州市場で他にザクロがない時期に出荷されるため、徐々に人気が出るかもしれない。欧州市場では需要が伸び、供給が追いついていない状況である。現在の価格は3.5kg当たり5ユーロで、前年とほぼ同程度である。毎年需要が高まっていることから、イスラエルでは栽培面積を拡大する傾向にある。イスラエル国内ではどこでもザクロ栽培は可能であるが、生産地は中部と南部に集中している。

南と東に輸出を展開するエジプト

北アフリカでは主にワンダフルとバラディの2品種が栽培されている。ワンダフルは9月中旬から出荷が始まり、11月初旬まで続く。バラディの果皮はワンダフルほど固くなく、色合いもザクロとしては魅力が低い。しかし、エジプトの業者によると香りは優れているという。加えて価格も安い。今シーズンの出荷時期は、前年と同程度である。今年は温暖な気候が早く始まったため、品質は良好のようだ。昨年はワンダフルの輸出は9月下旬に始まった。今年は、温暖な気候のお陰で、9月15日にスタートした。このため、バングラディッシュの需要期に間に合うことができた。

輸出は南と東の諸国に向けられている。主な輸出先はセイシェル、ブルジブ、モーリシャス、そして更に東の諸国であるシンガポール、マレーシア、香港、バングラディッシュ、ロシアである。輸出業者によると、今年は約700トン进行輸出するという。

トルコでは少ない国内消費量

2010年以降、アダナのセイハン地方で生産が倍増した。しかし、当該地方政府によると更なる投資による生産拡大が必要だという。輸出額は2009年の940万ドルから、2014年には1.084億ドルに急拡大している。この地方ではトルコ全体の生産量40万トンの10～12.5%を生産している。トルコ国内の一人当たり年間消費量は2.7kgで、政府は少なすぎると見ている。生産者は国内での消費拡大の支援を求めている。

生産拡大が進むスペイン

スペインでは、現在、価格は低下傾向にある。これは品種モラーの生産が大幅に増大したためだ。現在、スミス、アコからワンダフル、モラーの収穫に移りつつある。直近の数週間で低温に遭遇し、昼夜の気温差が大きかったため、着色は良好である。

バレンシア地方のカンキツ生産者は、経営の多様化を図るため、ザクロの生産を開始しつつある。過去2年間で、同地域のザクロ生産量はそれぞれ0%、20%増加した。従来バレンシア地方はザクロを生産していなかったが、現在はアリカンテ州を中心に行われている。同州の生産量は6万トンに達しようとしている。主な品種はモラーであるが、ワンダフルやスミスのような果皮が鮮やかな色の品種が増加している。毎年生産量は

増加の一途であるが、生産者は問題とは考えていない。それは販売プロモーションを実施しているお陰で需要が拡大しているからだ。スペインでは国内生産量を30%上回る消費がある。

以前はスペインの輸出市場としてロシアが重要で、生産量の30%を輸出していた。現在はロシアの輸入禁止措置により市場が閉鎖されているため、シンガポール、インドネシア等の極東、中東に輸出しており、中国も有望市場と考えている。勿論 EU 域内(英国、アイルランド、オランダ、ドイツ、イタリア)にも輸出している。

出荷が早まったイタリア

プッリャ州とシチリアが主産地である。カラブリアにも小規模の産地がある。現在出荷が始まって2週間を経過した。これは通常年に比べると10～15日早い。9月10日から収穫が始まり、10月中まで続くともており、クリスマスまで出荷が可能である。価格の面では、昨年と同程度だ。現在品種アコの収穫をしているが、第39週(9月25日～)からはワンダフルの収穫が始まる。なお、昨年の出荷量は前年を70～80%も上回った。

販売量は過去2～3年で大幅に増加した。主な品種はアコとワンダフルである。競合国はスペインとトルコであるが、イタリア人によれば競合は量の面だけだという。イタリア産のザクロはより赤く、魅力的であるとのことだ。プッリャ州での栽培面積は168ha である。

ここ数日でボローニャの卸売市場において地中海諸国(エジプト、トルコ、スペイン、イスラエル)からの入荷が始まった。加えてペルー産も入荷している。プロモーション活動はエジプトが先手を打ち、次いでスペイン、イスラエルと続く。価格は、バラ売りの場合はキロ1.5ユーロで、パック入は1.8ユーロ、ピーク時には2.5ユーロに達する。需要は現時点では少ないが、今後数ヶ月で増加する。特に冬場の需要は大きく、近年大幅に増加した。かつてはクリスマスシーズンの商品とされていたが、現在はその他の時期も需要が旺盛である。

加工品も需要が拡大している。このお陰でザクロを食べる消費者が増加している。勿論、伝統的な生食需要も大きい。

成長するベルギー市場

ベルギーではザクロは最早ニッチな商品ではない。輸入業者によると過去5年間で輸入量は倍増している。健康の「達人」やシェフがザクロ推奨したことで人気が高まったようだ。今後、数年間は更に市場が成長すると見られている。

ベルギーでは年間を通じてザクロが販売されている。主な輸入先は、スペイン、トルコ、イスラエル、イラン、エジプト、インド、南アフリカ、ペルー、チリ、米国である。品種ワンダフルが登場してから10年を経過した。その他流通している品種は次の通りである。Pom、モラー、Baghwa、Herskovitz、アコ、Hicaz、Emek。

海外果樹農業情報 刊行物一覧

No.	調査報告書名	発行年月日
73	ブラジルにおけるマンゴーの生産・流通事情調査報告書	03. 4
74	フィリピンにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	03. 7
75	台湾における果樹産業事情調査報告書	03. 8
76	中国福建省におけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	03. 11
77	海外果樹関係データ集 2003 年版	03. 12
78	ポーランド共和国におけるリンゴ及びリンゴ果汁の生産・流通事情調査報告書	04. 3
79	西欧のくだもの消費事情調査報告書	04. 6
80	中国山東省におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	04. 7
81	米国における果実消費動向及び生食用果実流通実態調査報告書	04. 8
82	欧米のくだもの消費事情調査報告書	04. 9
83	オーストラリアにおけるリンゴ及びアウトウの生産・流通事情調査報告書	05. 3
84	中国におけるリンゴの生産・流通事情調査報告書	05. 6
85	タイにおける果実の流通・販売の実態に関する調査報告書	05. 6
86	日本におけるフードガイドの新たな動きについて（くだもの編）	05. 7
87	インドネシアにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	06. 1
88	海外の果実生産・貿易状況 2006 年版	06. 4
89	台湾における果実の生産・流通・消費事情等に関する調査報告書	06. 6
90	スペインにおけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	06. 10
91	ベトナム・韓国・インドネシア・台湾における果実の生産・流通事情調査報告書（補遺版）	06. 10
92	チリにおける落葉果実等の生産・流通事情調査報告書	07. 2
93	台湾における果実の輸入関連制度に係る調査報告書（付 果実の生産・流通状況）	07. 5
94	アラブ首長国連邦・インド・タイにおける果実の生産・流通・消費事情調査報告書	07. 7
95	ニュージーランドにおける果実の生産・流通・消費事情等調査報告書	08. 3
96	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	08. 6
97	韓国における主要果実の生産及び輸出入等に関する実態調査報告書	08. 7
98	ドイツ・オランダにおける果実・果実加工品の生産・流通状況調査報告書	09. 2
99	台湾における日本産果実の生産・流通・消費実態調査報告書	09. 6
100	世界の主要果実の生産・貿易概況 2009 年版	09. 11
101	中国におけるポンカンの生産・流通実態調査報告書ー福建省及び浙江省を中心としてー	09. 11
102	米国におけるリンゴの加工品等実態調査報告書	10. 2
103	ロシアにおける日本産果実の販売可能性及び同国の果樹農業・政策基礎調査報告書	10. 7
104	米国連邦行政組織による果実消費拡大に向けた取組みに係る調査報告書	10. 8
105	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	10. 8
106	グローバリゼーション下の米国の果汁産業及び新たな生産流通システム実態調査報告書	10. 8
107	インドにおける日本産果実の販売可能性及びインド産ブドウの対日輸出可能性調査報告書	10. 10
108	カナダの果樹農業・政策実態調査報告書	11. 3
109	米国カリフォルニア州におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	11. 6
110	台湾における果実の生産・流通・消費等実態調査報告書	11. 6
111	中東における日本産果実の販売可能性調査	11. 8
112	ブラジルにおけるオレンジ及びオレンジ果汁を中心とした生産・流通事情調査報告書	11. 9
113	中国の主要都市における日本産果実の販売可能性及び中国のアウトウ産地調査報告書	11. 10
114	世界の主要果実の生産・貿易概況 2012 年版	12. 3
115	台湾における日本産果実の流通状況等実態調査報告書	12. 6
116	中国におけるブドウの生産・流通・消費調査報告書	12. 10
117	韓国の対米国 FTA 締結による韓国果樹産業への影響等調査報告書	12. 11
118	台湾における東日本大震災後の日本産果実等流通状況実態調査報告書	13. 3
119	中国におけるモモの生産・流通・消費調査報告書	13. 3
120	世界の主要果実の生産概況 2013 年版	13. 10
121	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入に関連する規制等に係る調査報告書	14. 3
122	世界の主要果実の貿易概況 2013 年版	14. 3
123	世界の主要果実の生産概況 2014 年版	14. 10
124	世界の主要果実の生産概況 2015 年版	15. 3
125	台湾における日本産果実の流通及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	15. 3
126	ニュージーランドの果樹農業及び香港の日本食品・果実事情調査報告書	15. 8
127	海外の果樹産業ニュース 2015 年度版	16. 3
128	台湾における日本産食品の輸入規制強化にともなう日本産果実の流通への影響に係る調査報告書	16. 3
129	海外の果樹産業ニュース 2016 年度上期版	16. 10
130	世界の主要果実の生産概況 2016 年版	17. 2

